

仙台市文化財調査報告書第490集

北目城跡 ほか

発掘調査報告書

中在家南遺跡第12次、北目城跡第10次、
富沢館跡第13・18次、安久東遺跡第4次

2021年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第490集

北目城跡
ほか

発掘調査報告書

二〇二一年三月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第490集

北目城跡 ほか

発掘調査報告書

中在家南遺跡第12次、北目城跡第10次、
富沢館跡第13・18次、安久東遺跡第4次

2021年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より10年が経ち、復興・創生期間5年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って平成30年度から令和2年度にかけて発掘調査を実施した、中在家南遺跡第12次、北目城跡第10次、富沢館跡第13・18次、安久東遺跡第4次の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために護るべき大切な財産です。先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ、次の世代へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

令和3年3月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例 言

1. 本書は、平成30年度から令和2年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、中在家南遺跡第12次、北目城跡第10次、富沢館跡第13・18次、安久東遺跡第4次の各発掘調査報告を合本にしたものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は及川謙作と妹尾一樹が行った。
第1・3章－妹尾一樹 第4章－及川謙作 第2章－柳澤 楓 第5章－澤目雄大
第6章－各担当職員
遺物の基礎整理～実測図作成－斎野裕彦、澤目雄大、木村 恒、柳澤 楓、妹尾一樹、向田文化財整理収蔵室
作業員
遺物図・遺構図デジタルトレース－向田文化財整理収蔵室作業員
遺物観察表作成－斎野裕彦、澤目雄大、木村 恒、柳澤 楓、妹尾一樹 遺構註記表作成－各担当職員
遺物写真撮影・図版作成－向田文化財整理収蔵室作業員 遺構写真図版作成－各担当職員
3. 本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。
4. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々および事業者から多くのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略)
伊藤長松 株式会社ランドクリエーション 積水ハウス株式会社東北シャーマゾン支店
株式会社ワークマン 株式会社ノースコンサル 東新住販株式会社 飯塚義之
5. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。
6. 「第3章 北目城跡の調査」に掲載した陶磁器の産地及び年代等は、佐藤洋氏（仙台市文化財課元職員）の鑑定による。

凡 例

1. 本文中の「遺跡と周辺の遺跡図」は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。
2. 図中の座標値は世界測地系を使用している。
3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。
SB：掘立柱建物跡 SD：堀跡・溝跡 SE：井戸跡 SK：土坑 SR：自然流路跡
SX：性格不明遺構 P：ピット
4. 遺物の略称は以下の通りである。
A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非ロクロ調整） D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 Ia：土師質土器 Ib：瓦質土器 Ic：陶器
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 O：自然遺物 P：土製品
5. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。
6. 遺構図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。また、各図に必要な応じて凡例を付した。

 : 柱痕跡

7. 遺物実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。

 : 黒色処理  : 敲打痕

8. 遺物観察表の（ ）がついた数値は、図上復元した推定値ないし残存値である。
9. 遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。また、異なる場合は各写真図版の右下に表記している。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り3分の1で掲載している。
10. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田 a 火山灰（To - a）」と考えられている。その降下年代は西暦 915 年と推定されている。
庄子貞雄・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡 - 昭和 54 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所
仙台市教育委員会 2000 『沼向遺跡 第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第 241 集
小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田 a と白頭山（長白頭）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 中在家南遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第12次調査	3
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3章 北目城跡の調査	19
第1節 遺跡の概要	19
第2節 第10次調査	21
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第4章 富沢館跡の調査	69
第1節 遺跡の概要	69
第2節 第13次調査	70
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3節 第18次調査	77
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第5章 安久東遺跡の調査	83
第1節 遺跡の概要	83
第2節 第4次調査	85
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第6章 総括	127

挿図目次

第1図 令和元～2年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)	2	第4図 第12次調査区配置図	4
第2図 中在家南遺跡と周辺の遺跡	3	第5図 第12次調査区平面図	5
第3図 第12次調査区位置図	4	第6図 SD1・2 溝跡断面図	6
		第7図 SD1 溝跡出土遺物 (1)	7

第8図	SD1 溝跡出土遺物 (2) ……………	8	第46図	堀跡推定線(国土地理院保有・米軍撮影の 空中写真(1952年撮影)を加工)……………	50
第9図	SD2 溝跡出土遺物 ……………	8	第47図	第10次調査区と 第7・8次調査区の合成図 ……………	51・52
第10図	SK2 土坑平面図 ……………	9	第48図	SD10 堀跡・SD2 溝跡変遷図 ……………	53
第11図	SK1・2・3 土坑断面図……………	9	第49図	富沢館跡と周辺の遺跡……………	69
第12図	SK2 土坑出土遺物 ……………	9	第50図	第13・18次調査区位置図 ……………	70
第13図	遺構外出土遺物 (1) ……………	10	第51図	第13次調査区配置図……………	70
第14図	遺構外出土遺物 (2) ……………	11	第52図	調査区全体図……………	72
第15図	遺構外出土遺物 (3) ……………	12	第53図	1・2トレンチ平・断面図……………	73
第16図	遺構外出土遺物 (4) ……………	13	第54図	3・4トレンチ平・断面図……………	74
第17図	北目城跡と周辺の遺跡……………	19	第55図	第18次調査区配置図……………	77
第18図	第10次調査区位置図……………	20	第56図	調査区全体図……………	78
第19図	第10次調査区配置図……………	21	第57図	調査区出土遺物 ……………	80
第20図	調査区東壁断面図 ……………	22	第58図	富沢館跡 検出堀跡位置図 ……………	82
第21図	調査区全体図……………	23	第59図	安久東遺跡周辺の地形 (国土地理院土地条件図を基に作成)……………	83
第22図	SB1 掘立柱建物跡平面・断面図 ……………	24	第60図	安久東遺跡と周辺の遺跡 ……………	84
第23図	SD1・4 堀跡平面・断面図……………	25・26	第61図	第4次調査区位置図……………	85
第24図	SD1 堀跡出土遺物 (1)……………	28	第62図	第4次調査区配置図……………	85
第25図	SD1 堀跡出土遺物 (2)……………	29	第63図	確認調査トレンチ平面図 ……………	87
第26図	SD1 堀跡出土遺物 (3)……………	30	第64図	第4次調査区全体図……………	88
第27図	SD1 堀跡出土遺物 (4)……………	31	第65図	第4次調査区溝跡・土坑・ ピット全体図 ……………	89
第28図	SD10 堀跡平面・断面図……………	32	第66図	第4次調査区自然流路跡全体図……………	90
第29図	SD4・10 堀跡出土遺物……………	33	第67図	1区調査区平面図……………	91
第30図	調査区北部溝跡位置図……………	34	第68図	1区調査区断面図……………	92
第31図	調査区南部溝跡位置図……………	34	第69図	2区調査区平面図……………	93
第32図	溝跡断面図……………	35	第70図	2区調査区東壁・北壁断面図……………	94
第33図	SD2 溝跡出土遺物 ……………	36	第71図	3区調査区平面図……………	95
第34図	SD3 溝跡出土遺物 (1)……………	37	第72図	3区調査区・SK2 土坑断面図……………	96
第35図	SD3 溝跡出土遺物 (2)……………	38	第73図	3区SD3 溝跡出土遺物……………	97
第36図	SD5・8 溝跡出土遺物……………	39	第74図	4区調査区平面図……………	99
第37図	SE1・2・3・6 井戸跡平面・断面図……………	41	第75図	4区調査区断面図(1)……………	100
第38図	SE4・5 井戸跡平面・断面図……………	42	第76図	4区調査区断面図(2)……………	101
第39図	SE2・3・4 井戸跡出土遺物……………	43	第77図	4区SD5 溝跡・SK3 土坑出土遺物……………	102
第40図	SE5 井戸跡出土遺物……………	44	第78図	5区・6区調査区平面図……………	103
第41図	SK1～5 土坑平面・断面図……………	45	第79図	SD12・13 溝跡平面図……………	104
第42図	SK6～10 土坑平面・断面図……………	46			
第43図	SK7 土坑・ピット出土遺物……………	47			
第44図	ピット群平面図……………	48			
第45図	ピット群断面図……………	49			

第 80 図	SD14 溝跡平面図	105	第 84 図	遺構外出土遺物	113
第 81 図	SD15・16 溝跡平面図	106	第 85 図	安久遺跡・安久東遺跡	
第 82 図	5・6区断面図	107・108		遺構全体図	117・118
第 83 図	5・6区溝跡・自然流路跡出土遺物	112			

挿表目次

表1	令和元年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2
表2	令和2年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2

写真図版目次

写真図版1	中在家南遺跡第12次調査(1)	14	写真図版15	北目城跡第10次調査出土遺物(4)	64
写真図版2	中在家南遺跡第12次調査(2)	15	写真図版16	北目城跡第10次調査出土遺物(5)	65
写真図版3	中在家南遺跡第12次調査 出土遺物(1)	16	写真図版17	北目城跡第10次調査出土遺物(6)	66
写真図版4	中在家南遺跡第12次調査 出土遺物(2)	17	写真図版18	北目城跡第10次調査出土遺物(7)	67
写真図版5	中在家南遺跡第12次調査 出土遺物(3)	18	写真図版19	北目城跡第10次調査出土遺物(8)	68
写真図版6	北目城跡第10次調査(1)	55	写真図版20	富沢館跡第13次調査	76
写真図版7	北目城跡第10次調査(2)	56	写真図版21	富沢館跡第18次調査・出土遺物	81
写真図版8	北目城跡第10次調査(3)	57	写真図版22	安久東遺跡第4次調査(1)	119
写真図版9	北目城跡第10次調査(4)	58	写真図版23	安久東遺跡第4次調査(2)	120
写真図版10	北目城跡第10次調査(5)	59	写真図版24	安久東遺跡第4次調査(3)	121
写真図版11	北目城跡第10次調査(6)	60	写真図版25	安久東遺跡第4次調査(4)	122
写真図版12	北目城跡第10次調査出土遺物(1)	61	写真図版26	安久東遺跡第4次調査(5)	123
写真図版13	北目城跡第10次調査出土遺物(2)	62	写真図版27	安久東遺跡第4次調査(6)	124
写真図版14	北目城跡第10次調査出土遺物(3)	63	写真図版28	安久東遺跡第4次調査 出土遺物(1)	125
			写真図版29	安久東遺跡第4次調査 出土遺物(2)	126

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和元年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔

主任 及川謙作

主事 妹尾一樹 相川ひとみ 木村 恒 柳澤 楓 佐藤恒介

文化財教諭 元山祐一 大友 渉 栗和田祥郎 尾形隆寛

専門員 斎野裕彦

【整備活用係】係長 佐藤 淳

主任 小野寺啓次 高橋敬子

主事 庄子裕美 五十嵐 愛

文化財教諭 齋藤健一 三浦昂也 佐藤文征

専門員 渡部弘美

令和2年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔

主査 近藤勇亮 栗和田祥郎

主任 及川謙作 小浦真彦 尾形隆寛

主事 澤目雄大 妹尾一樹 相川ひとみ 木村 恒 柳澤 楓

専門員 斎野裕彦

会計年度任用職員 篠原信彦

【整備活用係】係長 工藤慶次郎

主査 元山祐一

総括主任 高橋勝枝

主任 堀越 研 佐藤文征

主事 庄子裕美 五十嵐 愛

第2節 調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

第3節 調査実績

令和元年度～令和2年度（令和2年1月～令和3年1月）にかけて実施された調査は表1、2の通りで、公共事業が3件、民間開発が17件、合計20件である。本書に収録したのはこのうち3件と平成30～令和元年12月までに実施した2件の計5件である。

第3節 調査実績

表1 令和元年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H31-55	民間	富沢館跡	仙台市富沢駅西土地区画整理事業	店舗建築	371.96	37	1月7日、9～10日	性格不明遺構・小溝状遺構・縄文土器	H31 102-76	第18次
2	H31-57	民間	神柵遺跡	仙台市若林区沖野三丁目	建売住宅	74.52	12	1月20日	ピット、土坑	H31 101-247	—
3	H31-58	民間	神柵遺跡	仙台市若林区沖野三丁目	建売住宅	70.38	9	1月21日	溝跡、ピット	H31 101-248	—
4	H31-60	民間	長喜城跡および隣接地	仙台市若林区長喜城字山神	宅地造成	42560.65	195	2月10日～27日	水田耕作土 / 土師器・弥生土器	H31 103-015	—
5	H31-61	公共	経ヶ峯伊達家墓所	仙台市青葉区壺屋下	公園トイレ	485.01	10.45 +7.2	2月18日	磁器	H31 104-057	—

(令和2年1月1日～3月31日)

表2 令和2年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図No.	調査No.	公共・民間	遺跡名	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	R2-5	民間	北目城跡	太白区東郡山2丁目	宅地造成	1345	1084.0	5月7日～8月6日	陶器・磁器ほか	H31 102-110	第10次
2	R2-10	公共	根岸遺跡	太白区根岸町	橋台工事	347	79.2	5月27日、12月21日	遺構・遺物なし	H31 104-40	—
3	R2-13	民間	中ノ瀬遺跡	太白区茂庭字中ノ瀬	建売住宅	100	24.0	6月8日	遺構面まで到達せず	R2 101-69	—
4	R2-14	民間	中在家南遺跡	若林区荒井1丁目	共同住宅	177	50.0	6月15～30日	溝跡・土坑	H31 101-450	第12次
5	R2-15	民間	南小泉遺跡	若林区遠見塚2丁目	賃貸住宅	83	27.5	6月22～23日	竪穴遺構?、遺物僅少	R2 101-78・79	—
6	R2-18	民間	堰ノ沢遺跡隣接地	青葉区大倉	農地整備	17100	261.1	8月3日～9月18日	遺物少量	R2 103-17	—
7	R2-20	民間	富沢館跡	太白区富沢駅西	共同住宅	214	24.0	8月7日	遺構・遺物なし	R2 102-18	—
8	R2-21	民間	羽黒前遺跡	宮城野区岩切字羽黒前	区画整理	115600	829.0	8月19日～10月21日	溝跡・土塁・周溝状遺構・塚・竪穴住居跡、土師器・須恵器・陶器・磁器	H31 102-79	—
9	R2-22	民間	大野田古墳群・大野田遺跡	太白区大野田4丁目	GS整備室	63	9.6	9月3日	小溝2・ピット、遺物なし	R2 102-3	—
10	R2-30	公共	桜ヶ岡公園遺跡	青葉区桜ヶ岡公園3番地	公園トイレ	60	36.7	10月22日～11月2日	溝跡1・ピット6、遺物僅少	R2 103-21	—
11	R2-35	民間	沼遺跡	泉区上谷刈267	高齢者向住宅	507	60.0	12月7～10日	性格不明遺構1、遺物なし	R2 102-58	—
12	R2-38	民間	富沢館跡20次	太白区富沢駅西	共同住宅	647	138.0	11月30日～12月11日	堀跡・溝跡	R2 102-116	次年度
13	R2-41	民間	富沢館跡21次	太白区富沢字館	長屋住宅	369	37.5	1月7～8日	堀跡	R2 101-283	次年度
14	R2-42	民間	高柳遺跡	泉区八乙女中央2丁目	共同住宅	129	12.0	1月13日	遺構面まで到達せず	R2 102-63	—
15	R2-43	民間	羽黒堂前B遺跡	太白区山田北前町	宅地造成	571	96.0	1月18～22日	1T-遺構なし、2～4T-遺構面に到達せず、土師器	R2 102-69	—

(令和2年4月1日～令和3年1月31日)



第1図 令和元～2年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)

第2章 中在家南遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

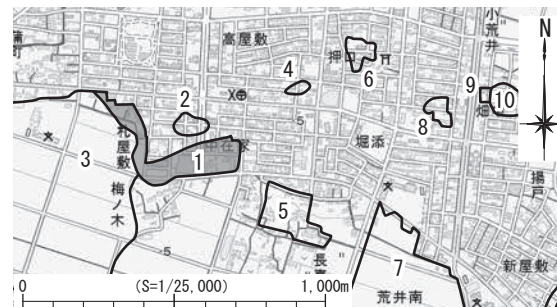
中在家南遺跡は、仙台市若林区荒井字中在家、字札屋敷等に所在する。JR仙台駅の南東約5kmに位置し、標高約5mの自然堤防上に立地する縄文時代から近世の複合遺跡である。これまでの発掘調査では、弥生時代中期の土坑墓や土器棺墓、河川跡、古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代や平安時代の竪穴住居跡が確認されている。特に河川跡からは、弥生時代中期の土器、石器、木製品、骨角器等が多量に出土している。木製品を中心とした出土遺物は、弥生時代の生活を知るうえできわめて重要な考古資料であり、平成14年度に仙台市有形文化財に指定されている。

中在家南遺跡の周辺の荒井南遺跡〈7〉では弥生時代の水田跡と、それを覆う津波の堆積層が確認されている。また押口遺跡〈6〉でも弥生時代から平安時代にかけての遺物を含む河川跡が、荒井広瀬遺跡では河川跡と弥生時代の地震に伴う地割れ跡などが確認されている。

第2節 第12次調査

1. 調査要項

遺跡名	中在家南遺跡（宮城県遺跡登録番号01427）
調査地点	仙台市若林区荒井一丁目14-9の一部
調査期間	令和2年6月15日 ～令和2年6月30日
調査対象面積	176.66 m ²
調査面積	50.0 m ²
調査原因	共同住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主任 小浦 真彦 主事 柳澤 楓



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	中在家南遺跡	土器棺墓、土坑墓、方形周溝墓、河川跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～近世
2	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
3	仙台東郊条里跡	条里跡	自然堤防	平安
4	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
5	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世
6	押口遺跡	河川跡、水田跡、包含地	自然堤防、後背湿地	弥生～近世
7	荒井南遺跡	水田跡	後背湿地	弥生
8	荒井畑中遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世
9	荒井畑中東遺跡	包含地	自然堤防	古墳
10	荒井館跡	城館跡	自然堤防	中世

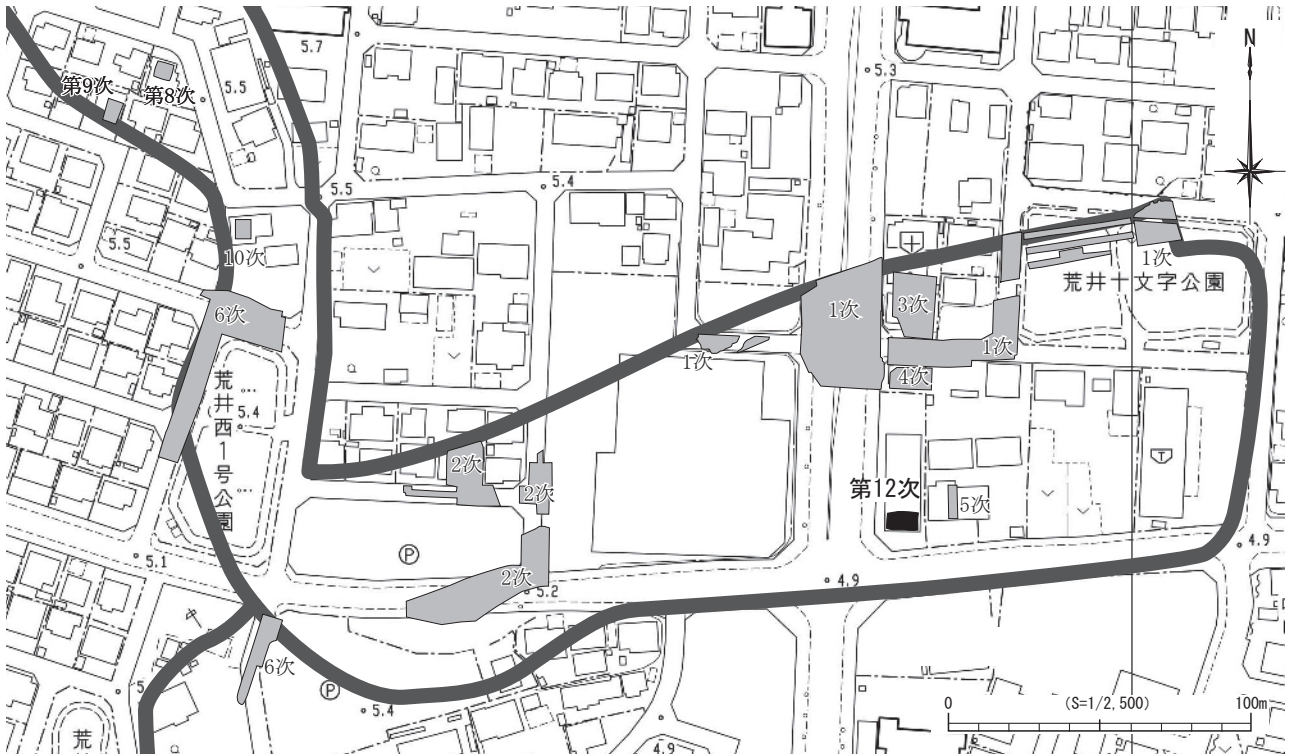
第2図 中在家南遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和2年2月10日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和2年2月14日付H31 教生文第101-450号で通知）に基づき実施した。

対象地内に東西10.0m×南北5.0mの調査区を設定し調査を行った。重機により盛土および基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去し、GL-0.6mに達した時点で調査区の東西にサブトレンチを設けたところ、東西方向に延びる溝跡が2条確認された。調査区の中央部は、攪乱により溝跡上面が大きく削平されている状況であるが、攪乱を除去すると溝の残存が確認された。

調査では、調査区平面図（S=1/20）および断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラにより撮影を行った。

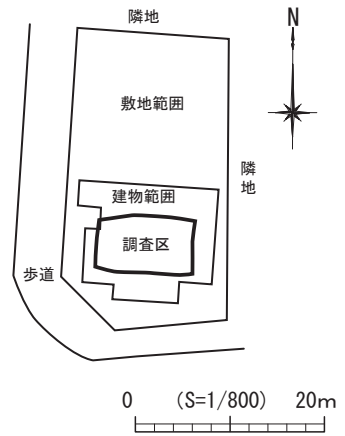


第3図 第12次調査区位置図

3 基本層序

盛土 (GL-0.4m) の下に基本層が5層確認された。遺構検出面であるⅢ層上面までは、GL-0.5～0.6mである。

- I 層：10YR3/1 黒褐色シルト。褐色粘土ブロックを含む。炭化物を含む。部分的にややグライ化している。層厚 2～20 cm。
- II 層：10YR3/3 暗褐色シルト。炭化物を含む。層厚 4～16 cm。
- III 層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を含む。黒色粘土を筋状に含む。層厚 10 cm。
- IV 層：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。酸化鉄を含む。黒色粘土を筋状に含む。層厚 25 cm。
- V 層：10YR6/4 にぶい黄橙色砂。しまりのない細砂である。酸化鉄を含む。ややグライ化している。層厚 5cm以上。



第4図 第12次調査区配置図

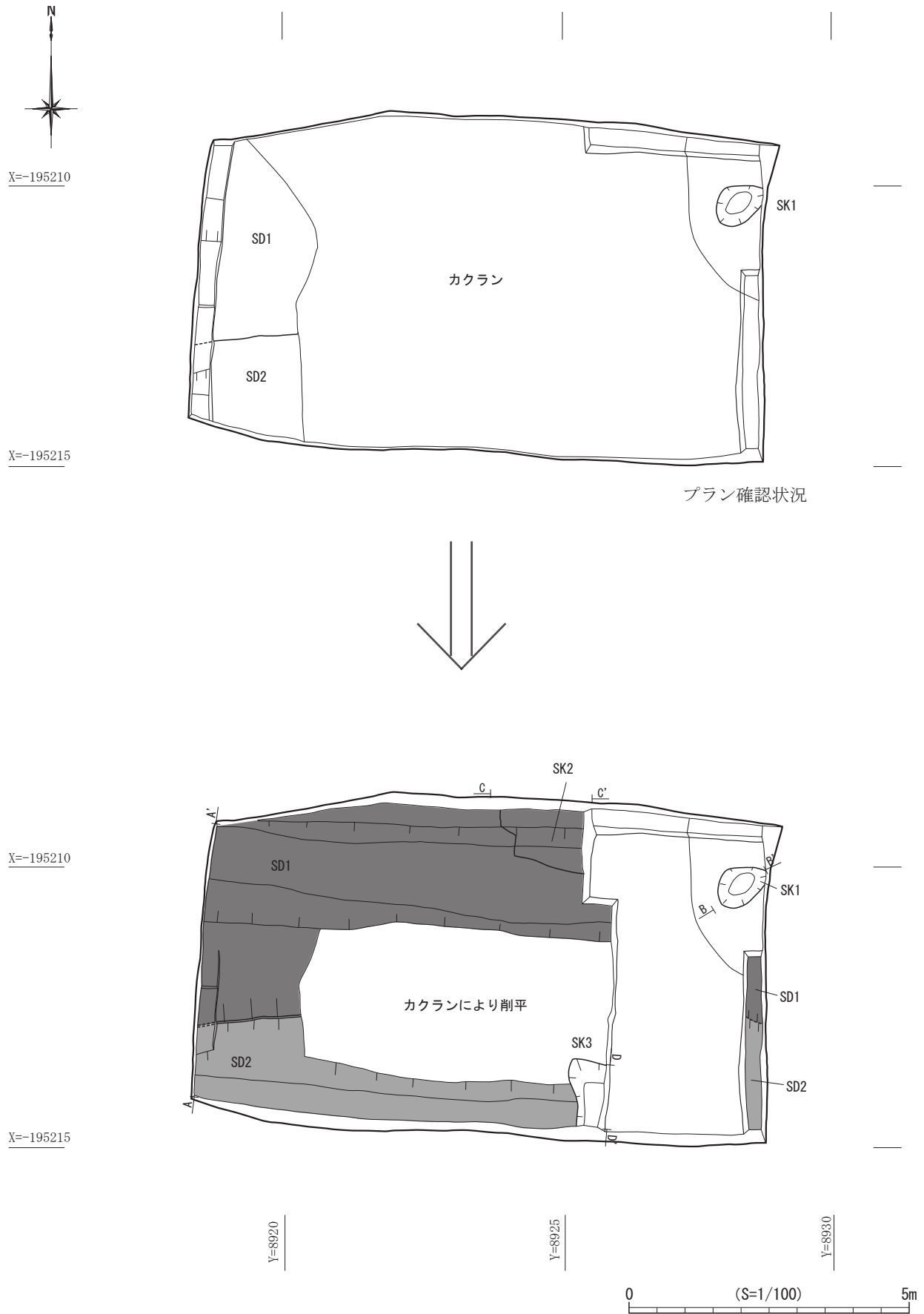
4. 発見遺構と出土遺物

遺構は、溝跡2条、土坑3基が確認された。遺物は各遺構および攪乱から須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石製品、漆器が出土した。

(1) 溝跡

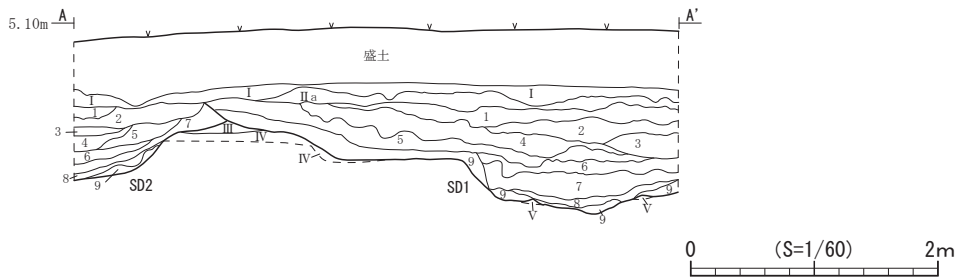
SD1 溝跡 (第5～8図)

調査区北側で確認された東西方向に延びる溝跡で、SD2 溝跡、SK2 土坑より新しく、SK1 土坑より古い。検出長は約 10.0m で、そのうち調査した規模は約 7.0m である。調査区外の東西両方向へさらに延びる。検出幅は平面で約 1.9m～3.6m、調査区西壁で約 3.8m を測り、調査区外北側へさらに広がる。深さは約 0.8m である。断面形は



第5図 第12次調査区平面図

西壁・SD1・SD2



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを含む。酸化鉄を含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック（大）を含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック（小）を含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色～黄色シルトを多量に含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを少量含む。炭化物、酸化鉄少量。
	6	10YR3/1 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトブロックを少量含む。酸化鉄を含む。
	7	10YR3/1 黒褐色	粘土	ややグライ化している。植物遺存体を全体に含む。
	8	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物少量含む。植物遺存体を少量含む。
	9	10YR3/2 黒褐色	粘土	基本層IV層ブロックを含む。
SD2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色シルトを少量含む。酸化鉄を少量含む。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土質シルトを含む。
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む。
	4	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色シルトブロックを含む。黒色粘土少量、酸化鉄少量含む。
	5	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	黒色粘土少量、酸化鉄少量含む。
	6	10YR2/2 黒褐色	粘土	砂を帯状に含む。酸化鉄少量、植物遺存体を少量含む。
	7	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化物を僅かに含む。酸化鉄を少量含む。
	8	10YR3/3 黒褐色	粘土	炭化物を僅かに含む。酸化鉄を少量含む。IV層少量含む。
	9	10YR3/3 黒褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。

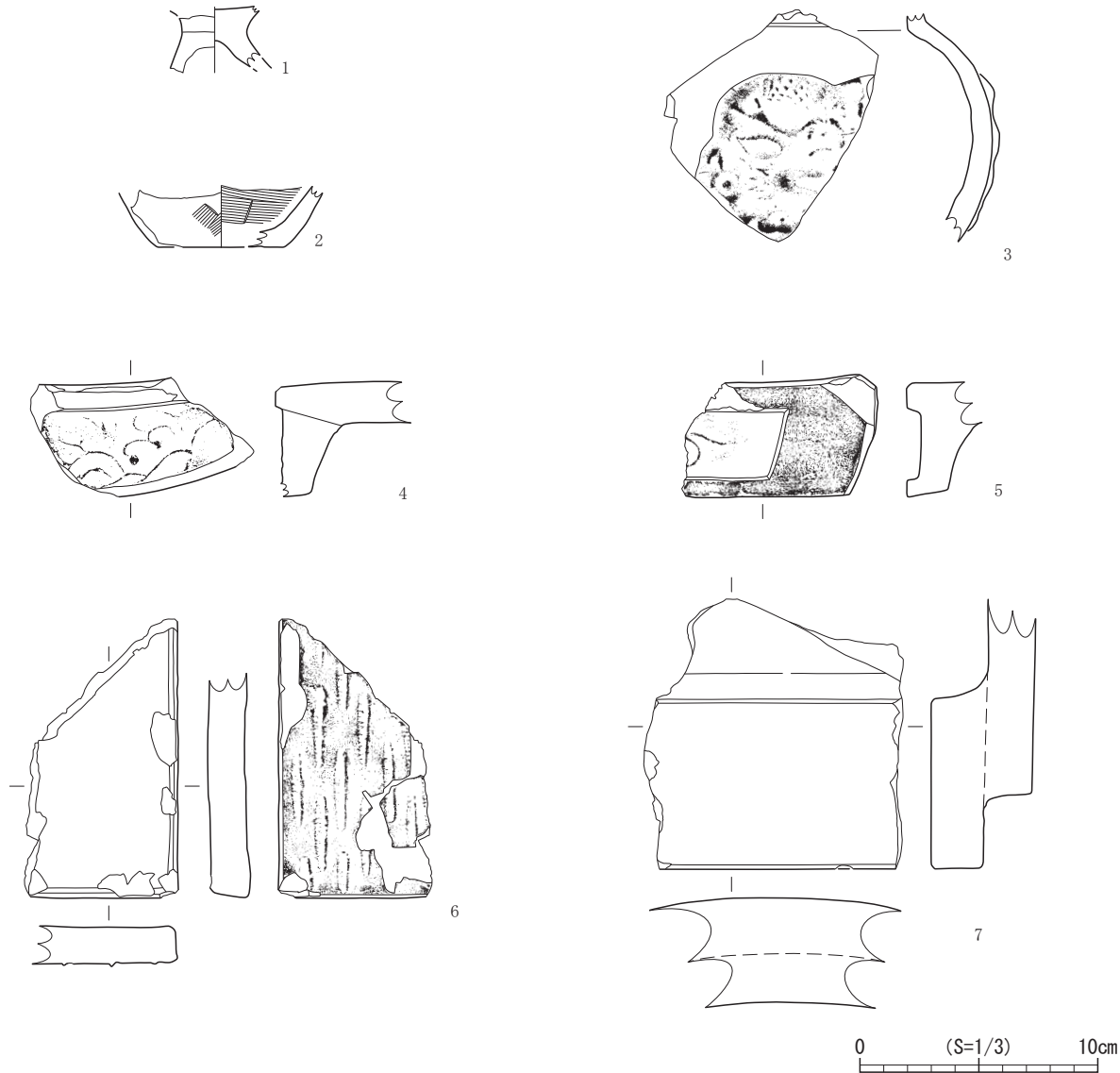
第6図 SD1・2 溝跡断面図

皿形を呈し、立ち上がりは緩やかである。攪乱により溝跡中央部の上半部は大きく削平されている。6層より下は、黒褐色の粘土を主体としており、植物遺存体を含む層もある。

遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、植物の種子（くるみ類か？）が出土した。土師器は非ロクロ土師器が29点である。第7図1は高環の脚部と考えられる。第7図2は甕の底部である。いずれも破片資料であり、摩滅により調整痕が明瞭に観察できず、時期は不明である。須恵器は破片が1点出土のみで、器形等の詳細は不明である。瓦質土器は、播鉢の体部、底部の破片が2点であるが、図化できるものはない。写真図版3-8に写真を掲載した。陶器は、碗や瓶掛など34点出土した。碗は大堀相馬、小野相馬産のものが確認されたが、口縁部、底部の小破片のみで図化できるものはない。第7図3瓶掛は、仙台城跡第16次調査において同様のものが出土している。磁器は、瀬戸美濃の碗（源氏香文散し）の破片をはじめ、11点出土したが小片のみで図化できるものはない。瓦は、平瓦や道具瓦など21点である。第7図6は、凸面に楕円状の工具による刺突痕が等間隔で付けられている。破片資料であるため詳細は不明であるが、反りを持たないことから塀瓦の可能性もある。第7図7、第8図1・2はいずれも部分的な破片資料であるが、水切り溝や角棧部を有することから、伏間瓦と判断した。その他自然遺物として植物の種子が出土した。

SD2 溝跡（第5・6・9図）

調査区南側で確認された東西方向に延びる溝跡で、SD1 溝跡、SK3 土坑より古い。検出長は約9.6mで実際に調査した規模は約7.4mである。調査区外の東西へさらに延びる。検出幅は、平面で約0.8m～1.7m、調査区西壁断面では約1.2mを確認し、調査区外南側へ広がる。深さは約0.6mである。断面形は皿形を呈すると考えられ、堆積土は9層確認され、6層より下は粘土を主体としており、植物遺存体を含む層がある。SD1 同様攪乱の影響で溝



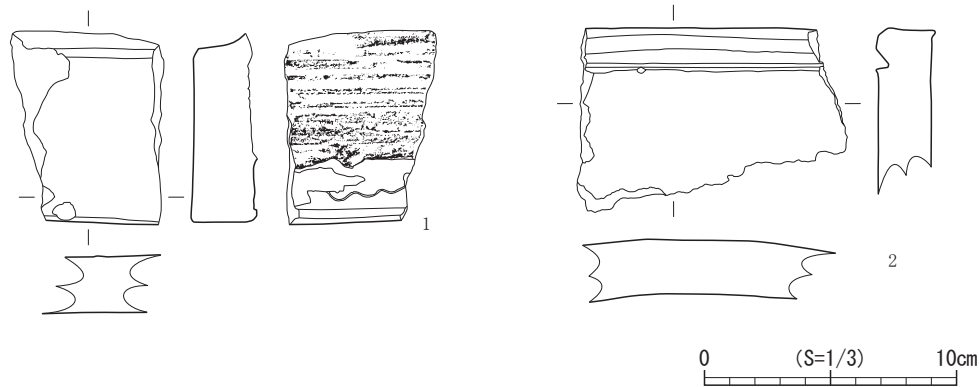
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1	SD1	-	非ロクロ土師器	高坏	-	-	(2.8)	不明	不明	胎土緻密 砂粒を含む	3-1
2	C-2	SD1	-	非ロクロ土師器	甕	-	(7.4)	(2.6)	ヘラナデ	ヘラナデ	胎土緻密 砂粒を含む	3-2
3	Ic-1	SD1	-	陶器	瓶掛	(9.6)	(8.5)	1.1	緑釉 龍文		産地：美濃 19c 初頭	3-3
-	Ic-2	SD1	-	陶器	播鉢	-	-	-	-	おろし目		3-8

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	G-1	SD1	-	瓦	軒平瓦	4.6	(9.0)	1.2	燻し瓦 瓦当面：唐草文 周線高：0.3 cm 凸面：ナデ 凹面：ナデ	3-4
5	G-2	SD1	-	瓦	軒平瓦	4.8	(8.2)	1.7	燻し瓦 瓦当面：唐草文 内区幅：(3.9) cm 内区高：(3.1) cm 周線高：0.6 cm 脇区幅：3.5 cm 凸面：ナデ 凹面：ナデ	3-5
6	G-3	SD1	-	瓦	平瓦	(11.7)	(6.5)	1.6	燻し瓦 凹面：ナデ凸面：ナデ→工具先端の刺突痕	3-6
7	H-1	SD1	-	瓦	伏間瓦 (角)	(11.4)	(10.7)	2.0	燻し瓦 棧幅：7.0 cm きき幅：(10.4) cm 外面：棧部面取り 棧接合→ヨコナデ 全体的にナデによる調整 内面：棧接合→ヨコナデ 全体的にナデによる調整	3-7

第7図 SD1 溝跡出土遺物 (1)

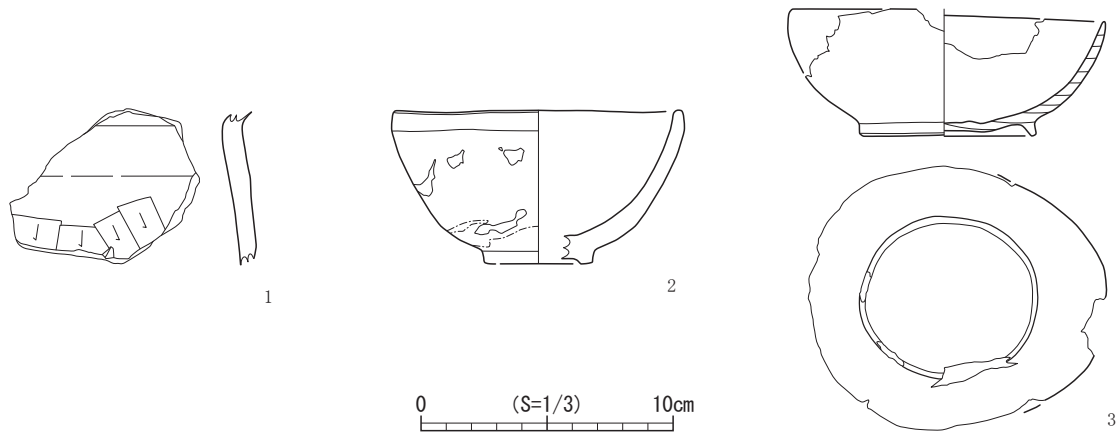
跡中央部の上半部は大きく削平されている。

遺物は土師器2点と、瓦、陶器、磁器、漆器が各1点出土した。第9図1は土師器甕の体部であるが、破片であるため、時期は不明である。陶器は、円礫数点と共に重なった状態で出土している。漆器(第9図3)は5層からの出土であり、全体的に薄い器形で土圧による影響かやや変形している。瓦と磁器は細片のため、図化できなかった。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	H-2	SD1	-	瓦	伏間瓦(角)	(7.5)	(6.1)	2.6	燻し瓦 棧幅:6.9cm きき幅:(4.9)cm 外面:棧部面取り 棧接合→ヨコナデ 全体的にナデによる調整 内面:全体的にナデによる調整 つなぎ目に櫛歯状の平行沈線あり	3-9
2	H-3	SD1	-	瓦	塀瓦	(7.8)	(10.6)	2.2	燻し瓦 凸面:ナデ 水切溝 凹面:ナデ	3-10

第8図 SD1 溝跡出土遺物 (2)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-1	SD2	6	土師器	甕	-	-	(6.1)	ロクロナデ→ケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	3-11
2	Ic-3	SD2	2	陶器	碗	(11.2)	(4.3)	6.1	灰釉 腰部~底部:無釉	灰釉	産地:唐津?	3-12
3	L-1	SD2	5	木製品	漆器椀	(12.3)	(6.8)	5.1	黒塗	黒塗	半割材を素材として横木取り	3-13

第9図 SD2 溝跡出土遺物

(2) 土坑

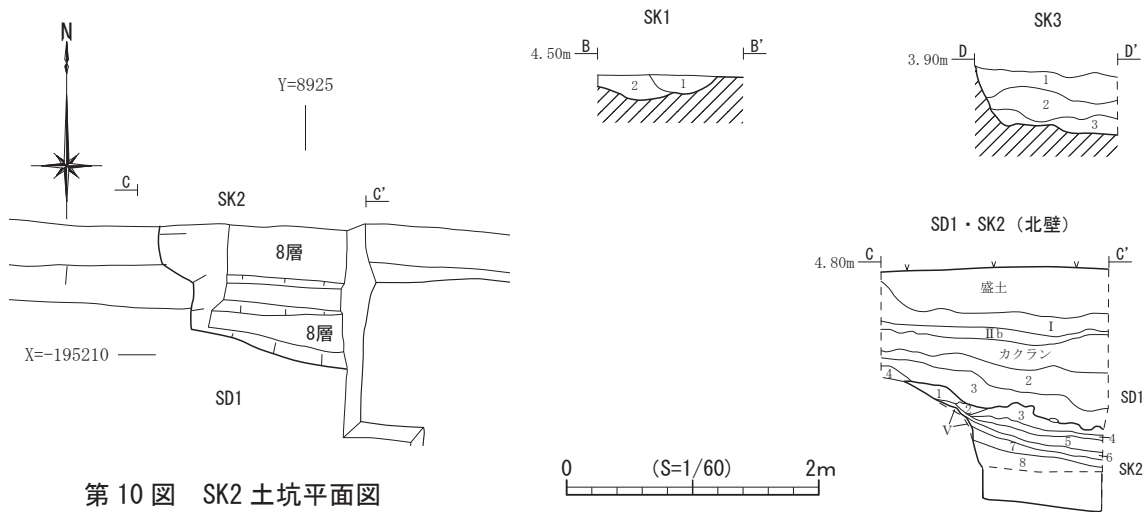
SK1 土坑 (第11図)

調査区の北東部、SD1 溝跡の1層上面で確認された。SD1 溝跡よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸約0.9m、短軸約0.7mである。断面形は皿形を呈し、深さ約0.2mである。堆積土は2層確認された。遺物は出土していない。

SK2 土坑 (第10～12図)

調査区中央部北側で確認された。SD1 溝跡よりも古い。部分的な検出であり平面形は不明である。規模は南北約1.0m、東西約1.1～1.4mで、調査区外北側に広がる。断面形は逆台形を呈する。安全面を考慮し、遺構の中に幅0.3m程度のサブトレンチを設け、部分的に底面の検出を行った。深さは約1.0mである。ほぼ垂直に掘りこまれていることから、当初は井戸跡の可能性を考えたが、深度が浅いことから土坑とした。

遺物は土師器片1点、須恵器甕の頸部から体部の破片が1点(第12図1)、植物の種子(クルミ類か?)が出土した。



第10図 SK2 土坑平面図

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SK1	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロックを少量含む。酸化鉄を含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロックをわずかに含む。
SK2	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	黒色粘土ブロックを含む。IV層を少量含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	IV層を少量含む。
	3	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	
	4	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	3層よりやや暗い。5層との境に黒色粘土を帯状に含む。
	5	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	壁際にIV層を帯状に少量含む。
	6	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロックを少量含む壁際にIV層を帯状に少量含む。
	7	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	
	8	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロックを少量含む。
SK3	1	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	黒褐色粘土ブロックを斑状に含む。
	2	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	1層ブロックを含む。
	3	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂	黄褐色シルトブロックを含む。炭化粒をわずかにふくむ。

第11図 SK1・2・3 土坑断面図

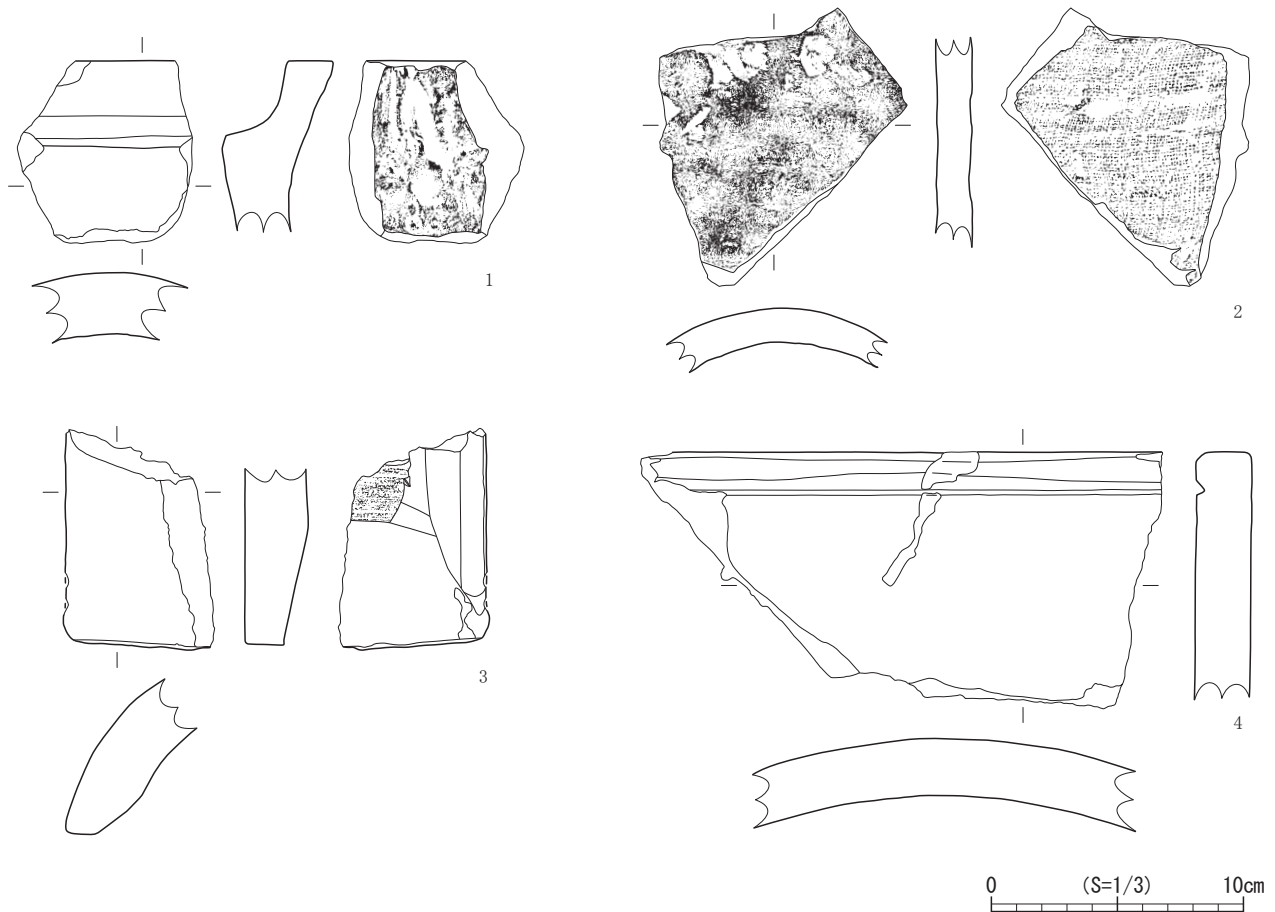


図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-1	SK2	-	須恵器	甕	-	-	(3.3)	平行タタキ目	ロクロナデ	胎土緻密	4-1

第12図 SK2 土坑出土遺物

SK3 土坑 (第11図)

調査区中央部南側で確認された。SD2 溝跡よりも新しい。部分的な検出であるため、平面形は不明である。検出規模は南北約 1.2m、東西約 0.7m で調査区外の南側に広がる。断面形は逆台形を呈しており、深さは約 0.5m である。SD2 溝跡同様、攪乱の影響で遺構上半部は削平されている。遺物は出土していない。



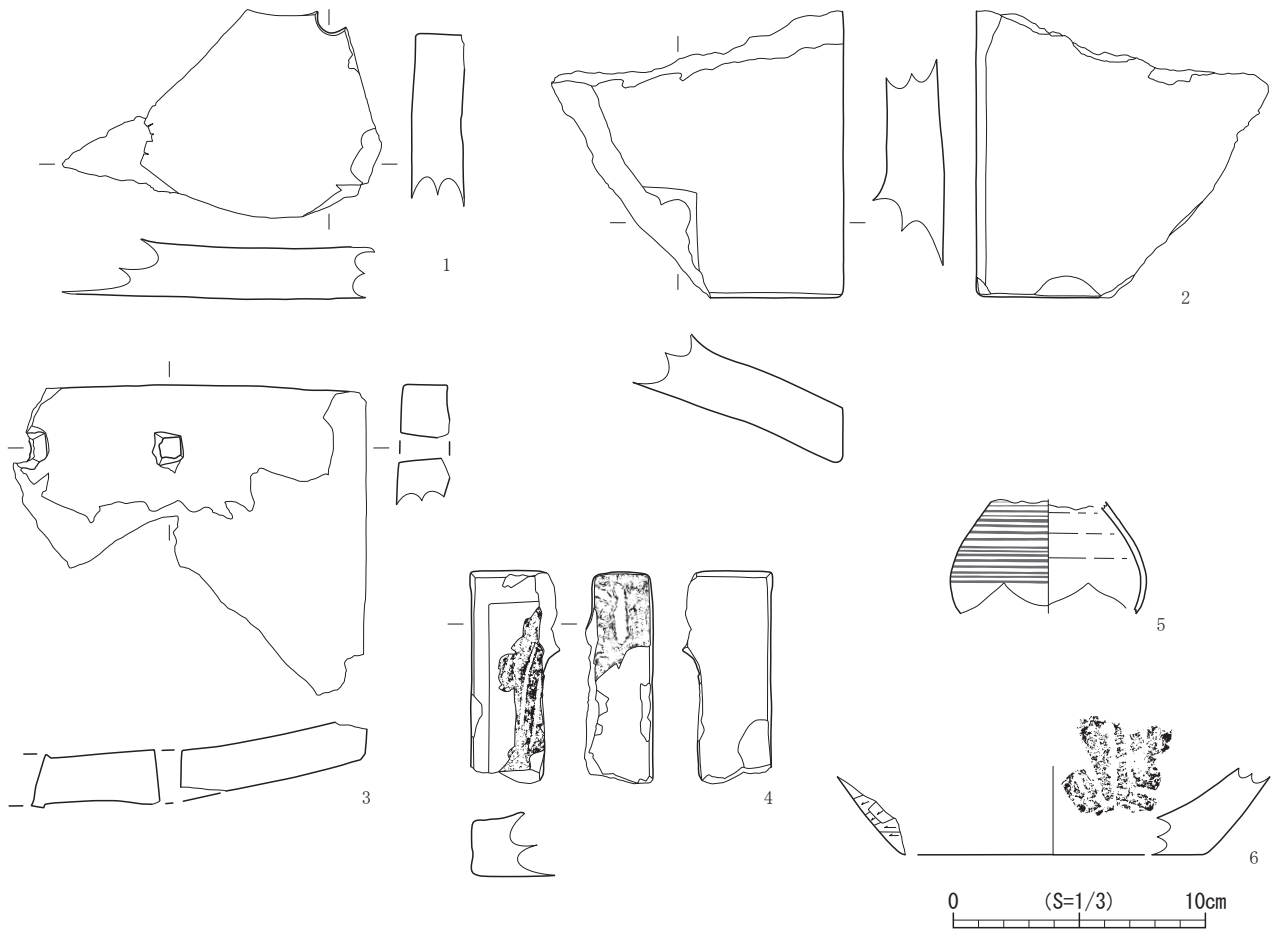
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	F-1	カクツ	-	瓦	丸瓦	(7.3)	(7.0)	(2.1)	燻し瓦 凸面：ナデ 凹面：しぼり目→ナデ	4-2
2	F-2	カクツ	-	瓦	丸瓦	(11.1)	(9.8)	(1.6)	凸面：タタキ目→ナデ 凹面：粘土紐横上痕→布目	4-3
3	F-3	カクツ	-	瓦	丸瓦	(8.8)	(5.9)	(2.5)	燻し瓦 凸面：ナデ 炭化物付着 凹面：面取り、布目痕、コビキ痕	4-4
4	H-4	カクツ	-	瓦	伏間瓦(角)	(10.2)	(20.7)	2.3	燻し瓦 凸面：ナデ 水切溝 凹面：ナデ	4-5

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
-	C-3	カクツ	-	非ロクロ土師器	坏	-	-	-				4-6

第13図 遺構外出土遺物 (1)

(3) その他の出土遺物 (第13～16図)

基本層及び攪乱から土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石製品、木製品が出土した。大半が攪乱からの出土である。土師器は非ロクロ土師器の破片が36点である。坏や甕の体部片が確認されたが、小片のものや摩滅により調整が観察できないものが多く、詳細な時期は不明である。須恵器は破片が3点であるが小破片であり、詳細は不明である。瓦質土器は挿鉢の体部や底部の破片等が11点である。第15図1は形状から火鉢と考えられるが、香炉の可能性もある。陶器は77点である。産地がわかるものでは、大堀相馬産の碗や徳利、小野相馬産の碗、瀬戸美濃の菊紋皿の底部、堤焼の鉢や焙烙の把手部分がある。磁器は、碗、皿、小皿の破片が37点出土している。切込焼が2点確認され、第15図2のほか、紗綾文の型押皿の破片がみられる。これの類例は、仙台城跡や沼向遺跡、山田条里遺跡をはじめ仙台市内各地の遺跡で確認されている。瓦は63点であり、種類は丸瓦、平瓦の他に各種道具瓦が確認された。図化できたもののうち第13図2の丸瓦と凸面に縄叩きが残る平瓦2点が古代の瓦である。その他は近世以降の瓦である。第14図1は部分的な破片であるが反りを持たないことから塀瓦と考えられる。第14

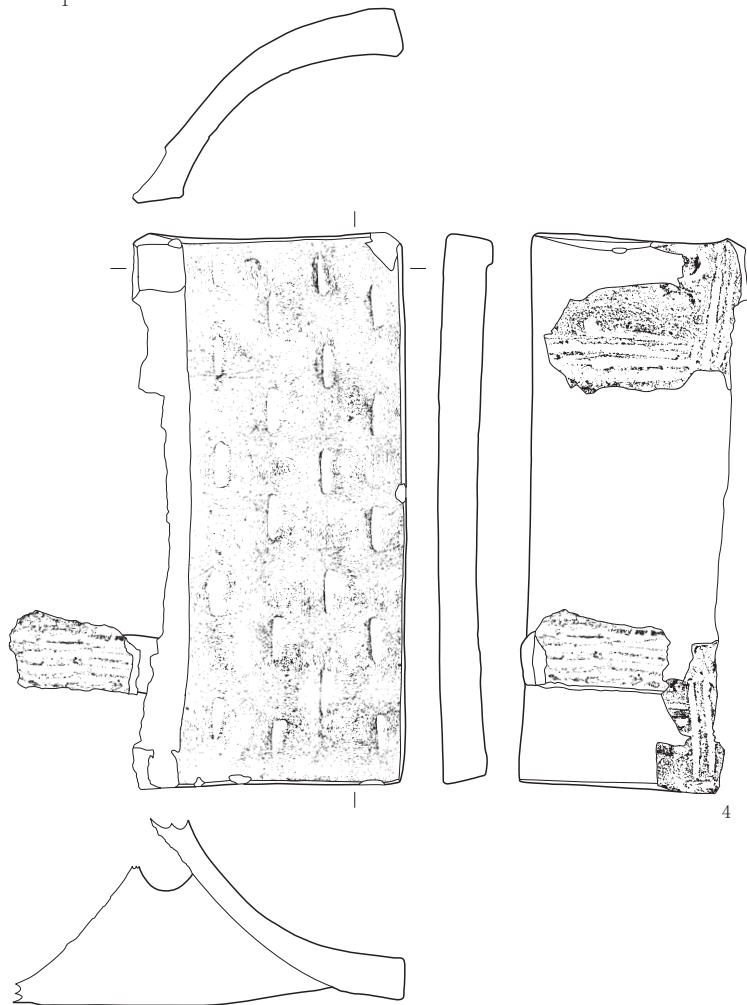
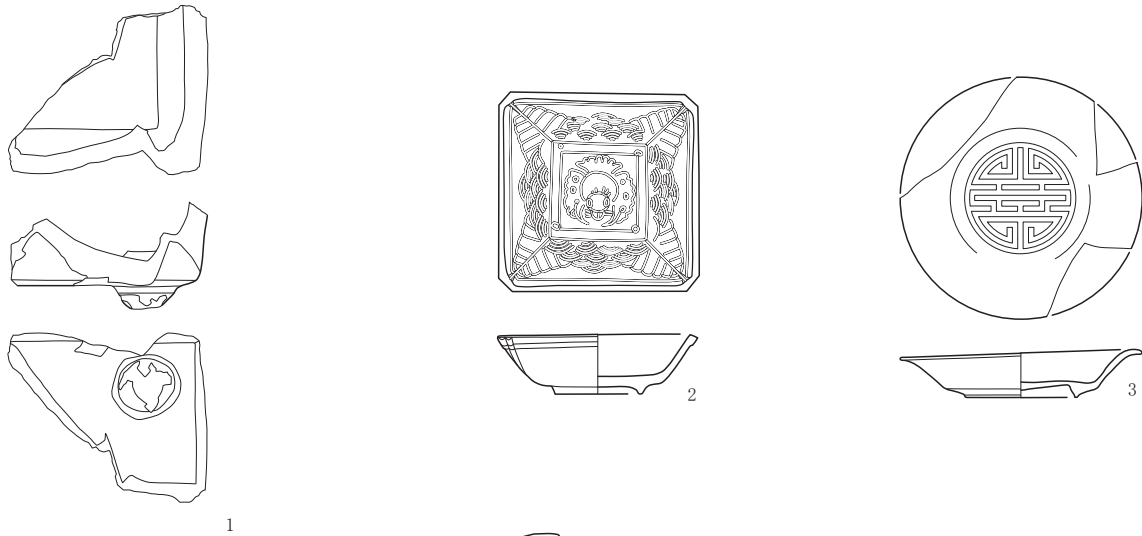


図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	H-5	カクア	-	瓦	崩瓦?	(8.2)	(12.7)	2.3	凸面：ナデ 凹面：ナデ 貫通孔（円形）1孔あり	4-7
2	H-6	カクア	-	瓦	伏間瓦（角）	(11.4)	(11.5)	2.1~2.7	燻し瓦 凸面：ナデ 隆起部あり 凹面：コビキ痕 ナデ	4-8
3	H-7	カクア	-	瓦	棧瓦?	(12.1)	(14.0)	2.1	燻し瓦 凸面：ナデ 凹面：ナデ 上端近くに方形孔あり（2ヶ所）	4-9
4	H-8	カクア	-	瓦	不明	(13.4)	(3.5)	2.5	櫛目状痕あり	4-10

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
5	Ic-4	カクア	-	陶器	瓶掛	-	-	(4.6)	胎釉 糸目		産地：大塚相馬 18c ?	4-11
6	Ic-5	カクア	-	陶器	播鉢	-	(12.0)	(3.1)	ケズリ	おろし目（単位不明）		4-12
-	L-2	-	IV	木製品	曲物	-	-	-			底板	5-1

第14図 遺構外出土遺物（2）

図3は、孔の位置や反りをもつことから棧瓦と考えたが、棧瓦が持つ頭や尻部分の切り込み等の特徴が確認できないため、断定はできない。第14図4、第15図4は用途が不明な瓦である。第14図4は断面に櫛目状痕が確認でき、他の個体が接合されていたと考えられるが、全体の形状など詳細は不明である。第15図4は平瓦部分の凸面に三角形を呈した瓦が接合されており、端部や凸面の接合部には櫛目状痕が存在する。平瓦部分は、全体の幅が通常の平瓦の半分程度の大きさである。長辺部の片側側面の両端には、平坦な面（分割する際の切込みか？）を持ち、その間には櫛目状痕が確認できる。また、凹面にはへら状工具による刺突痕が等間隔に付けられているのが確認できる。接合した三角形を呈した瓦は、端部に半円状の孔が穿たれ、その両側の側面で櫛目状痕が確認された。用途や屋根のどの位置に葺かれていたかなどの詳細は不明である。石製品は砥石や硯等が8点出土し、そのうち3点を図化した。木製品は曲物の底板（写真図版5-1）と考えられる円形の板材の半分である。周縁は部分的に面取り状に削られている。このほかに、自然遺物や動物の骨が出土している。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ib-1	カクツ	-	瓦質土器	火鉢?	-	-	(4.3)	ナデ 底: 足貼付1ヶ所	ナデ	方形	5-2
2	J-2	カクツ	-	磁器	天塩皿	7.9	3.5	2.3		型押し ふくら雀 見込目跡4	産地: 切込 19c 前~中 白磁	5-3
3	J-1	カクツ	-	磁器	皿	9.6	4.4	1.9		「寿」 字文	産地: 瀬戸美濃	5-4

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	H-9	カクツ	-	瓦	不明	22.0	(8.8)	(7.8)	凹面: ヘラ状工具による刺突痕(幅約2.0cm、等間隔に20ヶ所)。接合部に櫛目状痕(7条)が施される。燻し具合は、全体的にあまく、特に平瓦部の凹面にはほとんど施されていない。	5-5

第15図 遺構外出土遺物(3)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	K-1	カクアツ	-	石製品	砥石	12.4	4.8	2.0	縦長の4面を砥石にしている 重さ:170g 石材:凝灰岩	5-6
2	K-2	カクアツ	-	石製品	砥石	(6.2)	(5.6)	(2.1)	板状の直方体 下端は折れ面 他の5面を砥石にしている 重さ:120.7g 石材:凝灰岩	5-7
3	K-3	カクアツ	-	石製品	不明	3.5	3.4	0.7	円盤状、周縁面取り 主面研磨 重さ:8.8g 石材:凝灰岩	5-8

第16図 遺構外出土遺物 (4)

6. まとめ

今回の調査地点は中在家南遺跡の南部に位置し、第5次調査区の西側にあたる。第5次調査では、中世や近世の井戸跡、東西方向に延びる溝跡が確認されており、遺物は陶磁器や瓦をはじめ、弥生時代の扁平片刃石斧や石核も出土している。また北側で行われた第3次・4次調査では、弥生時代の河川跡が確認されている。

今回の調査では溝跡2条、土坑3基が検出された。SD1・SD2溝跡は、共に上面が攪乱により削平されており、攪乱除去後に下部が残存しているのが確認された。規模は、SD1溝跡が3.8m以上、SD2溝跡が1.2m以上と共に規模が大きく、第5次調査で確認された溝跡と同様の区画施設と考えられる。また今回の調査で確認されたSD1溝跡は、位置や方向から第5次調査で確認されたSD5溝跡の延長部分であると考えられる。

出土遺物は、各遺構をはじめ攪乱からも多く出土した。時期は古代から近世と幅広く、調査地周辺には該期の集落が分布していたことを示すものと考えられる。出土遺物の傾向としては、中世から近世の遺物が多く出土しており、特に近世瓦の出土が多い。しかしながら、今回の調査や近隣で行われた過去の調査では、柱跡など建物に関する遺構は確認されておらず、また出土した遺物は、各遺構の年代を示すものではない。近世以降の様相については、今後の周辺での調査成果の蓄積を待ち、検討していく必要がある。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1997 『養種園遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第214集
- 仙台市教育委員会 2007 『仙台北城跡7—平成18年度 調査報告書—』 仙台市文化財調査報告書第309集
- 仙台市教育委員会 2012 『仙台平野の遺跡群22』 仙台市文化財調査報告書第404集
- 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 通史編5 近世3』
- 坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』 理工学
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報9』



1. SD1・SD2 溝跡検出状況（南から）



2. SD1 溝跡断面（西壁）



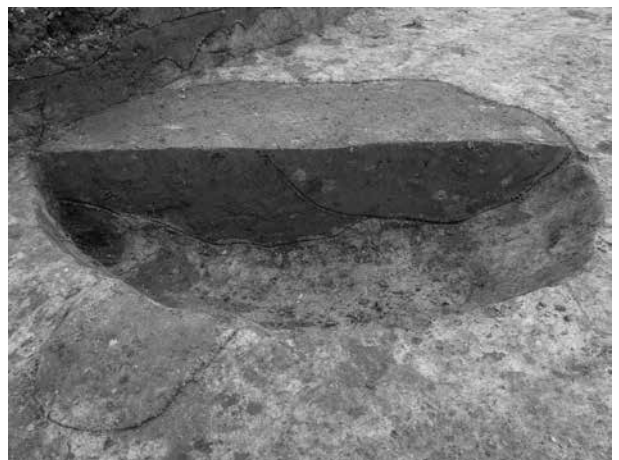
3. SD1 溝跡断面 最深部（西壁）



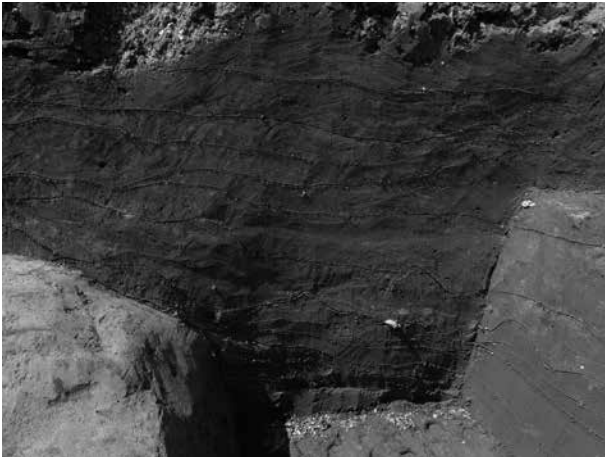
4. SD2 溝跡断面（西壁）



5. SD1・SD2 溝跡断面（西壁）



6. SK1 土坑断面（北から）



1. SK2 土坑断面（北壁）



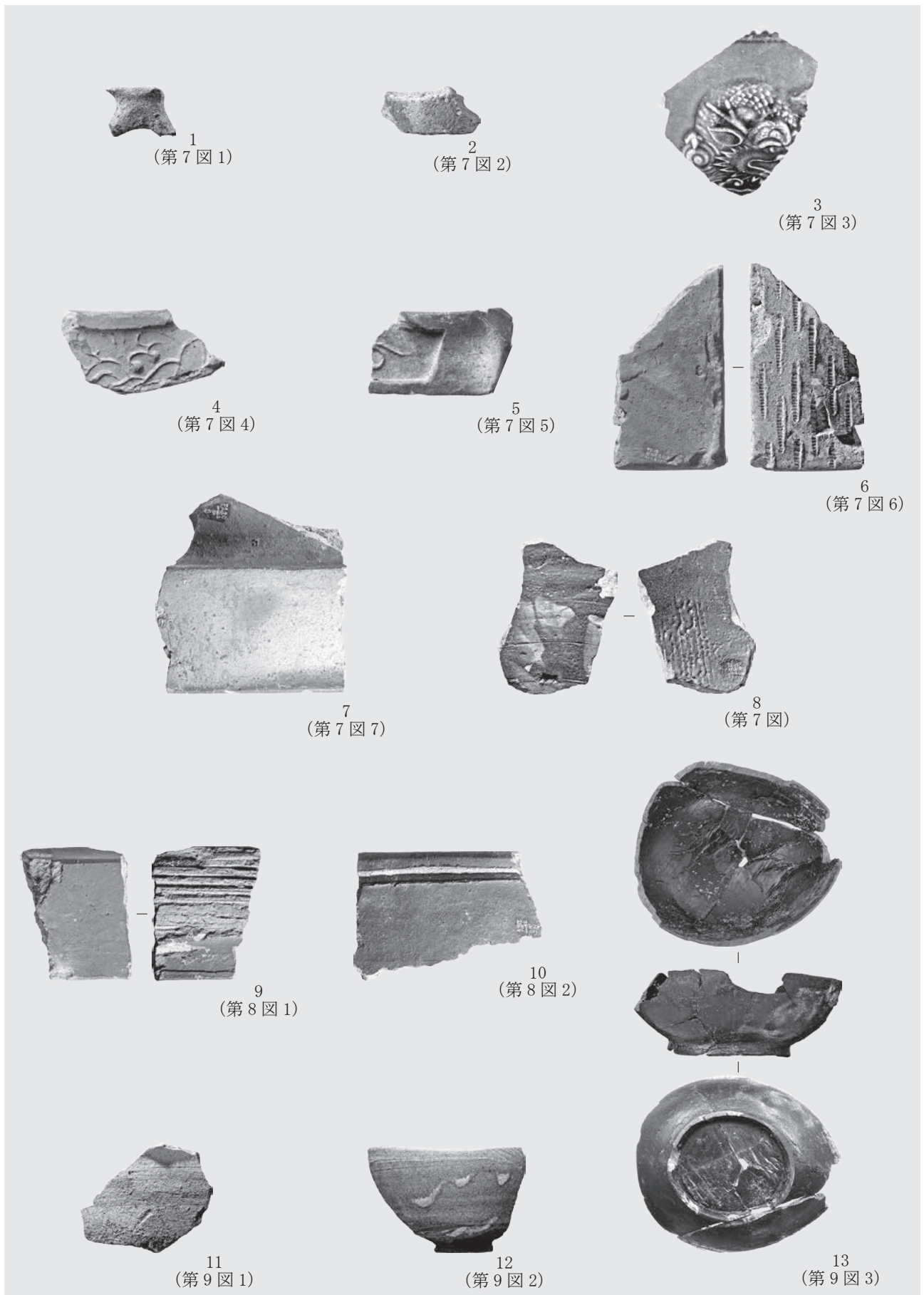
2. SK3 土坑断面（西から）



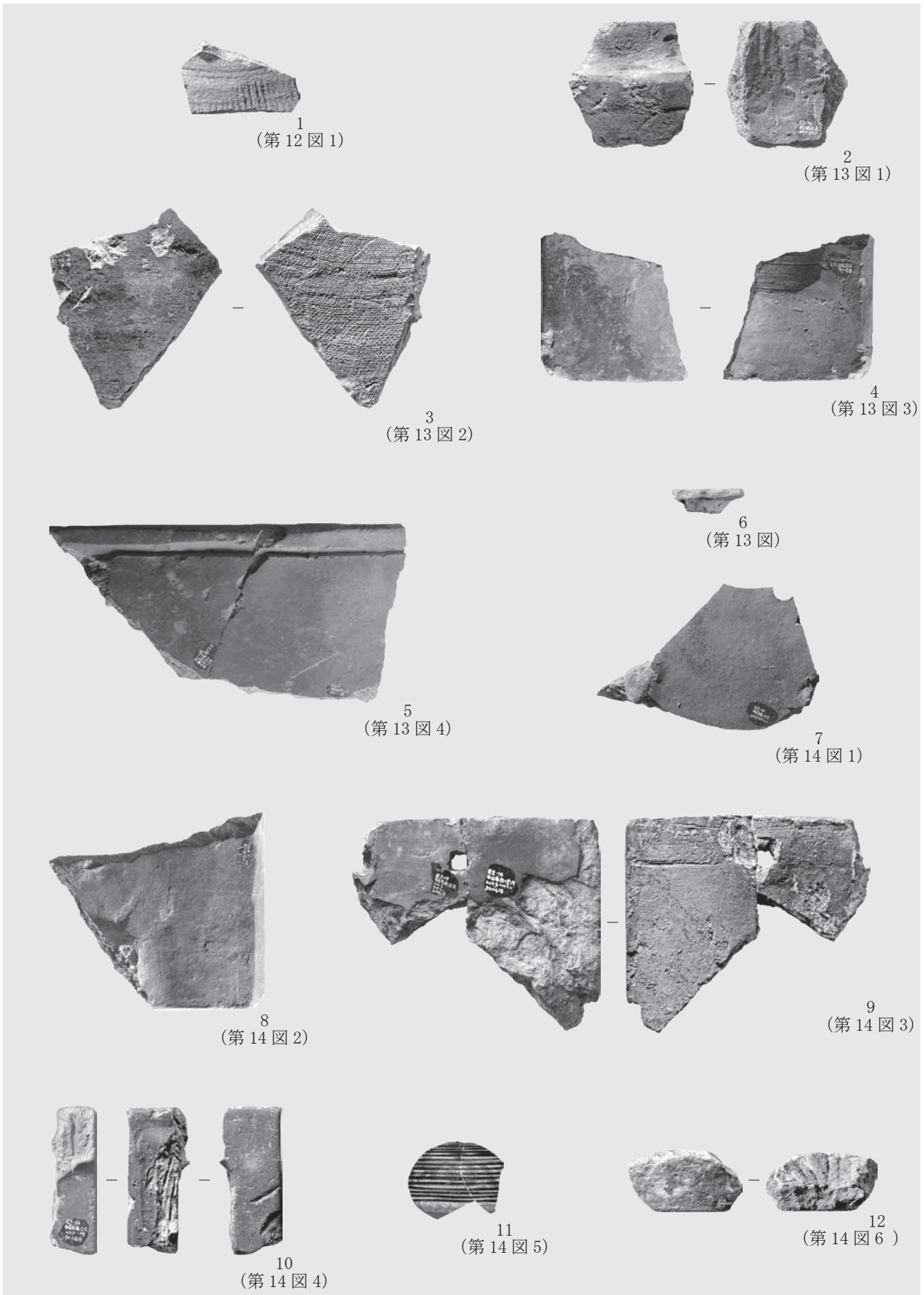
3. 調査区完掘状況（南から）



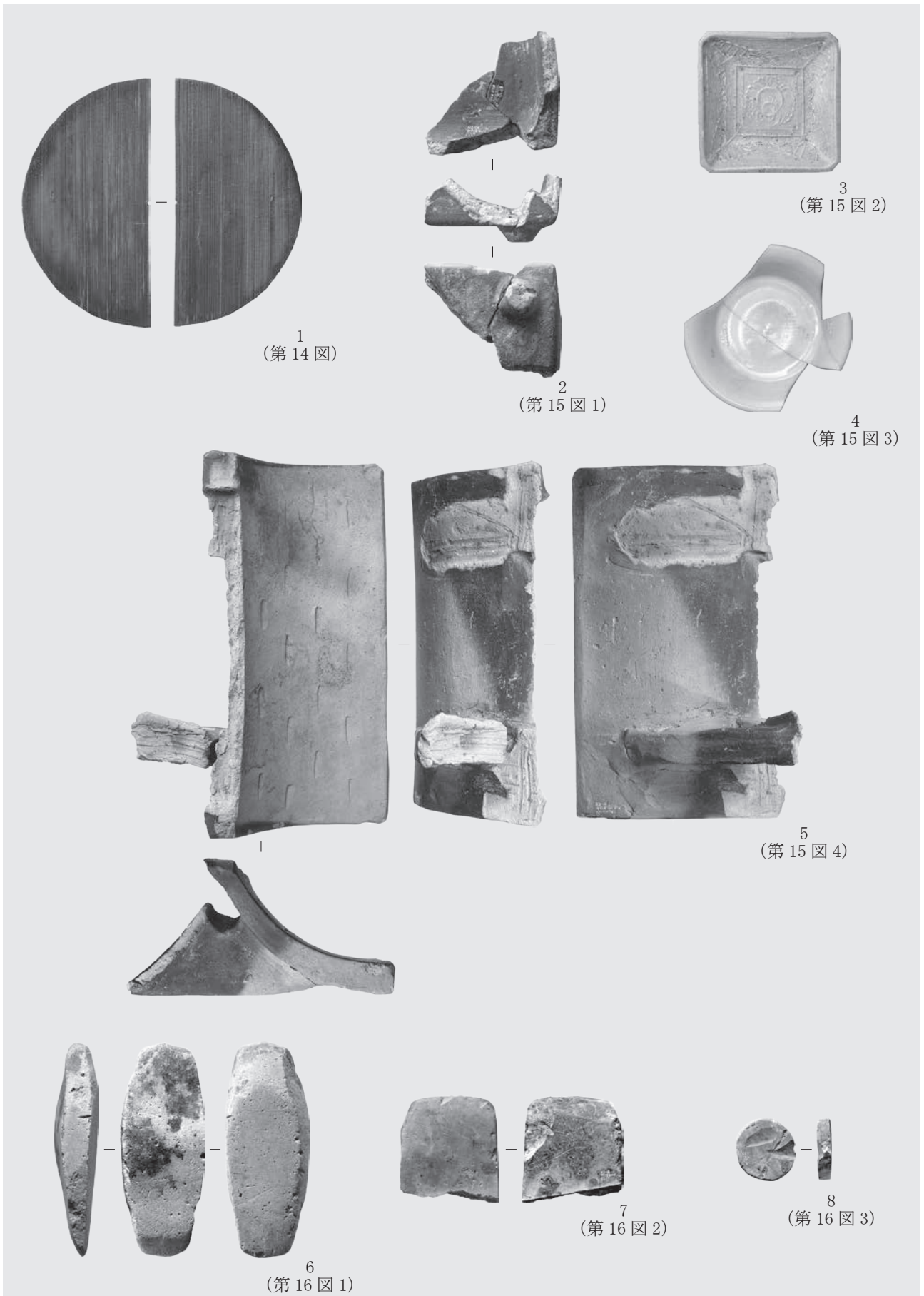
4. 調査区完掘状況（東から）



写真図版3 中在家南遺跡第12次調査出土遺物(1)



写真図版4 中在家南遺跡第12次調査出土遺物(2)



写真図版5 中在家南遺跡第12次調査出土遺物(3)

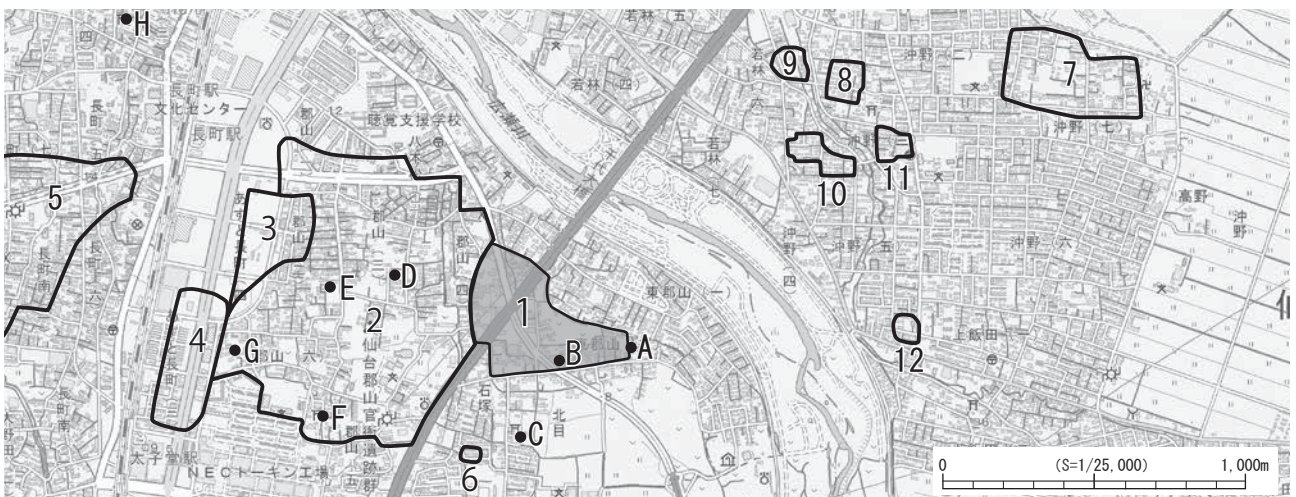
第3章 北目城跡の調査

第1節 遺跡の概要

北目城跡は仙台市太白区郡山四丁目、郡山字北目宅地、東郡山二丁目にかけて所在する平城跡である。郡山低地の東側、広瀬川の右岸の標高約9～12mの自然堤防上に立地し、遺跡の範囲は東西約500m、南北約450mにおよぶ。現在、遺跡の中央部分には国道4号線仙台バイパスと仙台南部道路の長町インターチェンジから通じる都市計画道路の交差点となっている。

北目城は延宝年間(1670年代)に記された「仙台領古城書上」によると、城主は16世紀後半までは栗野氏とされる。栗野氏は永禄年間以降(1570年～)に伊達氏の家臣化したものと考えられており、「北目給衆」と呼ばれる伊達氏の家臣たちが栗野領に派遣されている。また、城跡は東西四十六間(約83m)、南北五十六間(約101m)の規模で四方に幅8間(約15m)の堀があったと記されているが、これまでの調査成果やかつての地籍図から見るに、城の痕跡はさらに広域に広がっていると推定され、これは主郭部分についてのみ記していたと考えられる。その後、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの際には、伊達政宗はこの北目城に入り、ここを拠点として会津の上杉景勝方と対峙した。政宗はその翌年には仙台北城に居を移し、北目城に関わった家臣たちも仙台北城下に移封され、城は廃城となる。仙台北城下にも「北目」という地名があるのはそのためである。昭和40年代以前までは土塁や堀の痕跡が田畑の区割りなどに残されており、その周囲の字名には「館ノ内」、「出丸」、「矢来」、「矢口」といった城館に関連する地名が残っていた。

1992～93年にかけて行われた第1次調査では堀跡や井戸跡などが検出された。堀跡は南北もしくは東西方向に鉤形に屈曲して巡る大規模なもので、底面には地山を掘り残して造り出された障壁が縦横に配置されており、複雑



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～近世
2	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	縄文	縄文～古代
3	西台畑遺跡	集落跡、甕棺墓	自然堤防	縄文～古代
4	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～古代
5	富沢遺跡	水田跡	後背湿地	旧石器～近世
6	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
7	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
8	神柵遺跡	包蔵地	自然堤防	古墳、古代
9	砂押I遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
10	砂押II遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
11	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～古代
12	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

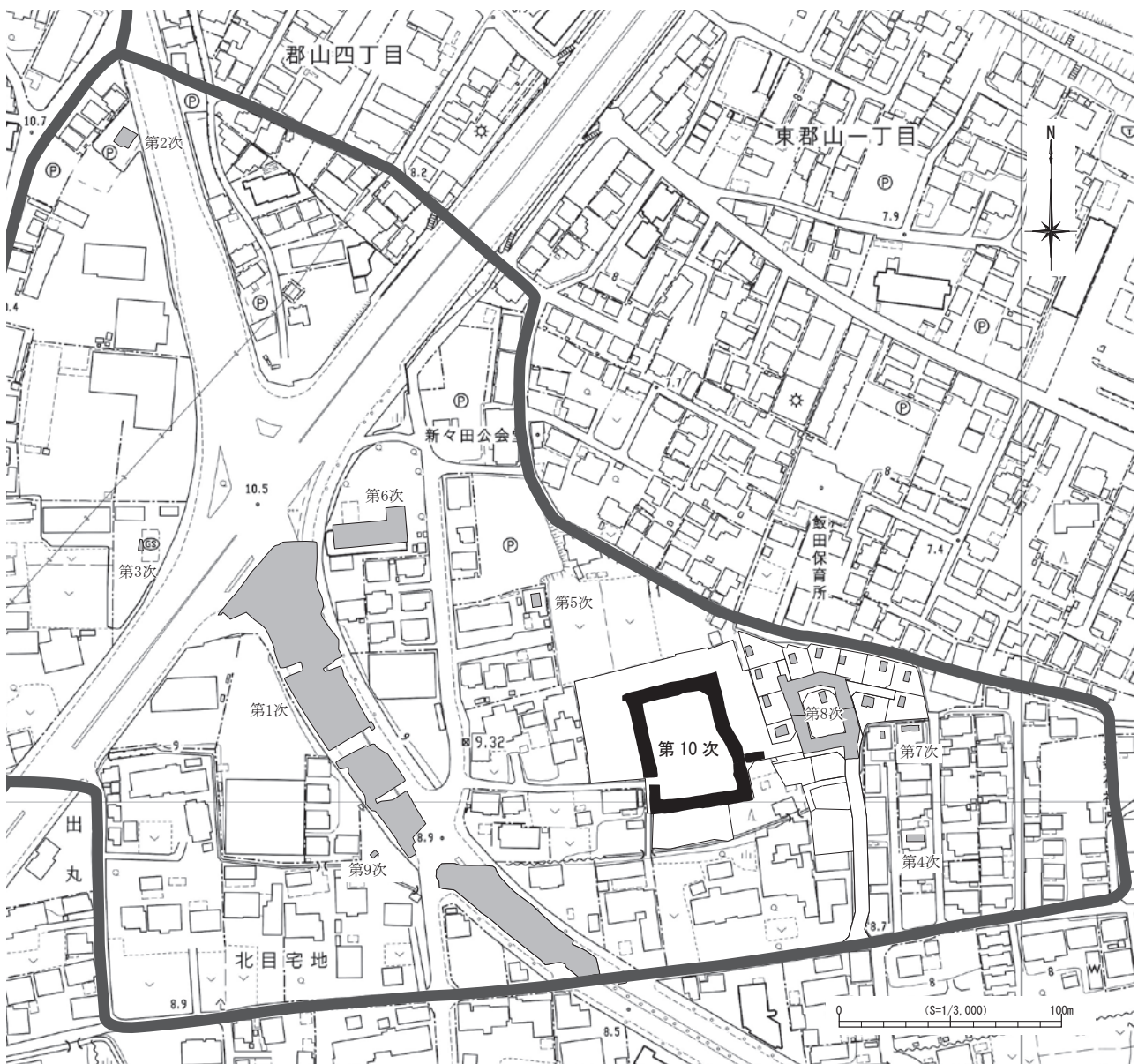
番号	遺跡名	種別	立地	時代・特徴
A	古峯神社板碑	板碑	自然堤防	嘉暦年間(1326～9)、種字大日親身真言
B	宅地古碑群	板碑	自然堤防	5基 正安三年(1301)～応長元年(1311)
C	北目古碑群	板碑	自然堤防	2基 嘉元三年(1305)～正和三年(1314)
D	郡山三丁目古碑群	板碑	自然堤防	4基 嘉暦二年(1327)
E	郡山八雲神社板碑群	板碑	自然堤防	9基 元亨二年(1323)～元徳三年(1331)
F	諏訪社古碑群	板碑	自然堤防	4基 乾元二年(1303)?～建武元年(1334)
G	長町駅裏古碑群	板碑	自然堤防	2基 徳治三年(1308)、嘉暦二年(1327)
H	蛸薬師古碑群	板碑	自然堤防	2基 延慶四年(1311)

第17図 北目城跡と周辺の遺跡

第1節 遺跡の概要

な構造を有する防御性に力点を置いた遺構と理解される（仙台市教育委員会 1995b）。堀跡からは16世紀後半から19世紀にかけての陶磁器、刀、木製品、石製品など多彩な遺物が出土しており、堀は近世初期には開削され、場所によっては19世紀から近現代に至るまで埋没せず窪地として残っていたことが判明している。その後も宅地造成等の開発に伴い調査が行われ、障壁を伴う堀跡、井戸跡、土坑などが検出され、陶磁器や石製品などが出土している。また、近世の城館跡に関わる遺構、遺物の他にも縄文時代後期の竪穴住居跡や後期～晩期にかけての遺物包含層、弥生時代の水田跡や中期から後期にかけての遺物、古代の溝跡、弥生時代以降の大規模な地震による液状化現象（噴砂痕）などが確認されている。

遺跡の西側では、飛鳥時代から奈良時代にかけての陸奥国府である郡山遺跡が所在し、さらに長町駅東遺跡や西台畑遺跡といった郡山遺跡と関わる大規模な集落跡が広がっている。東側の広瀬川の対岸には栗野氏の一族が居住していたと記録が残る沖野城跡が所在している。また、周囲には14世紀前葉の板碑が多数存在する。

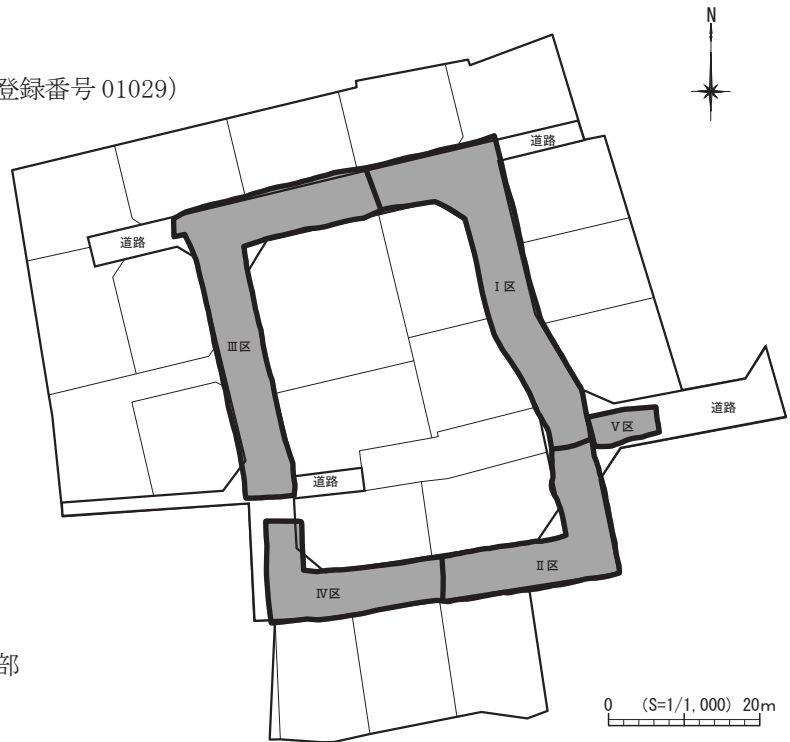


第18図 第10次調査区位置図

第2節 第10次調査

1. 調査要項

遺跡名	北目城跡（宮城県遺跡登録番号 01029）
調査地点	仙台市太白区 東郡山二丁目 108-28、 115、115-2・3、116、 539-1、542、543、 548-1～3
調査期間	令和2年5月7日 ～8月6日
調査対象面積	1,174 m ²
調査面積	1,035 m ²
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主事 妹尾一樹 木村 恒



第19図 第10次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和2年3月12日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（令和2年3月17日付 H31 教生文第 102-110 号で通知）に基づき調査を実施した。対象地は北目城の東部で平成3～4年度に調査を実施した第1次調査区の東側に、平成28年度に調査を実施した第8次調査区の西側隣接部にあたる。

調査は排土置き場の関係や、対象地に掛かっている農道の迂回路確保のため、一度に掘削を行わず、掘削を3回に分け調査を行った。調査区は、最初に掘削を行った道路計画地の東半部分を農道の南北を境にI区、II区、2回目の掘削箇所である道路計画地の西半部分を農道の南北を境にIII区、IV区、最後に東端の現在の道路との接続部分をV区と設定し、調査を実施した。

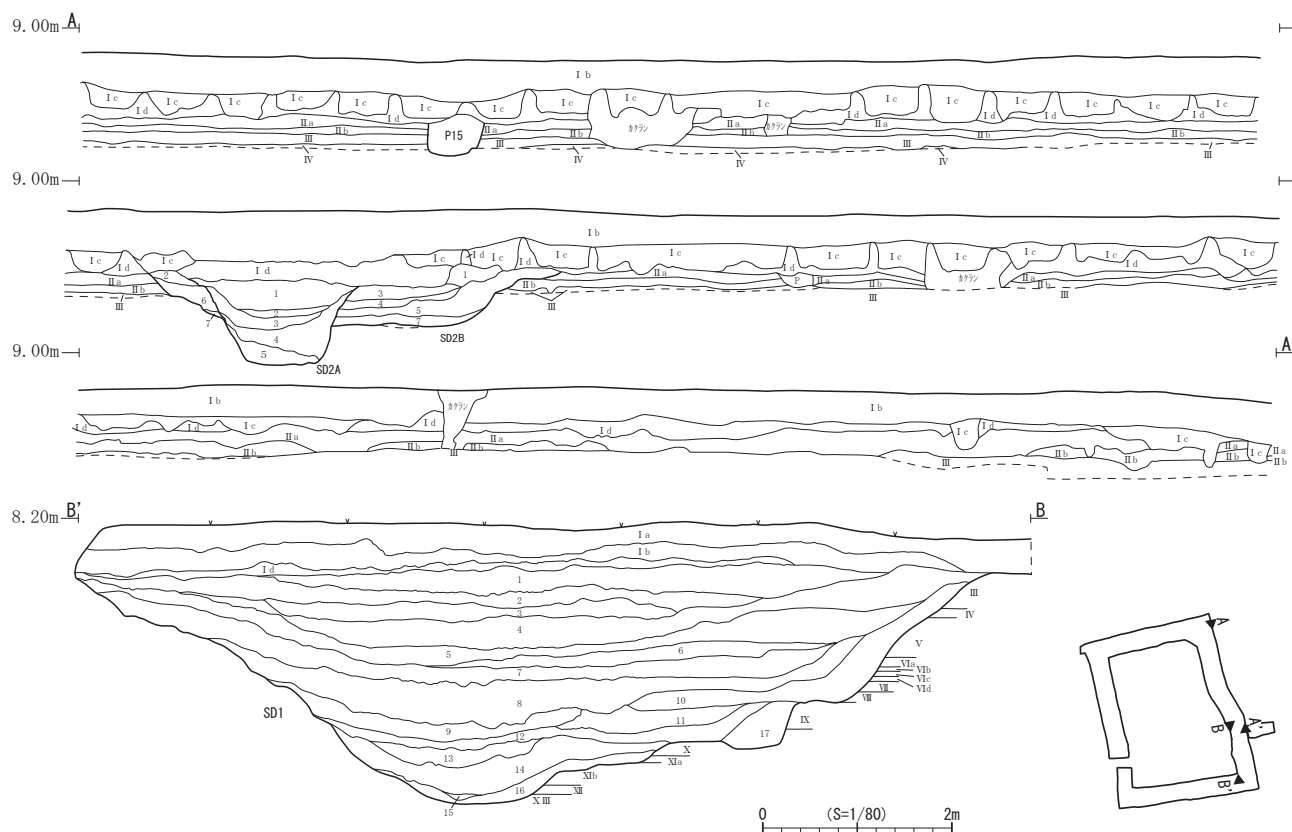
重機により基本層I～II層を除去し、III層上面もしくはIII層が耕作により残存していないI区ではIV～V層で遺構検出作業を行った。その結果、掘立柱建物跡1棟、堀跡3条、溝跡10条、井戸跡6基、土坑10基、ピット116基を検出した。

遺構の記録は、調査区配置図（S=1/200）と遺構平面図（S=1/20）、調査区壁面・遺構断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

3. 基本層序

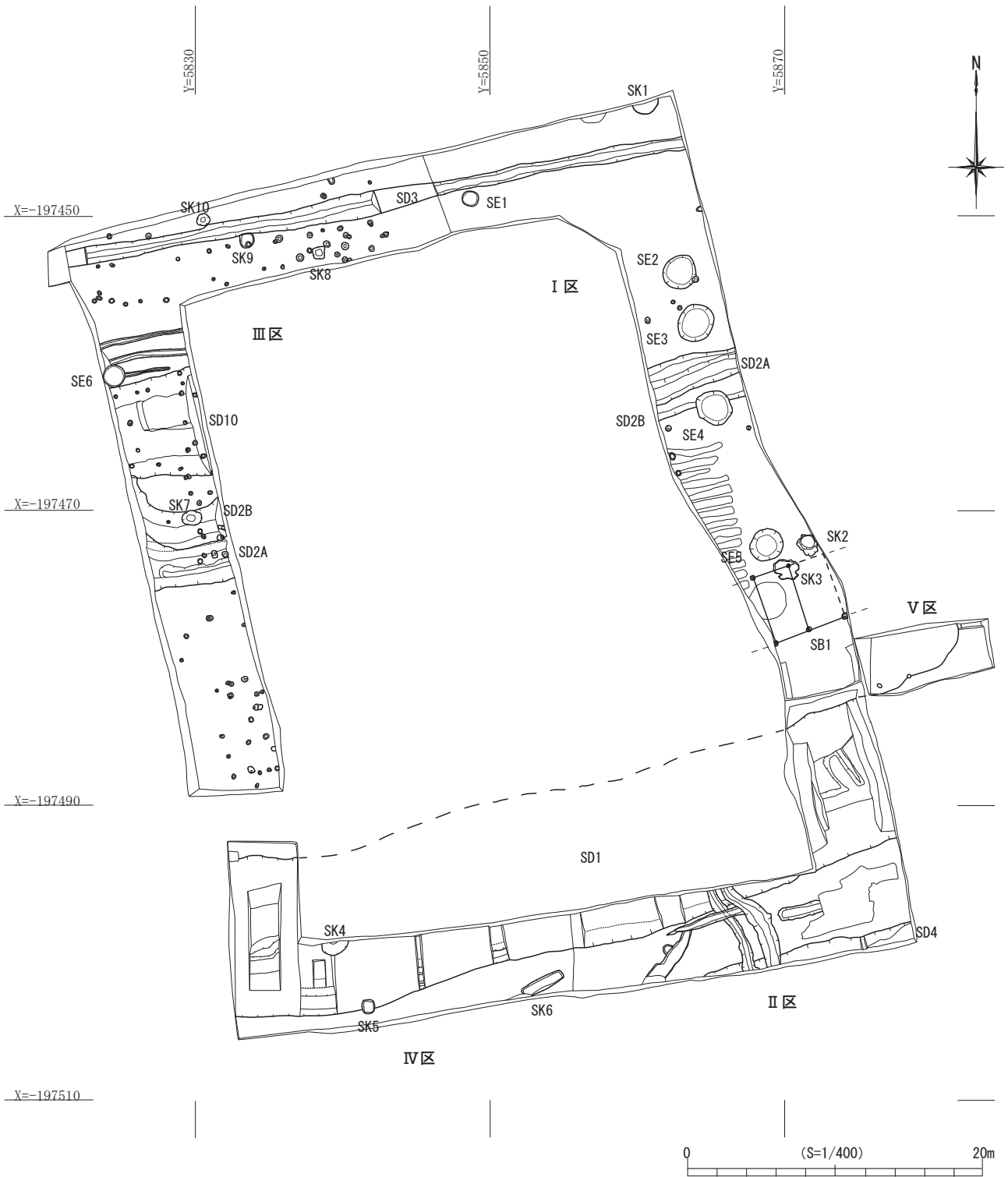
基本層は大別13層、細別22層確認された。調査区では現代の耕作土層であるI層が50～95cmの厚さで存在している。その下層のII層上面が古代以降の遺構検出面であるが、大部分が近年の耕作の影響を受けており遺構検出が困難であったため、基本層III～V層上面で遺構検出を行った。また、精査終了後にSD1堀跡の壁面を一部掘削し、基本層をXIII層まで確認した。III層上面までの深さは60～90cmである。

第2節 第10次調査



第20図 調査区東壁断面図

- I a 層：10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルト。現表土の耕作土層である。東側は駐車場整地のため漉き取られており、確認されない。層厚 20 ～ 42cm。
- I b 層：10YR5/4 ～ 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。旧表土で現代の耕作土層である。層厚 8 ～ 32cm。
- I c 層：現代の天地返し層である。下層を巻き上げており、土層は一定でない。
- I d 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。II 層ブロックを含む。現代の耕作土層である。層厚 14 ～ 28cm。
- II a 層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。今回検出された遺構の検出面の可能性がある。
- II b 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含み、部分的に灰白色シルトブロックを少量含む。
- III 層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。上部で部分的に灰白色シルトブロックを少量含む。また、II 区ではにぶい黄褐色粗砂が下層に堆積している。層厚約 30 cm。今回の遺構検出面である。
- IV 層：10YR3/2 黒褐色粘土。V 層ブロックを含み、下面が凹凸する。層厚 10 ～ 20 cm。
- V 層：10YR8/4 浅黄橙色粘土。黒色粘土と互層状に堆積する。層厚約 40cm。
- VI a 層：10YR6/2 灰黄褐色粘土。層厚 5 ～ 10 cm。
- VI b 層：10YR3/1 黒褐色粘土。層厚約 5 cm。
- VI c 層：10YR5/6 黄褐色粘土。黒褐色粘土と互層状に堆積する。層厚約 5 cm。
- VI d 層：10YR2/1 黒色粘土。黄褐色粘土と互層状に堆積する。層厚約 5 cm。
- VII 層：10YR2/2 黒褐色粘土。層厚約 10 cm。
- VIII 層：10YR6/3 にぶい黄橙色粘土。層厚 10 ～ 15 cm。
- IX 層：10YR6/4 にぶい黄橙色粘土。砂を含む。層厚約 30 cm。
- X 層：10YR8/6 黄橙色細砂。粘土を少量含む。層厚 25 ～ 30 cm。
- XI a 層：10YR6/4 にぶい黄橙色粘土。層厚約 5 cm。



第21図 調査区全体図

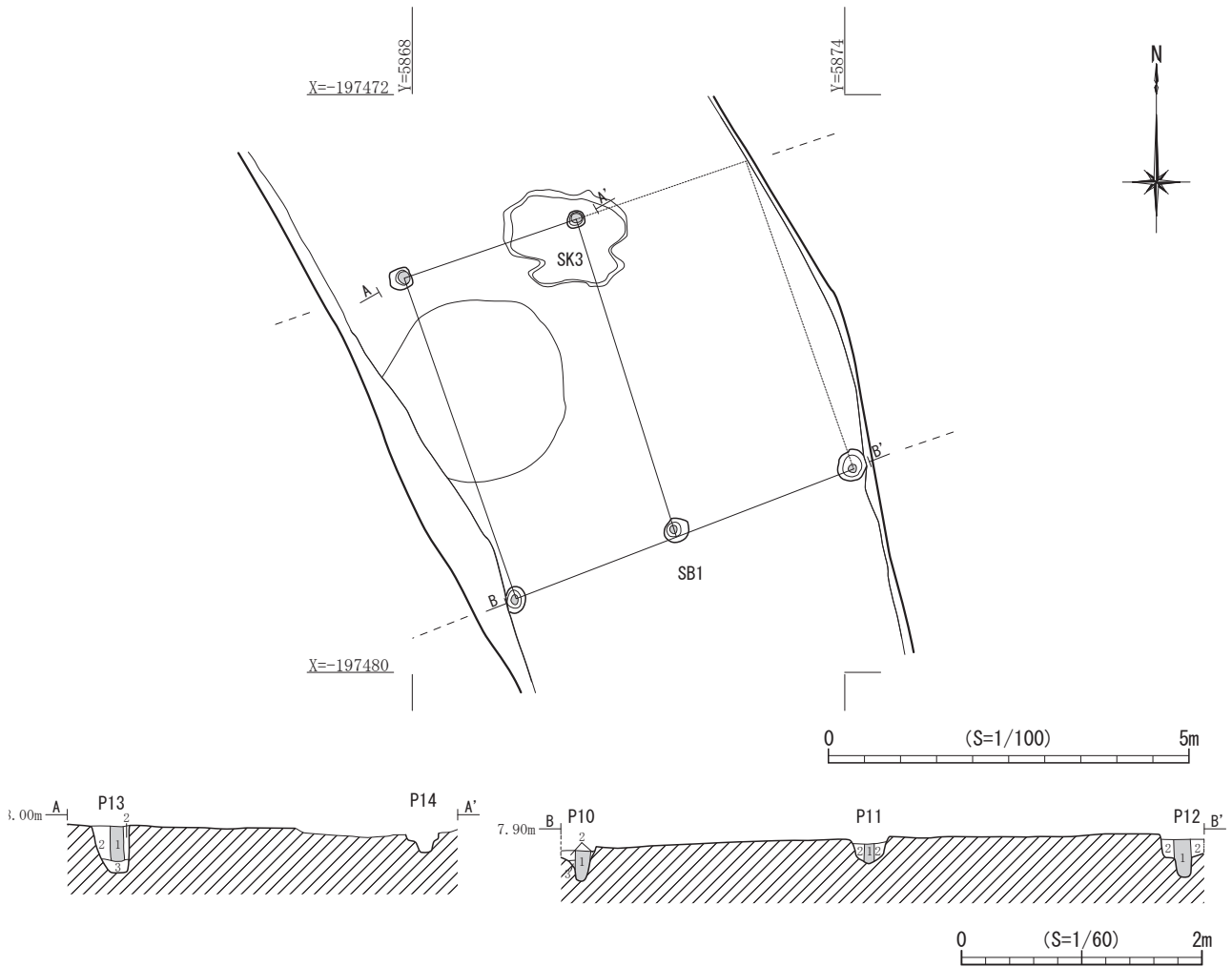
XI b 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土。炭化物を含む。層厚 30 ～ 40 cm。

X II 層：10YR3/1 黒褐色粘土。層厚 10 ～ 15 cm。

X III 層：10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂。層厚 50 cm 以上。

4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構は掘立柱建物跡1棟、堀跡3条、溝跡10条、井戸跡6基、土坑10基、ピット116基である。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SB1-P10	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	均質。柱痕跡。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (1 ~ 2 mm) を少量含む。
SB1-P11	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	均質。柱痕跡。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を含む。
SB1-P12	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	均質。柱痕跡。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を含む。
SB1-P13	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	柱痕跡。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (10 ~ 50 mm) 主体。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (10 ~ 50 mm) を含む。

第22図 SB1 掘立柱建物跡平面・断面図

(1) 掘立柱建物跡

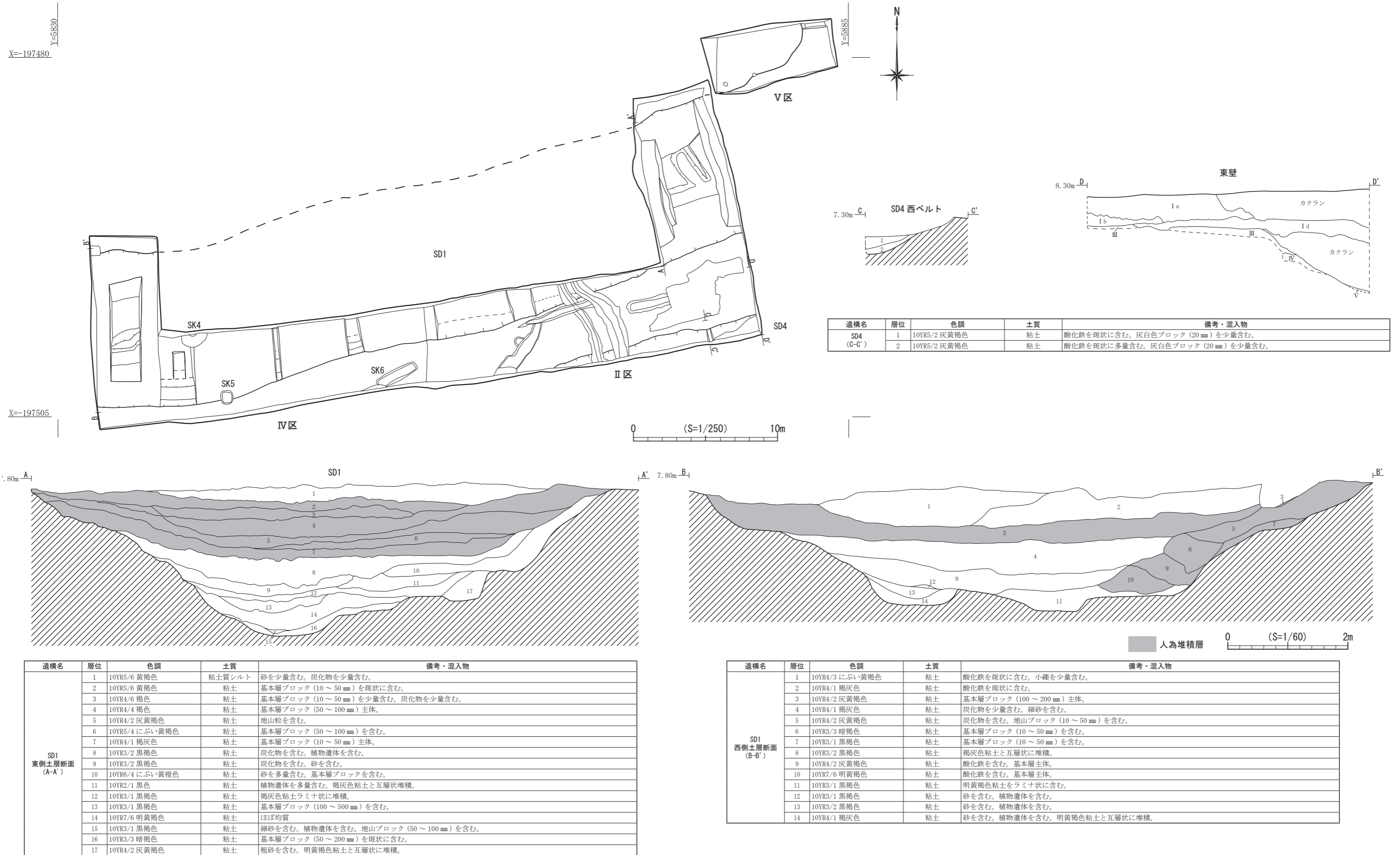
SB1 掘立柱建物跡 (第22図)

I区の南部で検出された。SK3土坑よりも古い。P10、11、12、13、14の5基で構成される、南北1間、東西2間以上の東西棟の側柱建物跡である。南側桁行を基準とした主軸方向はE-21° -Nを測る。規模は桁行総長5.0m以上、梁行総長4.5m、床面積22.9㎡以上である。柱間寸法は南側桁部で東から264cm、241cm、北側桁部で252cmを測る。柱穴の平面形状は円形を呈し、規模は径27~45cm、深さ22~39cmを測る。P10・11・12・13で径8~14cmの柱痕跡を確認し、P14の底面には窪みがある。遺物は出土していない。

(2) 堀跡

SD1 堀跡 (第23~27図)

II・IV・V区にかけて検出された、調査区南側を東西方向に横断する大規模な堀跡である。大部分は耕作などの



第23図 SD1・4堀跡平面・断面図

攪乱によって、Ⅲ層上面で検出されているが、Ⅳ区の西壁土層断面からⅡ層上面もしくはそれよりも上位が掘り込み面であることが分かる。SD6・8溝跡、SK4・5土坑、P116よりも古い。堀跡の規模は検出長約53mで、一部では屈曲しながら巡っている。上端幅は9.7～11.0mで、深さは検出面より1.9～2.5mを測る。また堀底では一部を掘り残して造り出された段差や畦状の障壁が設けられている。上端幅や深さの規模、底面に造り出された障壁の位置や規模は不規則である。

Ⅱ区では、方向は南辺を基準としてE-15～22° -Nであり、規模は上端幅9.7mで検出面から底面までの深さは2.5mを測る。堀底では比高差約30cmのL字状に落ち込む段があり、その落ち込み部から堀と直交する障壁が1条確認された。障壁は北壁と接するが、南壁とは接しておらず、約90cm離れている。障壁の規模は幅60cm、比高差は30cmである。堆積土は17層に分層され、下層の自然堆積層（8～17層）と上層の人為堆積層（1～7層）に大別される。なお、10、16層は法面崩落土と考えられる。

Ⅳ区では南辺を基準としてE-17° -Nとやや南西方向に傾いている堀跡が中央部からほぼ真西に向かって屈曲する状況が確認された。規模は上端幅が11.0mとⅡ区と比べ広く、検出面から底面までの深さは1.9mとⅡ区と比べ、浅くなっている。調査区南壁を通して検出面より約50cmの深さで幅約60cmの犬走状の段差が確認された。また、堀底では堀跡と並行する1条の障壁が確認された。障壁の規模は幅124cm、比高差24cmである。堆積土は14層に分層される。北壁側には底面の自然堆積層（11～14層）の上に基本層ブロック主体の人為堆積層（5～7・9・10層）が認められた。

Ⅴ区では北辺を基準としてE-20° -Nの方向に走る堀跡が屈曲し、ほぼ真北方向へと折れるプランが確認された。なおⅤ区では平面プランの確認を目的とし、掘削は一部に留めている。

遺物は下層（自然堆積層）から縄文土器1点、非ロクロ土師器4点、土師質土器2点、陶器1点、古代瓦2点、木製品2点、土製品2点、植物遺存体（自然木やクルミ類種子）、動物遺存体（骨片や昆虫甲殻）が、また上層（人為堆積層）から非ロクロ土師器7点、ロクロ土師器3点、須恵器2点、燻し瓦50点、土師質土器7点、陶器142点、磁器291点、石器10点、鉄製品10点、ガラス製品53点が出土している。このうち縄文土器、土師質土器、平瓦、折敷各1点（第24図）と近世～近代陶器13点（第25・26図）、近世～近代磁器10点（第26・27図）、石製品（砥石・石臼）2点（第27図6・7）、近世瓦（第27図8）、飾り金具1点（第27図9）を図化し、木製品1点（写真図版13-5）、土製品2点（写真図版13-6・7）、釘3点（写真図版15-14～16）を写真掲載した。

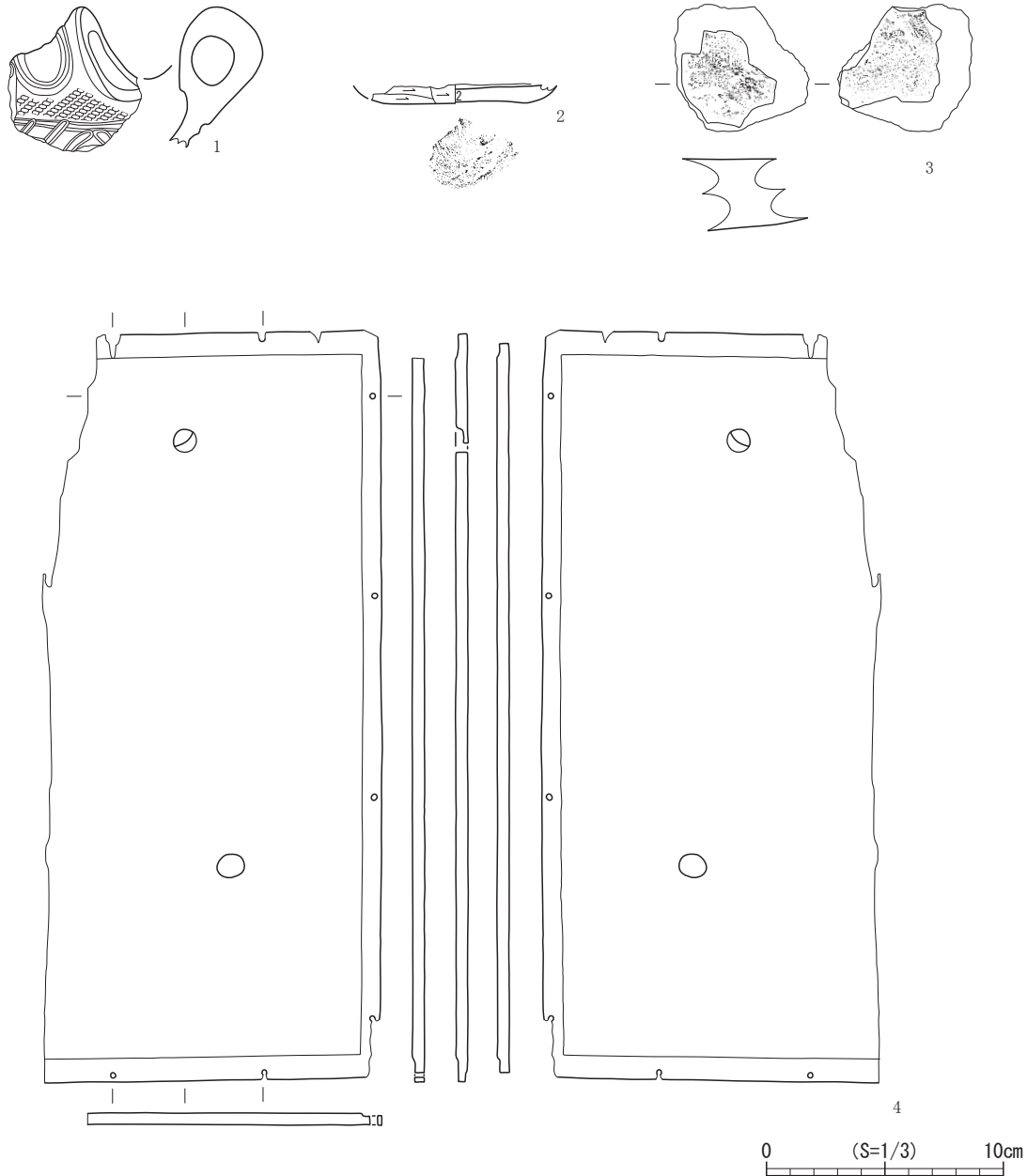
SD4 堀跡（第23・29図）

Ⅱ区で検出された、東西方向の堀跡である。東部は現代のゴミを含む攪乱により大部分を削平されている。SD6・8溝跡よりも古い。方向は北辺を基準としてE-15～18° -Nであり、北側に位置するSD1堀跡と平行する。規模は検出長14m、検出幅1mで、検出面から深さ30cmで壁面に到達した。なお、Ⅱ区南部は全体的にⅠ層が厚く堆積しており、遺構上部は近年の耕作による影響をかなり受けていると推定される。断面形状は不明であるが、確認された北壁の立ち上がりは緩やかである。遺物はロクロ土師器1点、石製品7点、土製品1点が出土した。このうち石臼と砥石を図化した（第13図）。

SD10 堀跡（第28・29図）

Ⅲ区で検出された、東西方向の堀跡である。SD2B溝跡、P16～20・70・87・88・92～102より古く、南辺の一部はSD2B溝跡により切られている。方向は北辺を基準としてE-15° -Nであり、規模は検出長5.4mで、さらに調査区外の東西へと延びる。上幅7.2m、深さ1.3mで、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦だが、北東部に比高差約10cmの落ち込む段が設けられる。堆積土は10層に分層され、堆積状況から判断すると、6～10

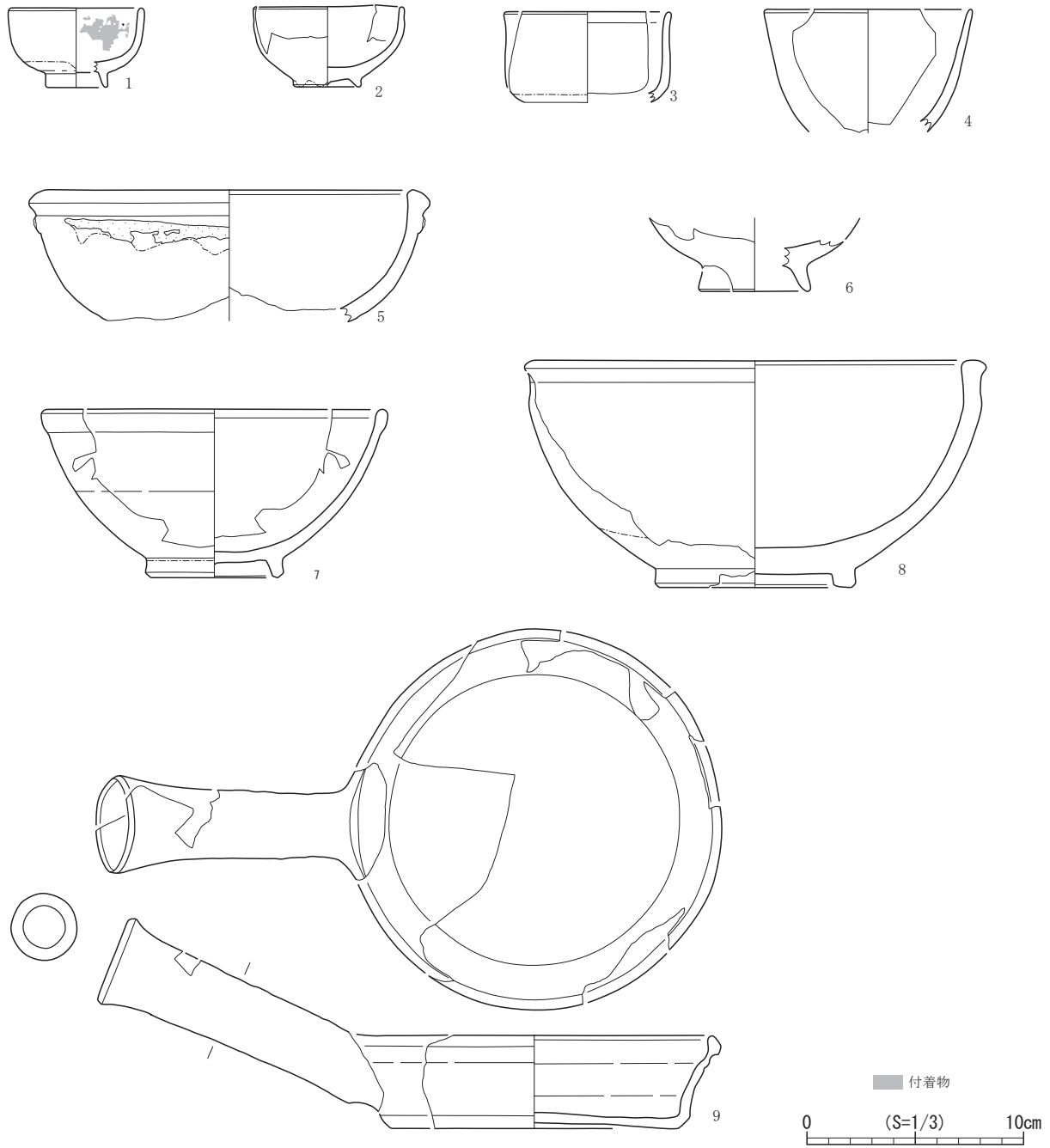
第2節 第10次調査



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	A-1	SD1	14	縄文土器	深鉢	-	-	(6.1)	突起に縄文 口縁部に斜行する平行沈線	ミガキ	突起の孔は漏斗状を呈する 上面に隆帯がめぐる	12-1
2	Ia-1	SD1	1~2	土師質土器	皿?	-	(6.0)	(0.8)	体: 手持ちヘラケズリ 底: 回転糸切→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	胎土緻密 色調: 橙色	12-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
3	G-10	SD1	1~3	瓦	平瓦	(5.4)	(5.7)	3.0	凹面: 布目模骨痕→ナデ 凸面: 縄タキ目→ナデ	12-3
4	L-1	SD1	8	木製品	折敷(底板)	31.5	(14.2)	0.5	組穴あるいは紐穴痕が上辺・下辺に2個ずつ、側辺に4個 主面の孔は根穴。針葉樹板目材を素材にしている	12-4
-	L-5	SD1	8	木製品	折敷?	31.5	(4.8)	0.7	組穴あるいは紐穴痕が上辺・下辺に1個	12-5
-	P-3	SD1	8	土製品	不明土製品	31.5	(14.2)	0.5	2面残存 胎土中にスサ含み 全体に被熱痕 重さ 140.7g	12-6
-	P-4	SD1	8	土製品	不明土製品	31.5	(14.2)	0.5	1面残存 被熱痕 重さ 10.8g	12-7
-	N-2	SD1	1~3	鉄製品	釘	5.1	1.2	1.2	重さ 8.2g	14-14
-	N-3	SD1	1~3	鉄製品	釘	9.4	1.2	1.1	重さ 8.9g	14-15
-	N-4	SD1	1~3	鉄製品	釘	6.1	1.6	1.1	重さ 12.0g	14-16

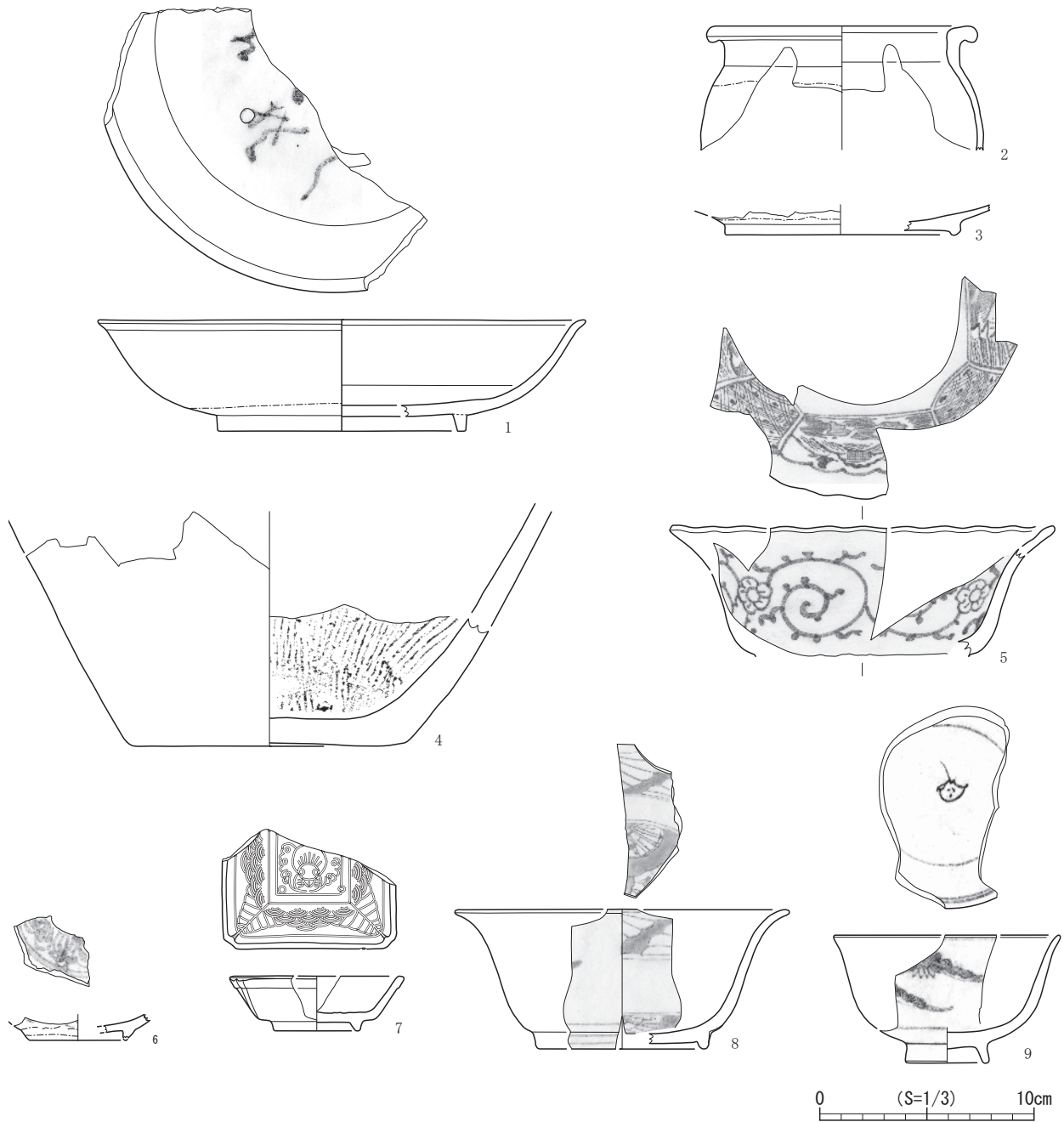
第24図 SD1 堀跡出土遺物 (1)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-18	SD1	1~3	陶器	小坏	(5.9)	(2.7)	3.7	灰釉	灰釉 蕾黒が付着	産地：瀬戸美濃 18c	12-8
2	Ic-12	SD1	1~2	陶器	小坏	(6.7)	3.0	3.8	灰釉	灰釉	産地：大堀相馬 18c 後半	12-9
3	Ic-3	SD1	1~2	陶器	小坏	(7.6)	-	(4.2)	灰釉	灰釉	産地：肥前? 17c	12-10
4	Ic-4	SD1	検出面	陶器	碗	(9.6)	-	(5.7)	灰釉	灰釉	産地：肥前 17c	12-11
5	Ic-6	SD1	1~2	陶器	鉢	(17.4)	-	(6.1)	灰釉	灰釉	産地：堤? 重ね焼の痕跡 海鼠釉の鉢と重ねていた	12-12
6	Ic-5	SD1	1~3	陶器	鉢	-	(4.9)	(3.4)	灰釉	灰釉	産地：肥前 17c	13-1
7	Ic-15	SD1	1~2	陶器	鉢	15.4	5.8	7.8	灰釉	灰釉	産地：大堀相馬 18c 後半以降	13-2
8	Ic-7	SD1	1~2	陶器	鉢	(20.6)	(9.0)	10.5	海鼠釉	海鼠釉 目跡 3	産地：堤 19c 中頃以降	13-3
9	Ic-9	SD1	1~2	陶器	焙烙	16.6	13.2	4.3			産地：堤 19c	13-4

第25図 SD1 堀跡出土遺物 (2)

第2節 第10次調査



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-17	SD1	1~3	陶器	中皿	(22.8)	(11.6)	5.2	灰釉	灰釉 鉄絵 目跡	産地：大堀相馬 19c 前葉~中葉	13-7
2	Ic-14	SD1	検出面	陶器	小型甕	(12.4)	-	(5.8)	鉄釉 口：白釉 つげがけ	鉄釉	産地：大堀相馬 江戸時代後半 (後期~幕末か)	13-5
3	Ic-16	SD1	検出面	陶器	土瓶	-	(10.8)	(1.4)	黒釉 底部に墨書		産地：大堀相馬 19c 前半~中葉	13-6
4	Ic-10	SD1	1~2	陶器	播鉢	-	12.6	(11.0)	鉄釉 底：糸切?	鉄釉 おろし目 (単位不明)	産地：堤 19c (江戸) 細かい砂が胎土に多く含まれる	13-8
5	J-6	SD1	1~2	磁器	輪花鉢	(18.0)	(10.0)	(6.1)	染付 (蔓草文)	染付 (四方樺変形文)	産地：肥前 18c 後半	14-2
6	J-1	SD1	検出面	磁器	皿	-	(4.5)	(1.2)		青花?	産地：中国 16c 後半	13-9
7	J-2	SD1	1~2	磁器	天塩皿	(8.1)	(3.9)	2.6		型押し ふくら雀	産地：切込 19c 前半~中頃 白磁	14-1
8	J-7	SD1	1~2	磁器	鉢	(15.6)	(7.8)	6.5	染付	染付	産地：肥前 18c 後半 蛇の目凹高台	14-3
9	J-4	SD1	1~2	磁器	端反碗	(10.4)	3.8	6.0	染付	染付	産地：切込 19c 中頃	14-4

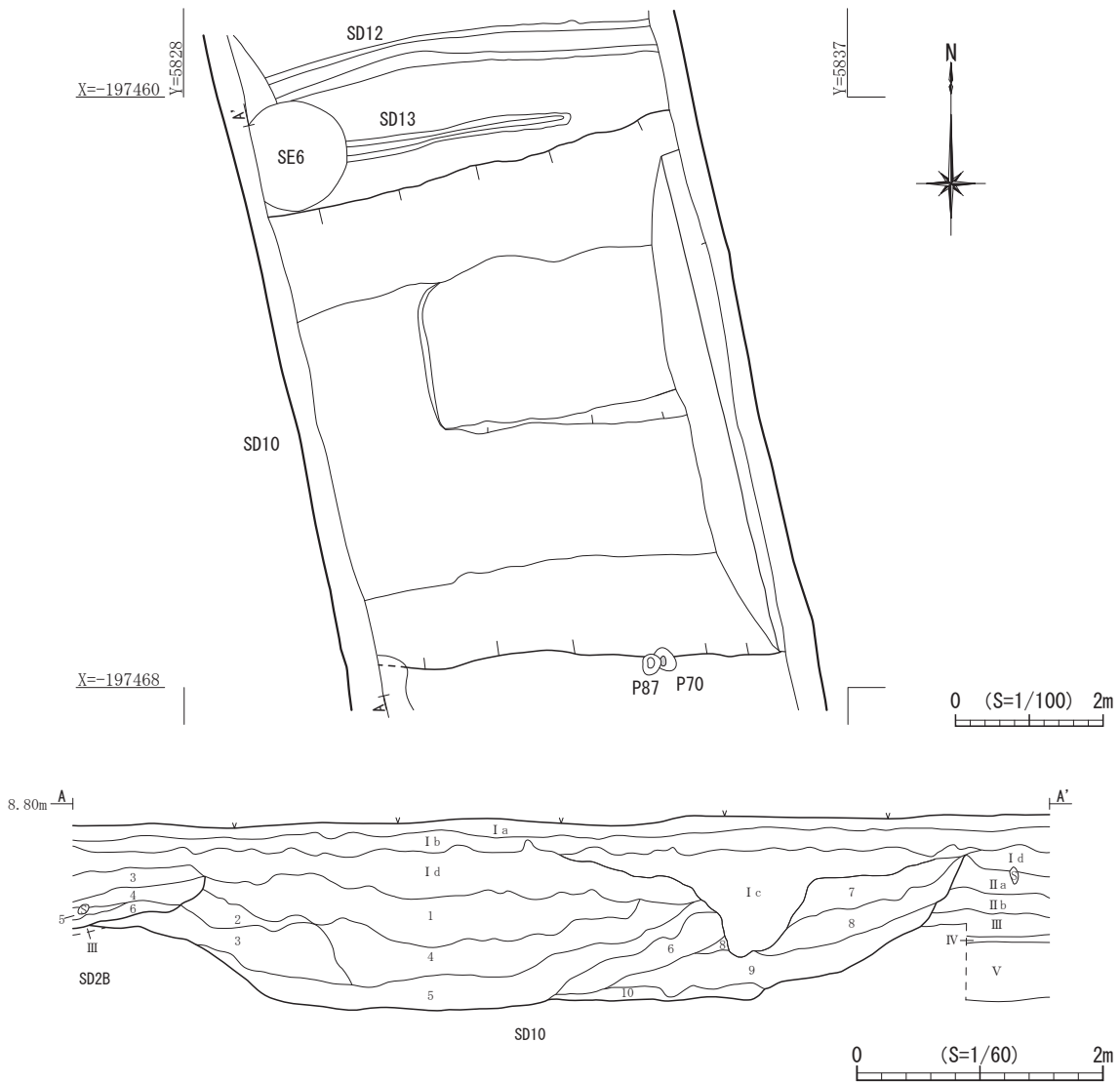
第26図 SD1 堀跡出土遺物 (3)



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	J-9	SD1	1~2	磁器	小鉢	-	3.9	(3.0)	染付 摺繪 (蓮弁文 斜格子状の文様)	染付 摺繪 (宝文)	産地: 肥前 17c 末~18c 前半 高台内「富貴長春」(銘)	14-5
2	J-3	SD1	1~2	磁器	端反碗	(11.0)	(4.0)	(5.7)	染付	染付	産地: 切込 19c 中頃	14-6
3	J-11	SD1	1~2	磁器	碗	(10.7)	(3.8)	10.5	染付 摺繪 (唐草文 向かい合う蝶の文様)	染付 摺繪 (草花文)	産地: 肥前? 19c 後半	14-7
4	J-12	SD1	1~2	磁器	德利	2.8	7.8	19.1	染付		産地: 不明 19c 後半	14-8
5	J-13	SD1	1~2	磁器	德利	-	7.6	(21.2)	染付		産地不明 (平清水・会津本郷) 19c 中頃 (幕末明治)	14-9

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
6	K-12	SD1	1~3	石製品	石臼	(14.6)	(16.2)	7.8	底径: 29.6cm 口径: 39.6cm 重さ 1270.0g	14-10
7	K-20	SD1	1~2	石器	砥石	(3.6)	4.0	1.7	砥面 5 面 重さ 55.5g 石材: 凝灰岩	14-11
8	G-11	SD1	1~3	瓦	道具瓦	(5.8)	(4.7)	(7.6)	燻し瓦 上下方向の穿孔 重さ 68.1g	14-12
9	N-5	SD1	1~2	金属製品	飾り金具	4.6	4.5	1~1.5	有孔 断面弧状 縁辺は鋸歯状に整形 青銅製	14-13

第27図 SD1 堀跡出土遺物 (4)



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD10 (A-A')	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	基本層ブロック主体。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。基本層ブロックを含む。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。地山ブロックを少量含む。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	基本層ブロック主体。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。植物遺体を含む。炭化物を含む。
	6	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。基本層ブロック主体。
	7	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。基本層ブロックを含む。
	8	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。基本層ブロックを少量含む。
	9	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。にぶい黄褐色粘土と互層状に堆積。
	10	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。

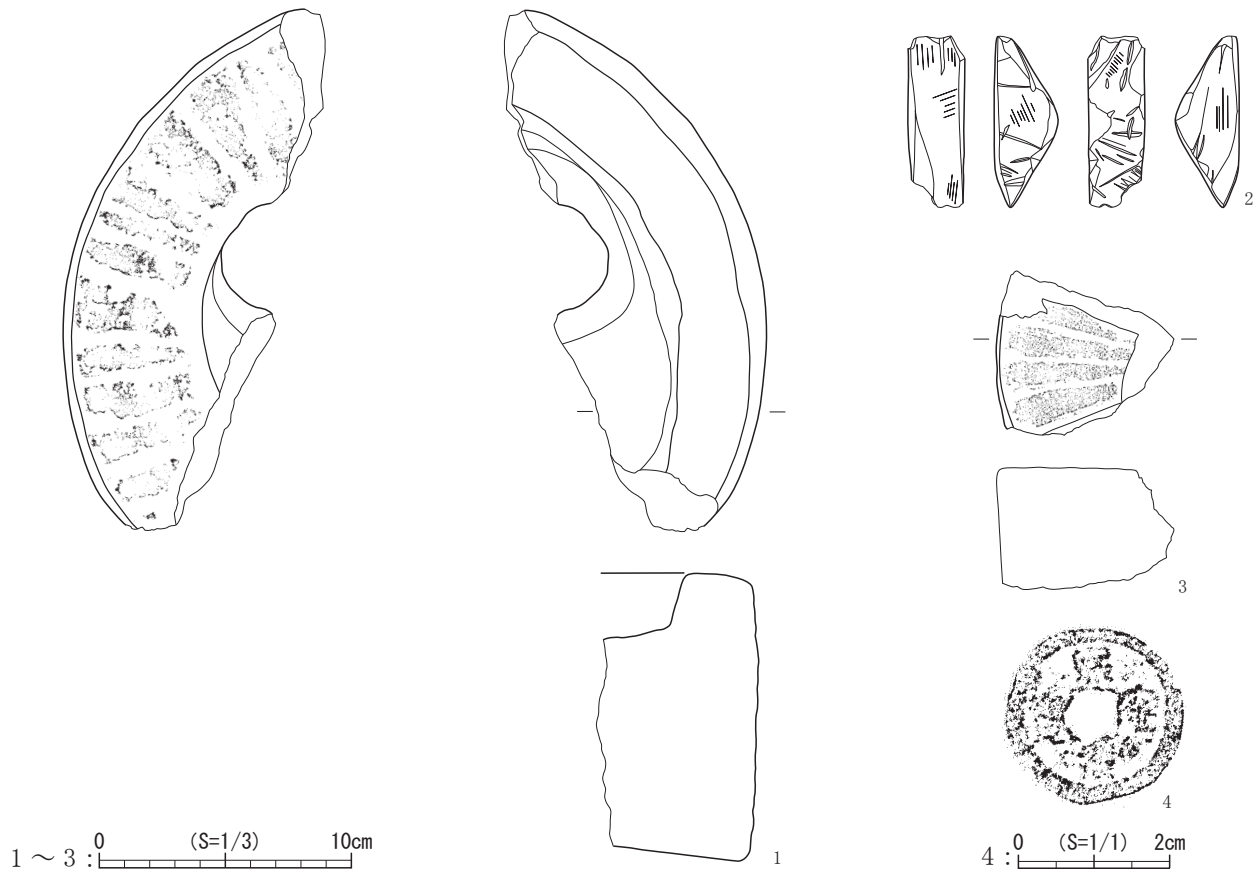
第28図 SD10 堀跡平面・断面図

層が堆積した後に、改修されたと推定される。また、改修された新期の堀跡の堆積土は最下層（5層）を除き、基本層ブロックを主体的に含んでいることから、人為的に埋め戻されたものと推定される。遺物は非クロコ土師器1点、石製品1点、古銭1点が出土し、このうち石臼（第28図3）と古銭（第28図4）が図化できた。

(3) 溝跡

SD2A 溝跡（第30・32・33図）

I・III区で検出された、東西方向の溝跡である。I区とIII区では上端幅に差異が認められるが、位置関係から同



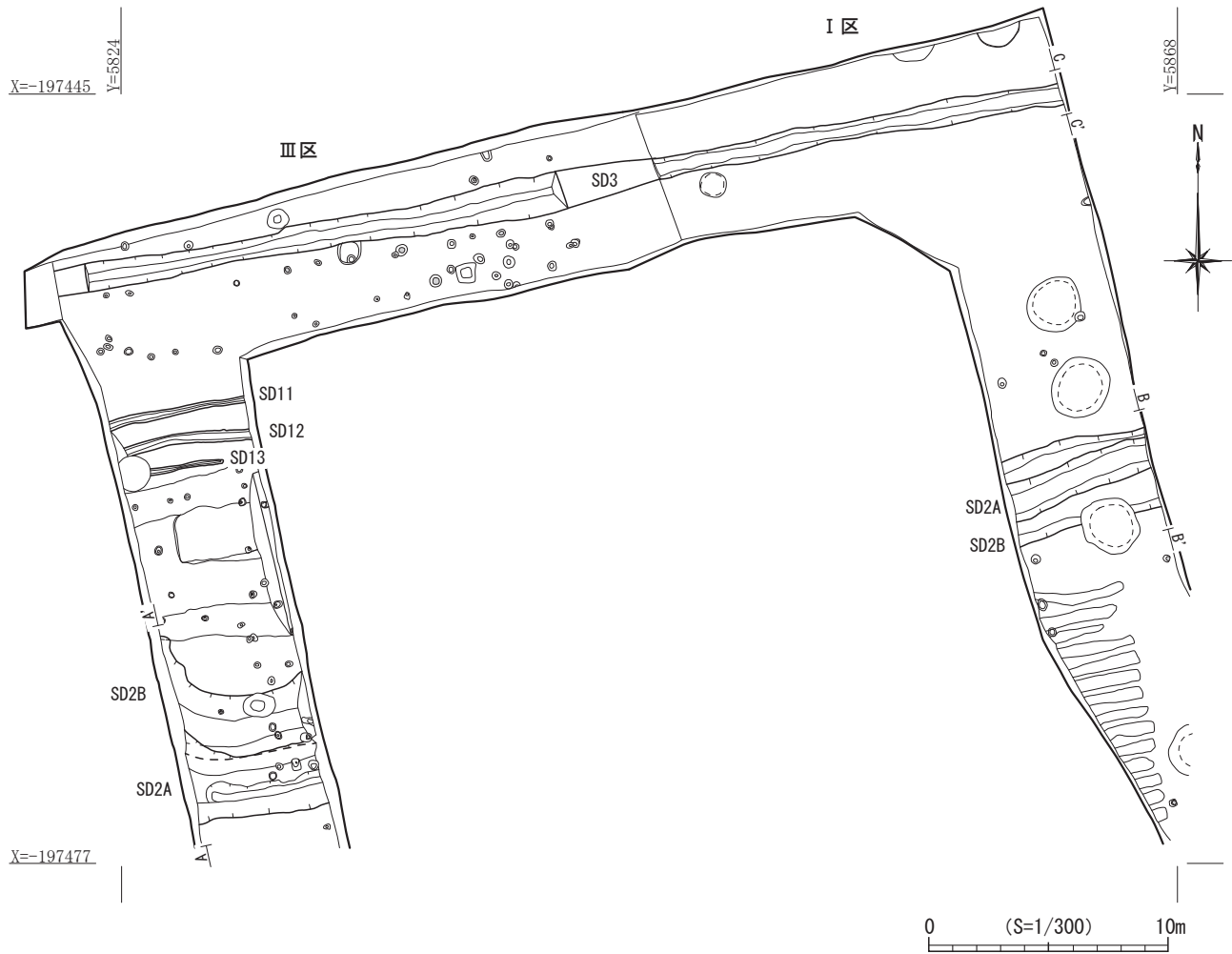
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	K-17	SD4	-	石製品	石臼(上臼)	(8.6)	(21.7)	12.1	径:28 cm 供給口:4.2 cm 重さ:2250.0g 石材:安山岩	15-1
2	K-23	SD4	検出面	石器	砥石	6.8	2.2	2.5	砥面5面 重さ:48.1g 石材:凝灰岩	15-2
3	K-25	SD10	-	石製品	石臼	(6.5)	(7.0)	4.9	表面が被熱 重さ:210.0g 石材:安山岩	15-3
4	N-6	SD10	上層	銅製品	古銭	2.5	2.5	0.11	「熙寧元宝」(初鑄1068年) 重さ:2.7g	15-4

第29図 SD4・10堀跡出土遺物

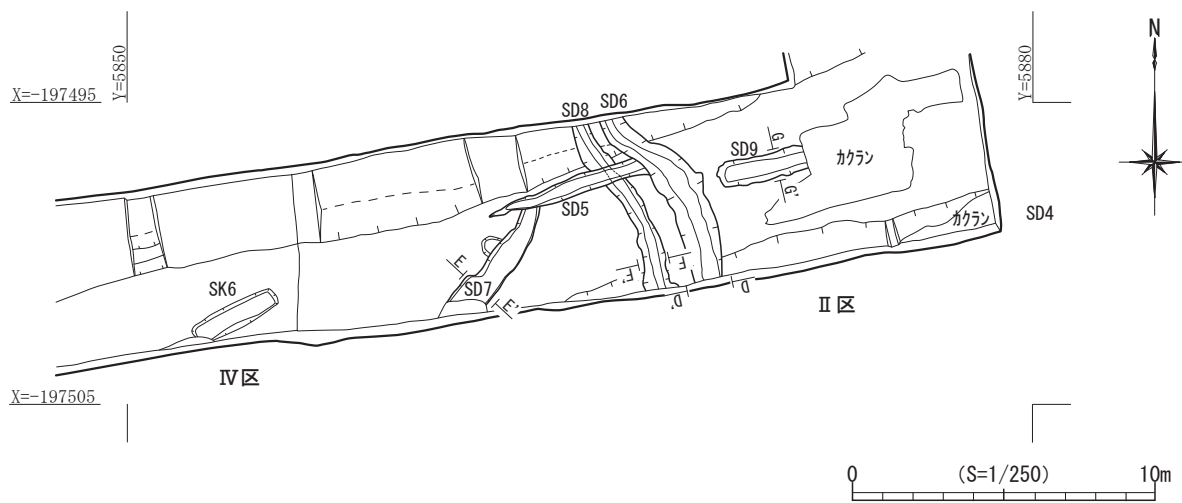
一遺構と判断した。SD2B 溝跡よりも新しく、P105・108～111 よりも古い。I 区では方向は南辺を基準に E-20° -N を測り、規模は上端幅 1.8 m、深さ 83cm で、断面形は逆台形状を呈し、堆積土は 5 層に分層される。III 区では方向は南辺を基準に E-15° -N であり、西端部で北に向かって屈曲するプランが確認された。規模は上端幅 2.9～3.7m、深さ 96cm で、断面形は逆台形状を呈し、底面の南東部には段状の落ち込みがあり、その比高差は 15 cm である。堆積土は 10 層に分層される。遺物は須恵器 2 点、古代瓦 1 点、中世陶器 2 点、石製品 3 点、動物遺存体（動物骨片や昆虫甲殻）が出土し、このうち平瓦（第 33 図 3）、古瀬戸産の香炉（第 33 図 1）、白石窯産の小型壺（第 33 図 2）を図化した。

SD2B 溝跡（第 30・32・33 図）

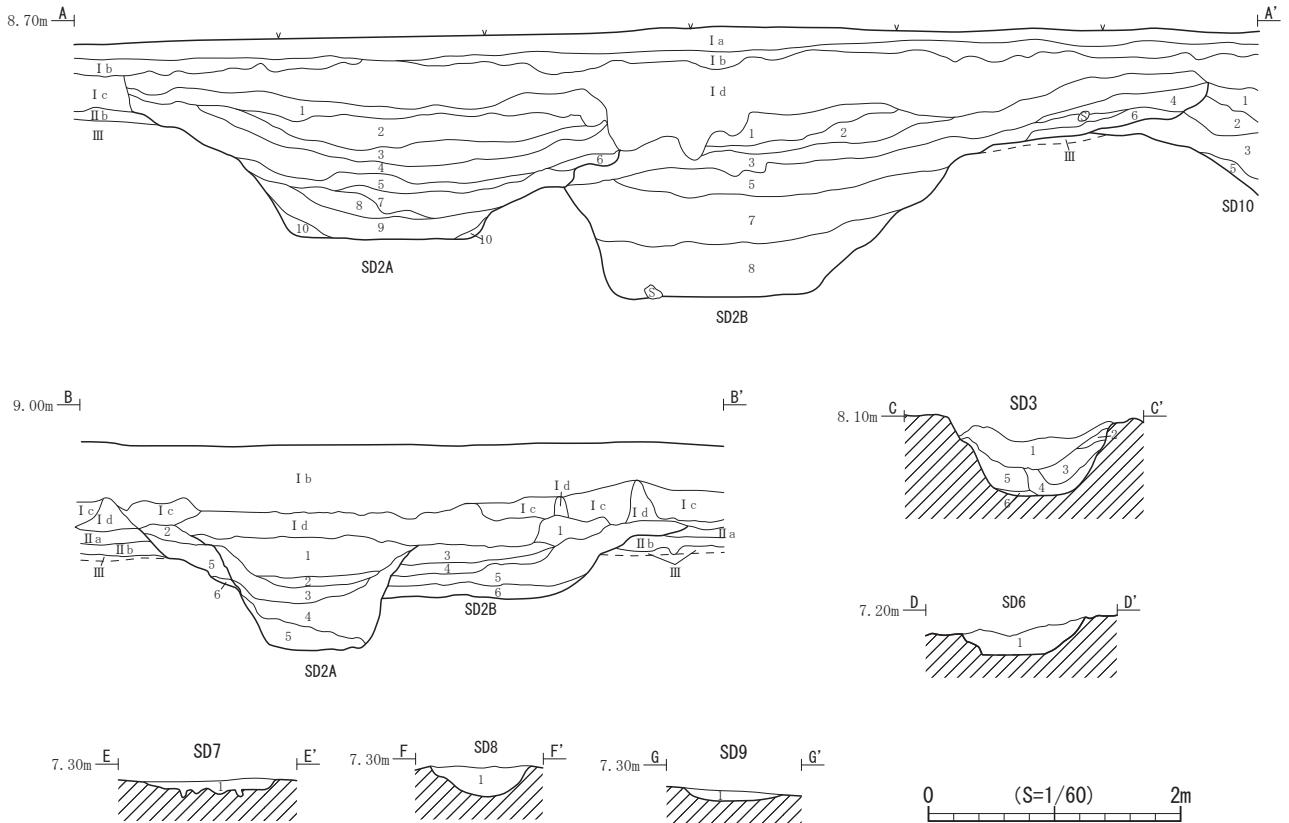
I・III 区で検出された、東西方向の溝跡である。I 区と III 区では上端幅、深さに差異が認められるが、位置関係と堆積土の類似性から同一遺構と判断した。SD10 堀跡よりも新しく、SD2A 溝跡、SK7 土坑、P103～107 よりも古い。I 区では方向は南辺を基準に E-10° -N であり、規模は上端幅 4.3 m、深さ 64cm で、断面形は幅広の U 字形を呈し、堆積土は 5 層に分層される。III 区では南辺は SD2A 溝跡により削平されている。方向は一定ではなく、SD2A 溝跡と同様、西端部で北に向かって屈曲するプランが確認された。規模は上端幅 3.7m、深さ 96cm で、断面形状は逆台形



第30図 調査区北部溝跡位置図

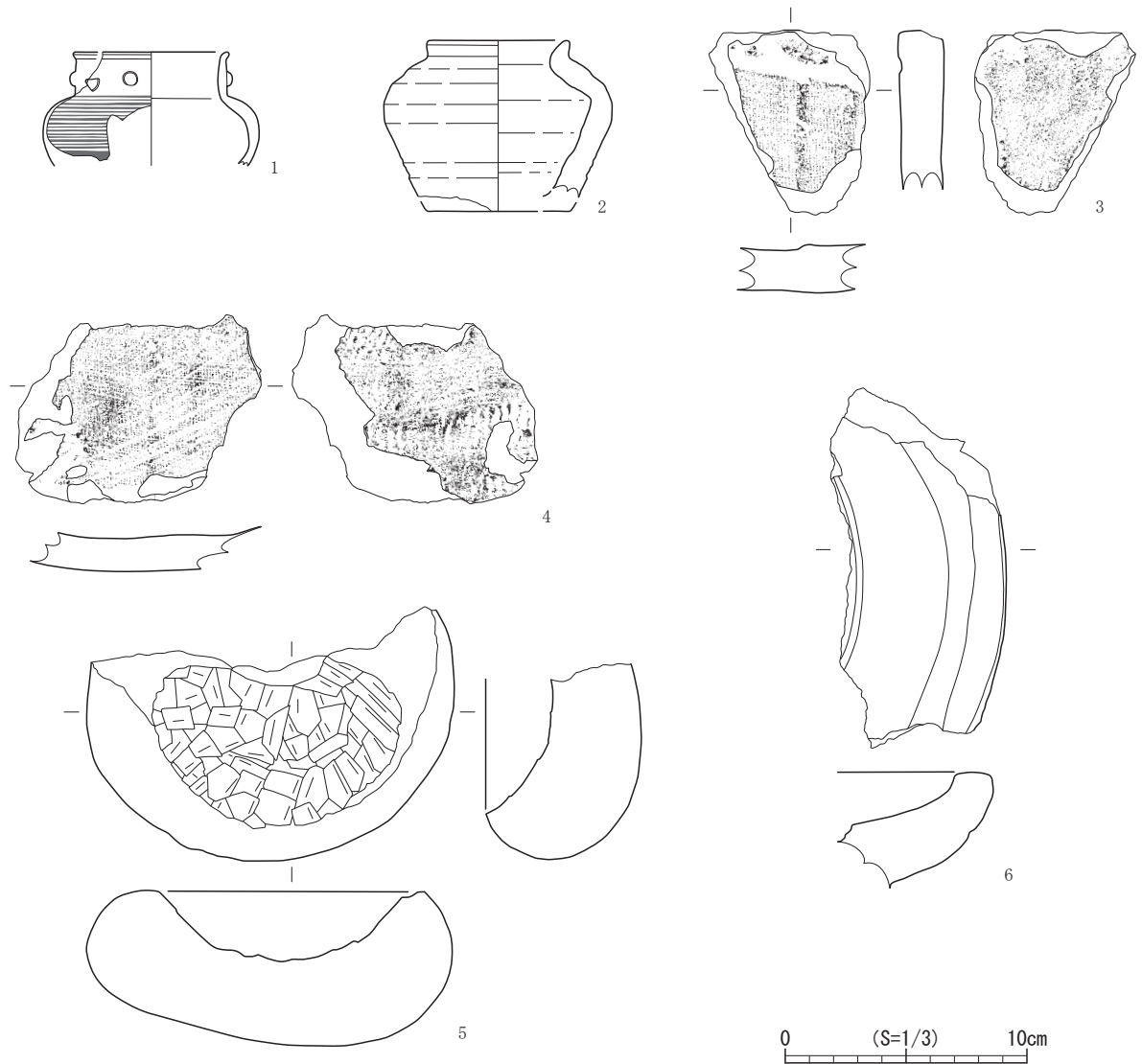


第31図 調査区南部溝跡位置図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2A 西側土層断面 (A-A')	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。基本層ブロック主体。
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	炭化物を含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。黒褐色粘土と互層状に堆積。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。にぶい黄褐色粘土ブロック (20 ~ 30 mm) を含む。
	6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロック主体。
	7	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロックを少量含む。
	8	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色地山ブロック主体。
	9	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	炭化物を少量含む。基本層ブロックを少量含む。植物遺体を含む。
	10	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	下部に基本層ブロックを含む。
SD2B 西側土層断面 (A-A')	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。基本層ブロックを含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。基本層ブロック主体。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。基本層ブロックを含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	粘土	黒褐色粘土と互層状に堆積。植物遺体を含む。
	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。基本層ブロック主体。
	7	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。植物遺体を含む。
	8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土と互層状に堆積。植物遺体を含む。
SD2A 東側土層断面 (B-B')	1	10YR6/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄粒を斑状に含む。灰黄褐色粘土と互層状に堆積。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄粒を斑状に含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄粒を斑状に含む。
	4	10YR3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。酸化鉄粒を斑状に含む。
	5	10YR3/1 黒褐色	粘土	粗砂、植物遺体を含む。酸化鉄粒を斑状に含む。
SD2B 東側土層断面 (B-B')	1	10YR6/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒 (10 mm) を斑状に含む。灰黄褐色粘土ブロックを斑状に含む。
	2	10YR6/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒を斑状に含む。灰黄褐色粘土ブロックを斑状に含む。
	3	10YR6/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒 (10 mm) を斑状に含む。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒を斑状に含む。灰黄褐色粘土と互層状に堆積。
	5	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒を斑状に含む。
	6	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒を斑状に含む。
SD3 (C-C')	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒 (10 ~ 20 mm) を斑状に含む。
	2	10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒 (10 ~ 20 mm) を斑状に含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒 (10 mm) を斑状に少量含み、下部で多めに含む。
	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒 (10 mm) を斑状に含む。下部で褐灰色粘土と互層状に堆積。
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒 (10 mm) を斑状に含む。
	6	10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土	基本層ブロックを多量含む。
SD6 (D-D')	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を少量含む。砂を少量含む。
SD7 (E-E')	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に、砂を少量含む。
SD8 (F-F')	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	暗褐色粘土質シルトブロックを斑状に含む。灰白色ブロック (5 mm) を少量含む。
SD9 (G-G')	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に少量含む。

第 32 図 溝跡断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-1	SD2A	-	陶器	香炉	(6.5)	-	(4.7)	鉄釉 口縁に播座	鉄釉	産地：瀬戸(古瀬戸) 14～15c	15-5
2	Ic-2	SD2A	-	陶器	小型壺	(5.8)	(6.0)	7.1	ロクロ	ロクロ	産地：白石窯 13～14c(鎌倉～南北朝) 鷺口壺	15-6

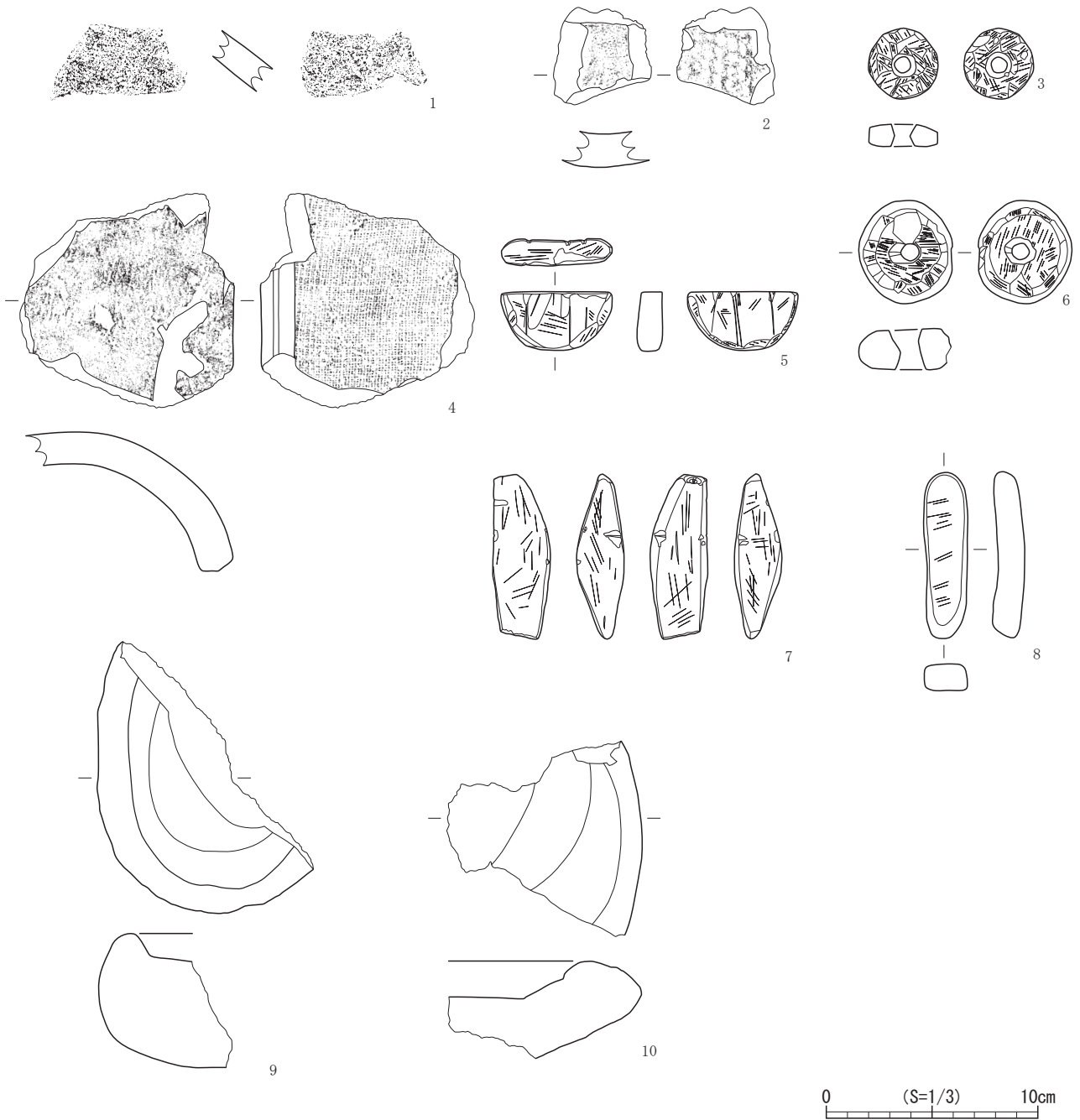
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
3	G-5	SD2A	-	瓦	平瓦	(7.5)	(6.4)	(2.0)	凹面：布目模骨痕 凸面：ナデ	15-7
4	G-1	SD2B	-	瓦	平瓦	(7.3)	(9.5)	1.4	凹面：糸切痕→布目、模骨痕 凸面：縄タタキ目→ナデ	15-8
5	K-1	SD2B	-	石製品	石鉢	(10.6)	15.3	3.9	主面の片方を工具で掘り窪めて鉢状に整形 重さ：480.0g 石材：凝灰岩	15-9
6	K-13	SD2B	-	石製品	茶臼	-	-	(4.8)	最大幅 14.8cm 最大長さ 6.6cm 重さ：370.0g 石材：安山岩	15-10

第33図 SD2 溝跡出土遺物

を呈し、堆積土は8層に分層される。遺物はロクロ土師器1点、古代瓦2点、石製品8点が出土し、このうち平瓦(第33図4)、茶臼の下臼(第33図6)、鉢状の不明石製品(第33図5)を図化した。

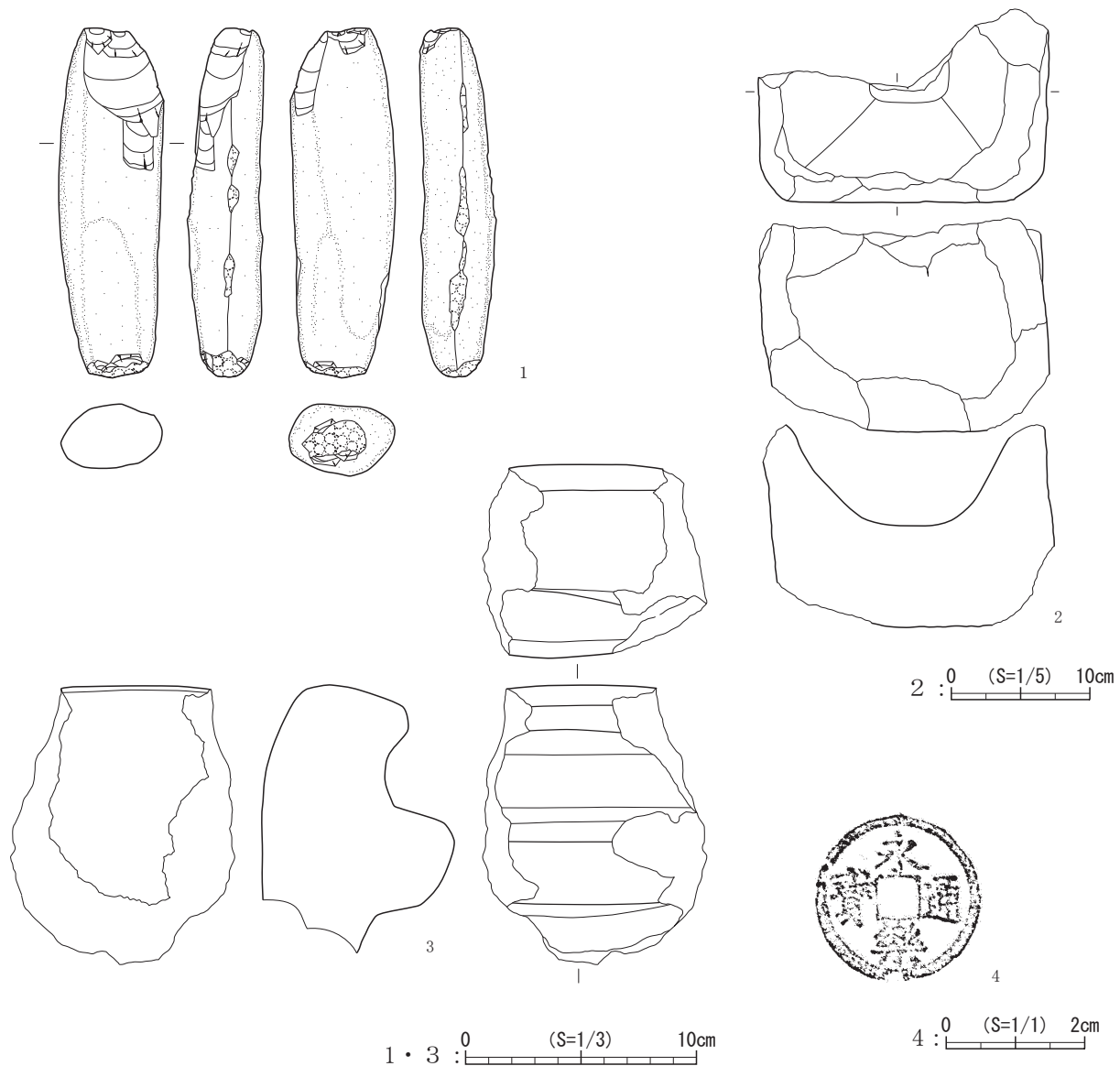
SD3 溝跡 (第30・32・34・35図)

I・III区にかけて検出された、調査区北側を横断する東西方向の溝跡である。SK9土坑よりも古い。方向は北辺を基準としてE-5～13°-Nであり、規模は検出長42m、上端幅1.2m、深さ54cmで、断面形は逆台形状を呈し、



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-22	SD3	下部	陶器	甕	-	-	(2.9)	ナデ	ロクロ	在地	16-1
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考			写真図版
						長さ	幅	厚さ				
2	G-7	SD3	-	瓦	平瓦	(4.6)	(4.6)	1.6	凹面：布目→ナデ 凸面：斜格子タタキ目			16-2
3	K-35	SD3	-	石製品	有孔石製品	3.4	3.3	1.05	全体を面取りで整形し中央を穿孔して表裏両面からノミ状の工具で整形 重さ：7.9g 石材：凝灰岩			16-3
4	F-1	SD3	-	瓦	丸瓦	(10.2)	(10.1)	18.0	凹面：布目 凸面：縄タキ目→ナデ			16-4
5	K-41	SD3	下部	石製品	-	2.8	5.2	1.2	両面に直線の線刻 折れ面を研磨によって再加工している 重さ：15.8g 石材：凝灰岩			16-5
6	K-4	SD3	-	石製品	有孔石製品	4.9	4.4	1.9	全体を面取り後ノミ状の工具で整形 重さ：32.7g 石材：凝灰岩			16-6
7	K-32	SD3	-	石器	砥石	7.8	2.7	2.1	砥面8面 断面形：細長い菱形 重さ：58.1g 石材：凝灰岩			16-8
8	K-36	SD3	-	石製品	-	7.9	2.1	1.3	研磨面4面 重さ：20.4g 石材：凝灰岩			16-7
9	K-39	SD3	-	石製品	不明石製品	(10.3)	(12.9)	6.4	全体が被熱 重さ：455.0g 石材：安山岩			16-9
10	K-3	SD3	-	石製品	石臼?	(9.3)	(9.1)	3.6	重さ：170.0g 石材：凝灰岩			16-10

第34図 SD3 溝跡出土遺物 (1)



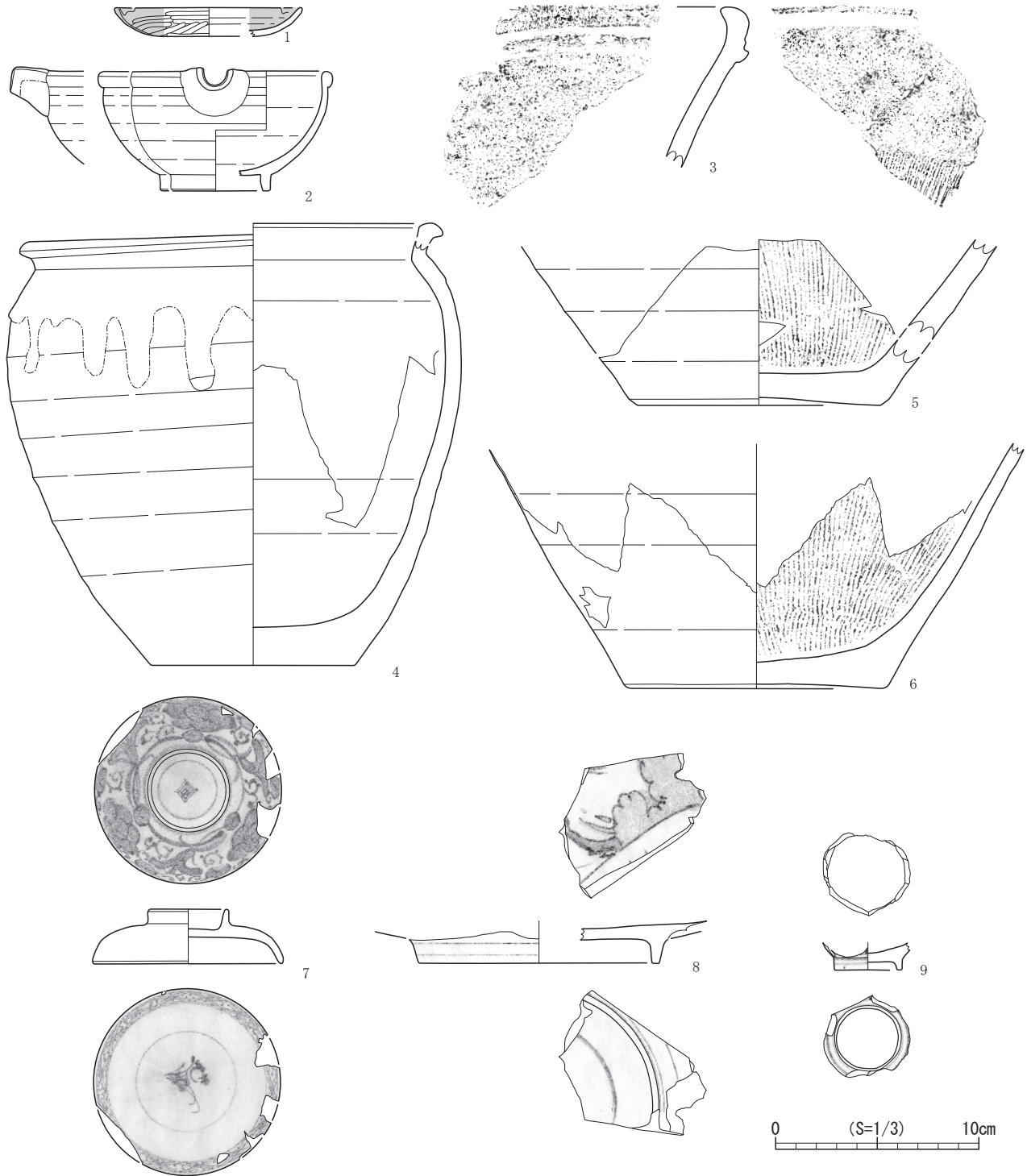
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	高さ		
1	K-37	SD3	-	石器	敲石	15.2	4.4	2.7	上下両端と側縁に敲打痕 重さ: 320.0g	16-11
2	K-14	SD3	-	石製品	石臼	(14.0)	21.0	高さ 15.5	重さ: 3890.0g 石材: 安山岩	16-12
3	K-15	SD3	-	石製品	不明	(12.1)	(10.2)	8.3	全体被熱 重さ: 700.0g	17-1
4	N-1	SD3	-	銅製品	古銭	2.5	2.5	0.18	「永楽通宝」(初铸 1411年) 重さ: 3.9g	17-2

第35図 SD3 溝跡出土遺物 (2)

堆積土は6層に分層される。遺物は須恵器1点、古代瓦3点、瓦質土器3点、中世陶器1点、石器1点、石製品14点、古銭1点、鉄滓、動物遺存体(昆虫甲殻)が出土し、このうち在地産中世陶器1点、平瓦1点、丸瓦1点、石器1点、石製品9点、古銭1点を図化した(第34・35図)。

SD5 溝跡 (第31・32・36図)

Ⅱ区で検出された東西方向の溝跡で、SD7・8溝跡よりも新しく、SD6溝跡よりも古い。方向は北辺を基準としてE-20° -Nであり、規模は検出長5.4m、上端幅30cmで、深さは25cmである。断面形はU字形状を呈し、堆積土は単層である。遺物はロクロ土師器1点、土師質土器1点、燻し瓦15点、近世から近代の陶器51点、近世から近代の磁器56点、石製品3点、鉄製品1点が出土している。このうちロクロ土師器1点、陶器5点、磁器2点を図化した(第36図1~8)。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	D-1	SD5	-	土師器	皿	(9.2)	-	(1.4)	黒色処理・ヘラミガキ	ロクロナデ 黒色処理	胎土緻密 内外面黒色を呈する	17-3
2	Ic-13	SD5	-	陶器	片口	(11.0)	(5.2)	6.1	灰釉	灰釉	産地：大塚相馬 18c 後半以降	17-4
3	Ic-8	SD5	-	陶器	播鉢	-	-	(8.9)	鉄釉	鉄釉	産地：堤 19c	17-5
4	Ic-20	SD5	-	陶器	甕	19.7	10.0	21.8	海鼠釉		産地：不明 19c ?	17-7
5	Ic-11	SD5	-	陶器	播鉢	(23.4)	12.0	(7.8)	鉄釉 底：回転糸切痕 目跡	鉄釉 おろし目 (単位不明)	産地：堤? 19c	17-6
6	Ic-19	SD5	-	陶器	播鉢	-	(12.6)	(12.1)	鉄釉	鉄釉 おろし目 (単位不明)	産地：不明 18c 以降 糸切りの底部に釉薬がかかっている	17-8
7	J-8	SD5	-	磁器	蓋	3.8	9.2	2.7	染付 (花唐草文)	染付 (口：四方禪文 草花文)	産地：肥前 18c 後半 高台内文字不明	18-1
8	J-5	SD5	-	磁器	中皿	-	(11.8)	(2.1)	染付	染付 目跡	産地：肥前 (伊万里) 17c 中頃	18-2
9	J-10	SD8	-	磁器	小坏	-	3.3	(1.3)	染付		産地：備前 江戸時代 転用器 (周辺打ち欠き)	18-3

第36図 SD5・8溝跡出土遺物

第2節 第10次調査

SD6 溝跡 (第31・32図)

Ⅱ区で検出された南北方向の溝跡で、SD1・4堀跡とSD5溝跡よりも新しい。方向は一定ではなく湾曲しながら南北方向に延びる。規模は検出長6.1m、上端幅102cmで、深さは30cmである。断面形は逆台形状を呈し、堆積土は単層である。遺物は燻し瓦が1点出土したが、図化できなかった。

SD7 溝跡 (第31・32図)

Ⅱ区で検出された南西—北東方向の溝跡で、SD5溝跡、P2より古い。方向は東辺を基準としてN-10° -Eであり、規模は検出長3.9m、上端幅104cmで、深さは10cmである。断面形は不整形形状を呈し、下面は凹凸している。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD8 溝跡 (第31・32・36図)

Ⅱ区で検出された南北方向の溝跡で、SD1・4堀跡、SD5溝跡よりも新しい。方向は一定ではなく湾曲しながら南北方向に走る。規模は検出長6.1m、上端幅71cmで、深さは27cmである。断面形は逆台形状を呈し、堆積土は単層である。遺物は近世～近代の陶器が2点、磁器が5点、石製品が10点、鉄製品が1点出土しており、このうち磁器1点を図化した(第36図8)。

SD9 溝跡 (第31・32図)

Ⅱ区で検出された東西方向の溝跡で、東部は攪乱により削平される。方向は北辺を基準としてE-15° -Nであり、規模は検出長2.9m、上端幅76cmで、深さは9cmである。断面形はU字形状を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD11 溝跡 (第30・32図)

Ⅲ区で検出された東西方向の溝跡である。方向は北辺を基準としてE-10° -Nであり、規模は検出長5.4m、上端幅40cm、深さ20cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SD12 溝跡 (第30・32図)

Ⅲ区で検出された東西方向の溝跡である。SE6井戸跡よりも古い。方位は北辺を基準としてE-6° -Nであり、規模は検出長5.2m、上端幅42cm、深さ20cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

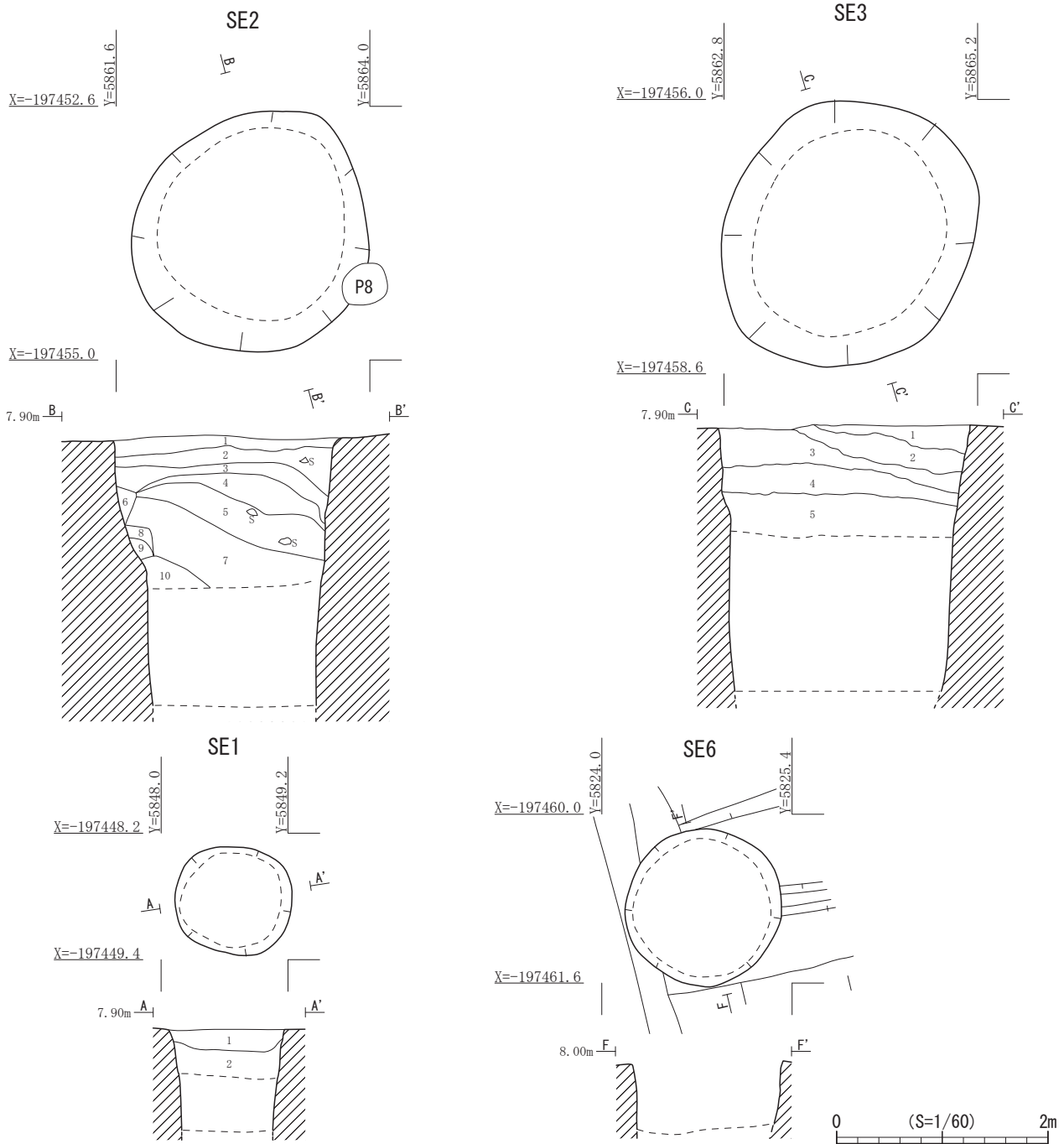
SD13 溝跡 (第30・32図)

Ⅲ区で検出された東西方向の溝跡である。SE6井戸跡よりも古い。方向は北辺を基準としてE-10° -Nであり、規模は検出長3.0m、上端幅26cm、深さ9cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(4) 井戸跡

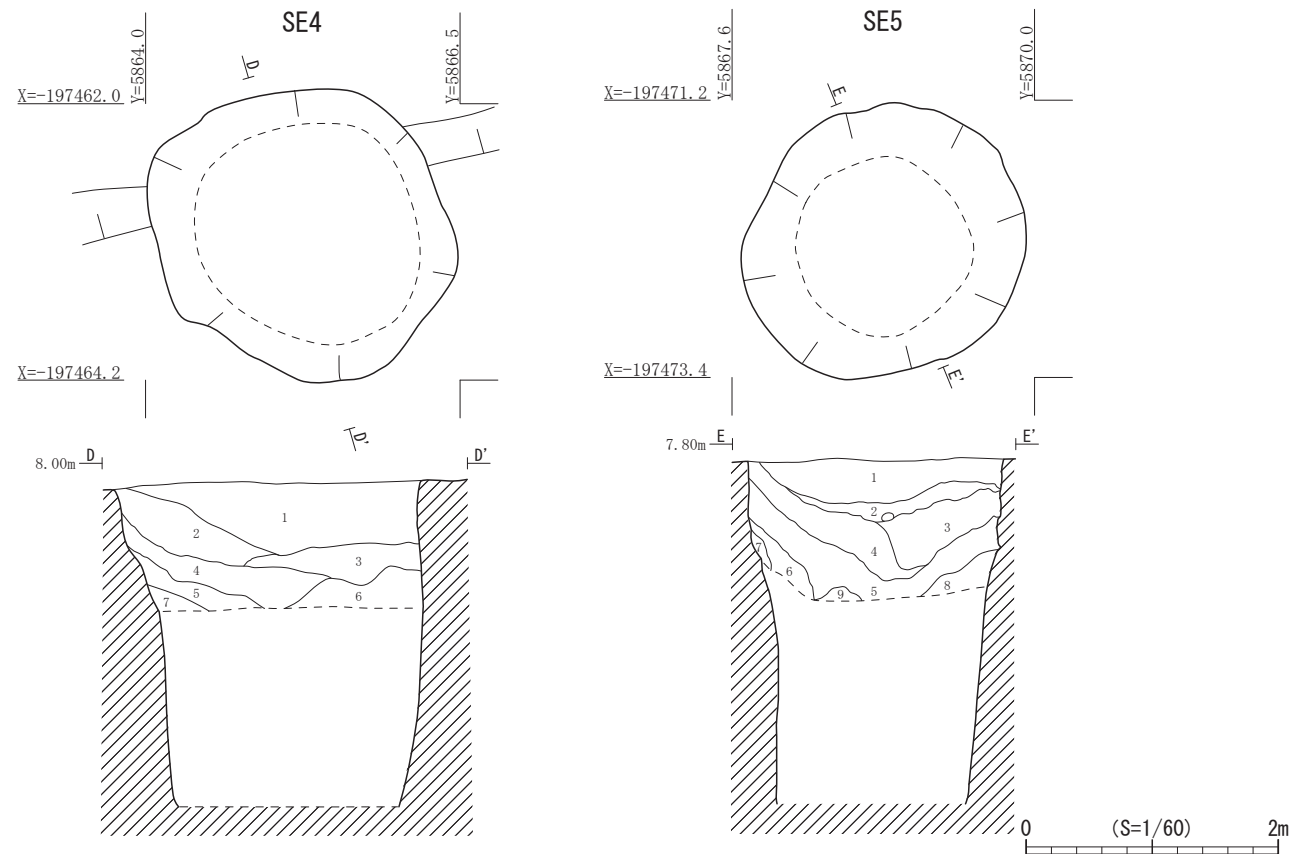
SE1 井戸跡 (第37図)

Ⅰ区で検出された素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、直径は1.0～1.1mである。安全面を考慮し検出面から1mまでの掘削にとどめたが、底面は確認されなかった。堆積土は2層に分層され、いずれも基本層ブロッ



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SE1 (A-A')	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	基本層ブロック (5 mm) を少量含む。
SE2 (B-B')	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 20 mm) を斑状に含む。
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 20 mm) を斑状に含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 20 mm) を斑状に含む。炭化物 (1 cm) を斑状に含む。
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土	自然木を含む。炭化物を含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	粘土	基本層ブロックを多量含む。自然木・礫を含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	基本層ブロック (1 ~ 5 mm) を少量含む。
	7	10YR3/2 黒褐色	粘土	基本層ブロック (10 ~ 50 mm) を含む。
	8	10Y6/2 オリーブ灰色	粘土	暗褐色粘土ブロックを含む。
SE3 (C-C')	9	10YR4/1 褐灰色	粘土	ほぼ均質。
	10	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロックを含む。
	1	10YR7/6 明黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 20 mm) を多量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を多量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 25 mm) を多量含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	基本層ブロック (2 ~ 10 mm) を含む。
	5	10YR3/1 黒褐色	粘土	オリーブ灰色粘土塊 (5 ~ 30 mm) を多量含む。

第37図 SE1・2・3・6井戸跡平面・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SE4 (D-D')	1	10YR7/4 にぶい黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 50 mm) を多量含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 20 mm) を含む。砂を少量含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 50 mm) を含む。粗砂を含む。
	4	10YR3/1 黒褐色	粘土	基本層ブロック (10 ~ 50 mm) を少量含む。
	5	10YR2/1 黒色	粘土	基本層ブロック (10 ~ 50 mm) を少量含む。
	6	10YR2/1 黒色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を少量含む。粗砂を含む。
	7	10YR2/1 黒色	粘土	粗砂を含む。
SE5 (E-E')	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	基本層ブロック (10 ~ 30 mm) を多量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	基本層ブロック (5 ~ 10 mm) を含む。炭化物を含む。礫を少量含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を少量含む。炭化物を少量含む。にぶい黄褐色粘土ブロックを含む。
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを多量含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を含む。炭化物を含む。にぶい黄褐色粘土ブロックを含む。
	6	10YR4/4 褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを含む。
	7	10YR6/6 明黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを含む。
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土	黒褐色粘土ブロックを含む。
	9	10Y4/1 灰色	粘土	ほぼ均質。

第 38 図 SE4・5 井戸跡平面・断面図

クを含む、人為堆積層であることから埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土していない。

SE2 井戸跡 (第 37・39 図)

I 区で検出された素掘りの井戸跡である。P8 よりも古い。平面形は円形を呈し、直径は 2.0 ~ 2.1m である。検出面から 1.5m まで精査を行った後、重機により約 2.5 m まで掘削を行ったが、底面は確認できなかった。堆積土は 7 層に分層され、いずれも基本層ブロックを含む人為堆積層であることから埋め戻されたものと考えられる。遺物は石製品 2 点、植物遺存体 (自然木や植物種子) が出土し、このうち砥石 2 点を図化した (第 39 図 1・2)。

SE3 井戸跡 (第 37・39 図)

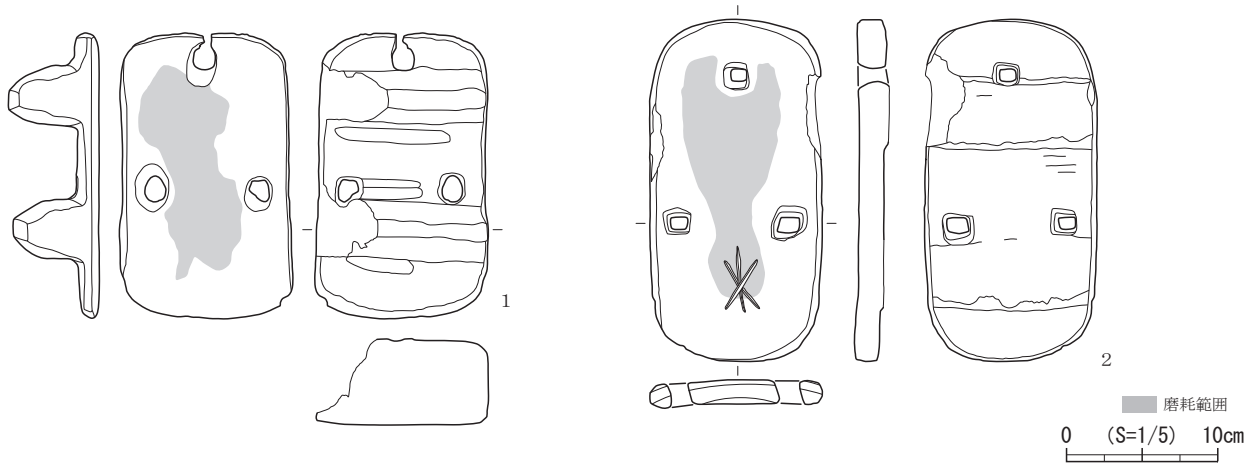
I 区で検出された素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、直径は 2.2 ~ 2.4m である。検出面から 1.1m まで精査を行った後、重機により 2.5 m まで掘削を行ったが、底面は確認できなかった。堆積土は 5 層に分層され、いずれも基本層ブロックを含む人為堆積層であることから埋め戻されたものと考えられる。遺物は古代瓦 1 点、礫



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
7	Ib-1	SE4	-	瓦質土器	播鉢	(7.8)	(12.0)	(1.4)	器面剥落	おろし目 (5条以上・摩耗)	産地：不明 16c	19-3

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	K-26	SE2	-	石製品	砥石	(6.7)	(4.3)	(4.8)	砥面4面 重さ：151.5g 石材：凝灰岩	18-4
2	K-27	SE2	-	石製品	砥石	7.7	4.5	3.0	砥面4面 一部に敲打痕 重さ：111.0g 石材：凝灰岩	18-5
3	G-2	SE3	-	瓦	平瓦	(15.3)	(6.1)	(2.5)	凹面：布目→ヘラナデ 凸面：平行タタキ目 (直交する2方向) 粘土板の重ね痕跡	18-6
4	K-29	SE3	-	石器	磨石	12.0	4.8	2.6	磨面1面 重さ：360.0g	18-7
5	K-28	SE3	-	石製品	砥石	7.0	4.3	3.0	砥面4面 置き砥石が中央で割れた後も使用されている 砥面および面と面がなす稜上に直線的な刃研き痕が多数認められる 重さ：107.2g 石材：凝灰岩	18-8
6	K-18	SE4	-	石製品	茶臼	(16.2)	(6.7)	(4.6)	重さ：520.0g 石材：安山岩	19-1
8	L-2	SE4	-	木製品	容器底板	10.4	9.7	0.5	側面を面取り 片面に墨書の痕跡の可能性 針葉樹の板目材を素材	19-4

第39図 SE2・3・4井戸跡出土遺物



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	L-3	SE5	-	木製品	連歯下駄	18.9	11.5	6.0	歯の一部を欠損 半割材を素材 台部裏面に加工痕	19-2
2	L-4	SE5	-	木製品	連歯下駄	22.6	11.3	1.9	底部欠損 半割材を素材 台部表面に線刻有り	19-5

第40図 SE5 井戸跡出土遺物

石器3点、石製品4点が出土し、このうち平瓦1点、磨石1点、砥石1点を図化した(第39図3~5)。

SE4 井戸跡 (第38・39図)

I区で検出された素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、直径は約2.4mである。検出面から1.0mまで精査を行った後、重機により約2.5mまで掘削を行ったが、底面は確認できなかった。堆積土は9層に分層され、いずれも基本層ブロックを含む人為堆積層であることから埋め戻されたものと考えられる。遺物は瓦質土器1点、礫石器1点、石製品1点、木製品1点が出土し、このうち瓦質土器播鉢1点、茶臼1点、木製容器の底板1点を図化した(第39図6~9)。

SE5 井戸跡 (第38・40図)

I区で検出された素掘りの井戸跡である。平面形は円形を呈し、直径は約2.0mである。検出面から1.4mまで精査を行った後、重機により約2.7mまで掘削を行ったが、底面は確認できなかった。堆積土は9層に分層され、いずれも基本層ブロックを含む人為堆積層であることから埋め戻されたものと考えられる。遺物は木製品3点、植物遺存体(自然木)が出土し、このうち下駄2点を図化した(第40図1・2)。

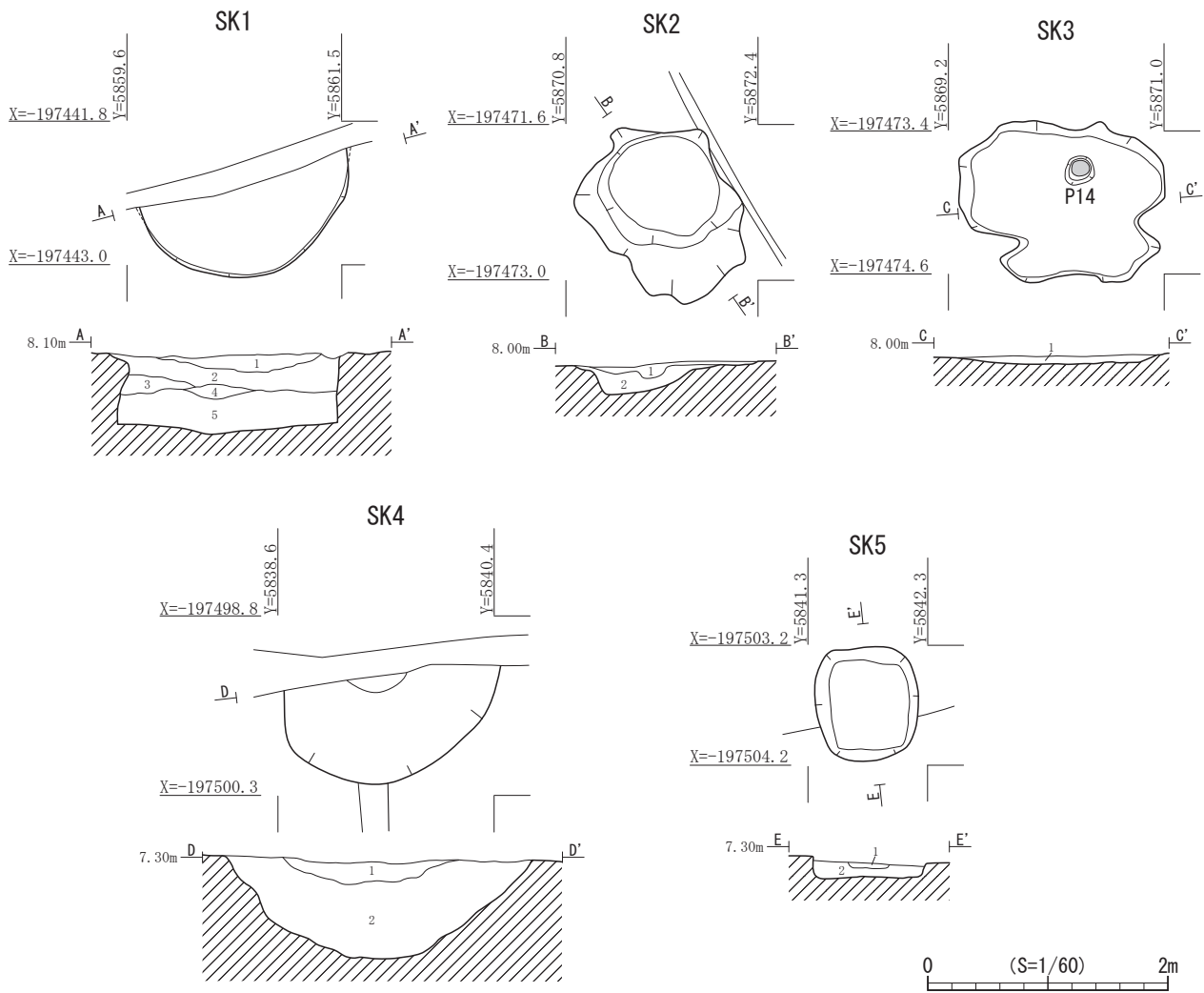
SE6 井戸跡 (第37図)

III区で検出された素掘りの井戸跡で、西側は調査区壁面と接する。SD12・13溝跡より新しい。平面形は円形を呈し、直径は約1.5mである。検出面から0.9mまで精査を行い、底面は確認できなかったが、安全面を考慮しここまでの掘削に留めた。堆積土は4層に分層される。遺物は出土していない。

(5) 土坑

SK1 土坑 (第41図)

I区で検出され、北側は調査区壁面と接する。部分的な検出のため平面形は不明だが、円形を呈すると考えられる。規模は東西長1.9m、南北長75cm以上であり、検出面からの深さは65cmである。断面形は箱形を呈し、堆積土は5層に分層される。遺物は出土していない。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SK1	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロックを斑状に含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土ブロックを少量含む。砂を含み、砂層と互層状に堆積。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物を含む。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	基本層ブロックを含む。砂を含む。
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック (50 mm) を斑状に含む。礫を含む。
SK2	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを上部に含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	基本層ブロックを含む。酸化鉄を含む。
SK3	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	炭化物を含む。
SK4	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物・砂粒を含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	粗砂を含む。灰黄褐色粘土と互層状に堆積。
SK5	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。炭化物を含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。

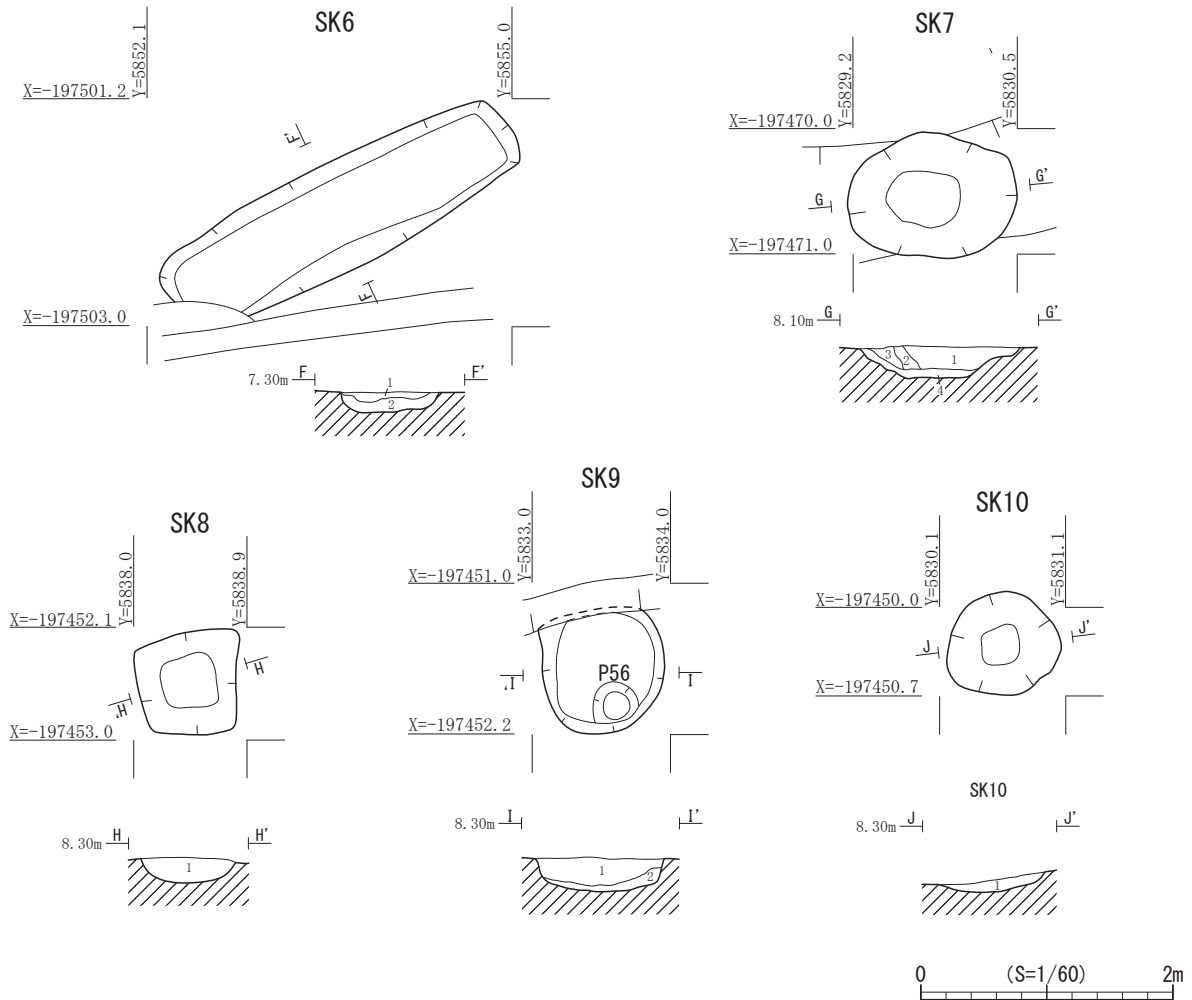
第41図 SK1～5 土坑平面・断面図

SK2 土坑 (第41図)

I区で検出され、東側は調査区壁面と接する。平面形は不整形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸1.2m、検出面からの深さは23cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は2層に分層される。遺物は出土していない。

SK3 土坑 (第41図)

I区で検出された。SB1 掘立柱建物跡よりも新しい。平面形は不整形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸1.4mであり、検出面からの深さは9cmである。断面形はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SK6	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。下部で地山ブロックを含む。
SK7	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を少量含む。地山粒を少量含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	地山粒を少量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を含む。地山粒を含む。
	4	10YR2/1 黒色	粘土	炭化物を多量含む。地山粒を含む。
SK8	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	地山ブロック (10mm) を含む。炭化物を少量含む。
	2	10YR2/1 黒色	粘土	炭化物を少量含む。地山ブロック (10mm) を含む。
SK9	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物を少量含む。地山ブロック (10mm) を含む。
	2	10YR2/1 黒色	粘土	炭化物を含む。
SK10	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物を含む。

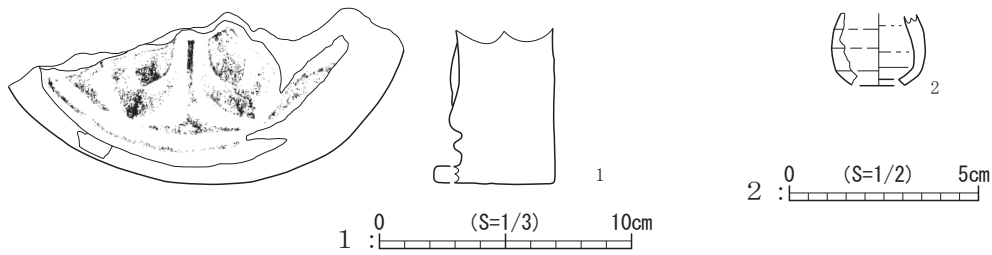
第42図 SK6～10 土坑平面・断面図

SK4 土坑 (第41図)

IV区で検出され、北側は調査区壁面と接する。SD1 堀跡よりも新しい。平面形は円形を呈すると考えられ、規模は東西長 2.5m、南北長 0.9m 以上であり、検出面からの深さは 82cm である。断面形はすり鉢状に中央に向かってすばまり、堆積土は 2層に分層される。遺物は出土していない。

SK5 土坑 (第41図)

IV区で検出された。SD1 堀跡よりも新しい。平面形は方形を呈し、規模は長軸 95cm、短軸 87cm であり、検出面からの深さは 10cm である。断面形は箱形を呈し、堆積土は 2層に分層される。遺物は鉄滓が出土した。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	F-2	SK7	-	瓦	軒丸瓦	(6.2)	(15.0)	(4.2)	瓦当文様は八葉単弁蓮華文 郡山遺跡の軒丸瓦A種 受熱しており折損面を除いてススが付着している	19-6
2	P-2	P1	-	土製品	土鈴	(2.0)	2.7	0.4	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部に孔あり	19-7
-	K-34	P110	-	礫	小玉石	1.7	1.5	0.2	基石 黒色 重さ：1.8g	19-8

第 43 図 SK7 土坑・ピット出土遺物

SK6 土坑 (第 41 図)

IV区で検出され、南側は攪乱により一部削平される。平面形は長方形を呈し、規模は長軸 3.0m、短軸 86cm であり、検出面からの深さは 16cm である。断面形はU字形を呈し、堆積土は 2 層に分層される。遺物は出土していない。

SK7 土坑 (第 42 図)

III区で検出された。SD2A 溝跡より新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 1.3m、短軸 1.0m であり、検出面からの深さは 24cm である。断面形はU字形を呈し、堆積土は 4 層に分層される。遺物は非ロクロ土師器 1 点、古代瓦 1 点、石製品 1 点、漆器と推定される漆塗膜が出土しており、このうち軒丸瓦を図化した (第 43 図 1)。

SK8 土坑 (第 42 図)

III区で検出された。平面形は方形を呈し、規模は長軸 84cm、短軸 74cm であり、検出面からの深さは 20cm である。断面形はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

SK9 土坑 (第 42 図)

III区で検出された。SD3 溝跡より古く、P56 より新しい。平面形は円形を呈し、北側は SD 3 溝跡により削平されている。規模は長軸 102cm、短軸 98cm であり、検出面からの深さは 28cm である。断面形はU字形を呈し、堆積土は 2 層に分層される。遺物は出土していない。

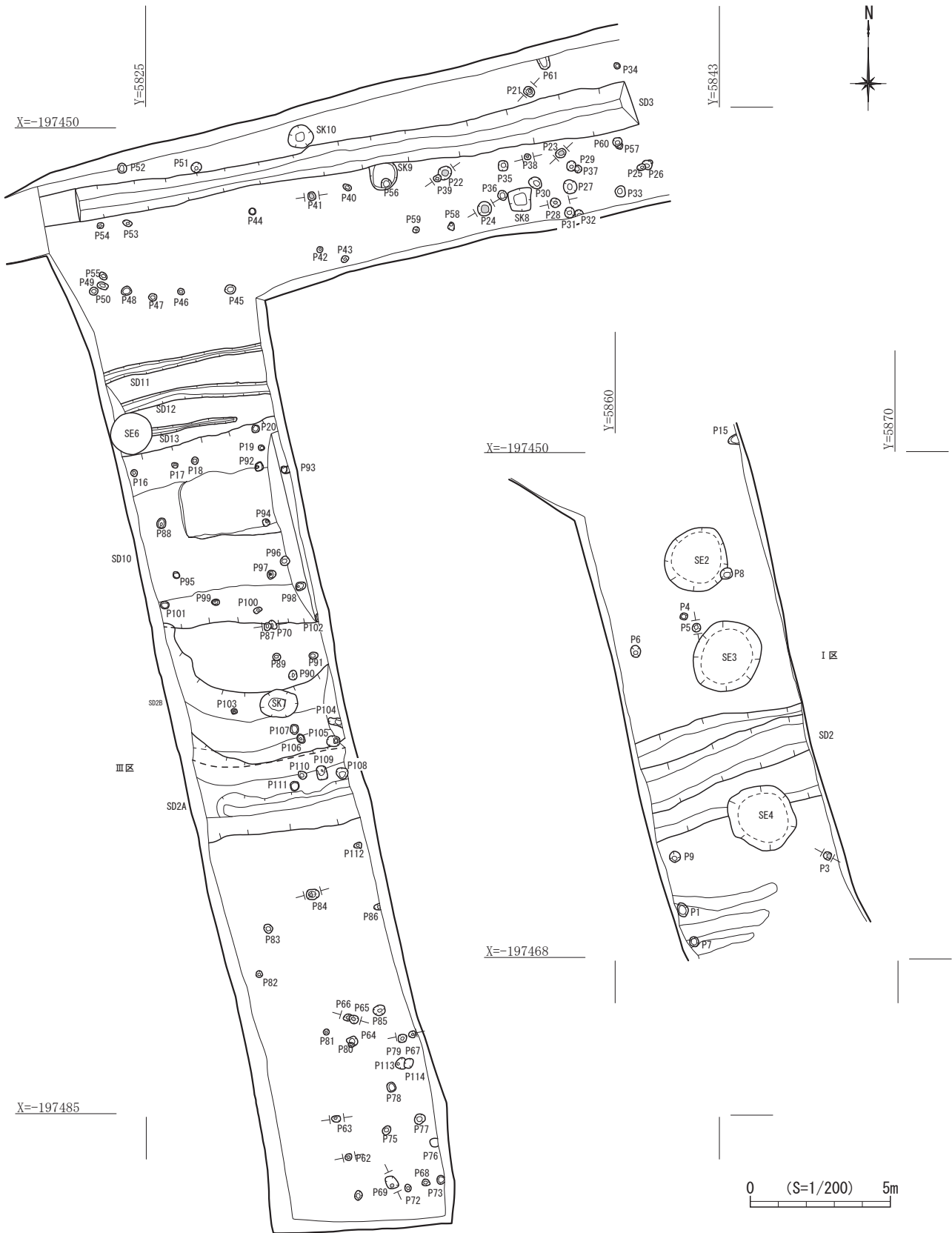
SK10 土坑 (第 42 図)

III区で検出された。平面形は円形を呈し、規模は長軸 93cm、短軸 84cm であり、検出面からの深さは 16cm である。断面形は皿形を呈し、堆積土は単層である。遺物は石製品が 1 点出土したが、図化しなかった。

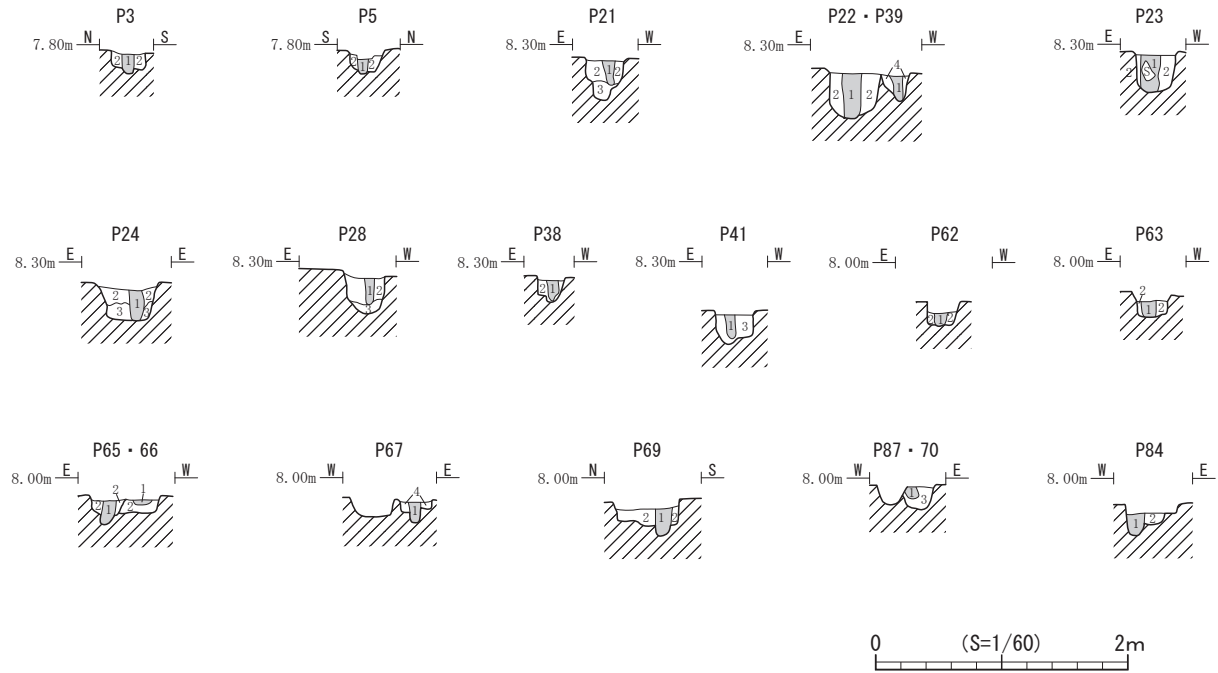
(6) ピット (第 43 ~ 45 図)

ピットは I 区で 14 基、II 区で 1 基、III 区で 101 基を検出した。おおむね他の遺構よりも新しい。平面形は円形または方形を呈し、直径は 20 ~ 40cm、深さは 15 ~ 40cm を測る。このうち SB1 掘立柱建物跡を除き、18 基で柱痕跡が確認された。柱痕跡の直径は 10 ~ 20cm である。なお、III 区以外での検出数が少ないのは、遺構検出面である II 層が削平されているためであると考えられる。

遺物は土師器、陶器、土製品が出土しており、このうち P1 から出土した土鈴を図化した (第 43 図 2)。



第44図 ピット群平面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
ピット	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	均質。柱痕跡。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	地山ブロック (5～10 mm) を含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	地山ブロック (1～2 mm) を少量含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	地山ブロック (10～50 mm) 主体。

第45図 ピット群断面図

5. まとめ

(1) 遺物について

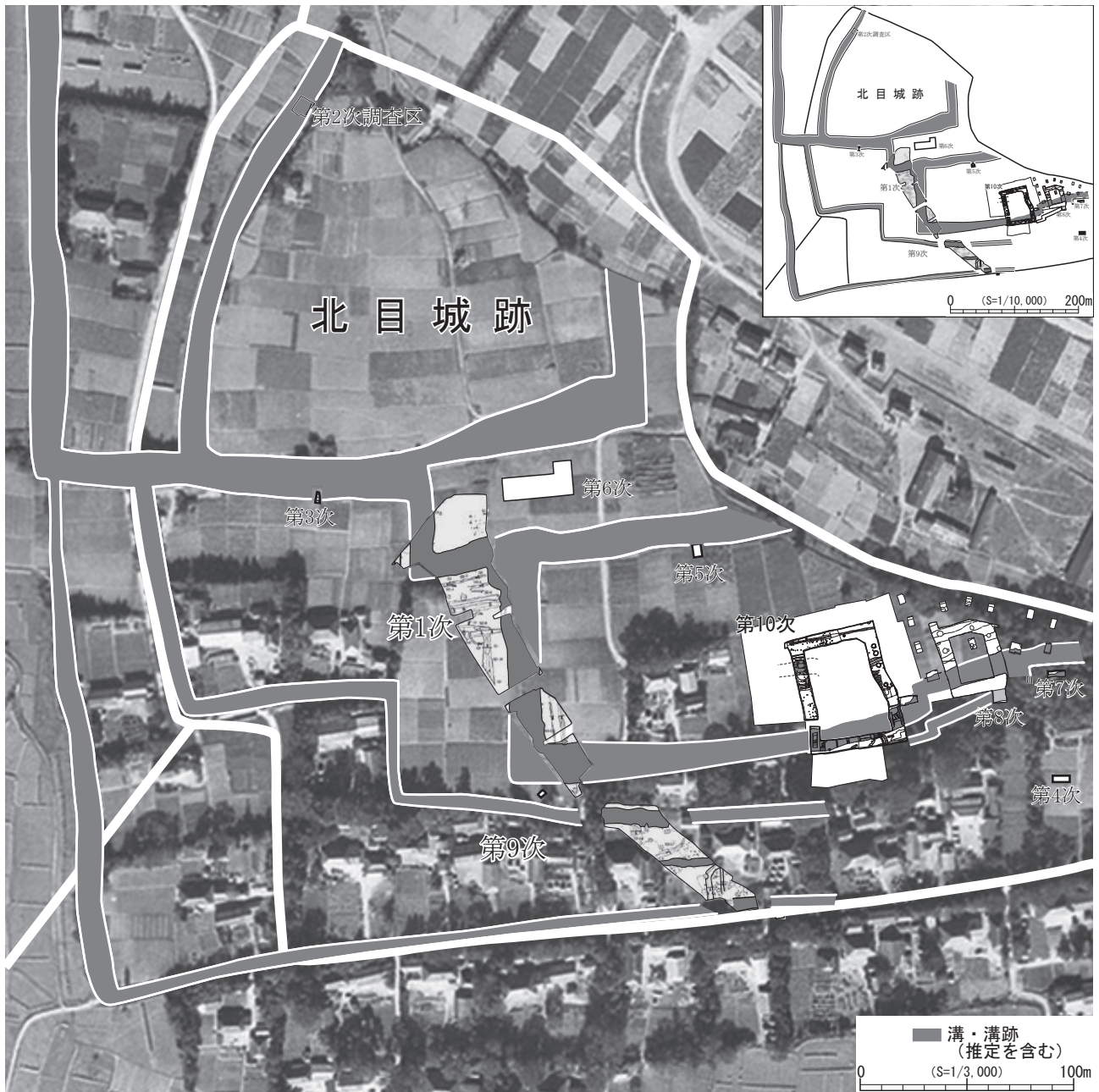
各遺構および基本層、攪乱から縄文土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦、石器、石製品、金属製品、木製品、土製品などの遺物が約 1000 点ほど出土しており、縄文、古代、中世、近世、近代の遺物が出土した。このうちある程度年代が絞れる遺物は以下の通りである。

縄文時代の遺物は、後期中葉に位置付けられる土器が 1 点出土した (第 24 図 1)。有孔状の突起をもち、伊古田遺跡 (仙台市教育委員会 1995a1) 等で類例が認められる。

古代の遺物としては土師器、軒丸瓦、平瓦、丸瓦が出土している。ロクロ調整の土師器 (第 36 図 1) は小型の皿形で、内外面に黒色処理が施され、調整は内面ロクロナデ、外面ヘラミガキである。軒丸瓦 (第 43 図 1) の瓦当文様は八葉と推定される単弁蓮華文であり、内区と周縁の間には一条圏線が巡る。これは郡山廃寺の出土瓦にみられ、年代は 7 世紀末～8 世紀初め頃とみられる (仙台市教育委員会 2005)。平瓦は凸面が格子叩きが施されるもの (第 34 図 2)、平行叩きが施されるもの (第 39 図 3)、縄叩きが施されるもの (第 24 図 2、第 33 図 4)、ナデ調整により叩き目が消されているもの (第 33 図 3) が認められ、丸瓦 (第 34 図 4) の凸面は縄叩きされており、出土点数は少ないものの多様性に富む。

中世の遺物は 5 点で、16 世紀後半: 中国産青磁皿 (第 26 図 6)、16 世紀代: 瓦質播鉢 (第 39 図 7)、14～15 世紀: 古瀬戸産陶器 (第 33 図 1)、13 世紀後半～14 世紀: 在地産中世陶器 (第 33 図 2、第 34 図 1) がある。

近世・近代の遺物としては陶磁器や燻し瓦が挙げられ、出土傾向としては SD1 堀跡南辺、SD6・8 溝跡など南部に集中し、SD1 堀跡以北からは出土しない。このことは第 8 次調査でも同様の傾向があり、廃城後の土地利用の違いを示唆するものと考えられる。年代については 17 世紀代の資料もみられるが 18 世紀～19 世紀のものが主体をなす。産地は登録した陶器 29 点のうち大塚相馬が 10 点、堤が 10 点、肥前が 4 点、瀬戸美濃が 2 点、不明 3 点で、



第46図 堀跡推定線（国土地理院保有、米軍撮影の空中写真（1952年撮影）を加工）

磁器73点のうち瀬戸美濃28点、肥前17点、切込4点、平清水・本郷1点、不明23点である。

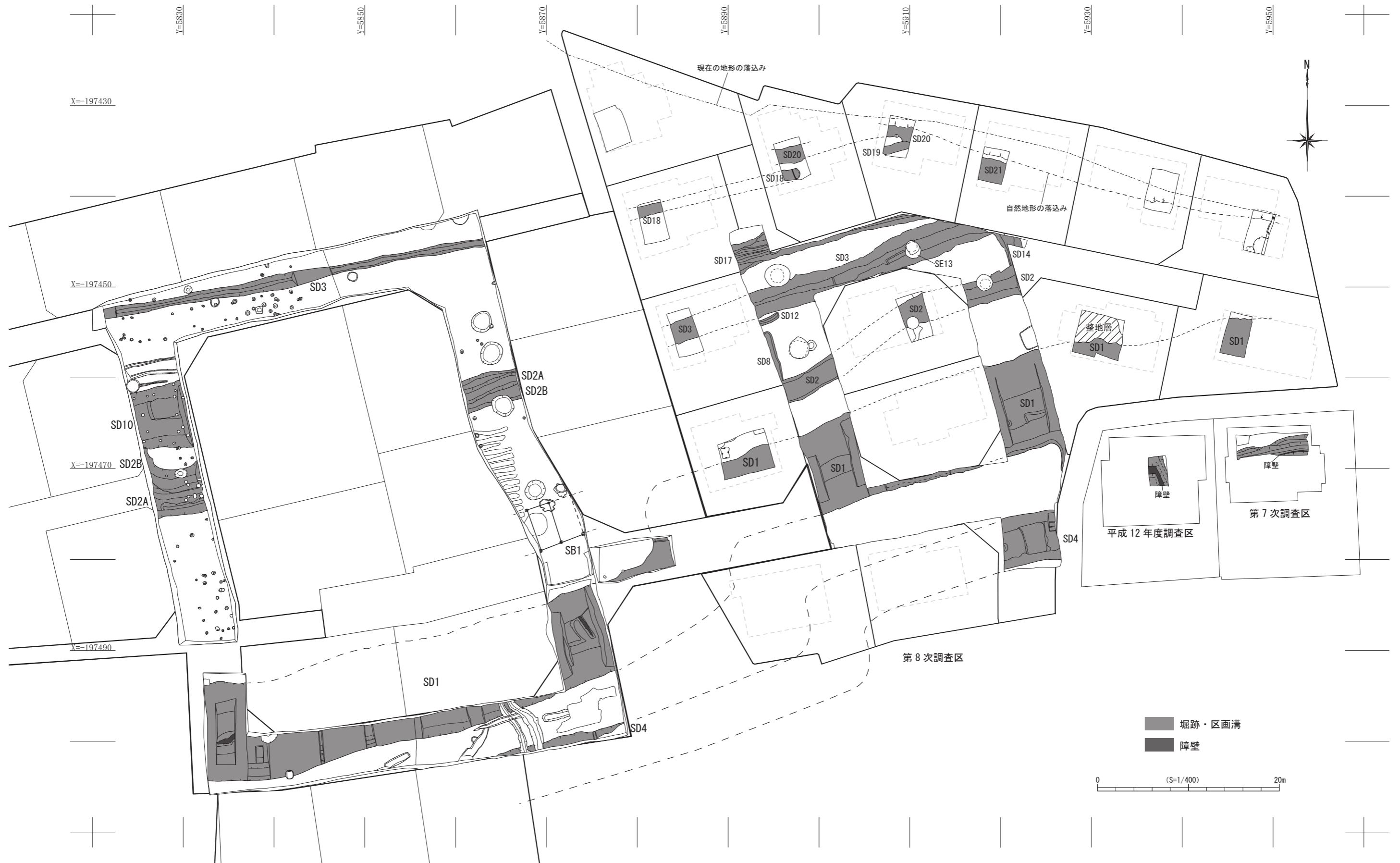
その他、時期は不明であるが石製品の出土が目立つ。石製品は砥石や石臼・茶臼の他に、石材を鉢状に彫りくぼめたもの（第33図4）や浅く平坦に彫りくぼめたもの（第34図9）、外形は立方体状に面取りを施し、内部を挿鉢状に彫りくぼめたもの（第35図2）、溝状に平行するくぼみを造り出すもの（第35図3）などの用途不明の不定形な資料があり、これらは城内の区画溝と考えられる遺構（SD2A・2B・3）から出土する傾向にある。

（2）遺構について

掘立柱建物跡1棟、堀跡3条、溝跡10条、井戸跡6基、土坑10基、ピット116基が検出された。

SB1掘立柱建物跡は1間×2間以上の建物跡である。鉤形に屈曲するSD1堀跡と並ぶように配置されるが、SD1堀跡と同時期に機能していたかは不明である。

堀跡と推定される遺構はSD1・4・10である。SD1堀跡は第1次調査SD1堀跡と第8次調査SD1堀跡の間に位置し（第

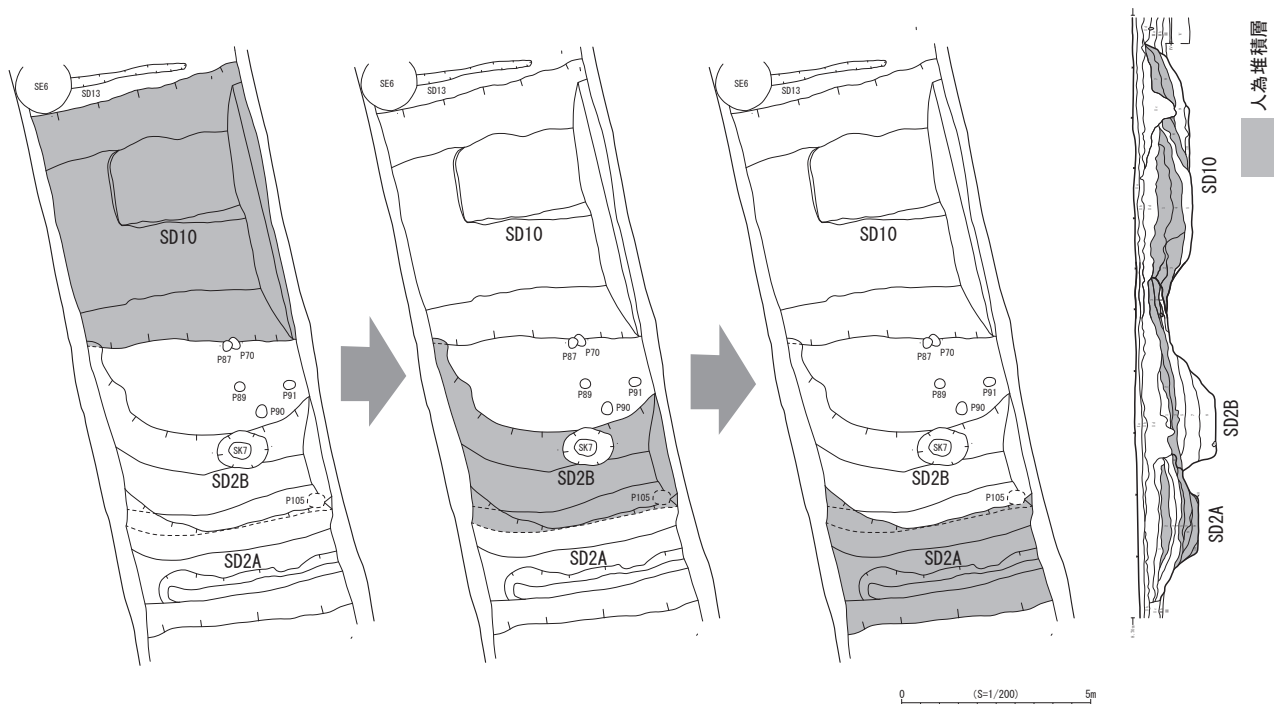


第47図 第10次調査区と第7・8次調査区の合成図

46 図)、これらと同一の、城跡南側を区画する一連の堀跡の一つと考えられる。幅 10～11 m の規模をもち、底面には障壁が造り出され、調査区東部では段状に落ち込み、堀と直交するように造り出されるのに対して、西部では堀跡と平行するように造り出されており、第 1 次 SD1 堀跡同様に複雑な構造を有している。また、東端部は鉤状に屈曲しながら第 8 次 SD1 堀跡に接続し (第 47 図)、西端部はまっすぐ第 1 次調査 SD1 堀跡に接続すると考えられる。その規模については東側 (第 8 次) とは類似するが、西側 (第 1 次) と比べると幅 18m に対し、本調査西端が 11m と 7m の差があることから、SD1 堀跡は西側に向かって規模が変わる可能性が高い。なお、IV 区では堀跡南壁に犬走状の段が確認されたが、段直上から大堀相馬の中皿 (第 26 図 1) が出土したことから、近代に改変を受け、造り出されたものと考えられる。今回の調査では時期決定資料は出土しなかったが、第 1 次調査では掘削年代は 16 世紀後半から 17 世紀初頭とされており、本遺構も同様の年代が考えられる。また、埋没後 17 世紀から 19 世紀にかけての陶磁器とともに埋め戻されていることから、少なくとも明治時代まで、窪地としてその痕跡が残っていたと推定される。

SD4 堀跡は SD1 堀跡と平行し、部分的な検出に留まったが、その位置関係から第 8 次 SD4 堀跡と接続すると考えられる (第 47 図)。第 8 次調査で確認された規模は幅 5.5 m、深さ 1.2 m と比較的規模が小さい。西側延長線上には幅 9m、深さ 1.5～2.1m の規模を持つ第 1 次調査 SD15 堀跡が位置し、接続する可能性がある。SD10 堀跡は上幅 7.2 m、深さ 1.3 m の規模を持ち、調査区北辺、東辺では確認されないことからその東側は途切れるか、南側に屈曲し、SD1 堀跡と接続する可能性がある。また、西側については地籍図からも読み取ることが出来ず、不明である。SD4・10 堀跡の年代について、具体的には言及できないが、SD1 堀跡と一連の遺構と考えられることから、同様の年代であると推定される。

溝跡は 10 条検出され、うち SD2A・2B・3 溝跡は城内部を区画する溝跡、SD5～9・11～13 溝跡は近世以降の耕作に伴うものと考えられる。SD2A・2B 溝跡はその東側は 8 次調査 SD3 溝跡または SD17 溝跡と、SD3 溝跡は 8 次調査 SD18 溝跡または SD19 溝跡に接続する可能性がある (第 47 図)。SD2A・2B 溝跡は III 区で SD10 堀跡と重複関係を有しており、SD10 堀跡→SD2B 溝跡→SD2A 溝跡の北から南への変遷が追える (第 48 図)。さらに堆積状況から SD10 堀跡は一度掘り直しを受けており、さらに改修された新期の堀跡の上層では、基本層ブロック主体の人為



第 48 図 SD10 堀跡・SD2 溝跡変遷図

第2節 第10次調査

的な埋め戻し土が確認されていることから、最終的に埋め戻されていると推定される。SD2A 溝跡からは古代瓦や中世陶器が出土するが、堀跡との重複関係を考慮すると、16世紀後半以降と考えられる。第8次調査との関係からSD3 溝跡も16世紀以降の年代と推定される。SD5～9・11～13 溝跡はいずれも小規模な溝跡であり、複数条が平行していることから、SD11～13 溝跡は廃城後の、SD5～9 溝跡は近代以降の耕作に伴う遺構である可能性が高い。

井戸跡は6基検出された。このうちSE4 井戸跡から16世紀代の陶器が出土している。第8次調査では同様の規模の遺構からは14～16世紀の遺物が出土し、近世のものは出土しないことから16世紀代と推定されている。そのため、SE1～5 井戸跡は詳細な年代は不明であるが、第8次調査と同様に16世紀頃の年代の可能性はある。なお、SE6 井戸跡はSD12・13 溝跡より新しく、廃城後の遺構と考えられる。また、土坑は10基検出された。このうちSK4・5 土坑はSD1 堀跡より新しいことから、近代以降の年代である。調査区南部では近代以降の遺物・遺構が集中することからSK6 土坑も近代以降の可能性はある。SK1～3・7～10については詳細な年代は不明であるが、井戸跡と同様に16世紀以降の年代と推定される。

(3) まとめ

第10次調査区は遺跡東部に位置し、第1次調査区の東側、第8次調査区の西側隣接部にあたる。調査成果や検討課題は以下のように要約される。

1. 遺物は縄文、古代、中世、近世、近代のものが出土した。出土状況については、その大部分が近世以降の遺物である。出土状況は調査区南側に集中し、SD1 堀跡より北側では出土していない。このことは廃城後の土地利用の違いが表れている可能性がある。その他の遺物については散漫的な出土状況である。また、時期不明の用途不明な石製品が出土した。
2. 北目城跡に関わるとみられる堀跡 (SD1・4・10) を検出した。SD1 堀跡は幅10～11m、深さ1.9～2.5mの規模をもち、その底面には障壁が造り出される。その位置関係から第1次調査SD1 堀跡と、第8次調査SD1 堀跡と同一の遺構と考えられ、これまでの調査と同様に複雑な構造を有することが確認された。SD4・10 堀跡はその延長プランやSD1 堀跡との関係など不明な点が多く、調査成果の蓄積が待たれる。また、城内を区画するとみられる溝跡 (SD2A・2B・3) を検出した。SD2A・2B 溝跡とSD10 堀跡の重複関係から少なくとも城内における3時期の変遷が迫る。
3. 個別の遺構の時期については、言及できないものが多いが、SD1 堀跡より北側については16世紀代・廃城後の大きく2時期に分けられ、SD1 堀跡より南側については近代以降と考えられる。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1995a 『伊古田遺跡』 仙台市文化財調査報告書第193集
仙台市教育委員会 1995b 『北目城跡』 仙台市文化財調査報告書第197集
仙台市市史編さん委員会 1995 『仙台市史 資料編1 古代中世』
仙台市教育委員会 1999 「北目城跡 (第2次調査)」 『陸奥国分尼寺ほか』 仙台市文化財調査報告書第238集
仙台市教育委員会 2004 「北目城跡 (第3次) 発掘調査報告書」 『保守院前遺跡他』
仙台市文化財調査報告書第274集
仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編(1)』 仙台市文化財調査報告書第283集
仙台市市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』
仙台市教育委員会 2007 『北目城跡—第6次発掘調査報告書—』 仙台市文化財調査報告書第314集
仙台市教育委員会 2008 「北目城跡第7次発掘調査報告書」 『南小泉遺跡他』 仙台市文化財調査報告書第326集
仙台市教育委員会 2016 「北目城跡の調査」 『沓形遺跡他』 仙台市文化財調査報告書第458集 (第8次調査)



1. I区 東側完掘状況（北から）



2. I区 北側完掘状況（北東から）



1. I区 SB1 掘立柱建物跡完掘状況(北東から)



2. I区 SD2A・2B 溝跡完掘状況(南東から)



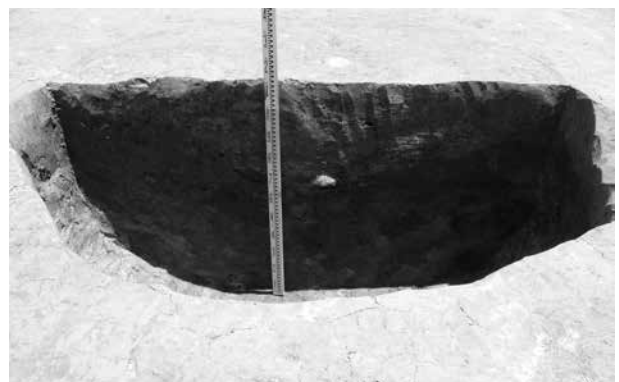
3. I区 SE1 井戸跡掘削状況(南から)



4. I区 SE2 井戸跡土層断面(西から)



5. I区 SE3 井戸跡土層断面(西から)



6. I区 SE4 井戸跡土層断面(西から)



7. I区 SK2 土坑土層断面(南西から)



8. I区 SK3 土坑土層断面(南西から)



1. II区 SD1 堀跡完掘状況(西から)



2. II区 SD1 堀跡障壁(西から)



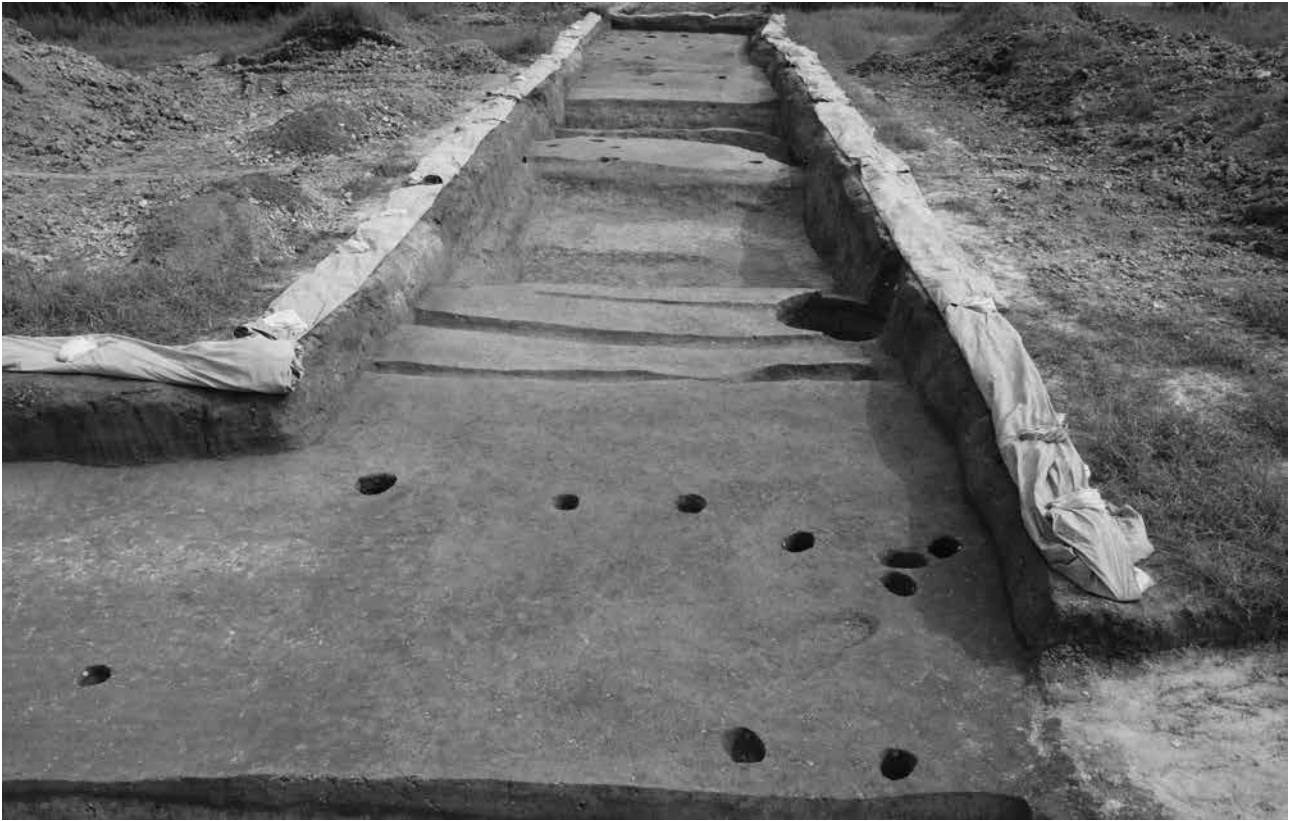
3. II区 SD4 堀跡検出状況(東から)



4. II区遺構完掘状況(北から)



5. II区 SD5 溝跡完掘状況(東から)



1. III区 西側遺構完掘状況(北から)



2. III区 北側遺構完掘状況(北西から)



1. Ⅲ区 SD10堀跡完掘状況(東から)



2. Ⅲ区 SD2A・2B溝跡完掘状況(南西から)



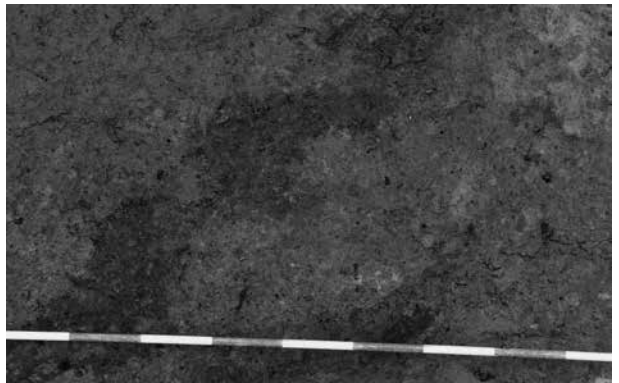
3. Ⅲ区 SD2A・2B溝跡土層断面(西から)



4. Ⅲ区 SD10堀跡・SD2A・2B溝跡(東から)



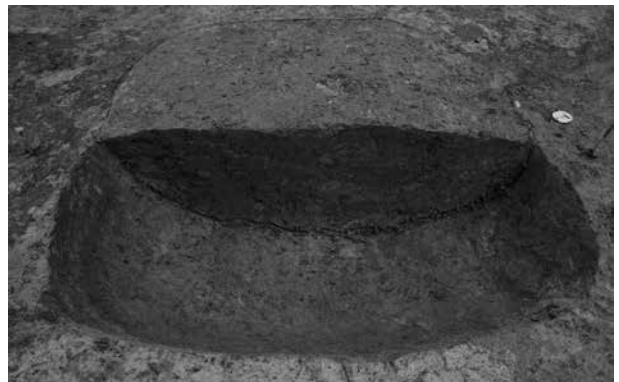
5. Ⅲ区 SD3溝跡土層断面(西から)



6. Ⅲ区 SK7土坑漆膜検出状況(北から)



7. SK7土坑土層断面(南から)



8. Ⅲ区 SK8土坑土層断面(南から)



1. IV区 SD1 堀跡完掘状況(南東から)



2. IV区 SD1 堀跡検出状況(東から)



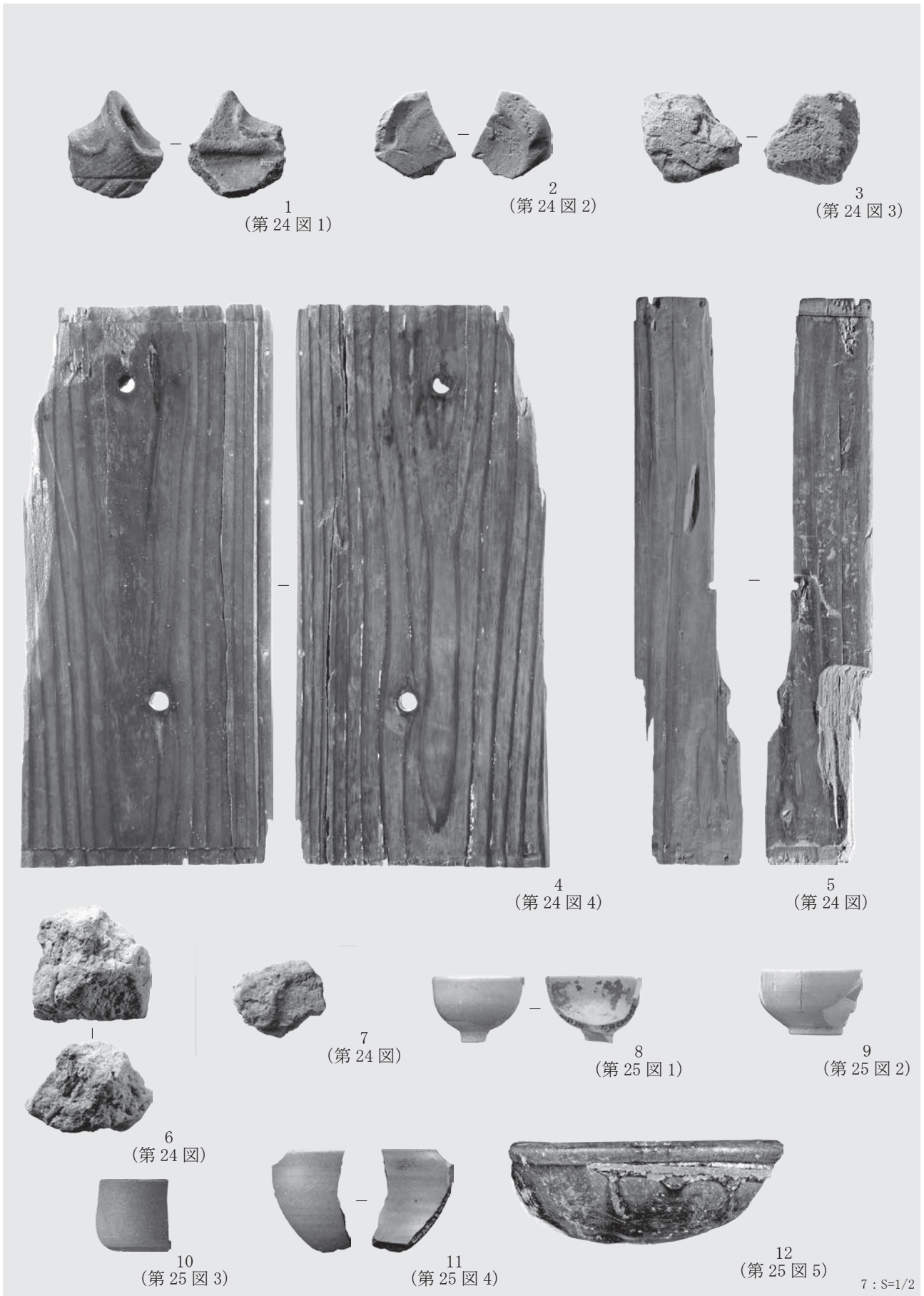
3. V区 SD1 堀跡検出状況(南から)



4. 東半部調査区全景(上が北)



5. 西半部調査区全景(上が北)



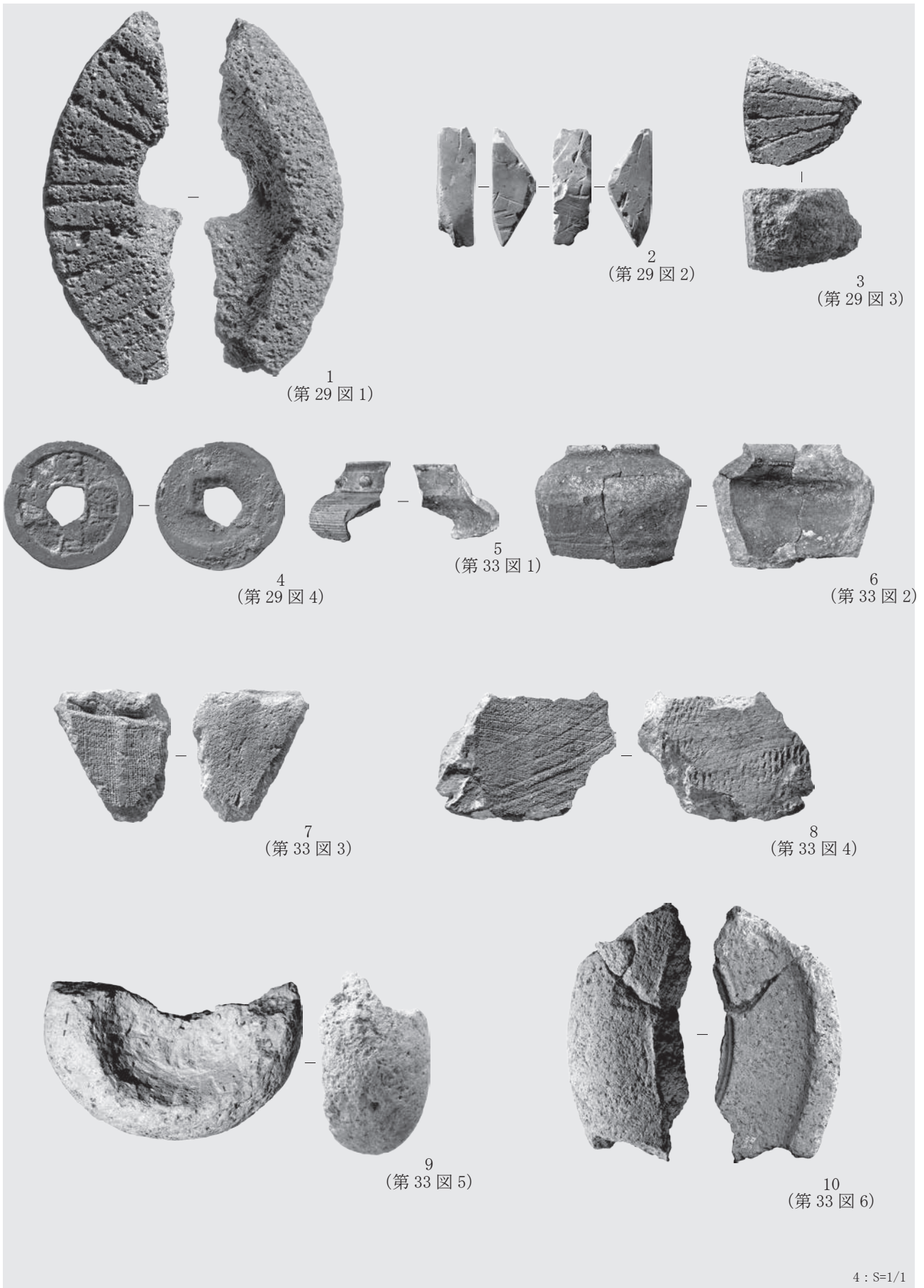
写真図版 12 北目城跡第10次調査出土遺物(1)



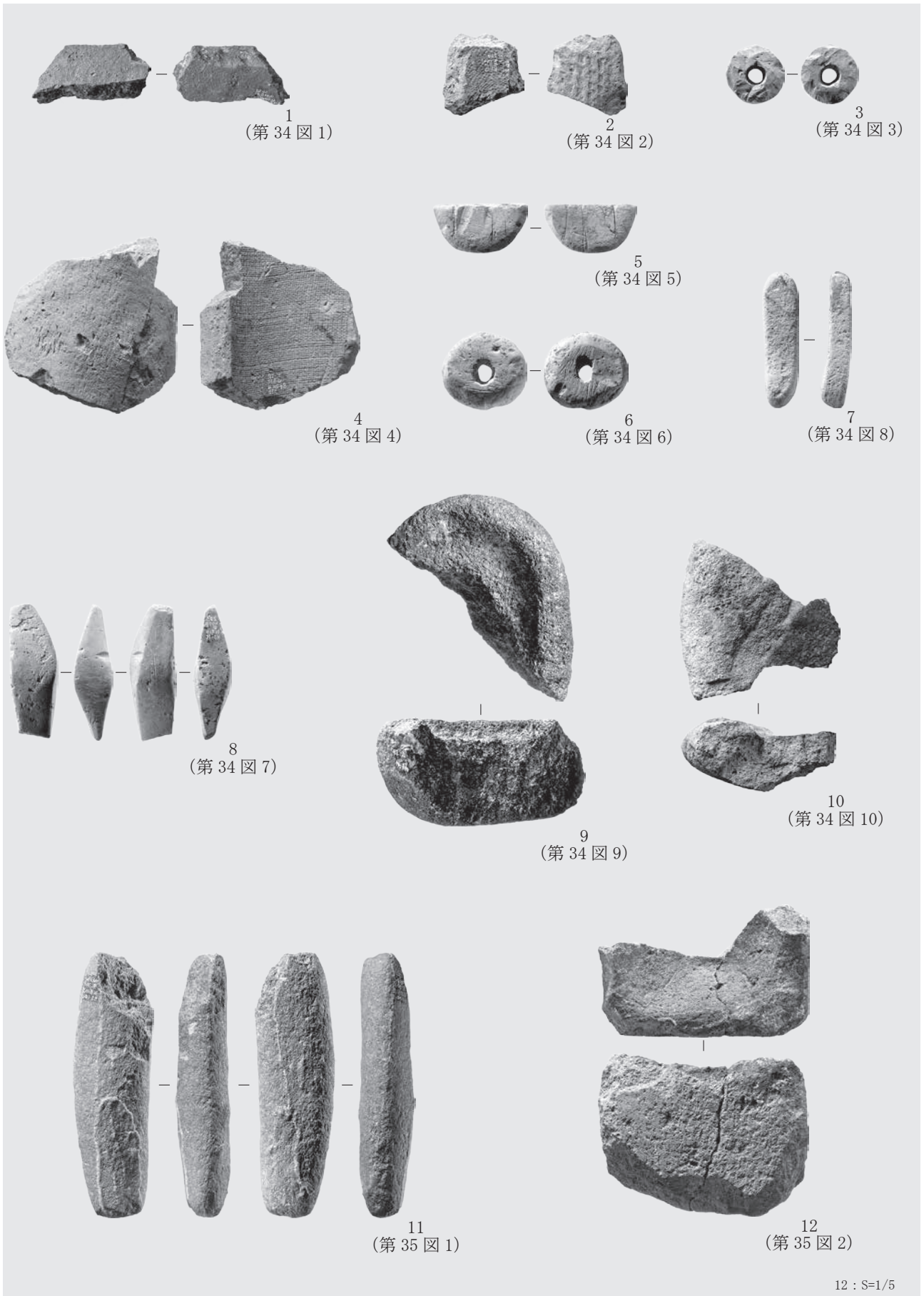
写真図版13 北目城跡第10次調査出土遺物(2)



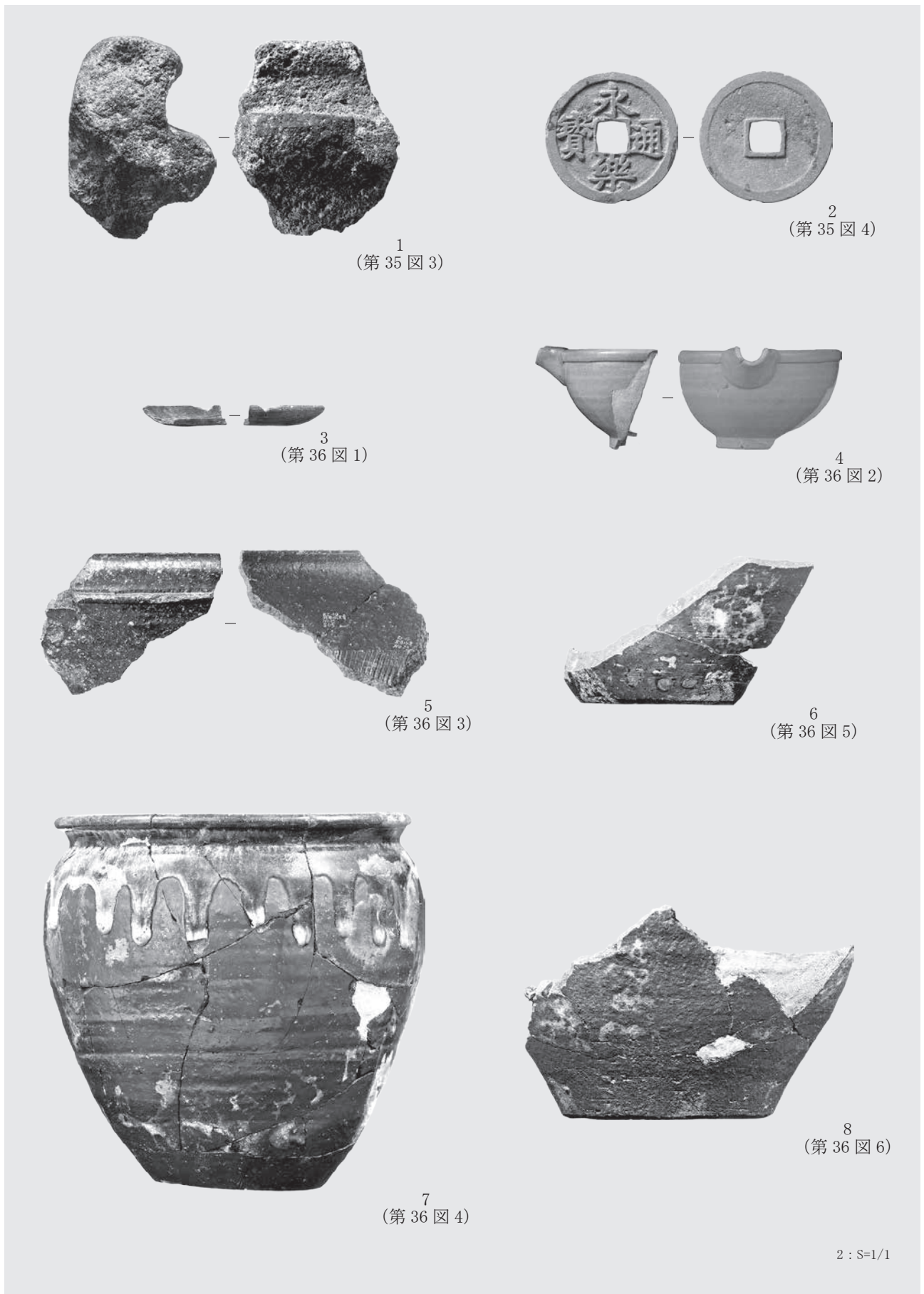
写真図版 14 北目城跡第10次調査出土遺物(3)



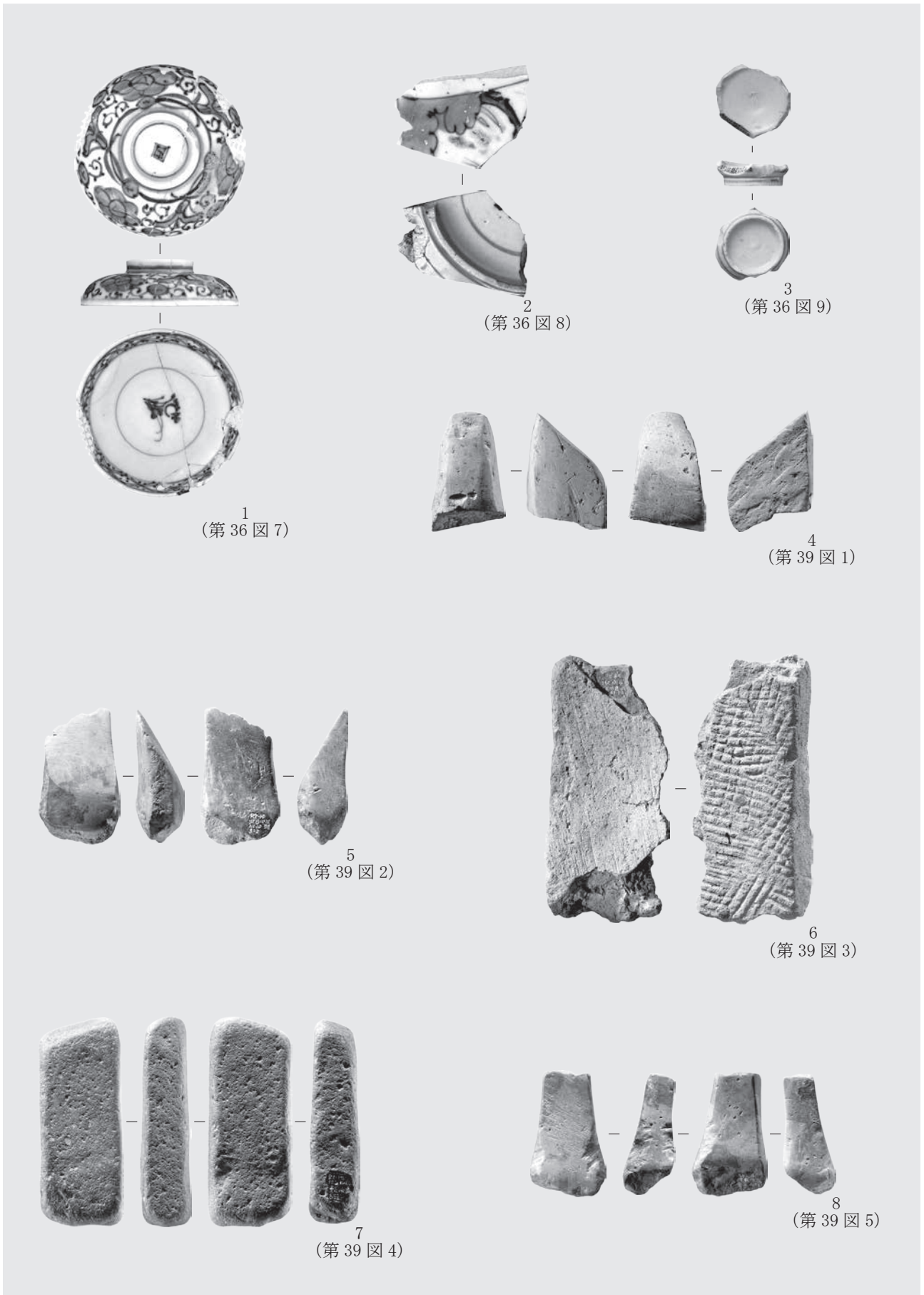
写真図版 15 北目城跡第10次調査出土遺物(4)



写真図版 16 北目城跡第10次調査出土遺物(5)



写真図版 17 北目城跡第10次調査出土遺物(6)



写真図版 18 北目城跡第10次調査出土遺物(7)



写真図版 19 北目城跡第10次調査出土遺物(8)

第4章 富沢館跡の調査

第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流の笹川によって形成された自然堤防上に立地する。現況での標高は約14～18mである。

富沢館跡はこれまでに17次にわたる調査が行われており、縄文時代、古代、中近世の時期の遺構、遺物が発見されている。

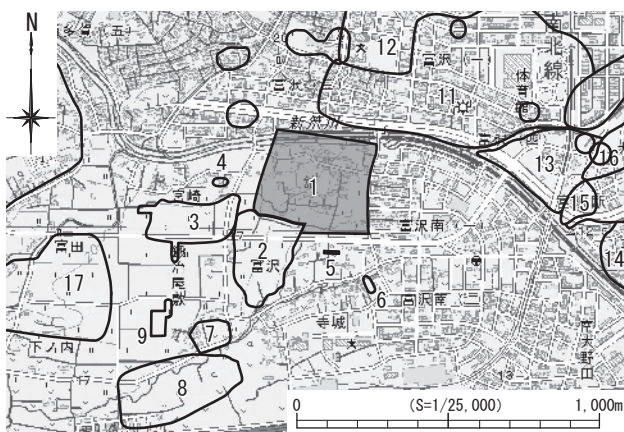
縄文時代では後期中葉の宝ヶ峯式の時期を主体として竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほか土偶やスタンプ型土製品なども出土している。

古代では炉跡を伴う竪穴遺構が複数確認されている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定され、鉄滓が多数出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構と考えられている。また同様の遺構は隣接する鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷A遺跡からは「謹解 申請稻事 合□□」「大田部」などと刻書された砥石が出土している（仙台市教育委員会 2018）。

中世になるとこの地域は北目領と呼ばれ、国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった栗野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏家臣の富沢伊賀守が居城したと伝わる。

富沢館跡は平成13年に行われた調査で堀跡の一部が検出され、その後も城の外側を区画すると推定される堀跡や、薬研堀の形状を呈する溝跡、土坑、河川跡などが検出され、中～近世の陶磁器などが出土している（仙台市教育委員会 2002、2004、2013）。その後平成25年度から始まった区画整理事業に伴い、館跡の周囲の様相は大きく変化した。中心部分の土塁は事業者との協議の結果、公園の一部として現在もその姿を残している。区画整理に伴う発掘調査により館跡の周囲には1～4条の堀跡が巡らされていたことが判明し、また主郭部の東側には出入口と考えられる門跡が検出された。また南西側では土塁が筋違いに配置されていることが確認され、虎口を形成していたものと考えられている。また2基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古銭などが出土した（仙台市教育委員会 2018）。

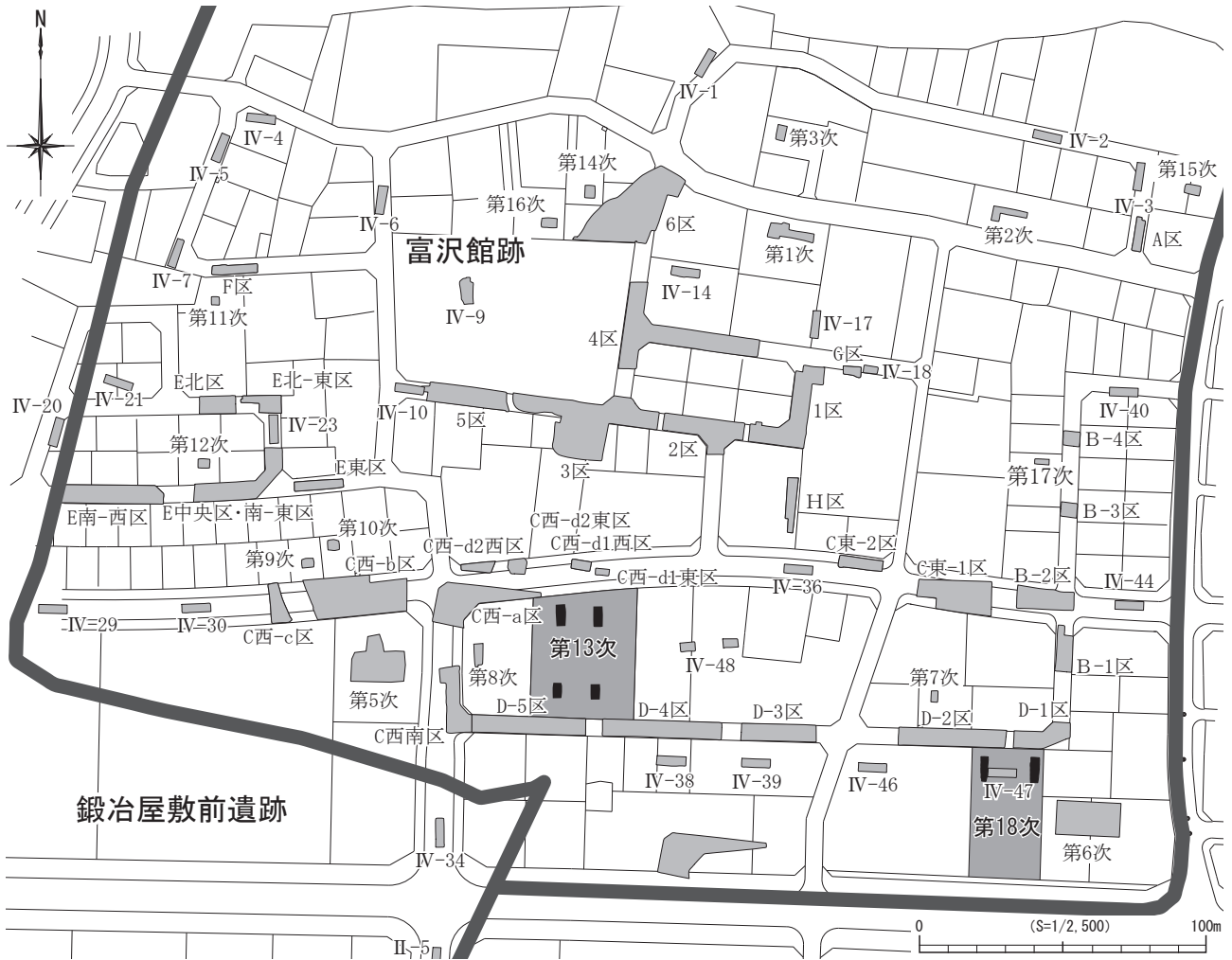
近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時に、堀や土塁があつては城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畑や水田として利用していたと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	城館跡・集落跡	自然堤防	縄文・平安～近世
2	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・奈良～中世
3	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古代～中世
4	宮崎遺跡	集落跡	自然堤防	平安
5	川前浦遺跡	散布地	自然堤防	縄文晩・古代
6	川前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文晩
7	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防・後背湿地	縄文・古代～近世
8	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
9	京ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文中・古代～平安
11	山口遺跡	集落跡・水田跡・包含地	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
12	富沢遺跡	水田跡・包含地	後背湿地	旧石器～近世
13	下ノ内遺跡	集落跡・墓・畑跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良～近世
14	伊古田B遺跡	畑跡	自然堤防	古墳～平安
15	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳・奈良・平安
16	六反田遺跡	集落跡・古墳・墓・畑跡	自然堤防	縄文～古墳・平安～近世
17	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生・平安

第49図 富沢館跡と周辺の遺跡

第2節 第13次調査

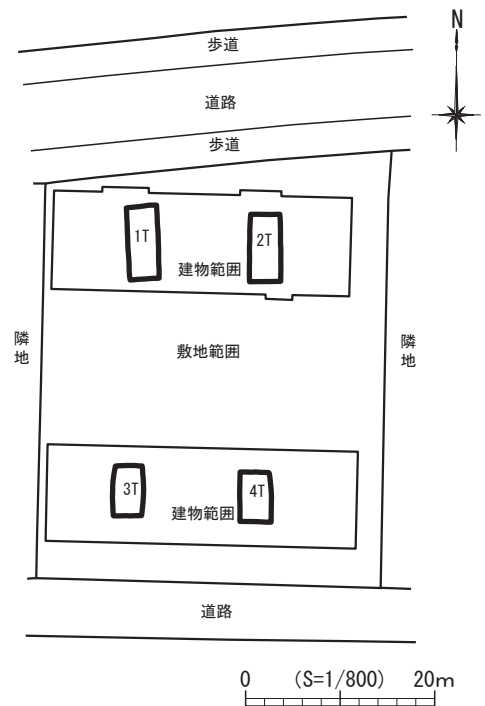


第50図 第13・18次調査区位置図

第2節 第13次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市富沢駅西土地区画整理事業地内 36-1 街区 2・3 画地
調査期間	平成 31 年 3 月 25 日～ 27 日
調査対象面積	337.03 m ² + 327.55 m ²
調査面積	54.0 m ²
調査原因	共同住宅新築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主事 三浦一樹 文化財教諭 栗和田祥郎



第51図 第13次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成31年3月1日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成31年3月4日付H30 教生文第105-133号で通知）に基づき実施した。

調査では北側のA棟建物範囲内に3.0×7.0mのトレンチを2本、南側のB棟建物範囲内に3.0×5.0mのトレンチを2本設定し、調査区名はA棟の西から1・2トレンチ、B棟の西から3・4トレンチとした。各調査区とも重機を用いて盛土および基本層I層を除去し、1トレンチではⅢb層上面、2トレンチではⅢa層上面、3トレンチでは堀跡堆積土上面、4トレンチではⅢc層上面で遺構検出作業を行った。その結果各トレンチとも堀跡と推定される遺構が検出された。

遺構検出後、2・3・4トレンチでは調査区西壁に沿って部分的にサブトレンチを設け、断面観察による遺構の確認を行った。計測については平面図（S=1/50）および断面図（S=1/20）を作製した。記録写真はデジタルカメラにより撮影した。

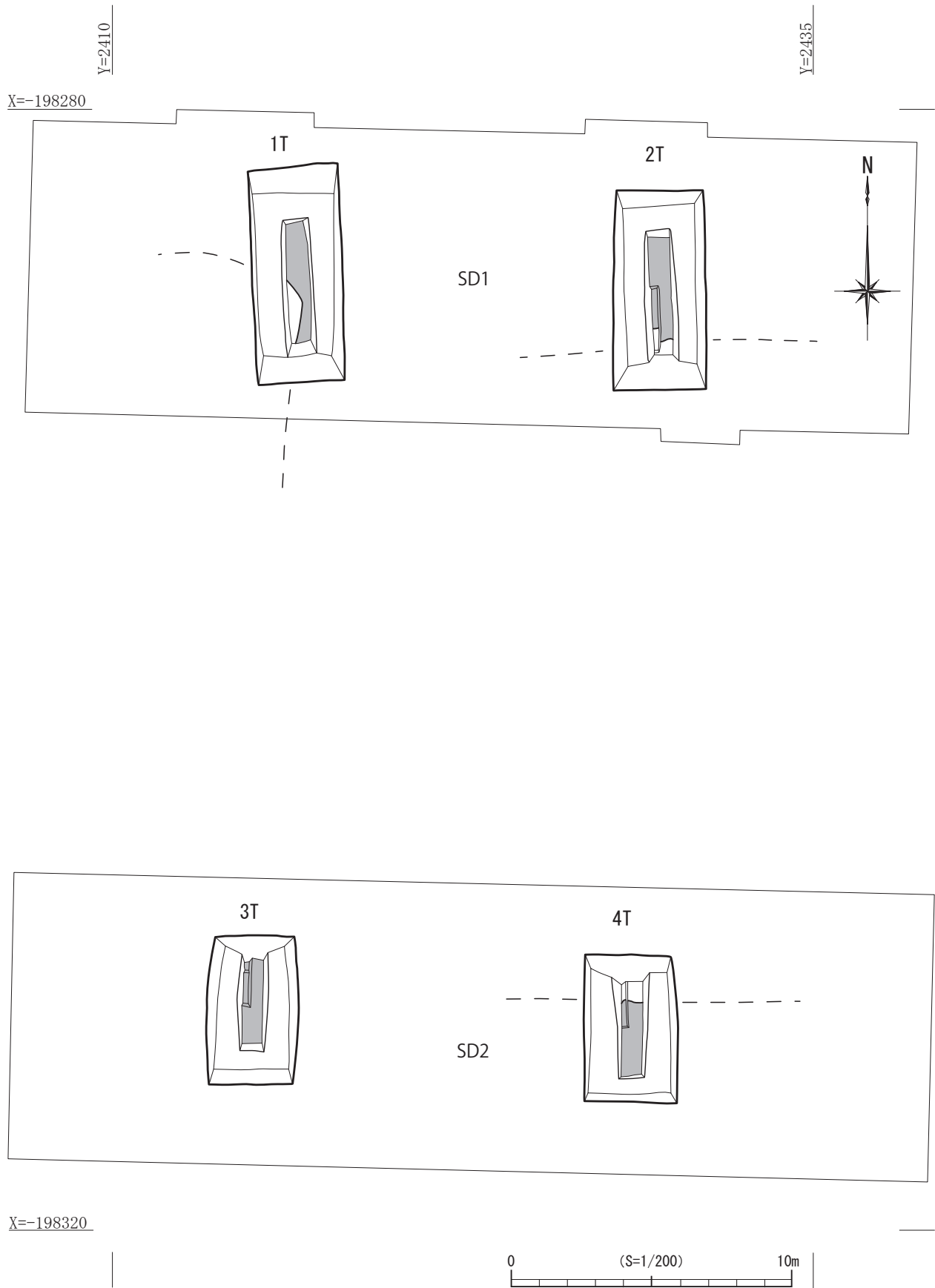
3. 基本層序

今回の調査では基本層を大別3層、細別で9層確認した。しかし、各トレンチによって同一層と判断された層であっても層の様相が若干異なる場合もあった。今回遺構検出作業を行ったのはⅢ層上面である。遺構検出面までの深度は約1.3～1.5mである。

- I a 層：10YR5/1 褐灰色シルト。酸化鉄、マンガン粒を含む。層厚は約32cmで、盛土以前の水田耕作土である。1・2トレンチで確認された。
- I b 層：2.5Y4/2 暗灰黄色シルト。酸化鉄を少量、植物遺存体を多量に含む。層厚は約40cmで、盛土以前の水田耕作土である。2・4トレンチで確認された。
- I c 層：10YR4/1 褐色シルト。酸化鉄を斑状に多量に含む。層厚は約15cmで、盛土以前の水田耕作土である。1・3・4トレンチで確認された。
- I d 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト。酸化鉄を斑状に、層下部に砂を少量含み、部分的にグライ化する。層厚は約45cmで、盛土以前の水田の畦畔と考えられる。2トレンチで確認された。
- II a 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。マンガン粒を少量、酸化鉄を斑状に多量に含む。層厚は約30cmで、近世以降の水田耕作土と考えられる。1・2トレンチで確認された。
- II b 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状に含む。層厚は約5cmで、近世以降の水田耕作土と考えられる。2トレンチで確認された。
- III a 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。酸化鉄粒を多量に含む。層厚は約0～34cmである。2トレンチで確認された。
- III b 層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。灰黄色粘土をブロックを帯状に、層上部にマンガン粒を少量含む。層厚は約30cmである。1トレンチで確認された。
- III c 層：10YR6/6 明黄褐色砂。酸化鉄を斑状に含む。部分的にグライ化する。層厚は約40cmである。4トレンチで確認された。

4. 発見遺構と出土遺物

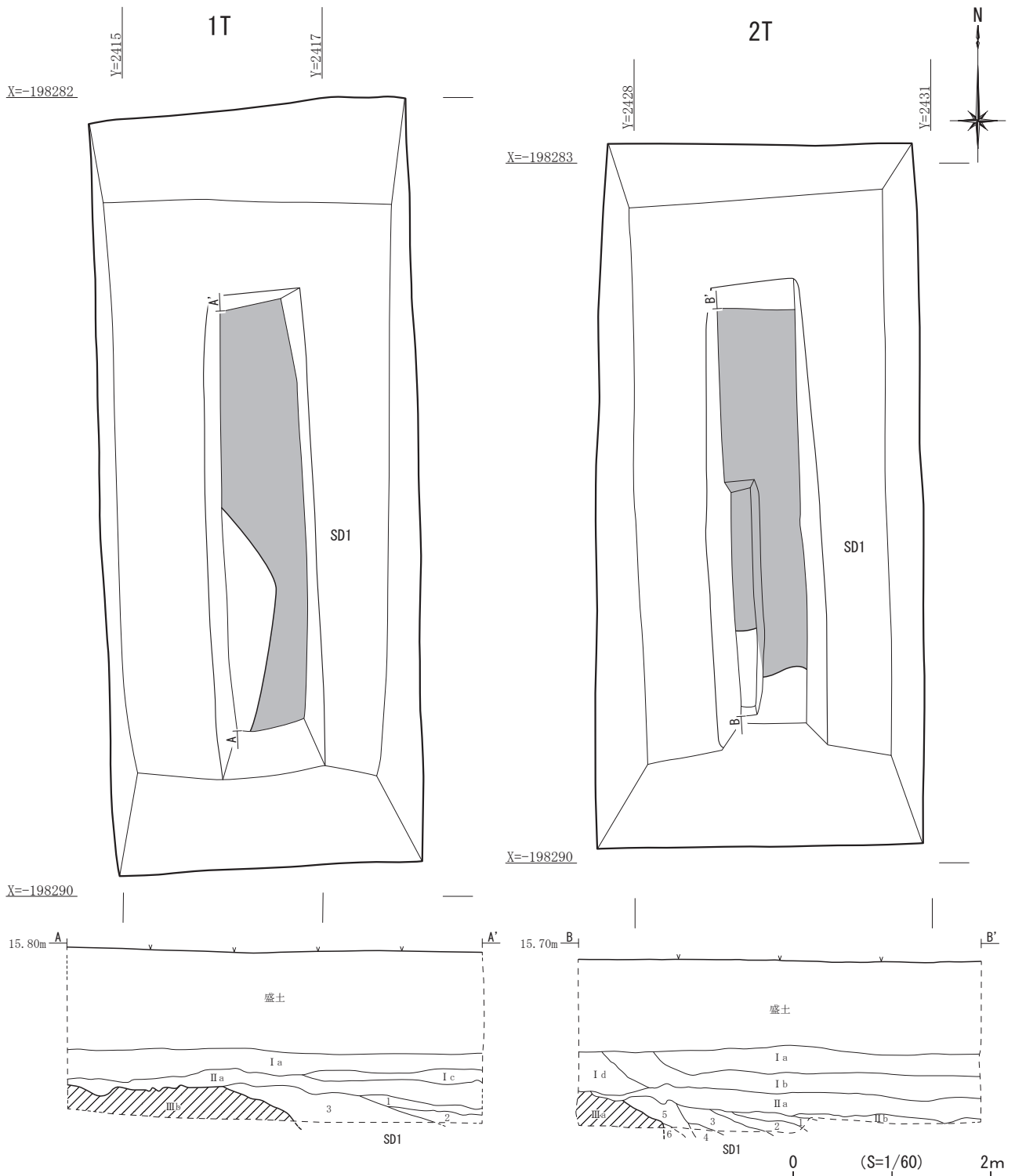
今回の調査では、堀跡が2条検出された。



第52図 調査区全体図

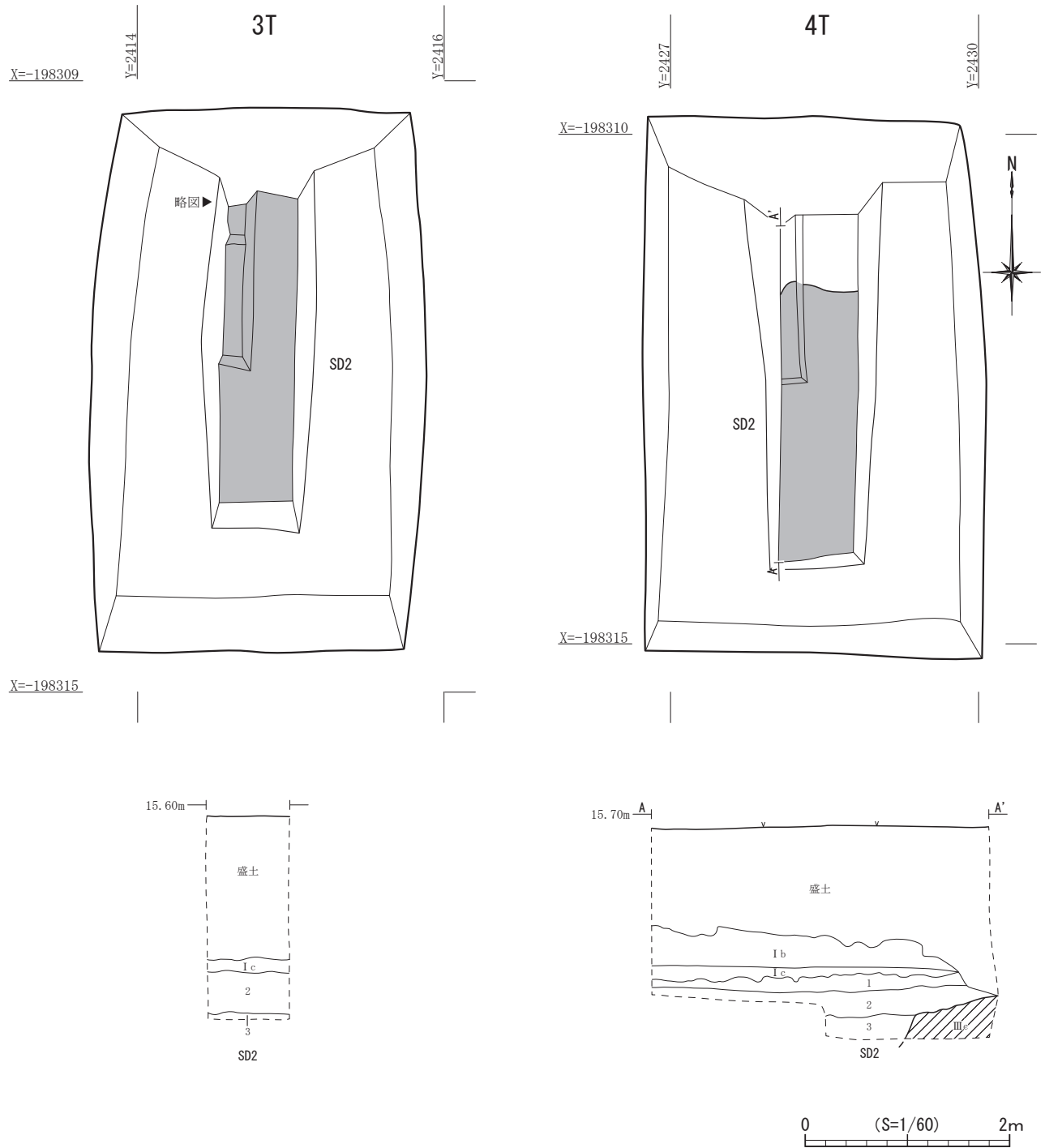
SD1 堀跡 (第52・53図)

1 トレンチと 2 トレンチで検出された。1 トレンチでは調査区の東側で検出された。西から南方向へ湾曲すると



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1 (1T)	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
	2	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土	酸化鉄を斑状に含む。層上部に砂が堆積する。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状、マンガン粒、砂を含む。
SD1 (2T)	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒、灰黄褐色粘土質シルトブロックを多量に含む。酸化鉄粒を含む。人為堆積層。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色シルト粒を少量、にぶい黄褐色粘土ブロックを含む。人為堆積層。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黒褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトを斑状に多量に含む。人為堆積層。
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトブロックを少量、酸化鉄粒を含む。
	5	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状、マンガン粒を少量含む。
	6	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒を少量含む。

第53図 1・2トレンチ平・断面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に多量に含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	部分的に砂を含む。酸化鉄を粒、带状に含む。

第54図 3・4トレンチ平・断面図

考えられ、大半が調査区外へ延びる。検出長は0.8 m以上、幅4.4 m以上で、深さ0.4 m以上である。断面形は逆台形を呈すると推定される。堆積土は灰黄褐色粘土質シルト、粘土で3層確認された。いずれも自然堆積層である。堀の中央部に行くに従い堆積土の上面が落ち込み、その部分に基本層II層が堆積している。

2トレンチでは調査区の北側で検出された。東西方向の堀跡で大半が調査区外へ延びる。調査区西壁沿いに部分的にサブトレンチを設けて掘削を行い、断面観察を行った。検出長は0.7 m以上、幅3.7 m以上、深さ0.35 m以

上である。断面形は逆台形を呈すると推定される。堆積土は6層確認された。その内1～3層は基本層由来の灰黄褐色、にぶい黄褐色粘土質シルトもしくは粘土をブロック状に多量に含むことから、人為堆積層と考えられる。一方、4～6層は灰黄褐色の砂質シルトもしくは粘土質シルトが均質に堆積しており、自然堆積層と考えられる。1トレンチ同様、堀の中央部に行くに従い堆積土の上面が落ち込み、その上面に基本層Ⅱ層が堆積している。

SD2 溝跡 (第52・54図)

3トレンチと4トレンチで検出された。3トレンチでは遺構精査を行ったが、Ⅰ層以外に基本層も遺物も確認できなかったことから、調査区北側において西壁に沿う形でサブトレンチを設けて掘削を行い、地表面から約1.9m(標高約13.7m)まで断面観察を行った。その結果、Ⅰ層より下層は全面が堀跡の堆積土であると判断された。堆積土は2層が確認された。砂もしくは砂質シルトで構成され、いずれも自然堆積土であると推定される。

4トレンチでは調査区の北西側で落ち込みの一部が検出された。方位は東西方向で、大半が調査区外に延びる。調査区北側の東壁沿いにサブトレンチを設けて掘削を行い、遺構の断面観察を行った。検出規模は全長0.7m以上、幅2.7m以上、深さ0.6m以上である。断面形は逆台形を呈するものと推定され、法面の傾斜が途中で急角度で落ち込む。堆積土は3層が確認された。いずれの層も自然堆積層であると推定される。

いずれの調査区においても安全面を考慮し、遺構の完掘には至っていない。また遺物も出土していない。

5. まとめ

今回の調査地点は富沢館跡の南西部に位置し、これまでの調査結果から城郭に伴う東西方向の堀跡が2条想定されていた。調査の結果、敷地の南側と北側の2つの建築予定範囲内の調査区から、堀跡と推定される遺構が2条検出された。この堀跡は検出位置から、富沢駅西土地地区画整理事業に伴う第4次調査で検出されたSD43・44堀跡と同一の堀跡と推定される。

今回の調査で見つかった堀跡はいずれも東西方向を基調とするものの、1トレンチでは堀の落ち込みが南から西に湾曲するような形で確認されたことから、SD1堀跡とSD2堀跡を結ぶような堀跡が存在していた可能性がある。SD2堀跡の南側には、城のさらに外側を区画するSD74堀跡が存在し、今回の敷地の南西側でSD74堀跡は北側に屈曲しSD2堀跡と接続していたものと推定されている。そして今回1トレンチで確認されたSD1堀跡の屈曲する部分は、SD2堀跡とSD74堀跡の接続部分が延長した箇所が存在することから、SD1堀跡からSD73堀跡まで堀が接続していた可能性が考えられるようになった。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2002 『小鶴城跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第261集(第1次)
- 仙台市教育委員会 2004 『保春院前遺跡他』 仙台市文化財調査報告書第274集(第2次)
- 仙台市教育委員会 2013 『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』 仙台市文化財調査報告書第416集(第3次)
- 仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第466集(第4次)
- 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』



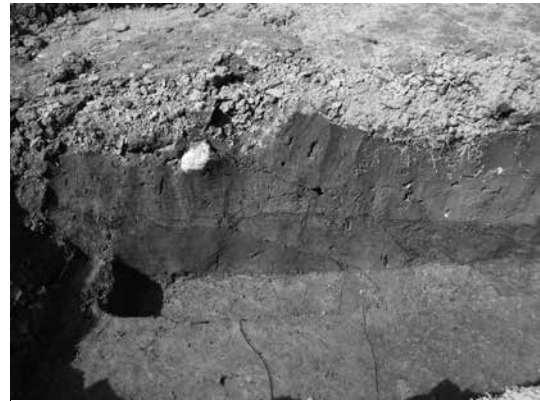
1. 1 トレンチ遺構検出状況（南から）



2. 1 トレンチ調査区西壁土層断面（東から）



3. 2 トレンチ遺構検出状況（南から）



4. 2 トレンチ調査区西壁土層断面（東から）



5. 3 トレンチ遺構検出状況（南から）



6. 3 トレンチ調査区西壁土層断面（東から）



7. 4 トレンチ遺構検出状況（北から）

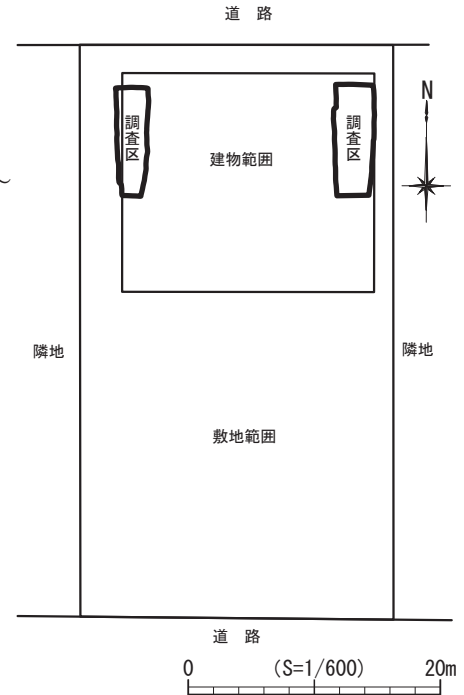


8. 4 トレンチ調査区西壁土層断面（東から）

第3節 第18次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市富沢駅西土地区画整理事業 37-2 街区 2-1 ～ 2-5 画地
調査期間	令和2年1月7日～10日
調査対象面積	371.96 m ²
調査面積	36.7 m ²
調査原因	店舗建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主任 及川謙作 主事 佐藤恒介 木村恒



第55図 第18次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者から令和元年10月28日付で提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（令和元年11月5日付H31教生文第102-76号で回答）に基づき実施した。調査では、事業に伴う掘削のうち建物の周囲の地盤改良のみが遺構面に影響を及ぼすと判断されたことから、調査区は建築範囲の際部分に3×9mの規模で2ヶ所設定し、東側の調査区をA区、西側をB区とした。

A・B区とも重機により盛土および基本層I層の除去を行った後にII層上面で遺構検出作業を行った。その結果A区からは小溝状遺構3条と性格不明遺構1基を、B区は小溝状遺構を6条確認した。いずれの遺構も安全面を考慮し、遺構の完掘は行わなかった。

計測については調査区平面図（S=1/20）および断面図（S=1/20）を作製した。記録写真はデジタルカメラにより撮影した。

3. 基本層序

今回の調査では、基本層が4層確認された。盛土は約1.1mの厚さで、遺構検出を行ったII層上面までの深さはA区では約1.2mで、B区では約1.1mである。

I 層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。上層との境界を中心にマンガング粒が斑状に堆積する。盛土前の水田耕作土で、層厚は約10～15cm。

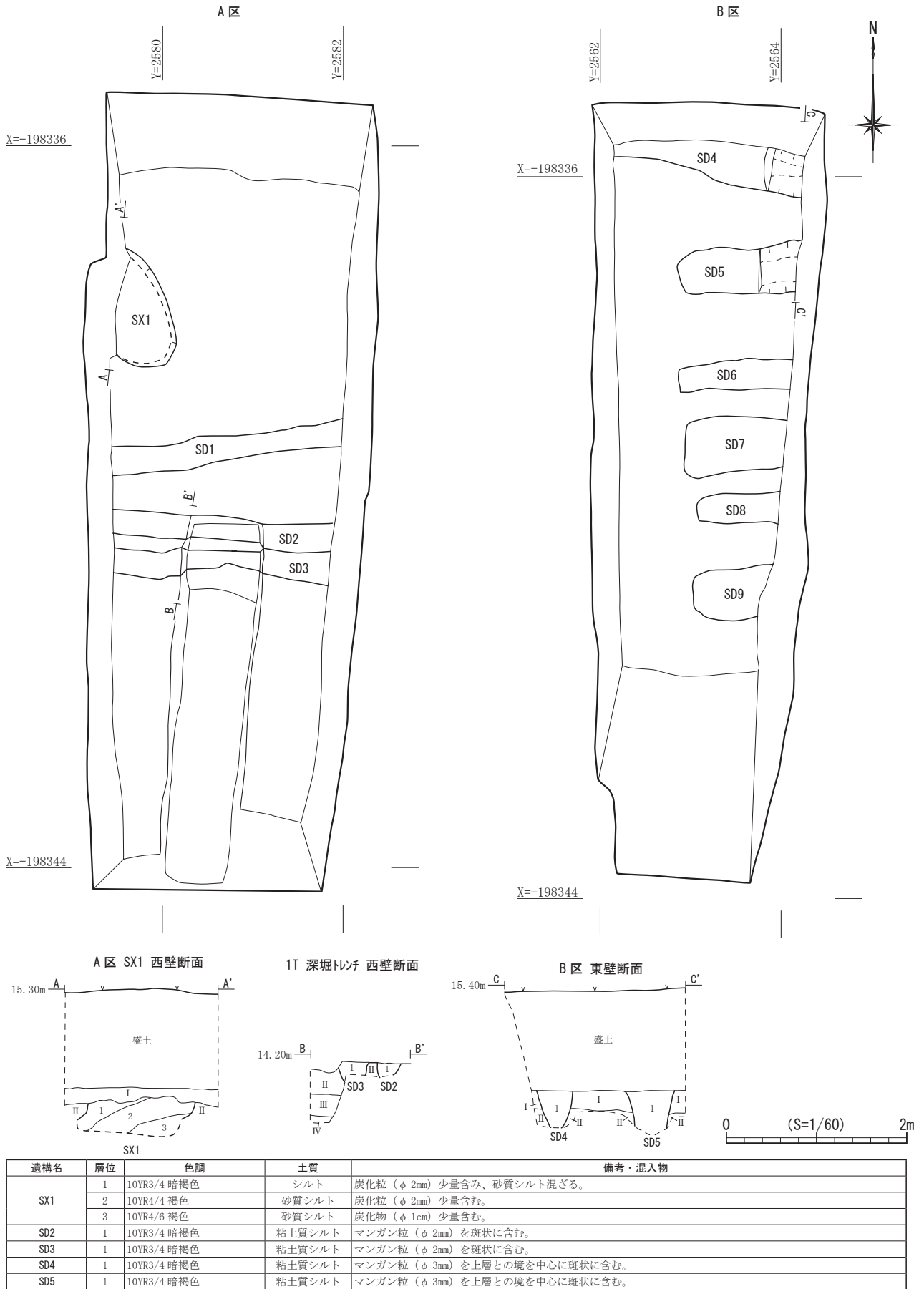
II 層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。比較的均質であるが、炭化物粒を斑状に含む。層厚は約35cm。

III 層：10YR3/4 暗褐色シルト。炭化物粒を少量含む。層厚は約20～25cm。

IV 層：7.5YR4/4 褐色砂質シルト。比較的均質である。層厚は8cm以上。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、II層上面で遺構検出作業を行い、A区からは小溝状遺構3条・性格不明遺構1基が確認された。遺物はSX1性格不明遺構と基本層中から縄文土器、凹み石等の石器が出土した。B区からは小溝状遺構6条を確認された。遺物は盛土内から土器片が1点出土した。



第56図 調査区全体図

A区

SD1～3 小溝状遺構 (第56図)

A区の中央部で検出された。方位は東西方向で調査区外に延びる。3条ともに検出長約2.5m、幅0.2～0.3mであり、SD1と2は約0.3～0.9m、SD2・3は約0.2mの間隔で並行している。堆積土はいずれも暗褐色粘土質シルトの単層である。

SD1～3小溝状遺構は後述するB区のSD4～9小溝状遺構と対応すると考えられる。なお小溝状遺構群に伴う耕作土は削平により失われていると考えられる。遺物は出土していない。

SX1 性格不明遺構 (第56図)

基本層Ⅱ層上面、調査区北西隅から西壁にかけて検出された。堆積土はシルトもしくは砂質シルトで3層確認された。平面形状は全体を検出できていないことから不明で、断面形状は安全面を考慮して完掘に至っていないことから詳細は不明であるが、西壁断面の南側掘込み部分は底面に向けてえぐれ、オーバーハングしている。

遺物は堆積層から縄文土器片が少量出土している。いずれも細片であるため詳細については不明だが、大部分は後期中葉の宝ヶ峯式期と推定される。縄文土器が出土しているものの、基本層Ⅱ層上面で検出されていることから遺構の年代は古代以降であると推定される。

B区

SD4～9 小溝状遺構 (第56図)

B区の調査区全面から検出された。方位は東西方向で調査区外に延びる。SD4は調査区の東西に延び、SD5～9は東側から調査区中央部にかけて確認された。幅はSD6・8が約0.3～0.4m、SD5・7・9が約0.5～0.6mである。小溝同士の間隔は約0.3～0.8mで、おおよそ等間隔に平行している。小溝状遺構はⅡ層上面で確認されたが、小溝状遺構に伴う耕作土は削平によって失われていると推定される。検出面からの深さは約0.3m以上である。堆積層はいずれも暗褐色の粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

出土遺物 (第57図)

A区のSX1性格不明遺構および基本層中から縄文土器が出土している。1は香炉形土器(異形土器)の胴部と考えられ、屈曲部の破片である。横位に沈線が巡りその上下に連続刺突文が施されている。5(A-3)と同一個体の可能性がある。2は深鉢の胴部の破片で、単位が短い単節の縄文が施されている。3は深鉢の胴部で、横位と斜位に沈線が巡り、沈線間に縄文が充填されていると考えられる。胎土中に骨針が混入する。4は壺の胴部と考えられ、口縁部は波状口縁を呈する可能性がある。器壁が薄く、幅1～2mmで深い刻み目が4条施され、その下部に節の細かい縄文が施文されている。胎土中に骨針が混入する。施文の特徴から晩期の可能性がある。5は香炉形土器(異形土器)の胴部と考えられ、屈曲部の破片である。連続刺突文が施された沈線帯が横位に巡る。胎土中に骨針が少量混じる。1(A-7)と同一個体の可能性がある。6は台付鉢で、底部に近い部位の破片である。横位に幅2～3mmで、浅い沈線が施され、その上に斜位に沈線が施されている。7(A-1)と同一個体の可能性が高い。7は台付鉢の底部破片である。胎土中に白色粒、黒色粒、石英粒が多量に混入する。全体的に精製土器が多く、特殊な器種の割合が高い。

5. まとめ

今回の調査地点は富沢館跡の南東部に位置し、これまでの調査結果から館跡に伴う東西方向の堀跡の存在が想定



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	A-7	-	II層	縄文土器	香炉形土器	-	-	(1.5)	横位沈線→上下に列点刺突	ナデ	胎土緻密 砂粒を含む A-3と同一個体	21-7-1
2	A-4	-	I層	縄文土器	深鉢	-	-	(3.9)	LR 縄文 (直前段多条)	ナデ→ミガキ	胎土緻密 砂粒を含む	21-7-2
3	A-5	-	I・II層	縄文土器	深鉢	-	-	(5.0)	磨消縄文 (RL 縄文)	ミガキ	胎土緻密 砂粒を含む	21-7-3
4	A-6	-	II層	縄文土器	壺	-	-	(2.6)	1 縄文 平行する弧状沈線	ミガキ	胎土緻密 砂粒を含む	21-7-4
5	A-3	SX1	-	縄文土器	香炉形土器	-	-	(2.5)	沈線 列点刺突	ナデ	胎土緻密 砂粒を含む A-7と同一個体	21-7-5
6	A-2	SX1	-	縄文土器	台付鉢	-	-	(2.4)	横位隆線 多条の山形沈線	ミガキ	胎土緻密 砂粒を多く含む A-1と同一個体の可能性あり	21-7-6
7	A-1	SX1	-	縄文土器	台付鉢	-	-	(1.3)	ミガキ	ミガキ	胎土緻密 砂粒を含む A-2と同一個体の可能性あり	21-7-7

第57図 調査区出土遺物

されたが、堀跡は検出されなかった。また基本層II層上面から性格不明遺構が検出された。下がるほど断面が広がるなど特徴的な断面形状ではあったが、遺構の性格などは不明である。SX1 性格不明遺構およびA区の基本層中から縄文土器および石器が出土した。SX1 性格不明遺構は検出された面から縄文時代よりも新しい時期の遺構と推定されるが、周辺の調査区からは縄文時代の遺構、遺物が散見されており、今回各遺構や基本層中から出土した縄文時代の遺物も下層から巻き上げられたものと推測される。異形土器と推測される器種など特殊な器形の土器が比較的多く出土しているが、この傾向は富沢館跡におけるこれまでの調査例とも類似しており、同様の傾向を示すものと推測される。近隣の大野田遺跡、王ノ壇遺跡、川前遺跡でも器種は異なるものの精製土器が比較的多く出土していることから、何らかの「まつりごと」の場であったことが予想される。

参考文献

斎藤報恩会 1991 『宝ヶ峯』

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第466集



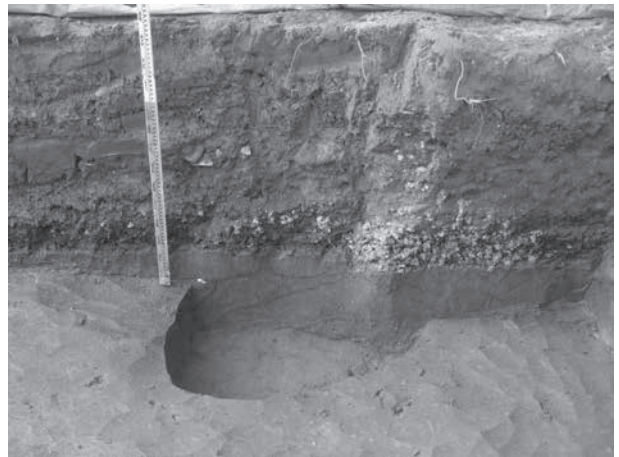
1. A区遺構完掘状況（南東から）



2. A区西壁土層断面（東から）



3. SX1 検出状況（西から）



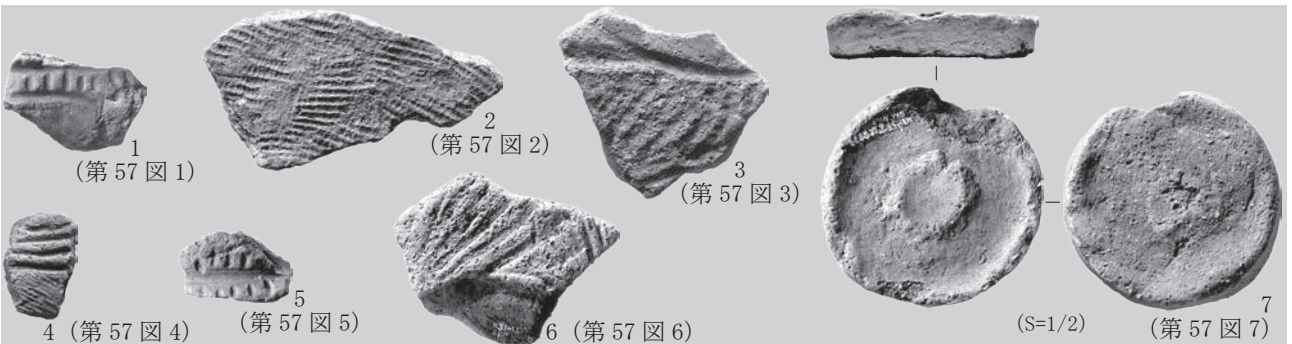
4. A区西壁土層断面（東から）



5. B区遺構検出状況（南西から）

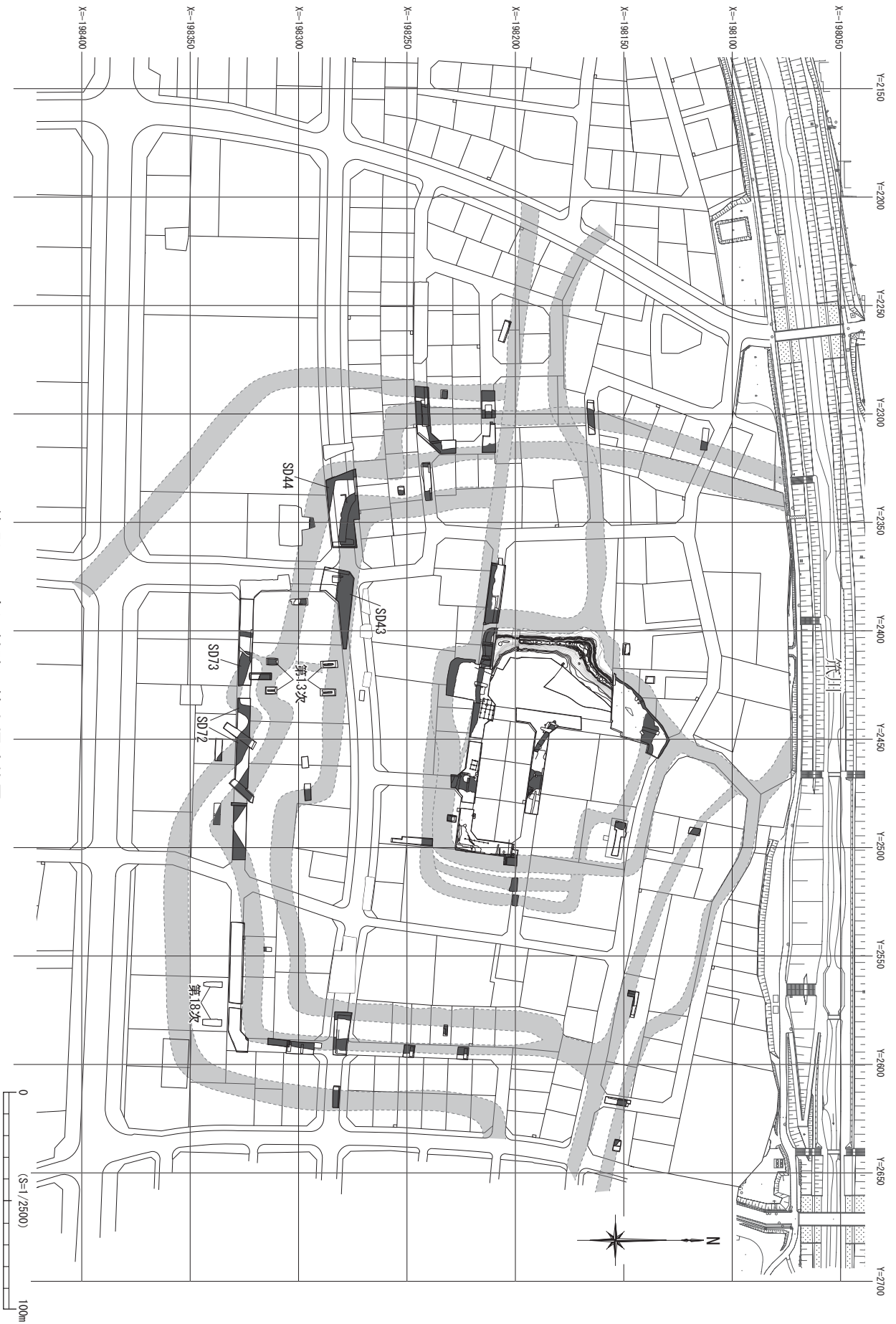


6. B区東壁土層断面（西から）



7. 第18次調査・A区出土遺物

写真図版 21 富沢館跡第18次調査・出土遺物



第58図 富沢館跡 検出掘跡位置図

第5章 安久東遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

安久東遺跡は、仙台市太白区西中田四丁目に所在する。JR 東北本線南仙台駅の西方約 100m に位置し、名取川の右岸に形成された東西方向に延びる自然堤防上の端部に立地している。遺跡の範囲は東西約 250m、南北約 190m、現況での標高は約 9.0m である。

本遺跡は、昭和 46 年（1971）に宮城県教育委員会による東北新幹線建設予定路線内の埋蔵文化財分布調査の際に初めて調査が行われており、その後民間の調査団による調査も行われている。仙台市では、土地区画整理事業や共同住宅建設に伴い、これまでに 3 次わたる調査を行っており、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。古墳時代前期の集落とみられる竪穴住居跡、その以後は墓域となり古墳の小型石室が発見されている。平安時代（9 世紀以降）には竪穴住居跡が散在しており、希薄ではあるが集落が営まれた様相が窺える。中～近世には、館が造営されており数時期の変遷が窺える区画溝跡や堀跡、掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡などが発見されている。遺物は土師器・須恵器を主体として、中・近世陶磁器、木製品、石製品、鉄製品などが見つかった。

本遺跡の周辺、名取川流域には数多くの遺跡が確認されており、名取川を挟んで北岸部では富沢遺跡や六反田遺跡など旧石器時代や縄文時代の活動の痕跡がみられるのに対し、当遺跡を含む南岸部では主に弥生時代以降になって活動が活発化している。古墳時代に入ると周辺の自然堤防上から浜堤まで集落・墓域の分布は広がる。主要な遺跡としては北岸部では古墳時代中～後期の大野田古墳群、南岸部では前期の集落や方形周溝墓が検出されている当遺跡や戸ノ内遺跡・四郎丸館跡、後期の集落である栗遺跡などがある。その後、奈良・平安時代になると安久遺跡・清水遺跡・中田南遺跡などの集落の広がりがみられ、中世以降には名取川北岸部では富沢館跡や王ノ壇遺跡など武士階級の居館が造営されるようになり、名取川南岸部でも当遺跡や前田館跡・中田南遺跡・四郎丸館跡など区画施設を伴う城館・居館が数多く造営されている。



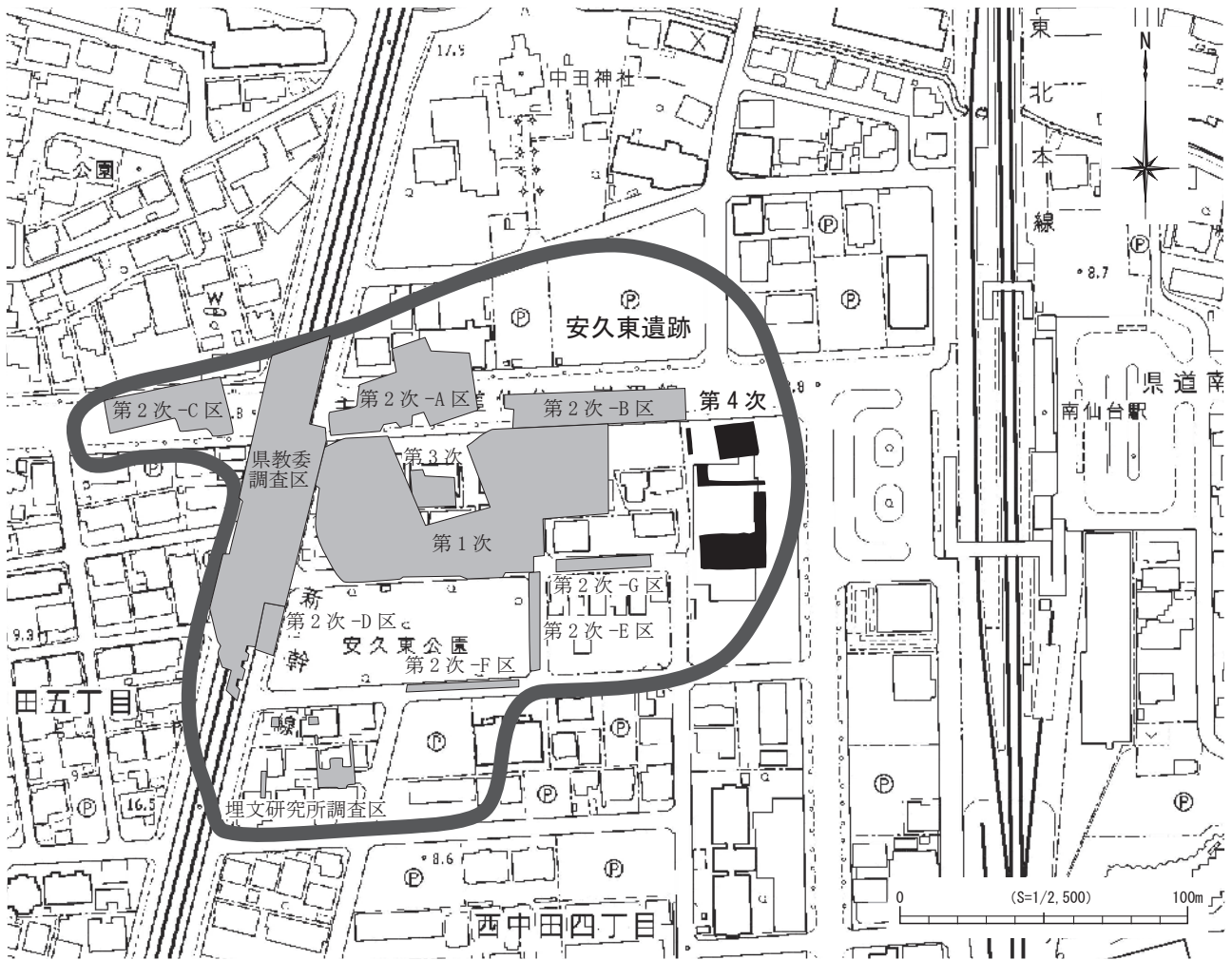
第 59 図 安久東遺跡周辺の地形（国土地理院土地条件図を基に作成）

第1節 遺跡の概要



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	26	欠ノ上I遺跡	水田跡	自然堤防	平安・中世
2	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～平安	27	欠ノ上II遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
3	鍛冶屋敷B遺跡	包含地	自然堤防 後背湿地	縄文、古代～近世	28	欠ノ上III遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
4	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安	29	高畑遺跡	包含地	沖積地	弥生～平安
5	富沢館跡	城館跡	自然堤防 後背湿地	中世	30	乗馬遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
6	富沢遺跡	水田跡他	後背湿地	旧石器～近世	31	松木遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
7	山口遺跡	集落跡	自然堤防 後背湿地	縄文、弥生、古墳、平安	32	雷遺跡	散布地	自然堤防	古代
8	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良、平安	33	開場遺跡	包含地	自然堤防	古墳、奈良、平安
9	袋東遺跡	包含地	自然堤防	古墳、平安	34	柳生台畑遺跡	包含地	自然堤防	古墳、古代
10	下ノ内浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文、弥生、奈良、平安	35	雷東遺跡	散布地	自然堤防	古代
11	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生～平安	36	谷地田遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
12	伊古田遺跡	包含地	自然堤防	縄文、古墳、奈良、平安	37	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
13	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳	38	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
14	大野田古墳群	古墳群他	自然堤防	古墳～平安	39	安久遺跡	集落跡	自然堤防 後背湿地	奈良～平安
15	元袋遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安	40	中田神社裏遺跡	包含地	自然堤防	古墳、平安
16	袋前遺跡	集落跡、官衙	自然堤防	縄文～平安	41	安久東遺跡	集落跡、館跡	自然堤防	弥生～近世
17	大野田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文(後期)、弥生	42	前田遺跡	館跡	自然堤防	中世
18	王ノ壇遺跡	古墳、集落跡他	自然堤防	古墳～中世	43	壇腰遺跡	包含地	自然堤防	奈良～平安
19	血屋敷遺跡	包含地他	自然堤防	奈良～中世	44	中田北遺跡	包含地	自然堤防	奈良～平安
20	長町駅東遺跡	包含地	自然堤防	弥生、古墳、古代	45	中田南遺跡	集落跡、館跡	自然堤防	奈良～平安
21	郡山遺跡	官衙跡、水田跡他	自然堤防 後背湿地	弥生～奈良	46	上余田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
22	北目遺跡	城館跡	自然堤防	室町、奈良	47	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	奈良～平安
23	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代	48	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
24	的場遺跡	集落跡	自然堤防	奈良、平安	49	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
25	籠ノ瀬遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	50	内手遺跡	散布地	自然堤防	古代

第60図 安久東遺跡と周辺の遺跡

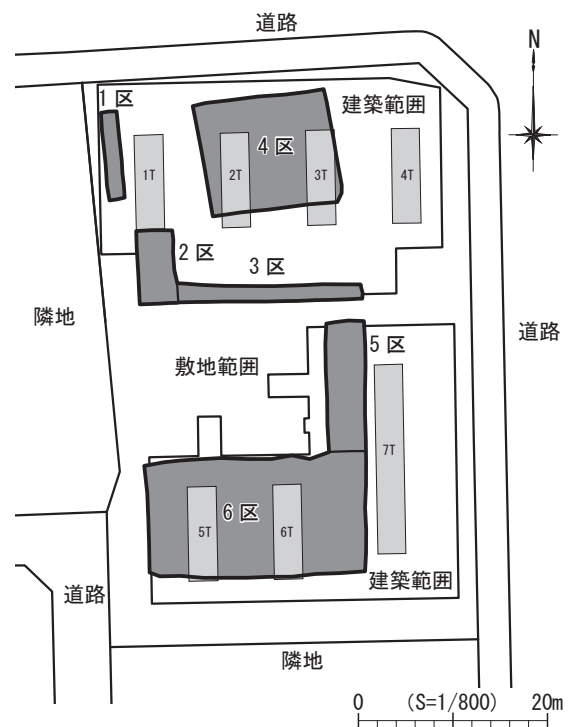


第61図 第4次調査区位置図

第2節 第4次調査

1. 調査要項

遺跡名	安久東遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01037)
調査地点	仙台市太白区西中田四丁目2番13号
調査期間	令和元年10月28日～令和2年2月21日
調査対象面積	1465.56㎡
調査面積	約590㎡
調査原因	共同住宅及び自走式駐車場の建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主事 澤目雄大 文化財教諭 元山祐一



第62図 第4次調査区配置図

第2節 第4次調査

2. 調査に至る経過と調査方法

令和元年8月5日付で事業者より「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」が提出され、令和元年8月7日付（H31 教生文第102-47号）で回答している。令和元年9月2日～6日に確認調査を実施（H31 教生文第1532号）し、その結果、GLより約2.0m掘り下げた場所から溝跡のほか約30cmの河原石の集石が発見された。昭和50年度に行われた安久東遺跡第1次発掘調査で確認されている小型石室と同様のものと推定される集石や、溝跡が確認されたことから本発掘調査を実施することとなった。

今回の本発掘調査では、調査区を6区に分けており、各規模は1.5m×9.0mの1区、3.5m×7.5mの2区、20.5m×2.0mの3区、14.0m×11.0mの4区、5.0m×15.0mの5区、23.0m×13.0mの6区である。掘削排土は場内仮置きとしたため、調査は事業地内で南北に分けて反転調査を行っており、前半は北側駐車場建設予定範囲に設けた1～4区を調査し、後半は南側マンション建設予定範囲に設けた5・6区の調査を行った。

調査は、令和元年10月28日より実施した。掘削は重機と人力を併用し、重機掘削の後、遺構確認及び遺構精査は人力で行った。出土遺物は層位ごと、検出した遺構ごとに取り上げた。掘削土は調査区の脇に仮置きし、調査区ごとに調査終了後埋め戻しを行った。令和2年2月21日に野外調査を終了した。記録図面については、平面図はトータルステーションを用いた電子平板システムによる機械実測を使用とし、断面図はS=1/20で手実測により作製した。写真記録はデジタルカメラにより撮影した。

3. 基本層序

今回の調査では、層厚が最大で約2.0mの盛土の下に、基本層が大別8層、細別で11層確認された。全体にわたって水の影響によりグライ化しているが、基本的な層序は調査区によって大差はない。遺構の検出面は、調査区1～3区ではV層上面、4～6区ではⅢ層上面である。

- I a 層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。炭化物粒・植物遺体を微量に含む。盛土以前の水田耕作土層と考えられる。層厚は16～18cm。
- I b 層：2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト。酸化鉄を層状に含む。盛土以前の水田耕作土層と考えられる。層厚は5～12cm。
- I c 層：5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト。オリーブ黒色（5Y3/2）粘土ブロック（φ3～5mm）を少量含む。層厚は約35cm。
- II a 層：5Y4/2 灰オリーブ色粘土質シルト。炭化物粒を多量に含む。水田ないし畑地耕作土層。層厚は約21cm。
- II b 層：5Y4/2 灰オリーブ色粘土質シルト。II a 層より全体的に酸化が強く赤味がかっている。水田ないし畑地耕作土層。層厚は6～8cm。
- Ⅲ 層：2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト。酸化鉄を斑状で多量に含む。層厚は21～30cm。
- Ⅳ 層：5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト。酸化鉄を斑状で多量に含む。18～35cm。
- V 層：7.5Y4/1 灰色粘土質シルト。酸化鉄を斑状で多量に含む。オリーブ黒色（5Y3/1）粘土ブロック（φ1～3mm）を少量含む。層厚は9～18cm。
- VI 層：5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト。層厚は8～28cm。
- VII 層：7.5Y4/1 灰色粘土質シルト。層厚は8～19cm。
- VIII 層：5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト。層厚は20cm以上あるものと推測される。

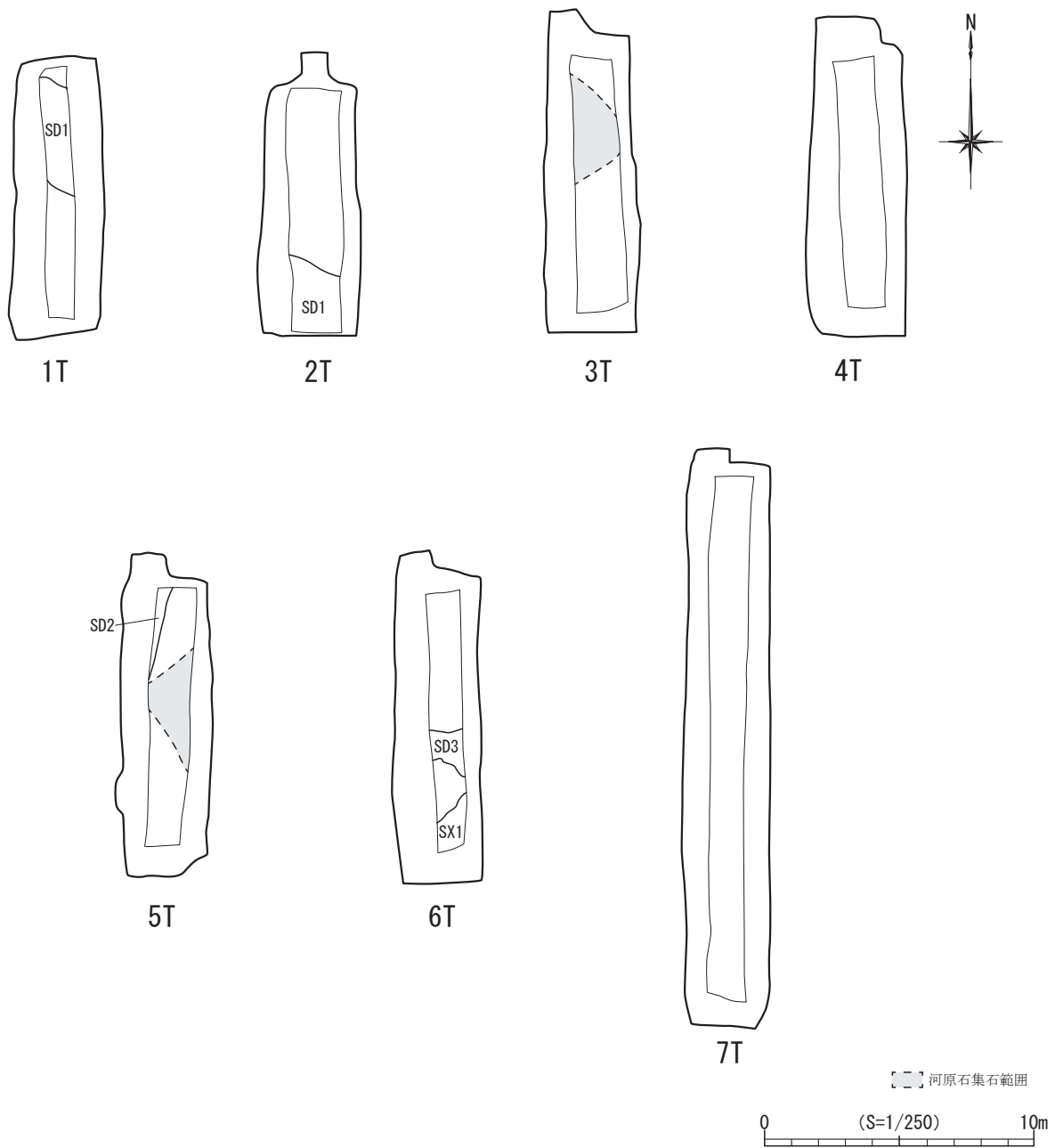
4. 確認調査による発見遺構と出土遺物

確認調査では、7か所のトレンチを設定し、溝跡3条、古墳石室の可能性が推定される集石2ヶ所、性格不明遺構1基が検出された。遺構の規模等は、確認にのみとどめたため掘削を行っておらず詳細は不明である。遺物は出土していない。各遺構に関しては、本発掘調査の際に別遺構名・番号に振り替えている。

5. 本発掘調査による発見遺構と出土遺物

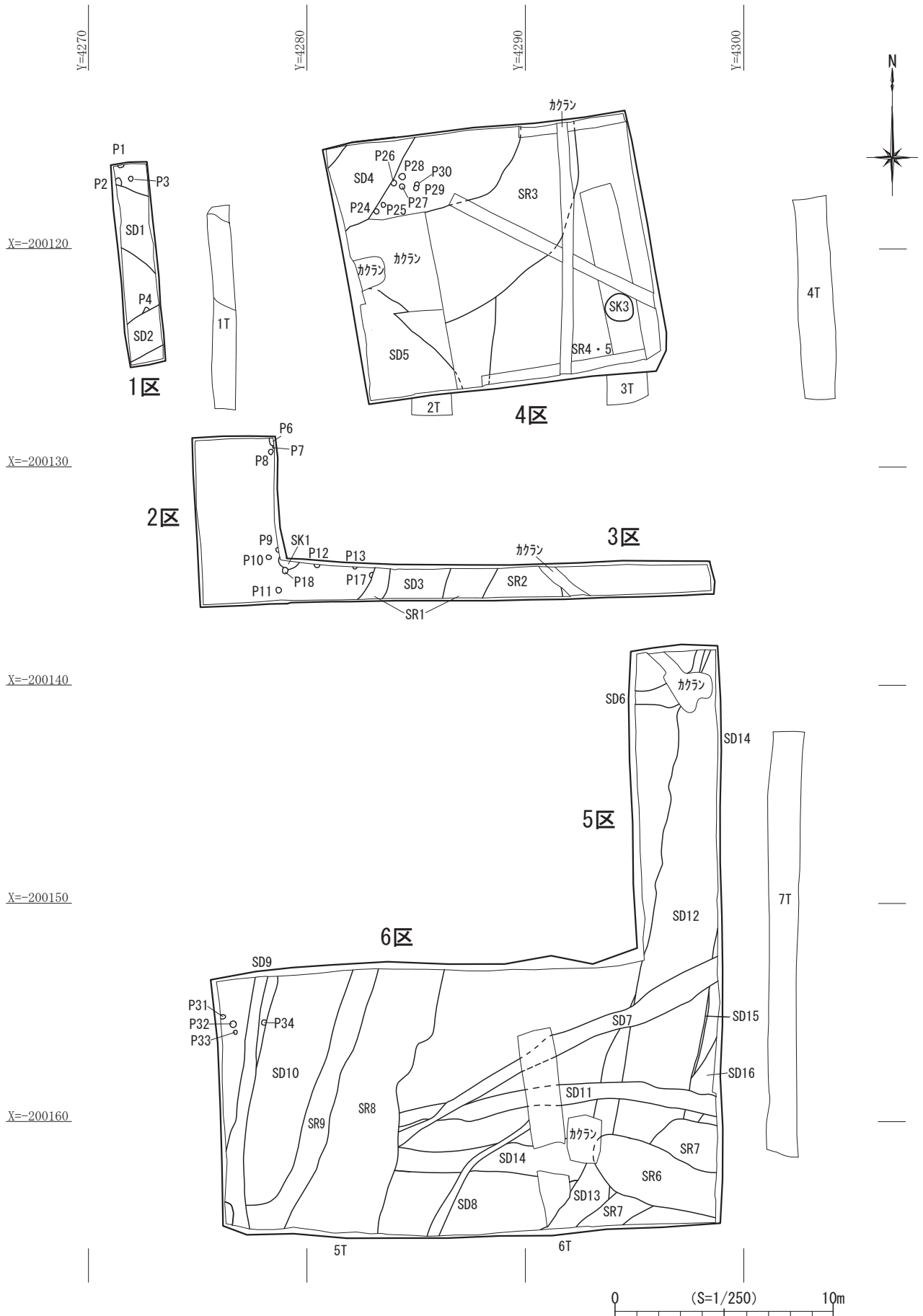
【1区】

1区で検出された遺構は、溝跡2条、ピット5基（うちP5は調査区北壁で断面のみ）である。遺構内外ともに、遺物は出土していない。

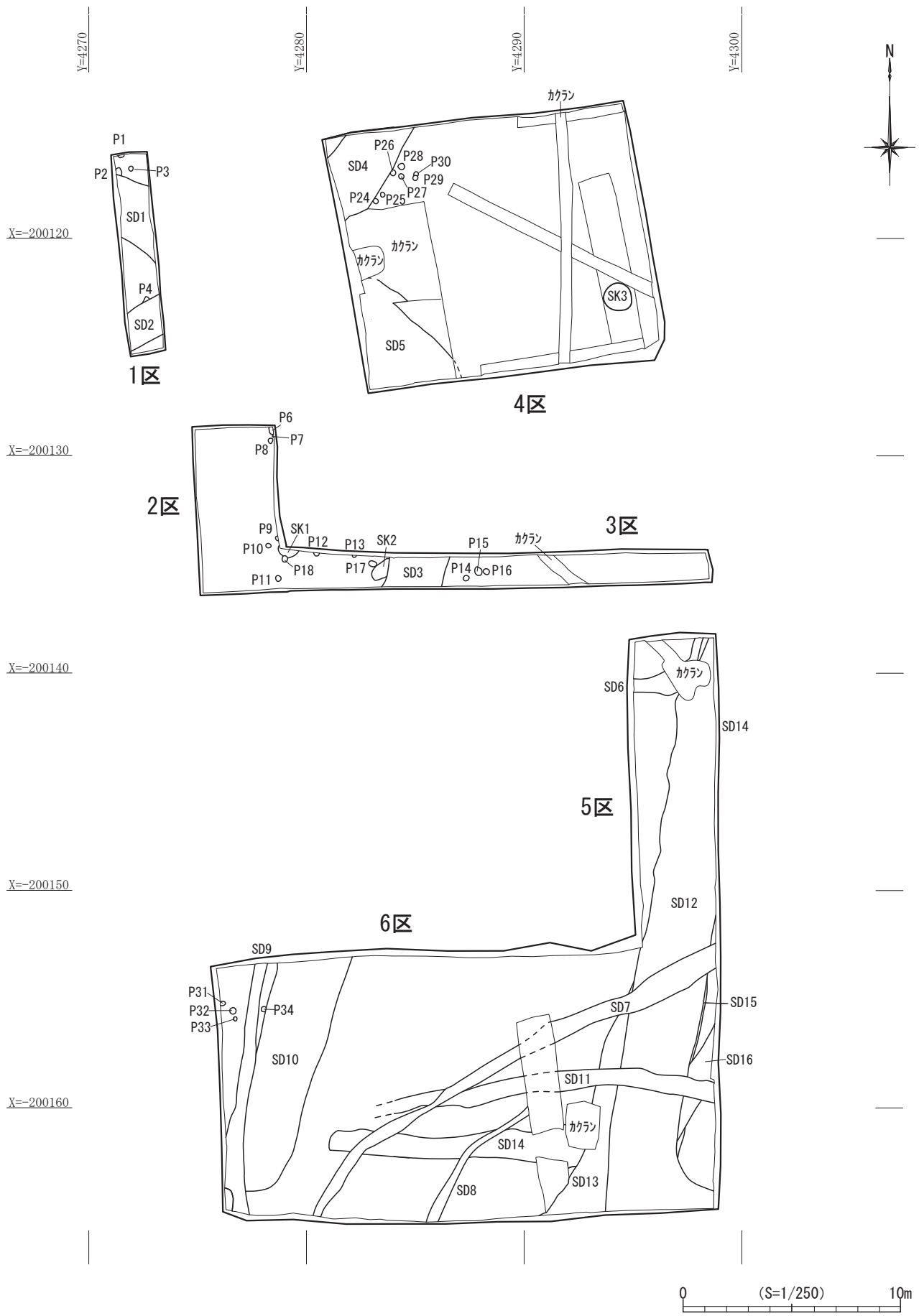


第 63 図 確認調査トレンチ平面図

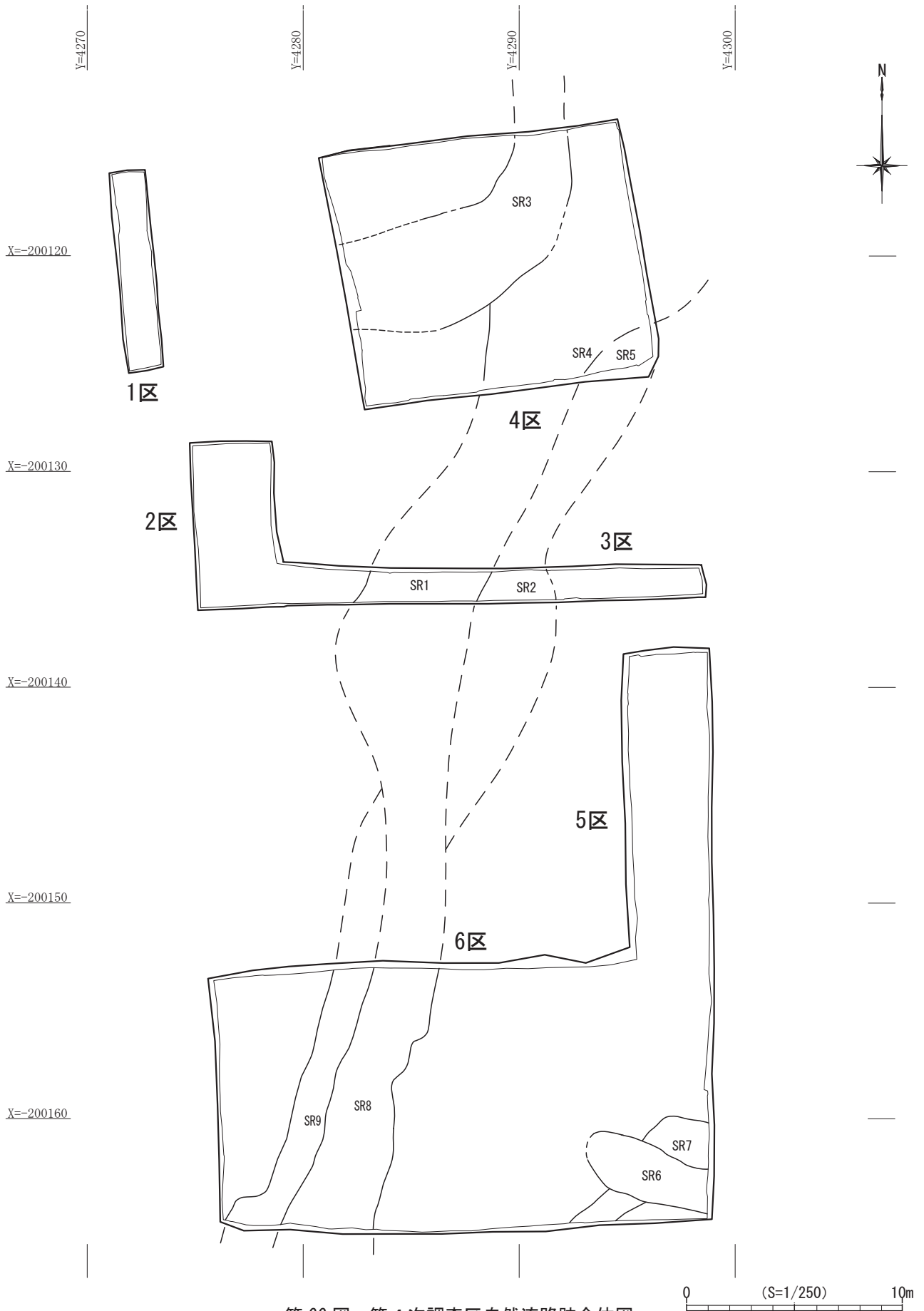
第2節 第4次調査



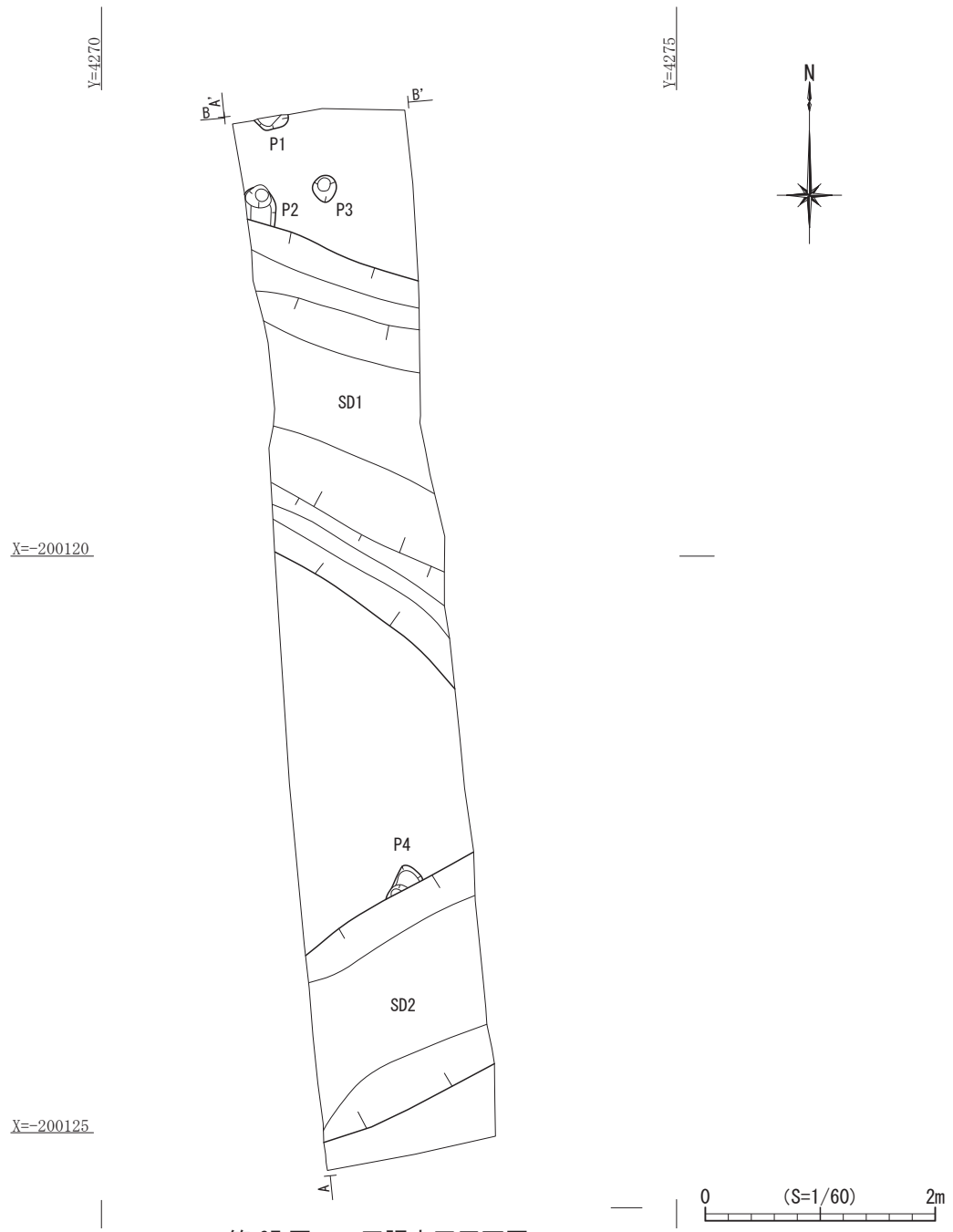
第64図 第4次調査区全体図



第 65 図 第 4 次調査区溝跡・土坑・ピット全体図



第 66 図 第 4 次調査区自然流路跡全体図

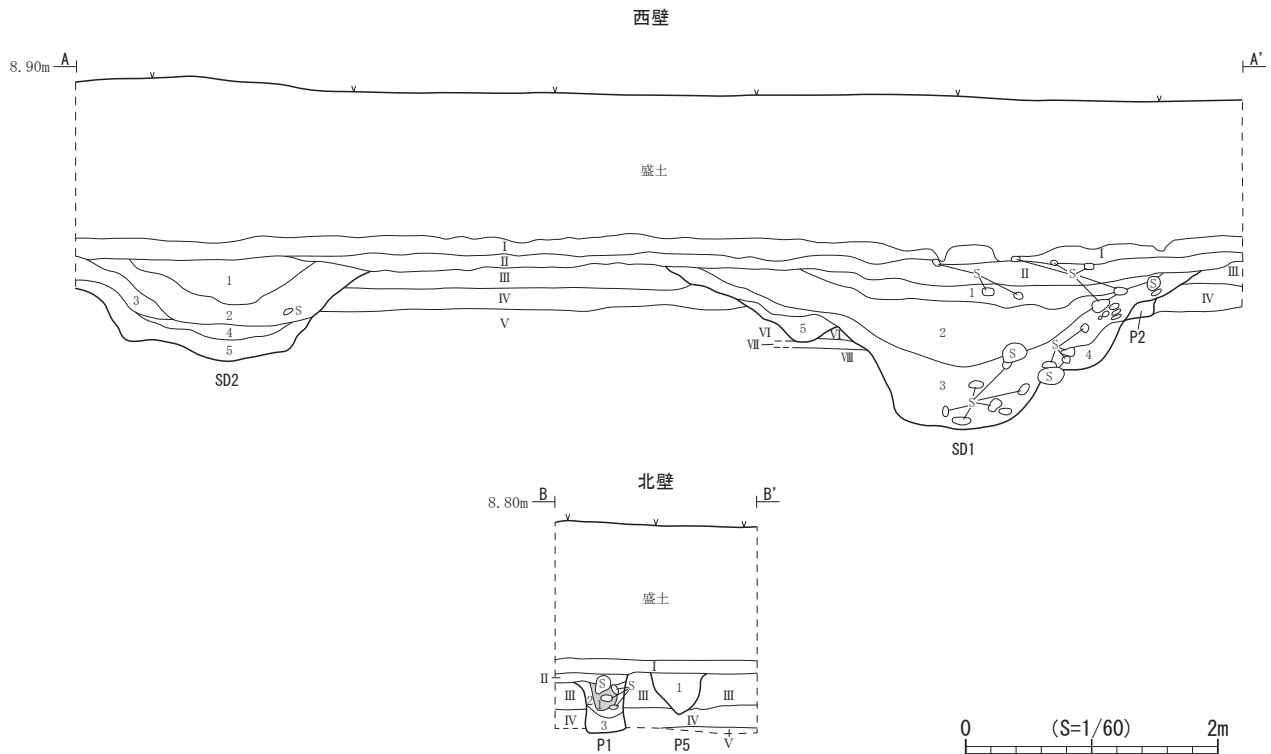


第 67 図 1 区調査区平面図

(1) 溝跡

SD1 溝跡 (第 64・65・67・68 図、写真図版 24)

北側で確認された北西～南東方向の溝跡で、検出長は約 1.4m である。溝跡の両端は調査区外へ延び、東側は今回の調査区内において、4 区 SD5 溝跡、3 区 SD3 溝跡、6 区 SD10 溝跡と同一の遺構と考えられる。推定される検出総延長は東西約 17.8m、南北約 38.4m となり、屈曲して「く」の字形を呈すると推定される。また西側の第 1 次調査時で確認されている館の堀跡か区画溝跡と一連の遺構の可能性がある (第 85 図)。P2 より新しい。検出面での規模は上端幅 260cm、下端幅 80cm、深さは 90cm である。断面形は逆台形を基調とし、北側の立ち上がりには段が付く。堆積土は 5 層に分層でき、堆積状況から二時期の変遷が考えられる。新时期は 1～4 層で黑色粘土を主体とし、古期は 5 層の黑色粘土質シルトを主体としたいずれも自然堆積層である。堆積土中には、φ 10～30cm の河原石と植物遺体 (クルミ・枝) や動物遺体 (昆虫甲殻) が多量に混入する。遺物は出土していない。



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SD1	1	2.5Y2/1 黒色	粘土質シルト	植物遺体を多量に含む。炭化物粒を微量含む。下位にオリブ灰色細砂を層状に含む。
	2	7.5Y2/1 黒色	粘土	植物遺体を多量、動物遺体を少量、下位にオリブ灰色細砂をラミナ状に含む。
	3	7.5Y3/1 オリブ黒色	粘土	下位にオリブ灰色細砂をラミナ状に含む。北側に円礫(φ10~30cm)を多量に含む。
	4	7.5Y2/1 黒色	粘土	オリブ灰色粘土質シルトを少量含む。
	5	5Y2/1 黒色	粘土質シルト	植物遺体を少量、酸化鉄粒を微量に含む。
SD2	1	5Y3/1 オリブ黒色	粘土質シルト	灰オリブ色粘土質シルトをブロック状(φ1~3mm)で多量に含む。酸化鉄粒を斑状で多量に含む。
	2	7.5Y3/1 オリブ黒色	粘土質シルト	灰色砂質シルトを少量含む。酸化鉄粒を斑状で多量に含む。
	3	5Y2/1 黒色	粘土質シルト	灰色粘土を少量含む。酸化鉄粒を斑状で多量に含む。
	4	5Y3/1 オリブ黒色	粘土質シルト	灰色粘土を多量に含む。酸化鉄粒を斑状で多量に含む。
	5	5Y3/1 オリブ黒色	粘土質シルト	黒色粘土と灰色砂質シルトをラミナ状に含む。
P1	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	円礫(φ10~15cm)を多量に含む。柱痕跡
	2	5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック(φ1~3mm)を多量に含む。掘方埋土
	3	7.5Y3/1 オリブ黒色	粘土質シルト	灰オリブ色粘土ブロック(φ1~3mm)を多量に含む。酸化鉄粒を少量含む。
P2	1	2.5Y2/1 黒色	粘土質シルト	
P5	1	2.5Y2/1 黒色	粘土質シルト	層下位に基本層III層ブロックを少量含む。

第68図 1区調査区断面図

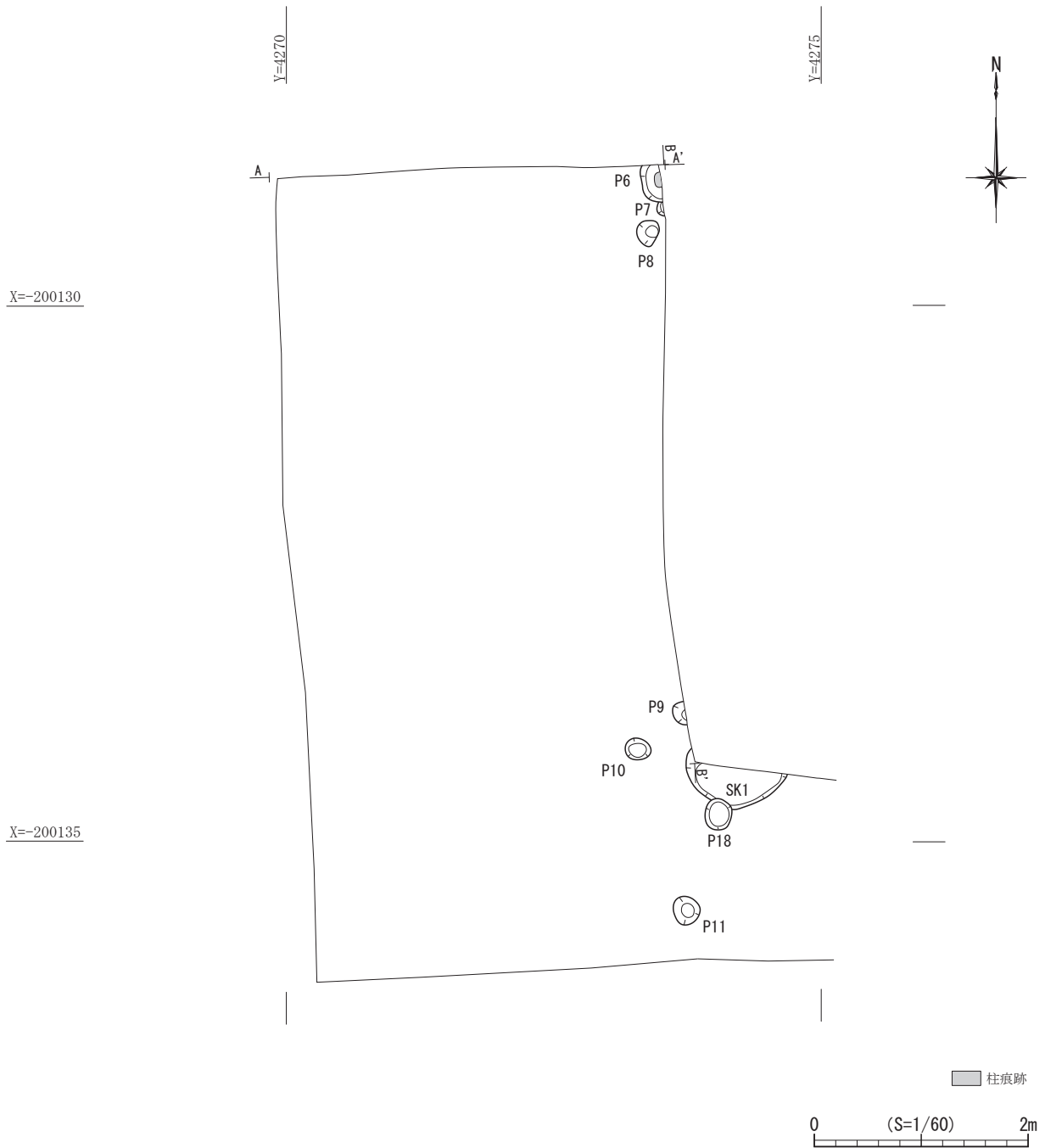
SD2 溝跡 (第64・65・67・68図、写真図版24)

南側で確認された北東～南西方向の溝跡で、検出長は約1.7mである。溝跡の両端は調査区外へ延び、東側は今回の調査区内において4区SD4溝跡と同一の遺構と考えられ、推定される検出総延長は約16.7mとなる。また、西側は第1次調査時に確認されている館の堀跡か区画溝跡と一連の遺構の可能性がある(第85図)。P4より新しい。検出面での規模は上端幅170cm、下端幅105cm、深さは80cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は5層に分層でき、オリブ黒色粘土質シルトを主体としたいずれも自然堆積層である。下層では砂質シルトが互層を成して堆積する。遺物は出土していない。

(2) ピット

P1～5 (第64・65・67・68図)

5基検出され、その内P5は調査区北壁の断面でのみ確認しており、掘り込み面は基本層III層上面である。遺構との重複関係は、SD1・2溝跡より古い。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は径約25～40cm、深さ約15～40cmで、P1には径約20cmの柱痕跡が伴う。配列や建物を構成するかは不明である。遺物は出土していない。



第 69 図 2 区調査区平面図

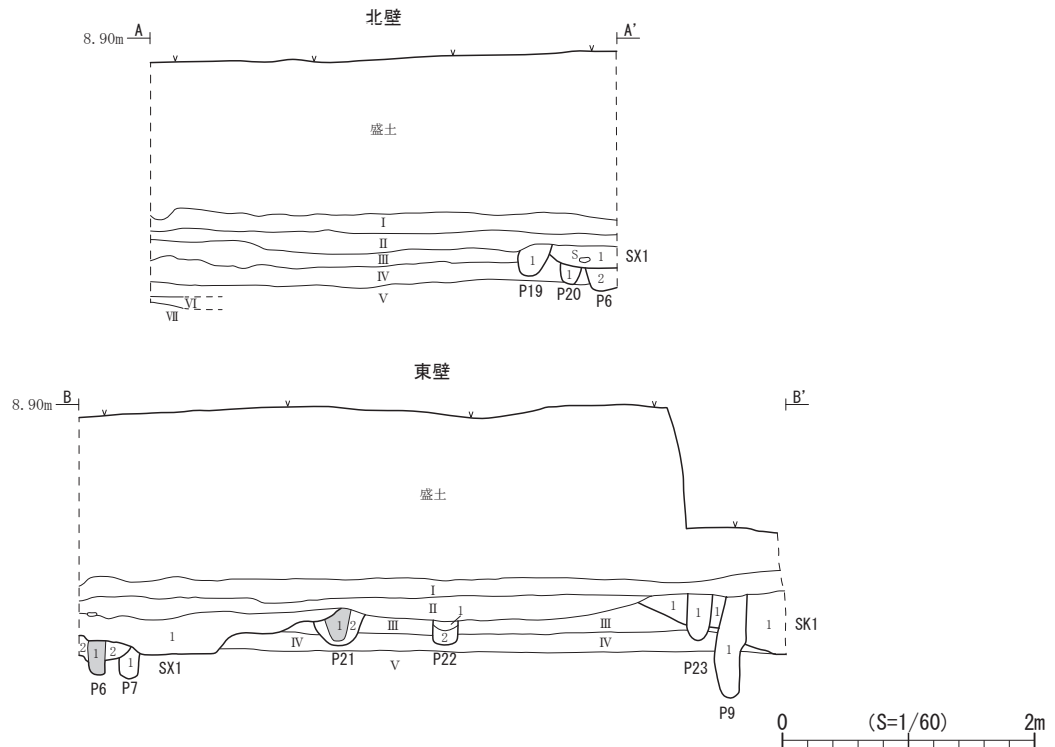
【2区】

2区で検出された遺構は、土坑1基、ピット12基（うちP19・20・21・22・23は調査区北・東壁の断面でのみ）、調査区北東隅の壁断面で性格不明遺構1基が確認されている。遺構内外ともに、遺物は出土していない。

(1) 土坑

SK1 土坑（第 64・65・69・70・72 図）

2区東壁際から3区北壁際で確認された。P9・12・23より古い。調査区壁断面による規模は、約3.1m、深さ50cmであり、平面形は楕円形を呈すると推定され、検出規模は0.9×0.4m以上、深さは約5cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とした単層である。遺物は出土していない。



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SK1	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量、灰色粘土を微量含む。
SX1	1	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	下位に灰色粘土を少量、酸化鉄粒を少量含む。
P6	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰色粘土ブロックを少量含む。柱痕跡。
	2	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	灰色粘土ブロック (φ 1～5mm) を多量に含む。酸化鉄粒を少量含む。掘方埋土。
P7	1	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	灰色粘土ブロック (φ 1～10mm) を多量、酸化鉄粒を少量含む。
P9	1	2.5Y2/1 黒色	粘土質シルト	酸化鉄粒と灰色粘土ブロック (φ 1～3mm) を少量含む。
P19	1	5Y2/1 黒色	粘土質シルト	オリーブ黒色粘土ブロックを少量含む。
P20	1	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
	2	5Y2/1 黒色	粘土質シルト	酸化鉄粒を微量に含む。柱痕跡。
P21	1	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを少量含む。掘方埋土。
	2	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロックを少量含む。掘方埋土。
P22	1	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	酸化鉄粒を微量に含む。
	2	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	酸化鉄粒を微量に含む。
P23	1	2.5Y2/1 黒色	シルト	下位にオリーブ黒色粘土ブロックを少量含む。

第70図 2区調査区東壁・北壁断面図

(2) ピット

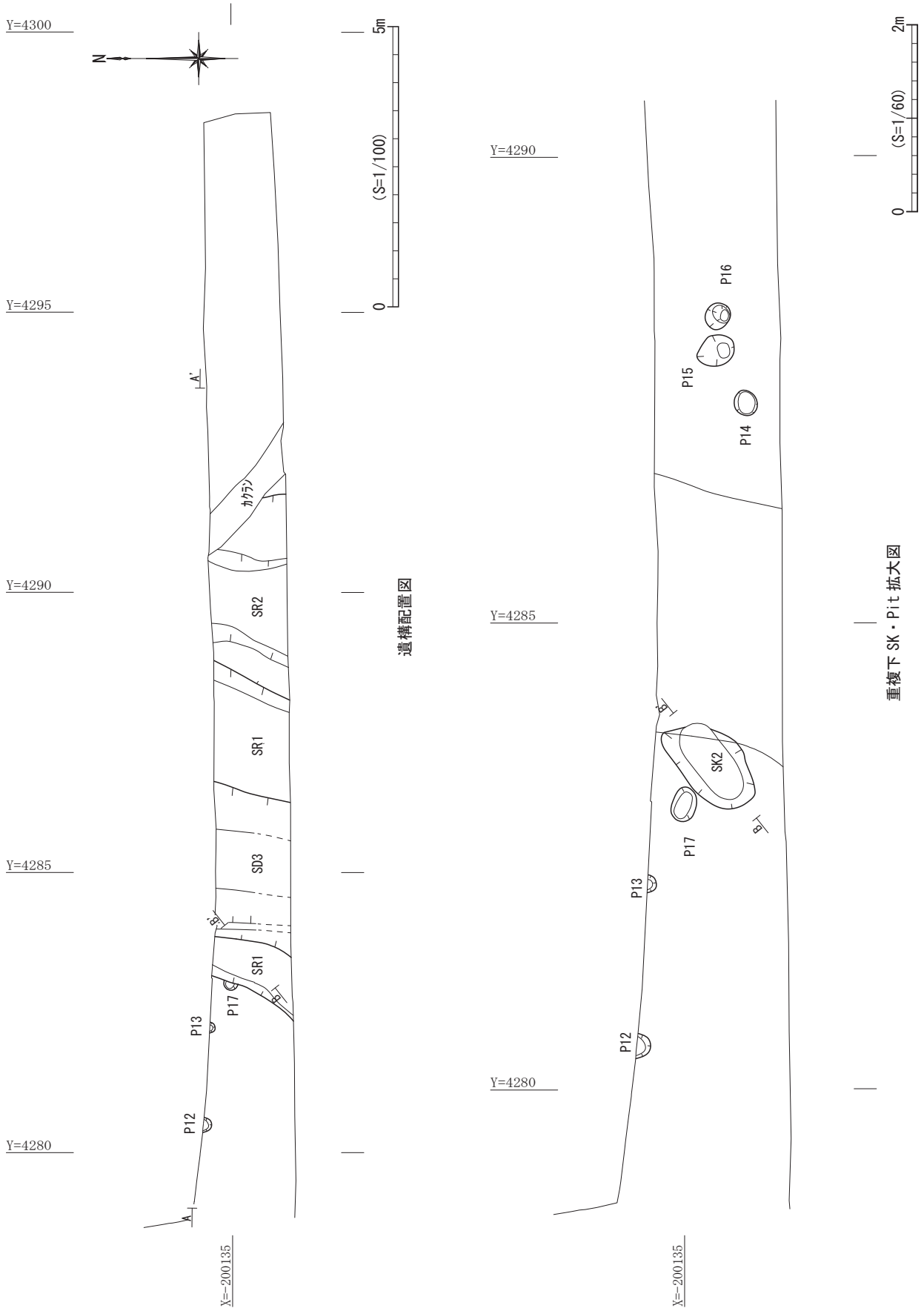
P6～11、18～23 (第64・65・69・70図)

12基が検出された。その内P19・20・21・22・23は調査区北・東壁の断面でのみ確認している。掘り込み面は基本層Ⅱ層上面 (P9・23) ないしⅢ層上面 (P19・21・22) である。P9・12・23はSK1土坑より新しく、またP6・7・20・21はSX1性格不明遺構より古く、P19はSX1性格不明遺構より新しい。平面形は円形を呈し、規模は径15～40cm程である。深さは15～35cm程で、P9のみ調査区壁断面による掘り込み面からの深さは80cmになる (第70図)。P6・21には柱痕跡を伴い、直径が約15～20cmである。全体的に散在しており、配列や建物を構成するかは不明である。遺物は出土していない。

(3) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構 (第70図)

調査区北東隅の壁断面にて確認した。P6・7・20・21より新しく、P19より古い。壁断面での規模は上端幅200cm以上、下端幅60cm、深さ34cmである。断面形は逆台形である。堆積土は、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした単層である。遺物は出土していない。周辺の検出状況から自然流路跡の可能性が考えられるが、断面のみの確認のため詳細は不明である。

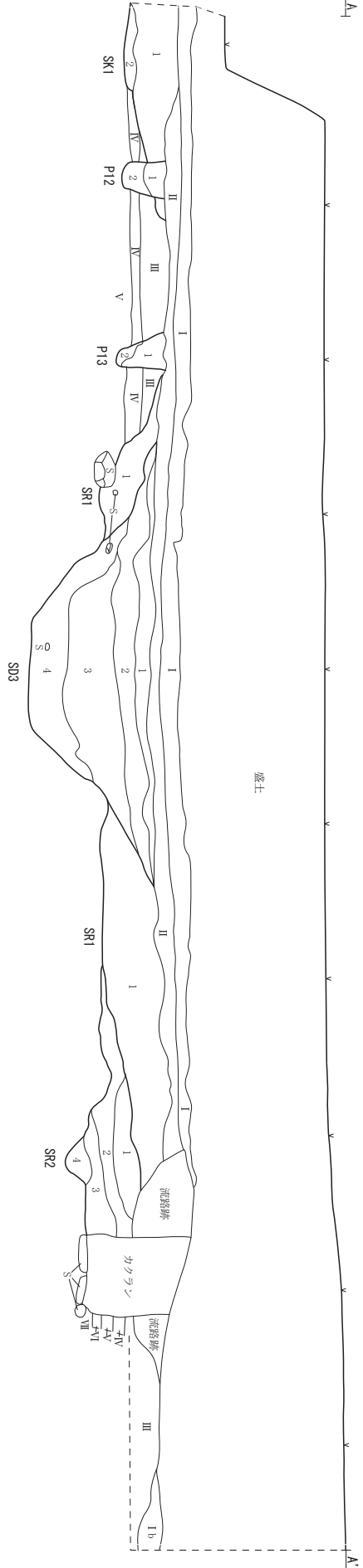


重複下SK・Pit拡大図
第71図 3区調査区平面図

8.90m-A1

北壁

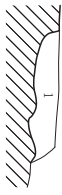
盛土



7.20m-B1

SK2

B1



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SD3	1	2.5Y4/2暗灰黄色	シルト	植物遺体・オリーブ褐色細砂・灰化物粒を少量含む。
	2	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	植物遺体と灰色砂質シルトを少量含む。
	3	5Y3/1オリーブ黒色	粘土	植物遺体を多量に含む。
SK2	4	5Y3/1オリーブ黒色	粘土	植物遺体を多量に含む。灰色細砂をラミナ状に含む。
	1	5Y3/1オリーブ黒色	粘土質シルト	灰色粘土フロック (φ 5 ~ 10mm) を多量に含む。
	2	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を斑状で多量に含む。
	2	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含む。
P12	1	5Y2/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量、オリーブ黒色粘土フロックを少量含む。
	2	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。
P13	1	5Y3/2オリーブ黒色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量、オリーブ黒色粘土フロックを少量含む。
	2	5Y2/1黒色	粘土質シルト	灰色砂質シルト・灰オリーブ黒色粘土フロックをラミナ状に含む。
SR1	1	5Y3/1オリーブ黒色	粘土質シルト	灰色砂質シルトフロックを多量に含む。灰色細砂を少量含む。
	2	7.5Y4/1オリーブ黒色	粘土質シルト	オリーブ黒色粘土フロック (φ 2 ~ 5, 10 ~ 20mm) を多量、灰色細砂を少量含む。
	3	7.5Y4/1灰色	粗砂	オリーブ黒色粘土フロック (φ 5 ~ 15mm)、暗オリーブ色粗砂をラミナ状に含む。
	4	5Y2/1黒色	粘土質シルト	オリーブ黒色粘土フロック (φ 5 ~ 10mm)、灰色粗砂を多量に含む。
SR2	1	5Y2/1黒色	粘土質シルト	植物遺体・オリーブ褐色細砂・灰化物粒を少量含む。
	2	2.5Y3/1黒褐色	粘土質シルト	植物遺体と灰色砂質シルトを少量含む。
	3	5Y3/1オリーブ黒色	粘土	植物遺体を多量に含む。
	4	5Y3/1オリーブ黒色	粘土	植物遺体を多量に含む。灰色細砂をラミナ状に含む。

第72図 3区調査区・SK2土坑断面図

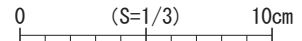
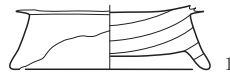
【3区】

3区で検出された遺構は、溝跡1条、土坑2基、ピット6基、自然流路跡2条である。遺物は、溝跡から木製品1点が出土している。

(1) 溝跡

SD3 溝跡 (第64・65・71・72図、写真図版23・28)

中央西寄りで検出された南北方向の溝跡で、検出長は約1.3mである。溝跡の両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において北側は1区SD1溝跡、4区SD5溝跡、南側は6区SD10溝跡と同一の遺構と考えられる。SK2土坑・SR1自然流路跡より新しい。検出面での規模は上端幅約280cm、下端幅約100cm、深さ約85cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層され、オリーブ黒色粘土を主体としたいずれも自然堆積層である。堆積土中には、植物遺体(クルミ・枝)や動物遺体(昆虫甲殻)が多量に混入する。遺物は堆積土上層から木製品の漆器椀が1点出土している(第73図1、写真図版28-1)。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						口径	底径	器高		
1	L-1	SD3	堆積土	木製品	椀	-	(7.7)	-	内外面黒漆 木取り：半割材、横木取り	29-1

第73図 3区SD3溝跡出土遺物

(2) 土坑

SK2 土坑 (第64・65・71・72図)

西側で検出されており、SD3溝跡、SR1自然流路跡より古い。平面形は1.2×0.7m以上の楕円形で、深さは21cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした単層である。遺物は出土していない。

(3) ピット

P12～17 (第64・65・71・72図)

6基が検出されており、掘り込み面は基本層Ⅲ層上面とみられる。SR1・2自然流路跡より古い。平面形は円形もしくは楕円形を呈し、規模は径約30～40cm、深さ約10～45cmである。全体的に散在しており、配列や建物を構成するかは不明である。遺物は出土していない。

(4) 自然流路跡

SR1 自然流路跡 (第64・66・71・72図)

中央で確認した南北方向の自然流路跡で、検出長は約1.5mである。その両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において北側は4区SR4自然流路跡、南側は6区SR8自然流路跡と同一の流路跡と考えられ、推定される検出総長は約52.5mとなる(第66図)。SK2土坑、SR2自然流路跡、P14・15・16・17より新しく、SD3溝跡より古い。検出面での規模は上端幅約510cm、下端幅約470cm、深さ約15cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は、黒色粘土質シルトを主体とした単層で、部分的に灰色砂質シルトを互層状に含む。遺物は出土していない。

SR2 自然流路跡 (第64・66・71・72図)

中央で確認した南北方向の自然流路跡で、検出長は約1.4mである。両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において北側は4区SR5自然流路跡、南側は6区SR9自然流路跡と同一の流路跡と考えられ、推定される検出総延長は約53.5mとなる(第66図)。P15・16より新しく、SR1自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約255cm以上、下端幅約120cm以上、深さ約40cmである。断面形は皿形状を呈する。堆積土は4層に分層され、オリーブ黒色粘土質シルトを主体としたいずれも自然堆積層である。部分的に灰色粗砂を互層状に含み、オリーブ黒色粘土ブロックが多量に含まれる。遺物は出土していない。

【4区】

4区で検出された遺構は、溝跡2条、土坑1基、ピット7基、自然流路跡3条である。遺物は遺構内から土師器20点、須恵器5点、陶器4点、磁器1点、金属製品1点、獣骨1点のほか、遺構外から土師器7点、須恵器4点、陶器15点、磁器8点、瓦質土器1点、瓦5点、鉄製品2点、土製品1点、剥片石器1点など計82点が出土している。

(1) 溝跡

SD4 溝跡 (第64・65・74・75図、写真図版24)

北西側で確認した北東～南西方向の溝跡で、検出長は約5.4mである。溝跡の両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において、南西側は1区SD2溝跡と一連する遺構と考えられる。P24・26より新しい。検出面での規模は上端幅約270cm、下端幅約165cm、深さ約65～75cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は5層に分層され、堆積状況から二時期の変遷が考えられる。新期は1～3層の黒色ないしオリーブ黒色粘土を主体とし、古期は4～5層の黒色ないし灰色粘土質シルトを主体としたいずれも自然堆積層であり、古期はラミナ状の堆積が顕著である。また新期堆積土中には、φ10～25cm程の河原石が多量に混入する。遺物は、非ロクロ土師器が7点出土しているが、いずれも小破片のため図示していない。

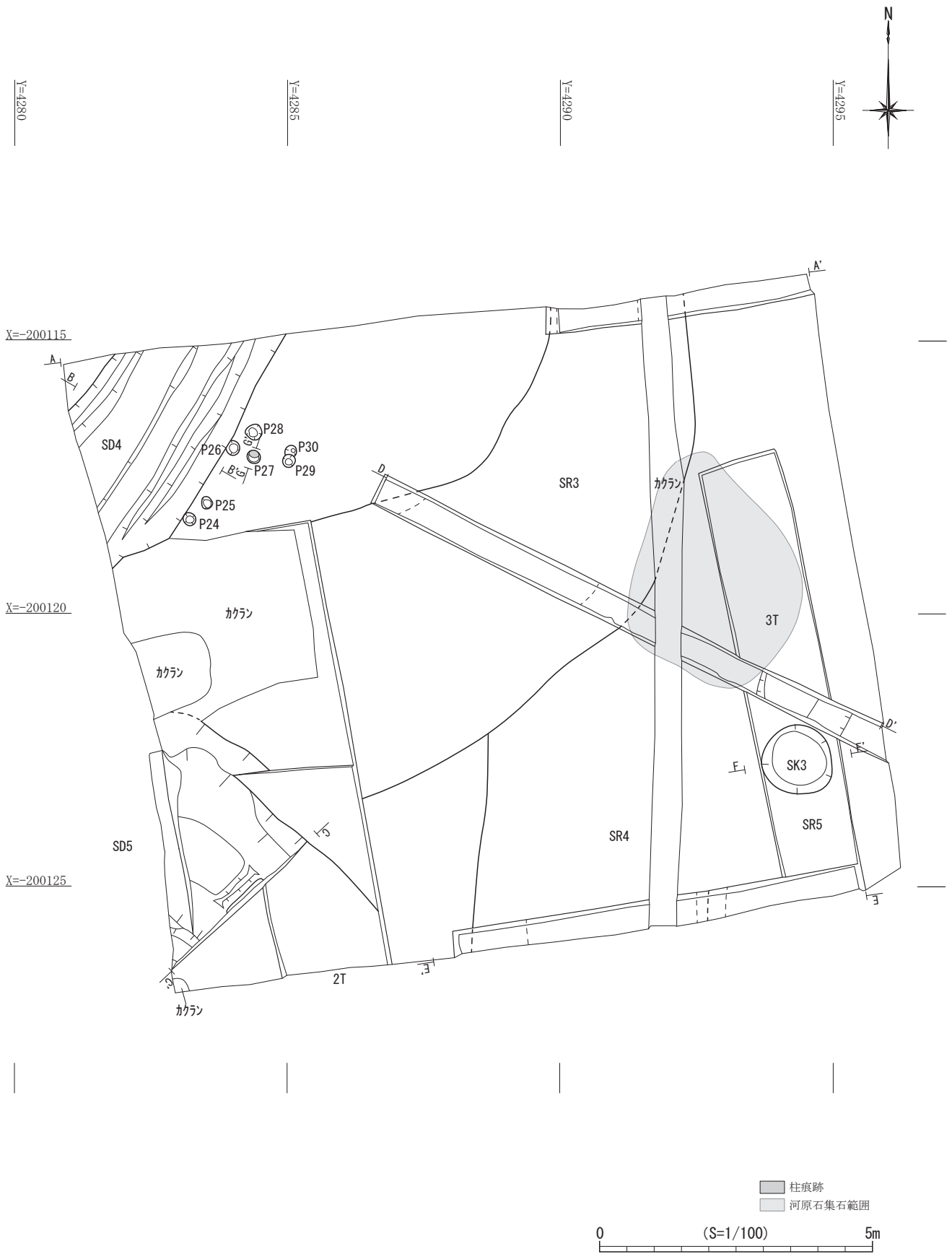
SD5 溝跡 (第64・65・74・75・77図、写真図版24・28)

南西側で確認した北西～南東方向の溝跡で、検出長は約4.9mである。溝跡の両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において、北側は1区SD1溝跡、南側は4区SD3溝跡、6区SD10溝跡と一連する遺構と考えられる。他の遺構との重複関係はない。検出面での規模は上端幅約340cm、下端幅約90cm、深さ約115cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は6層に分層され、堆積状況から二時期の変遷が考えられる。新期は1～5層のオリーブ黒色粘土を主体とし、古期は6層のオリーブ黒色粘土質シルトを主体としたいずれも自然堆積層である。堆積土中には、植物遺体(クルミ・枝)や動物遺体(昆虫甲殻)が多量に混入する。遺物は堆積土上層からロクロ土師器2点、金属製品1点が出土しており、その中から銅製品のキセル吸口を図示している(第77図1、写真図版28-2)。

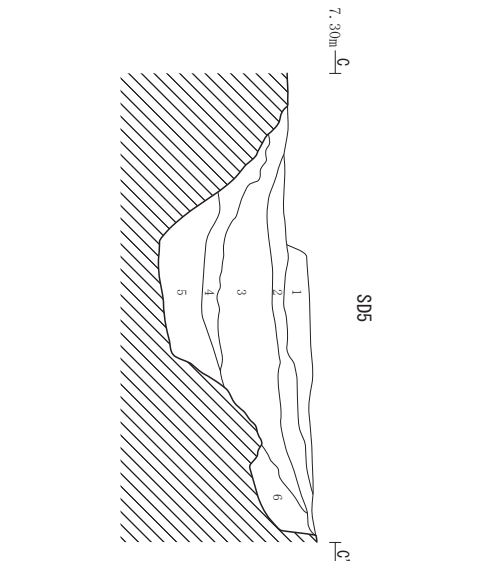
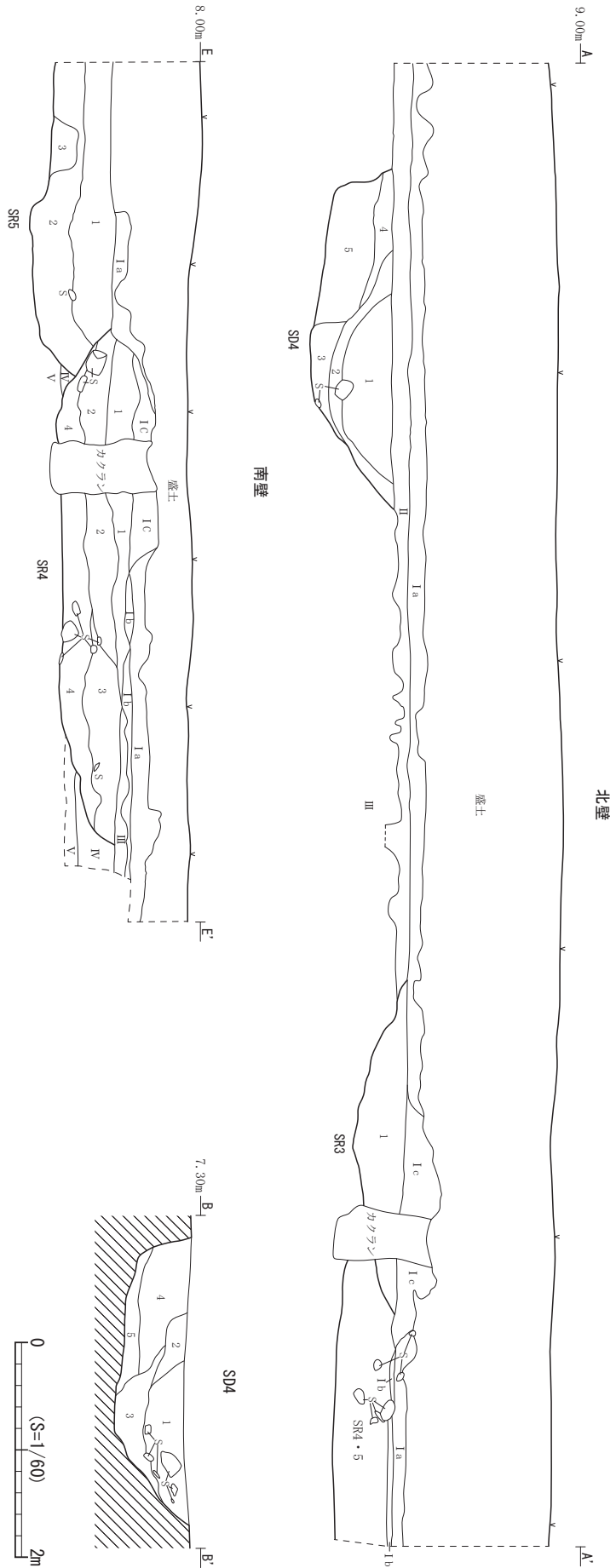
(2) 土坑

SK3 土坑 (第64・65・74・76・77図、写真図版28)

南東側で検出した。SR5自然流路跡より新しい。平面形は約1.3×1.3mの円形で、深さは約30cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は、オリーブ黒色シルトを主体とした単層である。遺物は堆積土から中世陶器の甕の破片3点と、陶器片1点が出土している。その中から、大堀相馬産の碗1点を図示している(第77図2、写真図版28-3)。

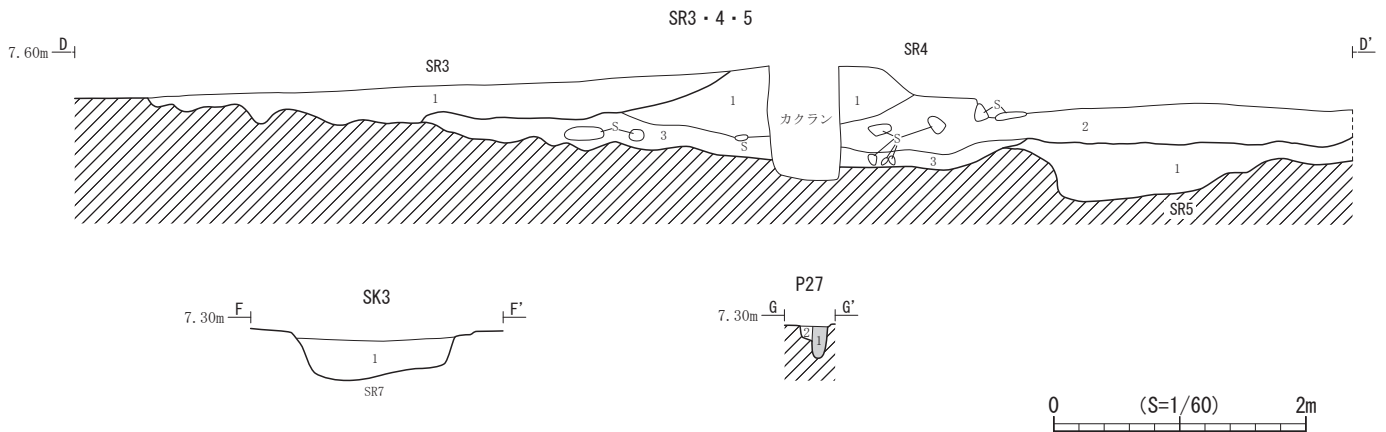


第74図 4区調査区平面図



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SD4	1	2.5Y2/1 黒色	粘土	オリーブ黒色粘土・フロック (φ 1 ~ 5mm) を多量に含む。堆積土内東側に河原石 (φ 10 ~ 30cm) を多量に含む。
	2	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	オリーブ黒色粘土・フロック (φ 1 ~ 5mm) を少量含む。灰化物を少量含む。
	3	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	暗オリーブ灰色・オリーブ黒色・灰色細砂を多量に含む。
	4	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	灰オリーブ灰色粘土・フロック・灰色砂質シルト・黒褐色粘土をラミナ状に含む。
	5	5Y2/1 黒色	粘土質シルト	下位に暗オリーブ灰色粘土・フロックを多量に含む。
SD5	1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	植物遺体を少量含む。灰色粘土・フロック (φ 10 ~ 15mm) を少量含む。
	2	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	植物遺体を少量含む。
	3	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	植物遺体を多量に含む。層下位にオリーブ黒色粘土を少量含む。
	4	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	植物遺体を少量含む。オリーブ黒色粘土をラミナ状・フロック状に含む。
	5	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	植物遺体を少量含む。暗オリーブ灰色粘土・フロック (φ 1 ~ 5mm) を層下位に少量含む。
	6	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	灰オリーブ灰色粘土をラミナ状に含む。
SR3	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	下位に灰オリーブ灰色細砂・粗砂、オリーブ黒色粘土をラミナ状に含む。
	2	7.5Y4/1 灰色	砂質シルト	灰オリーブ灰色細砂を少量含む。
SR4	1	10Y4/1 灰色	砂質シルト	灰オリーブ灰色細砂をラミナ状に含む。Dセクション1層対応。
	2	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	下位に灰色細砂をラミナ状に含む。灰化物を少量含む。円礫 (φ 3 ~ 8cm) を微量に含む。Dセクション2層対応。
	3	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	植物遺体を少量含む。オリーブ黒色粘土・フロックを多量に含む。円礫 (φ 10 ~ 20cm) を少量含む。灰色細砂をラミナ状に含む。Dセクション3層対応。
SR5	1	5Y4/1 灰色	粘土質シルト	灰色砂質シルト・フロック (φ 3 ~ 5mm)・灰化物を少量含む。
	2	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	灰色粗砂、オリーブ黒色粘土をラミナ状に含む。Dセクション1層対応。
	3	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	灰色粘土・フロック (φ 5 ~ 8mm) を多量に含む。

第75図 4区調査区断面図(1)



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SK3	1	5Y3/1 オリーブ黒色	シルト	黒褐色粘土質シルトブロック (φ 5～20mm)・暗灰黄色細砂を少量含む。
	2	7.5Y4/1 灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒を斑状に少量含む。掘方埋土。
P27	1	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土質シルト	灰オリーブ色粘土質シルト粒を少量含む。酸化鉄粒を斑状に多量含む。柱痕跡。
	2	7.5Y4/1 灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒を斑状に少量含む。掘方埋土。

第76図 4区調査区断面図(2)

(3) ピット

P24～30 (第64・65・74・76図)

7基が検出された。SD4溝跡より古い。平面形は円形を呈し、規模は直径約20～30cm、深さは約10～45cmであり、その内P27には径約10cmの柱痕跡が伴う。これらのピットが建物を構成するかどうかは不明である。遺物は出土していない。

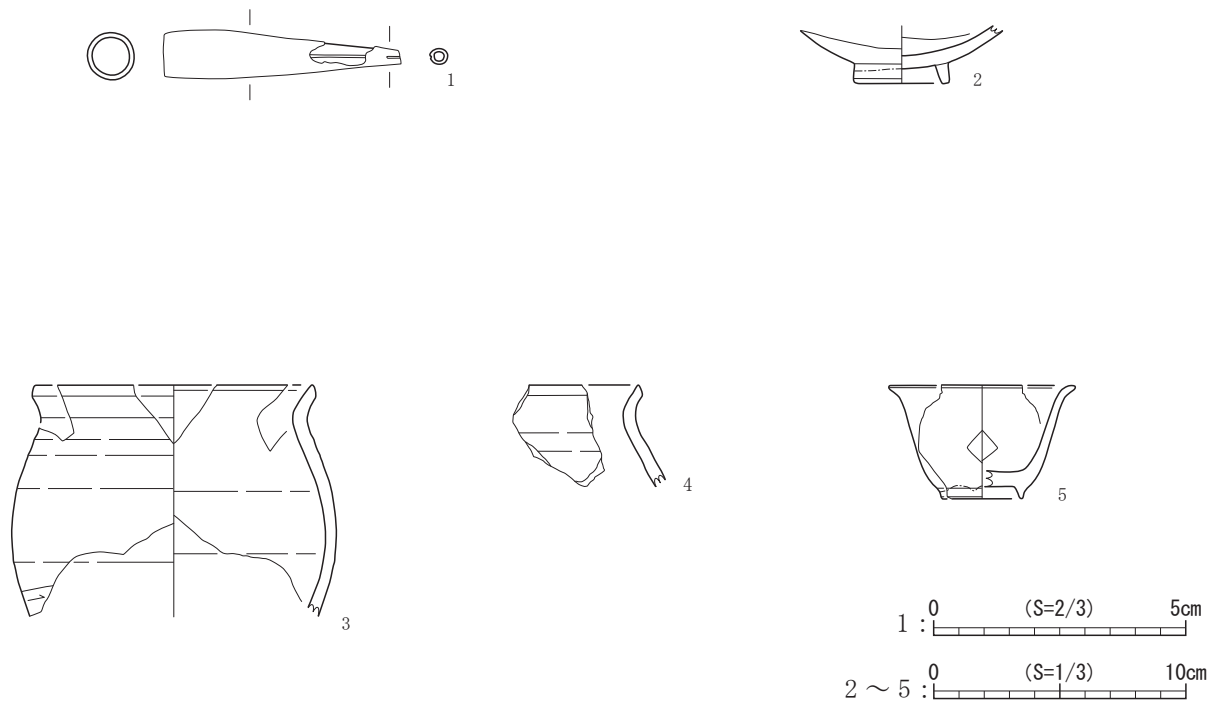
(4) 自然流路跡

SR3 自然流路跡 (第64・66・74・76図)

北～西側にかけて検出された自然流路跡で、検出長は約9.2mである。その両端は調査区外へ延びると推測されるが、西側は攪乱によって削平されており詳細は不明である。重複関係はSR4・5自然流路跡より新しい。検出面での規模は上端幅約240～515cm、下端幅約150cm、深さは最深部で約70cmである。断面形は皿形を呈する。堆積土は煩雑となるため単層としたが、黒褐色粘土質シルトを主体として、部分的に灰オリーブ色細砂・粗砂をラミナ状に含む。遺物は出土していない。

SR4 自然流路跡 (第64・66・74・76図、写真図版25)

中央付近で検出された南北方向の自然流路跡で、検出長は約12.5mである。その両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において南側は3区SR1自然流路跡、6区SR8自然流路跡と同一の流路跡と考えられ、推定される検出総延長は約52.5mとなる(第66図)。SR5自然流路跡より新しく、SK3土坑、SR3自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約480～730cm以上、下端幅約310～670cm、深さは約70cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層され、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした自然堆積層で、灰オリーブ色ないし灰色細砂をラミナ状に含む。河原石の集石は本流路跡の堆積土内で確認されている(写真図版25)。確認調査時点では、第1次調査等で検出された河原石積みによる古墳の小型石室である可能性を想定したが、精査の結果、石室を形成する痕跡は確認できなかった。遺物は堆積土上層から非ロクロ土師器1点、ロクロ土師器2点、須恵器3点、獣骨1点が出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	N-1	SD5	上層	銅製品	キセル(吸口)	4.7	1.0	-		28-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
2	Ic-1	SK3	堆積土	陶器	碗	-	3.8	(2.1)	鉄軸	鉄軸	胎土緻密 産地：相馬	28-3
3	D-1	SR5	下層	土師器	甕	(11.0)	-	9.2	口～体上半：ロクロナデ 体下半：ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒を含む	28-4
4	D-2	SR5	下層	土師器	甕	-	-	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒多量含む	28-5
5	J-1	SR5	検出面	磁器	碗	(7.4)	(3.2)	4.5			産地：肥前	28-6

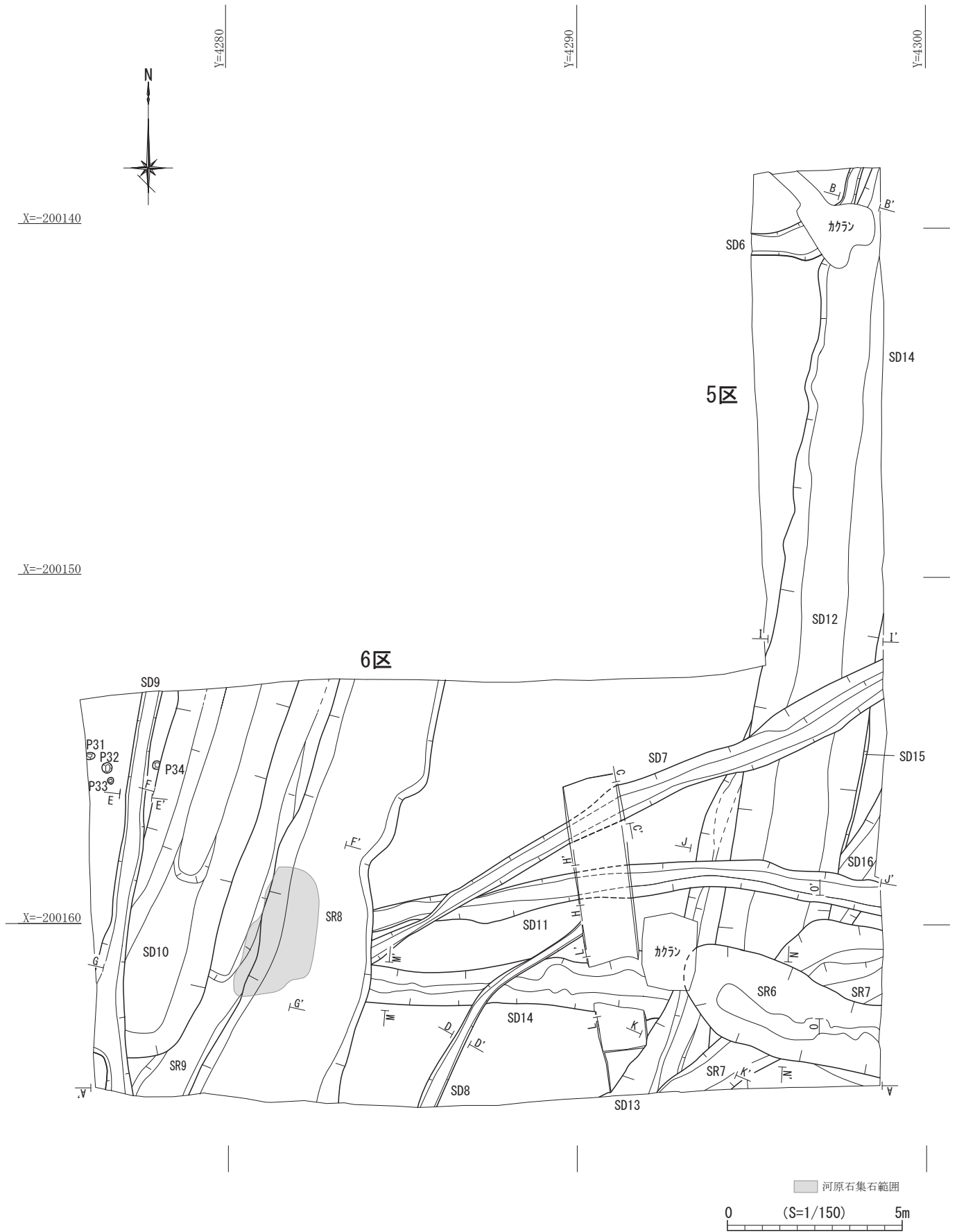
第77図 4区SD5溝跡・SK3土坑出土遺物

SR5 自然流路跡 (第64・66・74・76・77図、写真図版28)

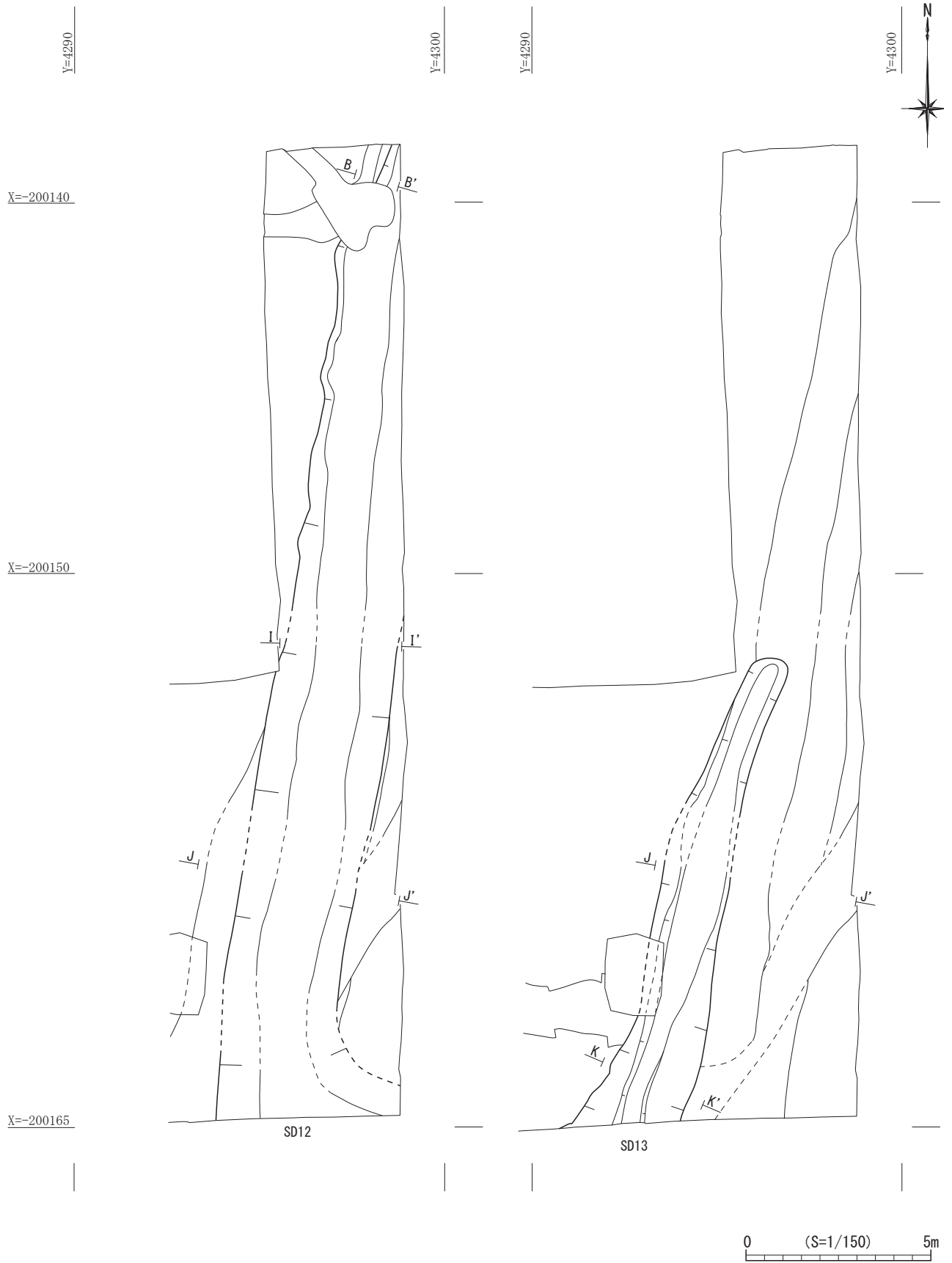
東側で確認した南北方向の自然流路跡で、検出長は約11.4mである。その両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において南側は3区SR2自然流路跡・6区SR9自然流路跡と同一の流路跡と考えられ、推定される検出総延長は約53.5mとなる(第66図)。重複関係はSR3・4自然流路跡より古い。規模は上端幅295cm以上、下端幅130cm以上、深さ約75cmである。断面形は逆台形を呈し、底面の一部は溝状に落ち込んで深くっており段が付く。堆積土は3層に分層され、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした自然堆積層で、下層では灰色粗砂をラミナ状に含む。遺物は検出面から磁器1点、珪化木1点、下層からロクロ土師器8点、核果類の種子1点、底面から須恵器2点が出土している。その中から、肥前産磁器碗1点、ロクロ成形の土師器甕2点を図化した(第77図3～5、写真図版28-4～6)。

【5・6区】

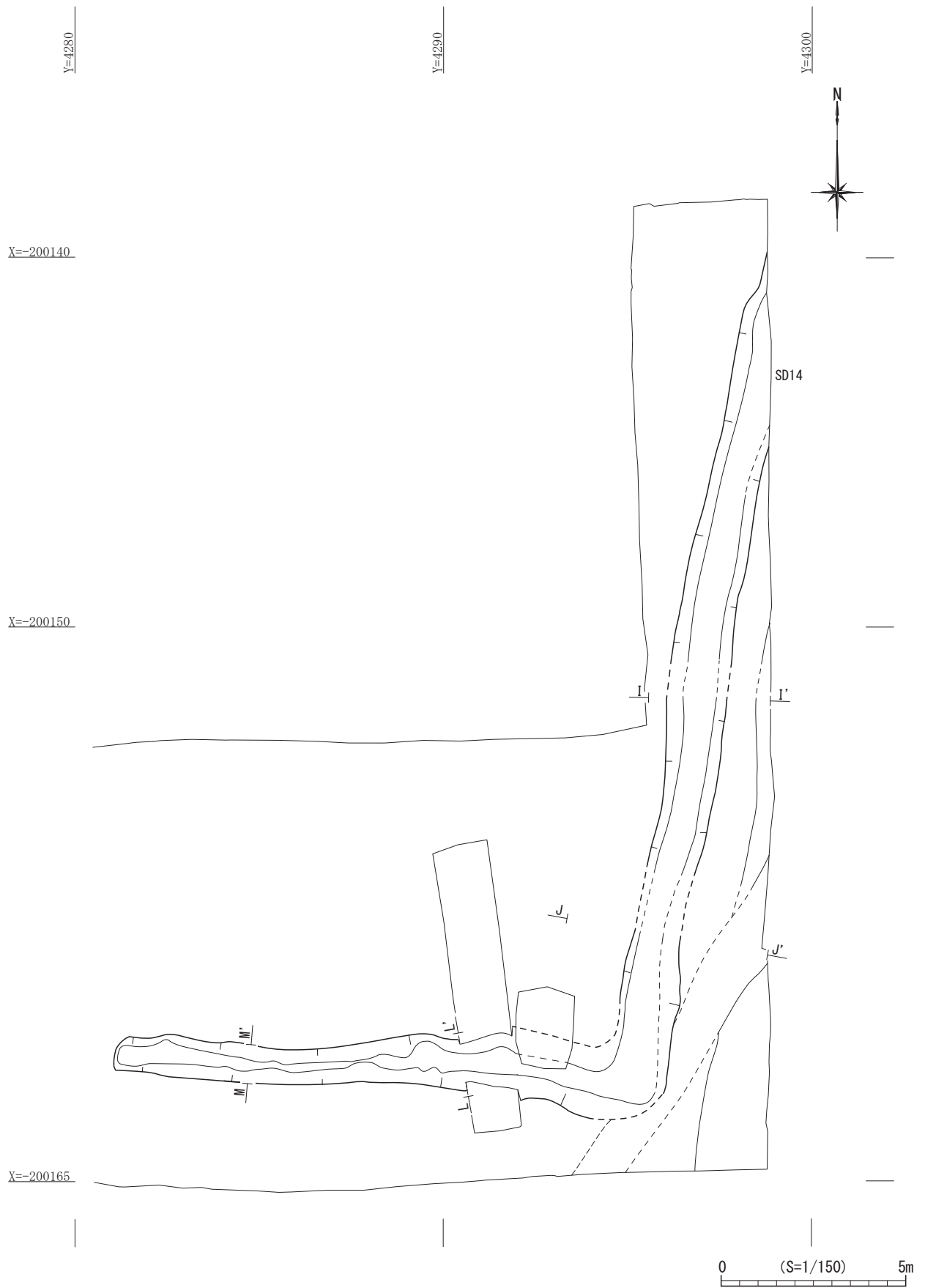
5・6区で検出された遺構は、溝跡11条、ピット4基、自然流路跡4条である。今回の調査では、ほぼ同位置において5条の溝跡が重複しているため、各溝跡を新旧関係順に図示している(第79～81図)。遺物は遺構内から土師器371点、須恵器57点、陶器9点、磁器2点、木製品5点、土製品1点のほか、遺構外から土師器42点、須恵器5点、陶器9点、磁器1点、瓦質土器1点、瓦1点など計513点が出土している。



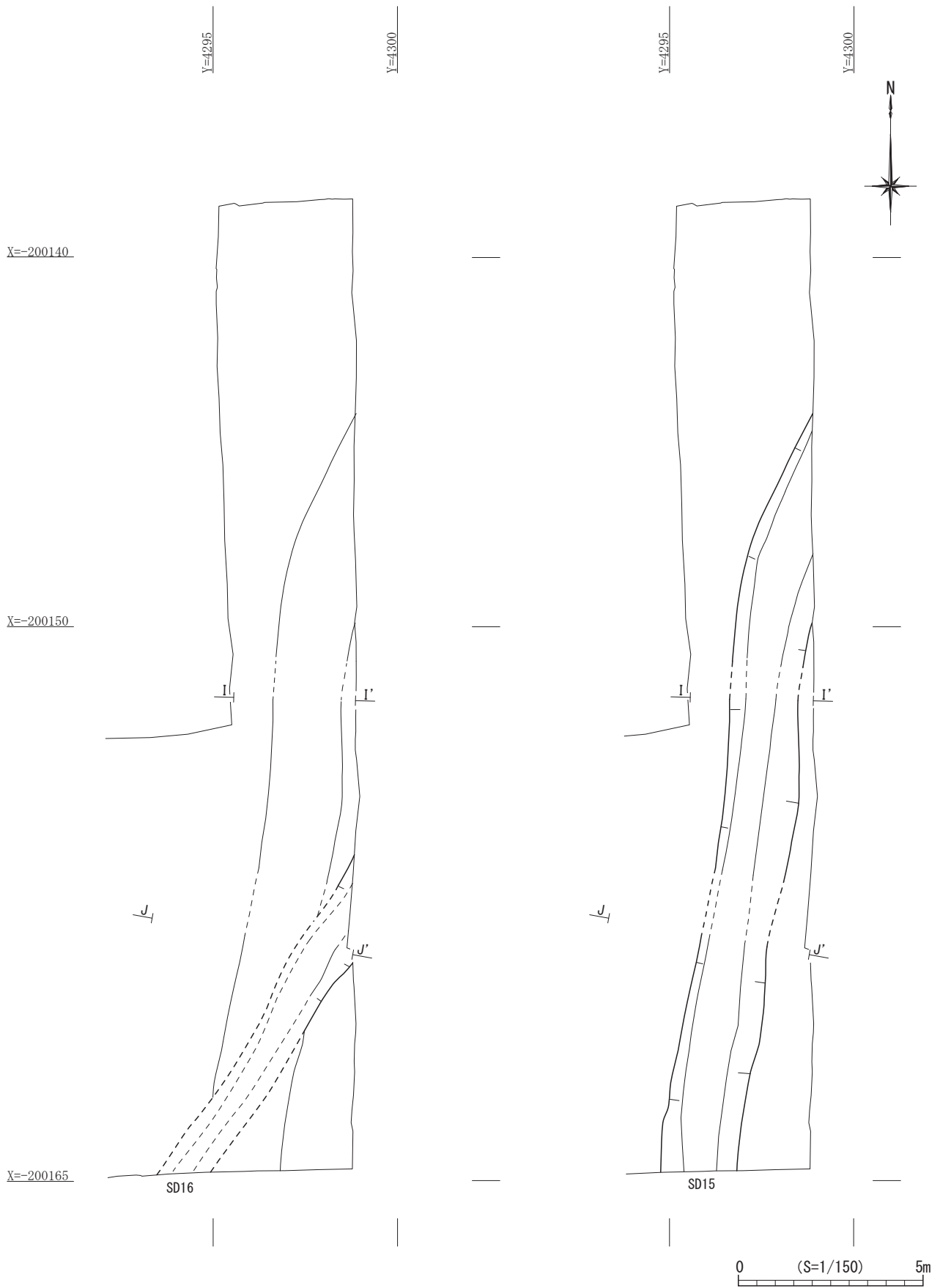
第78図 5区・6区調査区平面図



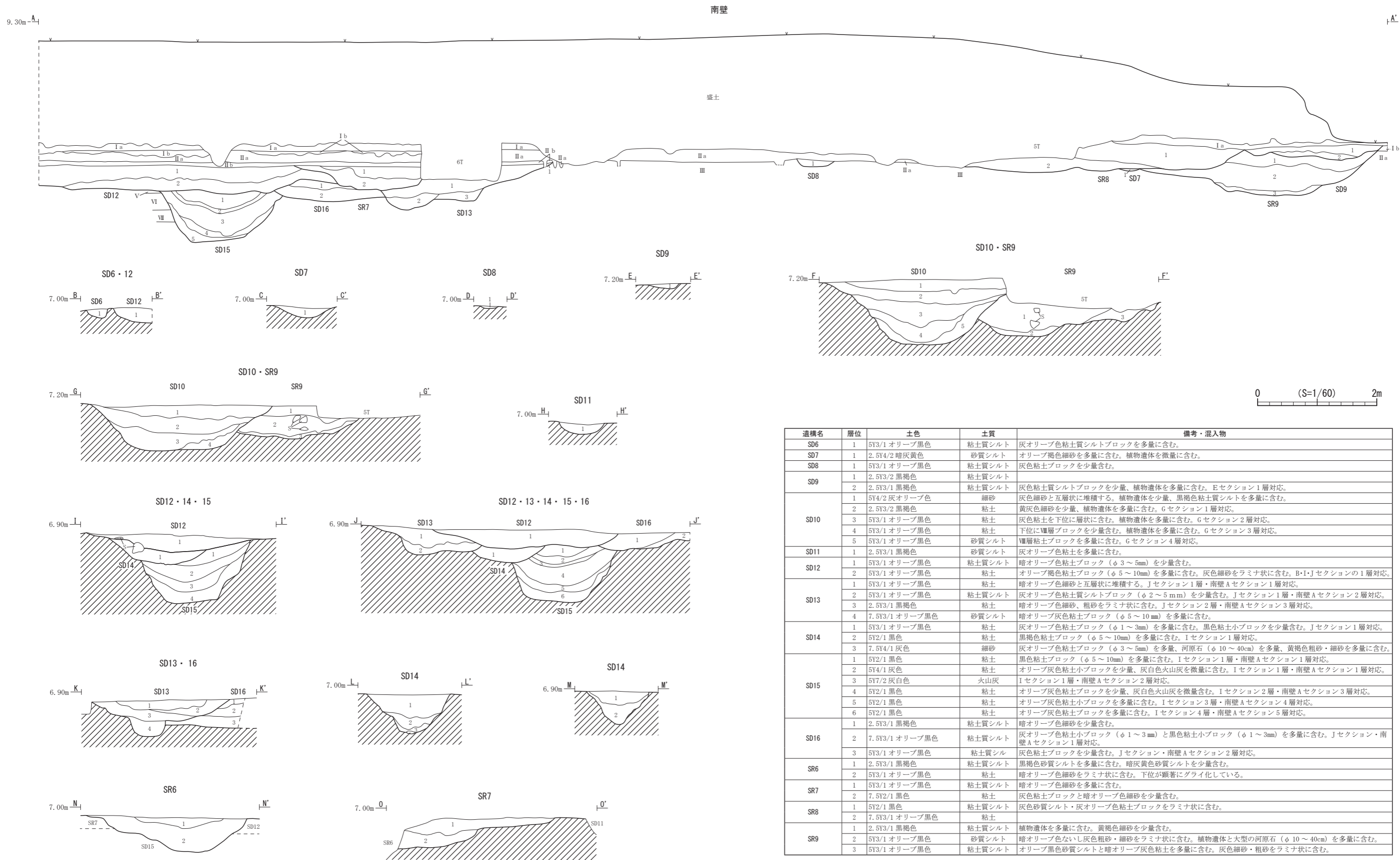
第 79 図 SD12・13 溝跡平面図



第 80 図 SD14 溝跡平面図



第81図 SD15・16 溝跡平面図



第82図 5・6区断面図

(1) 溝跡

SD6 溝跡 (第 64・65・78・82 図)

5区北側で検出されたL字状の溝跡で、検出長は東西約1.9m、南北約1.0mである。溝跡の両端は調査区外へ延び、他の遺構との重複関係はない。規模は上端幅約35cm、下端幅約25cm、検出面からの深さは約15cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした単層である。遺物は出土していない。

SD7 溝跡 (第 64・65・78・82・83 図、写真図版 28)

6区北東～中央部で検出された溝跡で、検出長は約21.6mである。溝跡の東端は調査区外へ延びる。SD11～16溝跡より新しく、SR8自然流路跡より古い。規模は上端幅約100cm、下端幅約40cm、深さ約15cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は、暗灰黄色砂質シルトを主体とした単層である。遺物は堆積土から須恵器1点、遺構底面から非ロクロ土師器2点、ロクロ土師器1点、須恵器1点、陶器2点が出土している。その中から、在地産陶器鉢を図化した(第83図1、写真図版28-7)。

SD8 溝跡 (第 64・65・78・82 図)

6区中央南側で検出された北東～南西方向の溝跡で、検出長は約7.2mである。溝跡の南側は調査区外へ延びるが、北側は確認調査時のトレンチ跡を境に検出できない。SD14溝跡より新しい。規模は上端幅約30cm、下端幅約15cm、深さは約5cmである。断面形は皿形を呈する。堆積土は、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした単層である。遺物は出土していない。

SD9 溝跡 (第 64・65・78・82・83 図、写真図版 28)

6区西側で検出された南北方向の溝跡で、検出長は約11.5mである。溝跡の両端は調査区外へ延びる。SD10溝跡、SR9自然流路跡より新しい。検出面での規模は上端幅約55cm、下端幅約35cm、深さは約10cmである。断面形は逆台形を基調とする。堆積土は2層に分層しており、黒褐色粘土質シルトを主体とした自然堆積層である。遺物は2層から陶器1点、木製品1点が出土している。その中から、在地産陶器の播鉢1点を図化した(第83図2、写真図版29-8)。

SD10 溝跡 (第 64・65・78・82・83 図、写真図版 27・28)

6区西側で検出された南北方向の溝跡で、検出長は約11.4mである。溝跡の北側は調査区外へ延びる。また、今回の調査区内において1区SD1溝跡、3区SD3溝跡、4区SD5溝跡と同一の遺構と考えられる(第85図)。SR9自然流路跡、P34より新しく、SD9溝跡より古い。検出面での規模は上端幅約300cm、下端幅約100～160cm、深さ約110cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は5層に分層され、オリーブ黒色粘土を主体としたいずれも自然堆積層である。堆積土中にはφ10～40cm程の河原石と植物遺体(クルミ・枝)が多量に混入する。遺物は堆積土上層からロクロ土師器2点、須恵器1点、中世陶器1点、陶器1点、礫1点が出土している。その中から、常滑産陶器甕を図化した(第83図3、写真図版28-9)。

SD11 溝跡 (第 64・65・78・82 図)

6区中央で確認した東西方向の溝跡で、検出長は約14.8mである。溝跡の東側は調査区外へ延びるが、西側はSR10自然流路跡より先へは延びていない。SD12～16溝跡より新しく、SD7溝跡、SR8自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約75cm、下端幅約50cm、深さは約15cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色

第2節 第4次調査

砂質シルトを主体とした単層である。遺物は1層から非ロクロ土師器2点、須恵器2点が出土しているが、図化できなかつた。

SD12 溝跡 (第64・65・78・79・82 図、写真図版 27)

5区中央から6区東側で検出された南北方向の溝跡で、検出長は約26.9mである。溝跡の北側は調査区外へ延び、南側は調査区内で屈曲し東側へ走向すると考えられる。SD13～16 溝跡より新しく、SD7・11 溝跡、SR6・7 自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約310cm、下端幅約190cm、深さは約45cmである。断面形は皿形を呈する。堆積土は2層に分層され、オリーブ黒色粘土質シルトを主体としたいずれも自然堆積層である。遺物は堆積土からロクロ土師器2点、須恵器1点が出土しているが、小破片のため図化できなかつた。

SD13 溝跡 (第64・65・78・79・82 図、写真図版 27)

6区東側で検出された南北方向の溝跡で、検出長は約13.3mである。溝跡の南側は調査区外へ延び、北側は溝跡の端部となっており、本調査区内で途切れている。SD14～16 溝跡より新しく、SD7・11・12 溝跡、SR6 自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約105～230cm、下端幅約50～155cm、深さは約60cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層され、オリーブ黒色粘土を主体としたいずれも自然堆積層で、堆積土中には、暗オリーブ色細砂がラミナ状に含まれる。遺物は堆積土から非ロクロ土師器3点、ロクロ土師器12点、須恵器1点出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかつた。

SD14 溝跡 (第64・65・78・80・82・89 図、写真図版 27・28)

5区中央から6区中央南寄りで検出されたL字形に屈曲した溝跡で、検出長は東西約14.8m、南北約23.8mである。南北方向の溝跡の北側は調査区外へ延び、東西方向の溝跡の西側は端部となっており、調査区内で途切れている。SD15・16 溝跡より新しく、SD7・8・11～13 溝跡、SR6・8・9 自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約140～165cm、下端幅約45～95cm、深さ約65cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に分層され、オリーブ黒色ないし黒色粘土を主体とした自然堆積層である。東西方向の溝跡では、底面に水の影響を受けたとみられるくぼみやえぐれが顕著で、3層堆積土中には河原石や粗砂の混入が目立つ。遺物は3層から非ロクロ土師器2点、ロクロ土師器3点、堆積土から非ロクロ土師器1点、ロクロ土師器48点、須恵器12点出土している。その中から、ロクロ土師器杯を1点図化した(第83 図4、写真図版 28-10)。

SD15 溝跡 (第64・65・78・81～83 図、写真図版 27～29)

5区中央から6区東側で検出された南北方向の溝跡で、検出長は約19.8mである。溝跡の両端は調査区外へ延びる。SD7・11～14・16 溝跡、SR6・7 自然流路跡より古く、今回の調査において最も古い時期の遺構に位置付けられる。検出面での規模は上端幅約210cm、下端幅約90cm、深さは約100cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は6層に分層しており、黒色粘土を主体とした自然堆積層で、3層は灰白色火山灰の2次堆積層とみられる。遺物は1層から非ロクロ土師器7点、ロクロ土師器153点、須恵器25点、土製品1点、堆積土から非ロクロ土師器8点、ロクロ土師器28点が出土している。その中からロクロ土師器杯1点・甕1点、赤焼土器の高台付杯1点、須恵器杯1点、土製品の羽口1点を図化した(第83 図5～8・11、写真図版 28-11～14・29-3)。

SD16 溝跡 (第64・65・78・81・82 図、写真図版 27)

6区東側で検出された北東～南西方向の溝跡で、検出長は約11.8mである。溝跡の両端は調査区外へ延びる。

SD15 溝跡より新しく、SD11・12～14 溝跡、SR6・7 自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約 190cm 以上、下端幅約 75cm、深さは約 30cm である。断面形は逆台形を基調とすると考えられる。堆積土は 2 層に分層され、オリーブ黒色粘土を主体とした自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器・須恵器が少量出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。

(2) ピット

P31～34 (第 64・65・78 図)

4 基検出した。SD10 溝跡より古い。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は径約 20～30cm、深さ約 10～25cm である。配列や建物を構成するかは不明である。遺物は出土していない。

(3) 自然流路跡

SR6 自然流路跡 (第 64・66・78・82 図)

6 区南東側で検出された東西方向の自然流路跡で、検出長は約 6.0m である。東側は調査区外へ延び、西端は調査区内で端部となっており途切れている。SD12～16 溝跡、SR7 自然流路跡より新しい。検出面での規模は上端幅約 200～270cm、下端幅約 60cm、深さは約 60cm である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は 2 層に分層され、オリーブ黒色粘土を主体とした自然堆積層で、2 層では暗オリーブ色細砂を互層状ないしラミナ状に含む。また、堆積土下半は特に水の影響を受けており、青灰色ないし緑灰色にグライ化している。遺物は堆積土から非ロクロ土師器 1 点、ロクロ土師器 38 点、須恵器 2 点出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。

SR7 自然流路跡 (第 64・66・78・82 図)

6 区南東側で検出された北東～南西方向の自然流路跡で、検出長は約 7.7m である。両端は調査区外へ延びる。SD12～16 溝跡より新しく、SR6 自然流路跡より古い。検出面での規模は上端幅約 130～260cm、下端幅約 70～130cm、深さは約 45cm である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は 2 層に分層され、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とした自然堆積層で、暗オリーブ色細砂を互層状に含む。遺物は堆積土から非ロクロ土師器 11 点、ロクロ土師器 19 点、須恵器 6 点出土しているが、いずれも小破片のため図化できなかった。

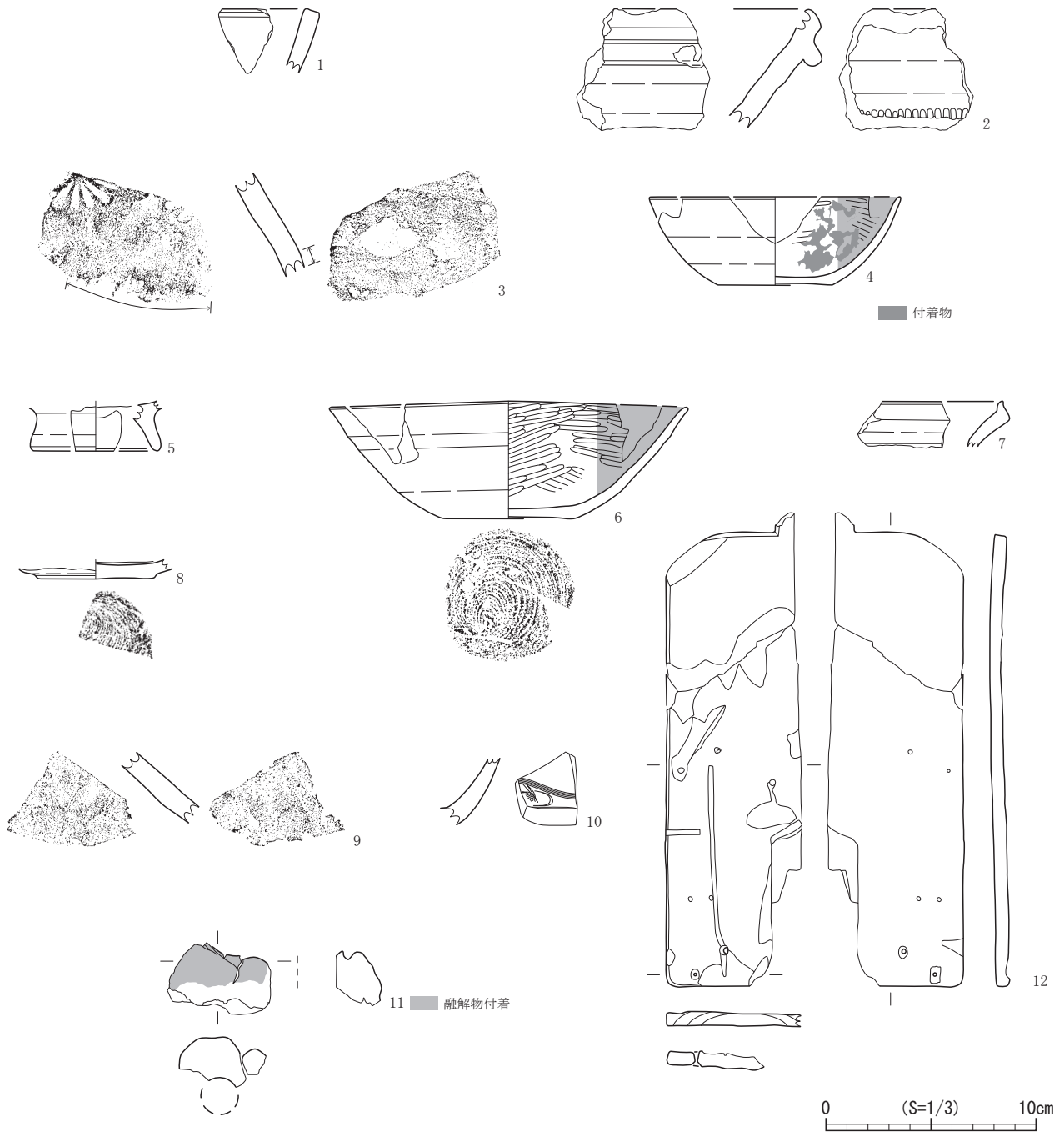
SR8 自然流路跡 (第 64・66・78・82 図)

6 区西側で検出された南北方向の自然流路跡で、検出長は約 12.5m である。両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において北側は 3 区 SR1 自然流路跡および 4 区 SR4 自然流路跡と同一の流路跡と考えられ、推定される検出総延長は約 52.5m となる (第 66 図)。SD7・11・14 溝跡、SR9 自然流路跡より新しい。検出面での規模は上端幅約 260～430cm、下端幅約 180～290cm、深さは約 50cm である。断面形は皿形を呈する。堆積土は 2 層に分層され、黒色粘土質シルトを主体とした自然堆積層で、灰オリーブ色細砂・粗砂を互層状に含む。遺物は堆積土から非ロクロ土師器 3 点、ロクロ土師器 4 点、須恵器 3 点、陶器 2 点、木製品 1 点、核果類種 1 点が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

SR9 自然流路跡 (第 64・66・78・82・83 図、写真図版 29)

6 区西側で検出された南北方向の自然流路跡で、検出長は約 12.5m である。両端は調査区外へ延び、今回の調査区内において北側は 3 区 SR2 自然流路跡および 4 区 SR5 自然流路跡と同一の流路跡と考えられ、推定される検出総延長は約 52.5m となる (第 66 図)。SD11・14 溝跡より新しく、SD9・10 溝跡、SR8 自然流路跡より古い。検

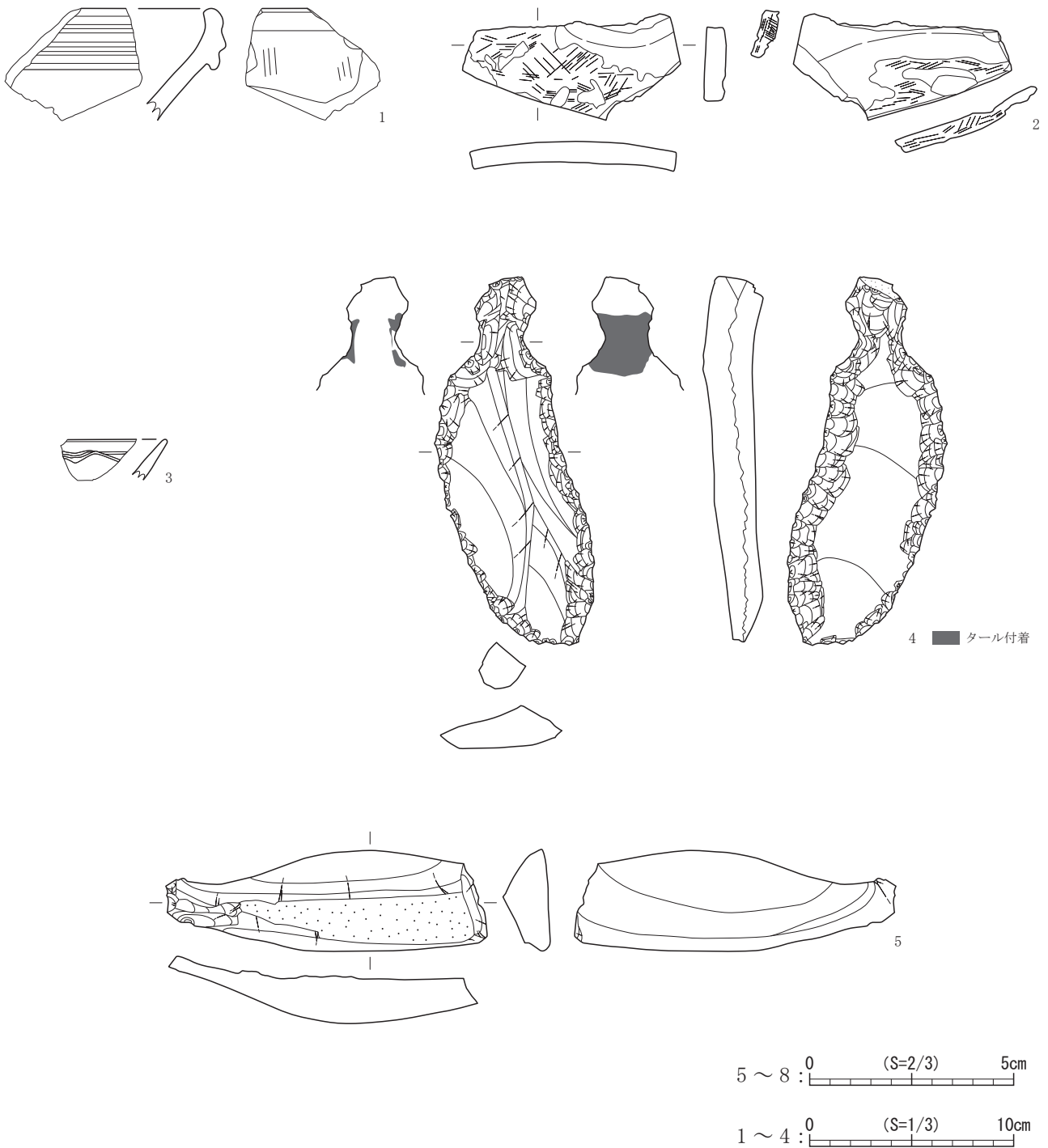
第2節 第4次調査



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-7	SD7	底面	陶器	鉢	-	-	-	ナデ	ナデ	胎土緻密 砂粒含む 産地：在地	28-7
2	Ic-4	SD9	堆積土	陶器	播鉢	-	-	(5.8)	口縁直下に突帯	-	胎土緻密 砂粒含む 産地：在地	28-8
3	Ic-5	SD10	上	陶器	甕	-	-	-	菊花文	ナデ	胎土緻密 産地：常滑	28-9
4	D-3	SD14	上	土師器	坏	-	-	4.2	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 海綿骨針含む 内外面：付着物 1/5 残	28-10
5	D-5	SD15	1	赤焼土器	高台付坏	-	(6.0)	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	28-11
6	D-4	SD15	上	土師器	坏	(17.0)	6.2	5.6	ロクロナデ 底：回転糸切 無調整	ヘラミガキ・黒色処理	胎土緻密 1/2 残	28-12
7	D-6	SD15	堆積土	土師器	甕	-	-	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	28-13
8	E-1	SD15	1	須恵器	坏	-	(5.6)	(0.8)	ロクロナデ 底：回転糸切 無調整	ロクロナデ	胎土緻密	28-14
9	Ic-6	SR9	1	陶器	甕	-	-	-	-	ナデ	砂粒含む 産地：常滑	29-1
10	J-3	SR9	堆積土	磁器	碗	-	-	-	-	-	青磁 産地：龍泉窯	29-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
11	P-1	SD15	1	土製品	羽口	-	-	(1.3)	外面：鈺滓付着	29-3
12	L-2	SR9	堆積土	木製品	不明	(22.6)	(6.4)	-	木取り：板目	29-4

第83図 5・6区溝跡・自然流路跡出土遺物



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	Ic-2		検出面	陶器	挿鉢	(2.3)	-	(5.30)	隆帯2条	-	胎土緻密 産地：在地	29-5
2	Ic-3		検出面	陶器	転用甕 砥石	(10.30)	(4.5)	1.0	砥面	砥面	転用砥石 割面も砥面としている 産地：在地	29-6
3	J-2		検出面	磁器	碗	-	-	(2.0)	-	-	青磁 産地：龍泉窯	29-7

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	K-1		検出面	石器	石匙	10.0	3.9	1.1	縦型の石匙 素材剥離の末端部につまみ部を作り出している 刃部は左右と下端部に背腹両面から縁辺部に二次加工を加えて作り出している つまみ部にタール状の付着物がある 石材：珪質頁岩	29-8
5	K-3		検出面	打製石器	剥片	2.5	7.9	1.1	1回の加撃で剥離した剥片で先行する剥離面がない 腹面末端のヒンジフラクチャーが背面に及び同時割れの痕跡を残している 通常の剥片剥離とは異なる営力が働いている可能性がある 石材：黒色頁岩	29-9

第84図 遺構外出土遺物

第2節 第4次調査

出面での規模は上端幅約220～370cm、下端幅約95～120cm、深さは約55cmである。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は3層に分層され、オリーブ黒色砂質シルトを主体とした自然堆積層で、灰色細砂・粗砂を互層状に含み、植物遺体が多量に混入する。また本流路跡の堆積土内で、河原石の集石が検出された。確認調査時点では、第1次調査等で確認されている河原石積みによる古墳の小型石室である可能性が想定されたが、精査の結果、石室を形成する痕跡は確認できなかった。遺物は1層ないし堆積土から非ロクロ土師器2点、ロクロ土師器4点、須恵器1点、中世陶器2点、青磁1点、木製品1点、下層から非ロクロ土師器1点、ロクロ土師器3点、須恵器1点、被熱した礫石器1点が出土している。その中から、在地産中世陶器甕1点、龍泉窯系青磁碗1点、板状不明木製品1点を図示している（第83図9・10・12、写真図版29-1・2・4）。

【遺構外出土遺物】（第84図1～5、写真図版29-5～9）

遺構外からは、非ロクロ土師器32点、ロクロ土師器17点、須恵器9点、陶器24点、磁器9点、瓦質土器2点、瓦6点、剥片石器3点、鉄製品2点、土製品3点、その他6点の計113点が出土している。主に4～6区の基本層I層、遺構検出面、攪乱などから出土している。その中から、在地産中世陶器を砥石に転用した甕1点、龍泉窯系青磁碗の口縁部1点、在地産陶器播鉢の口縁部1点、石匙1点、剥片1点を図化した。

6. まとめ

(1) 遺物と遺構について

今回の調査では、各遺構および基本層・検出面・カクランなど遺構外から、土師器・須恵器・赤焼土器・陶器・磁器・瓦質土器・瓦・石器・金属製品・木製品・土製品などの遺物が計594点出土している。大部分が小破片のため図化出来る遺物が極めて少なく、また明確な共伴関係が分かるものもないため、遺構の年代決定に至るものは少ない。遺構内から出土した遺物のうち、時代がある程度限定できるものは以下の通りである。

- ・ロクロ土師器坏（9c後半・平安時代）…SD15
- ・龍泉窯系青磁碗（中世）…SR9
- ・常滑産甕（中世）…SD10
- ・在地産播鉢（近世）…SD9

今回の調査で検出した遺構は、溝跡16条、土坑3基、ピット34基、性格不明遺構1基、自然流路跡9条であるが、これらのうち主な遺構は重複関係から4期に大別される。

第1期

- ・今回の調査で最も古い時期の溝跡（SD15）
- ・SD15より新しく、これと位置をほぼ同じくして走向する溝跡（SD12～14）
- ・SD15との新旧関係は不明だが、SD12～14より古い溝跡（SD16）

第2期

- ・第1期より新しく、方向が異なる溝跡（SD6・7・8・11）

第3期

- ・中～近世の館跡を区画する堀跡（SD1・2・3・4・5・10）

第4期

- ・第4期より新しい溝跡（SD9）

溝跡の変遷と出土遺物から、おおよその時期区分は第1期が平安時代、第2期が平安時代末～中世、第3期が中～近世、第4期が近世以降と考えられる。

この他、SR1～9自然流路跡に関しては第1期の溝跡より新しく、第3期の溝跡より古い時期にあたる。遺物は

土師器・須恵器のほか青磁が出土しており、第2期に相当するものと考えられる。

ピットは全区において第3期の溝跡に切られており、これより古い。遺物も出土していないため詳細は不明であるが、遺構との重複関係から第2期に相当するものと考えられる。

土坑に関しては、SK1はピットに切られており、これより古く、遺物は出土していない。SK2は第2・3期の溝跡や自然流路跡に切られており、これより古く、遺物は出土していない。SK3は自然流路跡を切るためこれより新しく、遺物は近世～近代の陶器が伴うことから第4期に相当すると考えられる。

SX1 性格不明遺構は、ピットとの重複関係から第2期に相当すると考えられる。

(2) まとめ

今回の第4次調査は、自然堤防の端部に位置する安久東遺跡の中でも、更に東側の後背湿地との境界付近にあたる。基本層や遺構堆積土は概ねグライ化しており、検出した遺構は、溝跡を主体として土坑3基とピット34基が点在し、自然流路跡が調査区内を縦横に走流した痕跡が確認された。また、遺構の様相や過去の調査歴との位置関係から、集落や館の存続時期にはその外郭部分に位置した場所と考えられる（第85図）。今回の調査成果や検討課題については、以下に3点挙げられる。

1. 今回の調査では縄文時代の石器（石匙）が出土している。隣接する安久遺跡第3次調査においても、縄文土器と石器が出土しているが、安久東遺跡では、宮城県教育委員会の調査の中で弥生土器が確認されているのみである。遺構が確認されていないため詳細は不明であるが、今回の出土によって遺跡の年代が縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

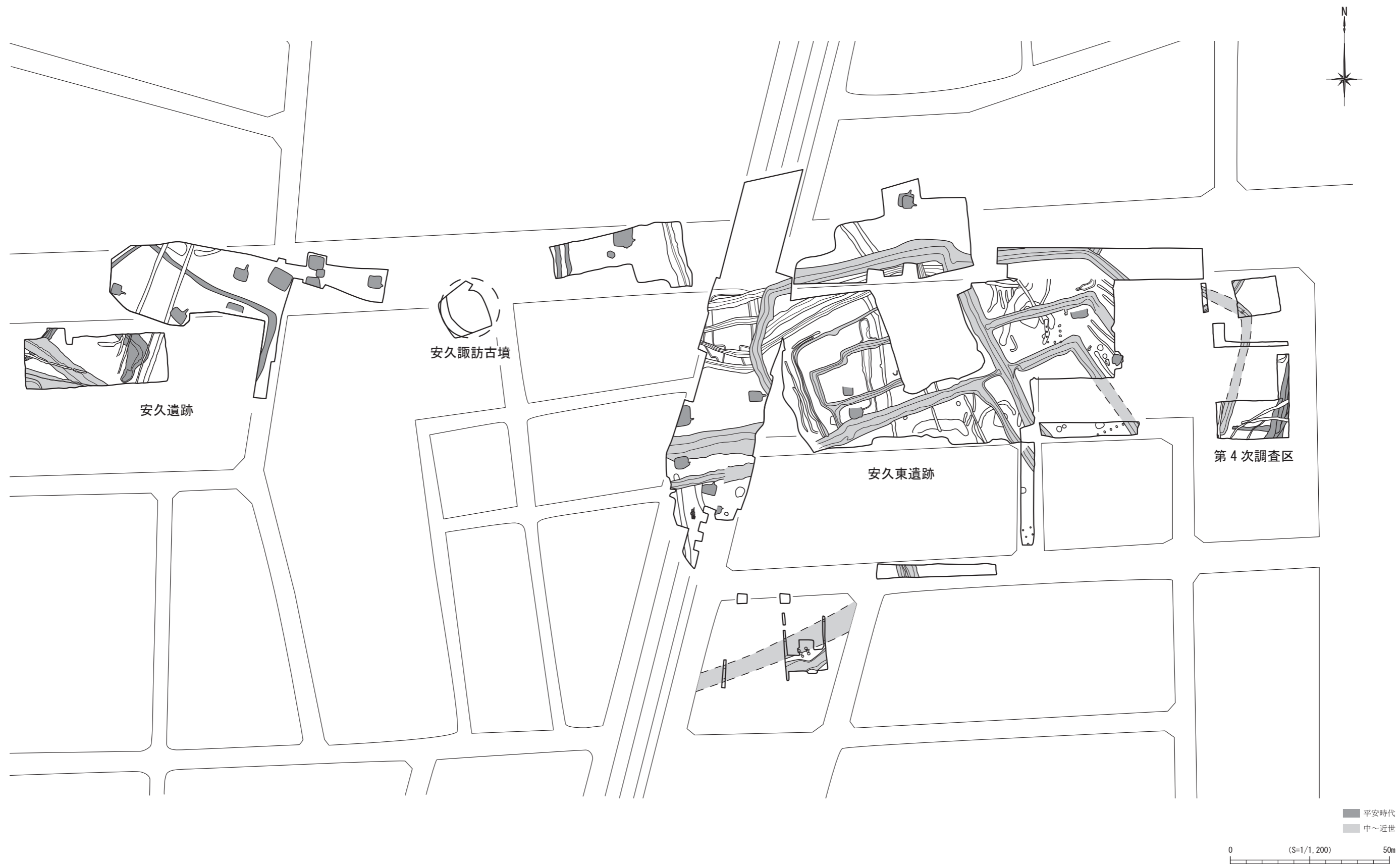
2. 中～近世の館跡に伴う、区画溝跡ないし堀跡を検出している。第1・2次調査時には、館の内部を数重に囲う方形区画を基調とした溝跡が確認されており、今回確認されたSD1・3・5・10からなる溝跡も堆積土等からこの一部を担うとみられる。その上で区画される範囲は、従来のものとは溝跡の方向が異なるため方形基調とはなっておらず、全体の様相は今後の調査例の蓄積を待つて改めて検討することが必要である。また、溝跡の南側は端部となって途切れており、この周辺には土橋状の進入路が設けられていた可能性が考えられる。

3. 確認調査において古墳の小型石室と考えられる河原石が検出されたが、調査の結果、自然流路の堆積土内に集石した河原石であることが確認された。本来はその周辺に遺存していた石室が、水流の影響により破壊されている可能性も考えられる。また、同様の河原石は中～近世の館堀跡内からも多量に発見されている。過去の調査歴の中では、安久東遺跡及び安久遺跡でも同例の状況が報告されており、館の造営に伴う土木工事に際して、大規模な削平により石室が破壊され、部材の河原石が溝跡内に投げ込まれた可能性が指摘されている。

第2節 第4次調査

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1975 『安久遺跡発掘調査略報』 仙台中田第一土地区画整理組合
- 仙台市教育委員会 1976 『安久東遺跡発掘調査概報』 仙台市文化財調査報告書第10集
- 仙台市教育委員会 1977 『安久東遺跡現地説明会資料』（第2次調査）
- 宮城県教育委員会 1980 「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』 宮城県文化財調査報告書第72集
- 仙台市教育委員会 1984 『戸ノ内遺跡』 仙台市文化財調査報告書第70集
- 仙台市教育委員会 1993a 『安久東遺跡－第3次発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第174集
- 仙台市教育委員会 1993b 「安久遺跡」『年報14』 仙台市文化財調査報告書第176集
- 仙台市教育委員会 1994 『中田南遺跡』 仙台市文化財調査報告書第182集
- 仙台市教育委員会 1997a 『安久遺跡－第3次発掘調査報告書－』 仙台市文化財調査報告書第219集
- 仙台市教育委員会 1997b 「安久遺跡（4次）」『高屋敷遺跡ほか調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第223集
- 仙台市教育委員会 2006 「前田館跡」『前田館跡他発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第301集
- 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』
- 埋蔵文化財発掘調査研究所 1986 『宮城県仙台市安久東遺跡』 埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第2集



第85図 安久遺跡・安久東遺跡遺構全体図



1. 1区全景（南から）



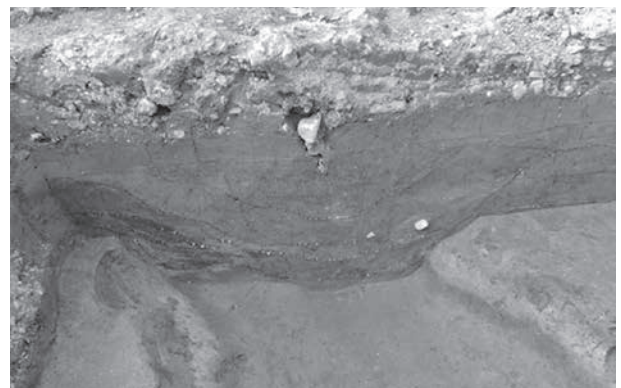
2. 2区全景（南から）



1. 3区全景（東から）



2. SD1 溝跡断面（東から）



3. SD2 溝跡断面（東から）



4. SD3 溝跡断面（南から）



5. 2区東壁断面（南西から）

写真図版 23 安久東遺跡第4次調査（2）



1. 4区全景（東から）



2. SD4 溝跡断面（南から）



3. SD5 溝跡断面（北から）



4. SD4 溝跡河原石出土状況（南から）



5. 3区作業風景（東から）



1. SR4 自然流路跡河原石集石状況（1）（南から）



2. SR4 自然流路跡河原石集石状況（2）（南から）

写真図版 25 安久東遺跡第4次調査（4）



1. 5区全景（北から）



2. 5区・6区東側全景（南から）

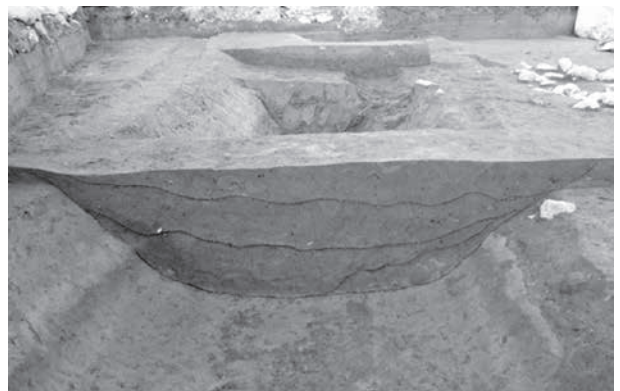
写真図版 26 安久東遺跡第4次調査（5）



1. 6区全景（南西から）



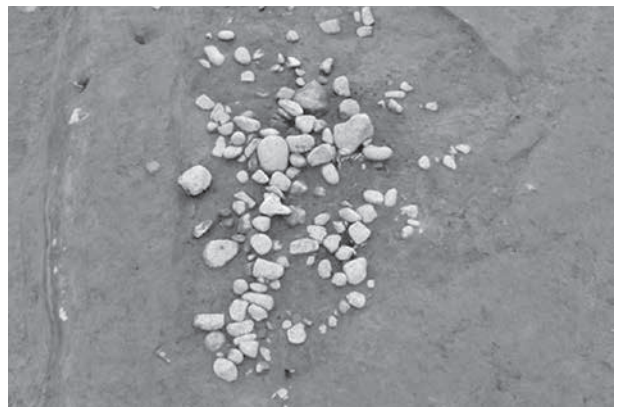
2. SD12 ~ 16 溝跡断面 J（南から）



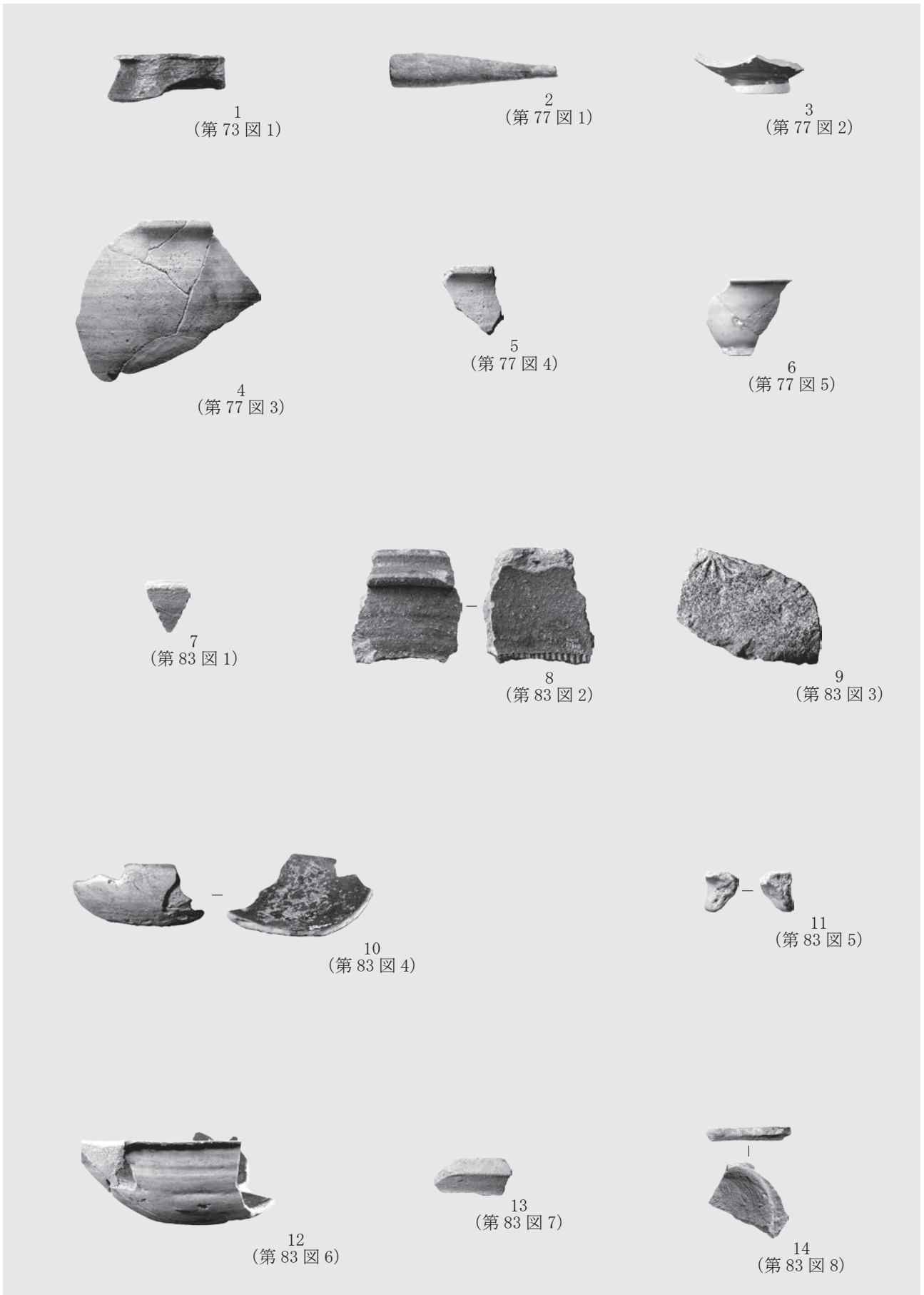
3. SD10 溝跡断面 F（南から）



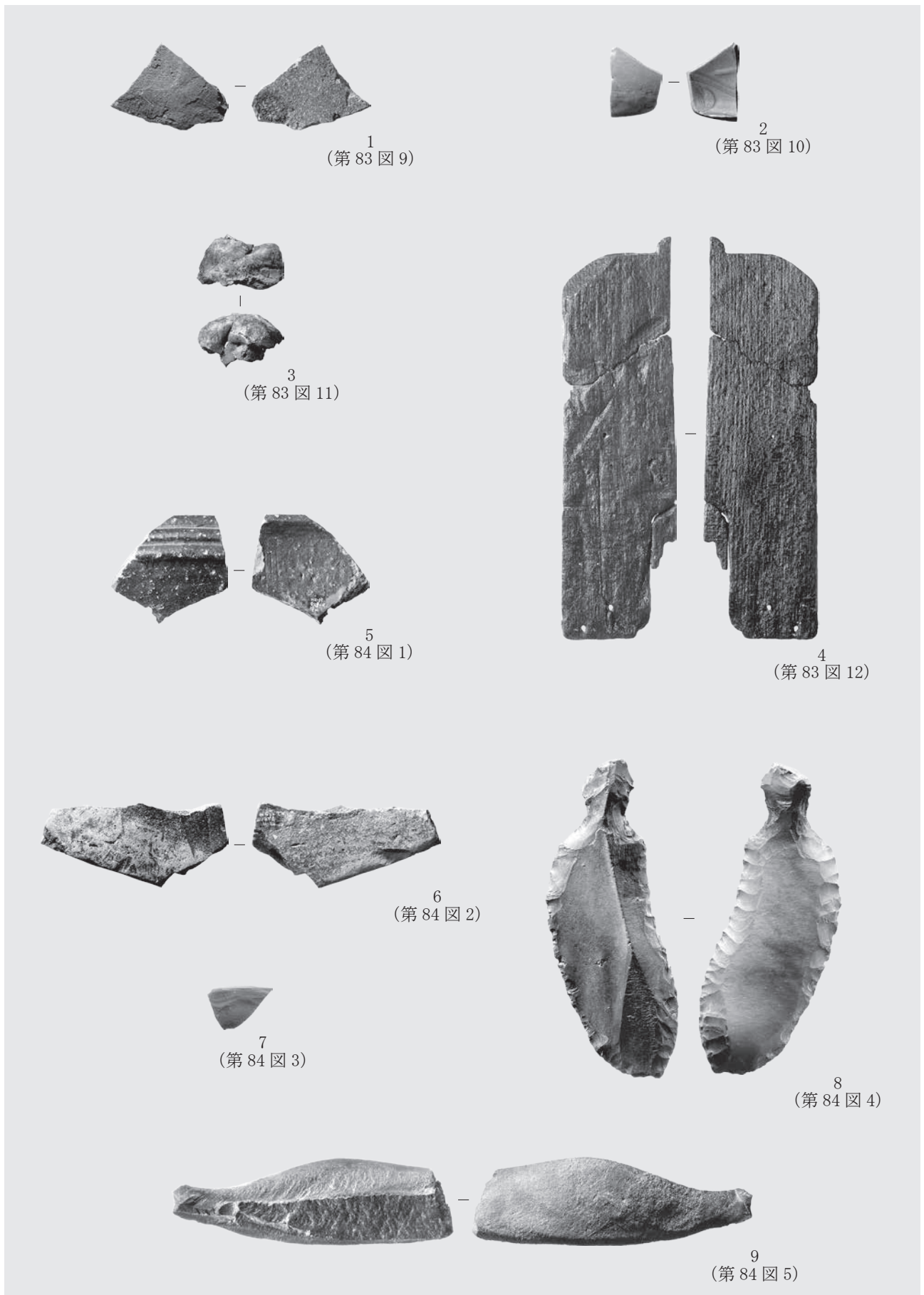
4. SD10 溝跡全景（南から）



5. SR9 自然流路跡河原石集石状況（南から）



写真図版 28 安久東遺跡第4次調査出土遺物(1)



写真図版 29 安久東遺跡第4次調査出土遺物(2)

第6章 総括

1. 中在家南遺跡第12次調査

調査地点は中在家南遺跡の南部に位置する。今回の調査では溝跡2条、土坑3基が検出された。SD1・2溝跡は、共に上部が攪乱の影響で削平されており、攪乱除去後に下部が残存しているのが確認された。溝跡は共に規模が大きく、区画施設と可能性が考えられる。出土遺物は、基本層及び各遺構、攪乱から、土師器、陶磁器、瓦等が出土しており、特に中世から近世の遺物が多く出土した。

2. 北目城跡第10次調査

調査地点は遺跡東部に位置し、第1次調査区の東側、そして、第8次調査区の西側隣接地にあたる。調査では掘立柱建物跡1棟、堀跡3条、溝跡10条、井戸跡5基、土坑10基、ピット116基が検出された。このうちSD1・4・10堀跡は北目城に関わるとみられる。SD1堀跡の底面には障壁が造り出され、これまでの調査と同様に複雑な構造を有することが確認された。また、城内を区画するとみられる溝跡(SD2A・2B・3)を検出した。SD2A・2B溝跡とSD10堀跡の重複関係から少なくとも城内における3時期の変遷を追うことができる。個別の遺構の時期については言及できないものが多いが、SD1堀跡より北側については16世紀代・廃城後の大きく2時期に分けられ、SD1堀跡より南側については近代以降と考えられる。

また、遺物は縄文時代、古代、中世、近世、近代のものが出土した。その大部分が18世紀以降の遺物であり、出土傾向として調査区南側に集中し、SD1堀跡より北側では出土しない。このことは廃城後の土地利用の違いが表れている可能性がある。

3. 富沢館跡第13次調査

調査地点は遺跡の南西部に位置する。調査では堀跡2条が検出された。いずれも城館に伴う堀跡と推定され、第4次調査で検出されたSD43・44堀跡と同一の遺構と考えられる。SD1堀跡は東西方向を基調とするものの南から西に湾曲するような形で検出されたことから、SD1堀跡とSD2堀跡を結ぶような堀跡が存在していた可能性がある。また、SD2堀跡の南側にはさらに堀跡が存在しており、SD1堀跡からSD74堀跡まで接続していた可能性が新たに考えられるようになった。

4. 富沢館跡第18次調査

調査地点は遺跡の南東部に位置する。これまでの調査結果から、城郭に伴う東西方向の堀跡の存在が想定されたが、今回の調査では堀跡は検出されず、性格不明遺構1基、小溝状遺構群1群が検出された。また、縄文時代後期中葉に属する遺物が出土した。出土数は少ないものの、特殊な器形の土器が比較的多く出土しており、富沢館跡のこれまでの調査例とも類似している。遺跡周辺は日常の場とは異なる空間が広がっていた可能性がある。

5. 安久東遺跡第4次調査

調査地点は安久東遺跡の東端に位置する。調査では溝跡16条、土坑3基、ピット34基、自然流路跡9条が検出された。過去の調査では、古代の集落や中～近世の館を数重に囲う方形区画を基調とした溝跡が確認されており、今回の調査はその集落や館の存続時期には外郭部分に位置した場所と考えられる。遺物は土師器、須恵器、赤焼土

第6章 総括

器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦、石器、金属製品、木製品、土製品などが出土した。

報告書抄録

ふりがな	きためじょうあとほか							
書名	北目城跡ほか							
副書名	発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 集							
編著者名	及川謙作 妹尾一樹 柳澤 楓 澤目雄大 斎野裕彦							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5-12 仙台市役所上杉分庁舎 10 階 TEL : 022-214-8894							
発行年月日	2021 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町 村	遺跡 番号					
なかざいけみなみ 中在家南遺跡 (第 12 次)	みやぎけんせんだいまやぎのく 宮城県仙台市宮城野区 あらい 1 ちょうめ 荒井一丁目	04102	01427	38° 14' 29"	140° 56' 06"	2020. 6. 15 ~ 2020. 6. 30	約 50 m ²	記録保存調査 (共同住宅建築)
きためじょう 北目城跡 (第 10 次)	みやぎけんせんだいまやぎのく 宮城県仙台市太白区 ひがしこおりやま 2 ちょうめ 東郡山二丁目	04104	01029	38° 13' 16"	140° 54' 01"	2020. 5. 7 ~ 2020. 8. 6	約 1,035 m ²	記録保存調査 (宅地造成)
とみざわて 富沢館跡 (第 13 次)	みやぎけんせんだいまやぎのく 宮城県仙台市太白区 とみざわあざて 富沢字館	04104	01426	38° 12' 49"	140° 51' 40"	2019. 3. 25 ~ 2019. 3. 27	約 54 m ²	記録保存調査 (共同住宅建築)
とみざわて 富沢館跡 (第 18 次)	みやぎけんせんだいまやぎのく 宮城県仙台市太白区 とみざわあざて 富沢字館	04104	01426	38° 12' 47"	140° 51' 46"	2020. 1. 7 ~ 2020. 1. 10	約 36.7 m ²	記録保存調査 (店舗建築)
あんきゅうがし 安久東遺跡 (第 4 次)	みやぎけんせんだいまやぎのく 宮城県仙台市太白区 にしなかだもちょうめ 西中田四丁目	04104	01037	38° 10' 49"	140° 52' 56"	2019. 10. 28 ~ 2020. 2. 21	約 590 m ²	記録保存調査 (共同住宅及び 自走式駐車場建 築)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中在家南遺跡 (第 12 次)	墓、水田跡、河川跡	弥生～近世	溝跡、土坑		土師器、瓦質土器、瓦、 石器、石製品、木製品			
北目城跡 (第 10 次)	城館跡、集落跡、 水田跡	縄文～近世	掘立柱建物跡、堀跡、溝跡、 井戸跡、土坑、ピット		縄文土器、土師器、須恵器、 陶器、磁器、土師質土器、 瓦質土器、瓦、石器、石製品、 金属製品、木製品、土製品			
富沢館跡 (第 13 次)	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世	堀跡		遺物なし			
富沢館跡 (第 18 次)	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世	土坑		縄文土器			
安久東遺跡 (第 4 次)	館跡、集落跡	縄文～近世	溝跡、土坑、自然流路跡、性 格不明遺構、ピット		土師器、須恵器、 赤焼土器、陶器、磁器、 瓦質土器、瓦、石器、 金属製品、木製品、土製品			
要約	中在家南遺跡第 12 次調査では溝跡 2 条、土坑 3 基が検出された。遺物は近世瓦を中心に出土した。							
	北目城跡第 10 次調査では掘立柱建物跡 1 棟、堀跡 3 条、溝跡 10 条、井戸跡 5 基、土坑 10 基、ピットが検出された。堀跡、溝跡は中～近世の城館跡に伴うと推定される。遺物は近世～近代の陶磁器類や中世陶器、古代瓦、縄文土器などが出土した。							
	富沢館跡第 13 次調査では中～近世の城館に伴う堀跡が 2 条検出された。							
	富沢館跡第 18 次調査では小溝状遺構群 1 群、性格不明遺構 1 基が検出された。また、遺構や基本層中から縄文時代後期中葉の土器が出土した。							
	安久東遺跡第 4 次調査では溝跡 16 条、土坑 3 基、自然流路跡 9 条、性格不明遺構 1 基、ピットが検出された。溝跡は中～近世の館跡に伴う、区画溝ないし堀跡と推定される。また、縄文時代の石器（石匙）が出土した。今回の出土によって遺跡の時期が縄文時代まで遡る可能性がある。							

仙台市文化財調査報告書第 490 集

北目城跡 ほか

発掘調査報告書

2021 年 3 月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12
仙台市役所上杉分庁舎 10 階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目 1-14
TEL 022 (231) 2245 (代)
